

Touhou NET—GAME

納豆チーズV

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人間と妖怪が共存する閉ざされた世界、幻想郷。その幻想郷は今、月に住まう民の技術を取り込むことで超IT革命を迎えていた。

幻想郷の中でも、ほとんどの住民が人間との共存を拒む妖怪で構成された地底に住む少女、古明地さとりは、MMORPGと呼ばれるデータ上の世界の存在を知る。他人の心を読めてしまう力を持つ彼女は、『他人の心を読めない世界』に関心を抱き、やがて引き込まれていく。

※更新停止により未完終了。再開の予定はありません。

目次

Chapter 1. 同調し燃え盛る紅の狂気

一. 進入完了 (access completion)	1
二. 無表情 (wooden face)	19
三. 凶暴性 (bestial nature)	35
四. 信頼関係 (trust relationship)	54
五. 店主蛙 (shopkeeper frog)	69
六. 付喪神 (artifactual spirit)	88
七. 子鬼妖精 (the goblin)	103
八. 大子鬼 (big goblin)	117
九. 秦ころ (Kokoro Hatanô)	132
一〇. 人殺し (player killer)	146
Chapter 2. 醒めたるは負を知らぬ氷結	
一. 双方世界 (two world)	166
二. 第二森林 (second forest)	181
三. 初友達 (first friend)	195
四. 冷凍剣士 (ice swordsman)	212
五. 混迷狂逸 (waver insanity)	227
六. 捩狂幼心 (twisted heart)	242
七. 攻略前談 (capture before)	256
八. 行違暴走 (perception gap)	274

Chapter 1. 同調し燃え盛る紅の狂気

一・進入完了 (access completion) n)

沈んでいた腕が、ぷかりと水面に浮かんでくる。

下に押し込もうとしてみると、最初の方はちよつとだけ抵抗がかっていただけで、完全に水中に浸かり切るとほとんどそれもなくなった。もちろん水に動きは障害されてしまうが、沈めようとした直後ほどのものではない。

もう一度、腕の力を抜いてみる。すると当然のごとく腕が水面まで押し上がってきて、しかしそこで止まった。水平にした腕の上半分は空気にさらされ、下半分は水面下に埋まっている。

この現象は外の世界から流れ込んできた書物によると、水が物を上へと押し上げようとする、浮力と呼ばれる力によるものらしい。水に入ると動きにくくなることはもちろん感覚的に知っていたが、知識として取り入れることができたのは、その書物を読んだからであった。

腕を沈め、力を抜き、浮かぶのを待つ。他にも、水の中で適当に手を動かしてみる。上へ動かす時は浮力のおかげで楽にでき、横へ動かすのは右も左も同じような加減で、下へ動かす時は浮力に逆らうためか、わずかに押し込める必要がある。こうして細かいところまで意識していると、変化する水の抵抗具合が理論的に体感できて面白い。

面白いと言っても、しょせんは暇潰しの域を出ない程度のだらな
いことなのだけれど。

「ふう」

さすがに水の抵抗で遊ぶのも飽きてきて、全身の力を抜いて浴槽の壁に背中を預ける。天井を見上げればランプの薄橙色の光が目に入ってきて、半ば反射的に目を細めた。

お風呂というものは、どうしてこうも気持ちがいいのだろう。体の外側だけでなく内側まで温められるようで、いつまでも浸かっていた気分になってしまう。それが適温であればなおさらだ。

目を閉じる。本来なら真っ暗闇になる視界は、ランプの光に影響されて、少々赤みを帯びていた。

お風呂がなぜ気持ちいいのか。それはこうして湯船に浸かっている満足感ゆえに出てきた単なる感嘆の念だったのだが、特にすることも考えることもなかったのも、ほんのちよつとだけ知識を掘り起こしてみることにする。

確か、前に読んだ書物にこんな説があったはずだ。

まだ自我なんてものが生まれていない頃、母親のお腹の中で温かい水に包まれていたことを無意識に思い出し、安心の感情を呼び起こしているのだと言う。また、すべての生命はかつて海で生まれた生命から派生しているため、そんな原初の記憶が懐かしんでいるのだとも書いてあった記憶がある。

現実的で科学的な観点で言えば、血行促進だとかによるリラククス効果とやらのおかげらしいが、現在お風呂に浸かっている少女——古明地^{こめいじ}さとりは、母親のお腹の中にいた頃を思い出すという説が個人的に気に入っていた。それはひとえにさとりの住んでいる地域が科学をそれほど信仰していないからでもあるが、一番の理由は単にロマンチックだからである。

「——そろそろ出ようかしら」

声が反響するのもまた、ちよつとだけ面白い。ただ、少し前に調子に乗って歌っていたら、ふらふらと入ってきた妹にその場面を目撃されるという恥ずかしい事件が起きたので、今回はきちんと自重しておく。

風呂から出るタイミングを掴めず、というか掴まず、あれやこれやといるいろいろなことに思考を巡らせていたために、どれくらい湯船に浸かっていたかは覚えていない。ただ、そろそろその温度がぬるくなってきたと感じてきたところで、さとりは大きく息を吸ったのちに口を閉じ、息を止めて水中に頭ごと顔を埋めた。

五秒ほどしてから顔を上げ、ゆっくりと瞼を開いた。水のせいで重くなった桃色の髪の毛先が目に入って少々鬱陶しかったが、それを無視して浴槽の縁に手をつけて立ち上がる。全身からわずかに散った

水滴が床のタイルに落ちた。

濡れた足でそんなタイルを踏み抜いて、壁に設置されたタオルかけから一枚のタオルを手にとった。当然ながら下から拭いても上の方から水が滴ってきたら拭き直しになるので、まずは髪から拭いていく。ごしごしと力を入れると髪が傷んでしまうが、この辺は慣れたもので、適度な力だけを込める。ある程度拭き取ったところで上半身に移ろうと視線を下ろすと、人間では絶対に持ち得ない体の部位が視界に映る。

それは顔についた二つとは別の、三つ目の目だった。

目とは言っても、別に上半身のどこかに埋め込まれているというわけではない。通常の手で言う瞼の役割を果たす赤い膜に包まれた真ん丸な目玉が、常に心臓付近に浮かんでいるのである。膜からは頭やら両手やら首元やらさまざまな場所へ向かって管が伸びており、先端のハートマークへ近づくにしたがって色は赤から黄色へと変わっている。

そんな第三の目がある以外、さとりの見た目は普通の少女となんら変わらない。肩から手の指先へ、胸からお腹まで、前も後ろもしっかりと拭き取り、下半身も同様にしていく。それが終われば浴室の扉を開け、風呂へ入る前に準備しておいた下着や服を着ていく。第三の目から伸びる管が邪魔なのだが、その辺りは適当に管の先端を体から外すことで解決する。一本でも回線が繋がっていればなんら問題はない。

フリルの多くついた水色の服と桃色のスカートを着終えると、管の先端を服へつけ直していく。赤いヘアバンドをつけ、その側面にもハートマークの先端を装着した。それらも終えると赤いスリッパを履いて、さとりは更衣室から廊下に出る。

すると、ちやうど青い霊力を伴った白い骸骨——怨霊が近くを通りかかっていたらしく、さとりと鉢合わせをする。視線が合ったのは一瞬で、怨霊はさとりの胸元にある第三の目を確認すると、ひどく慌てた様子で一目散に逃げて行った。

「……せっかく気持ちよかったのに」

怨霊がさとりを見て逃げて行くのはいつものことなのだが、さとりはため息を吐くの禁じ得なかった。もう少し風呂での余韻に浸りたかったのだけど、怨霊を第三の目で見てしまったせいで、そんな感情もすっかり冷めてしまった。

上機嫌からランクダウンしていつもの機嫌に戻ったさとりは、黒や赤などの市松模様彩られた床をすたと歩き、自室へと向かう。さとりが住んでいる、この地霊殿という屋敷自体は広大と言ってもいいほどに広いが、浴室から目的地へはそう遠くない。大して物思いにふけることもなく自身の部屋の扉の前までやってきた。

いざ開けようと手をかけた時、ふいと何者かの足音を感じ、さとりは来た廊下の道を振り返る。

「やつと見つけました！ さつき怨霊からこつちにさとりさまがいるって聞いて……」

ドアノブから手を離し、左右でそれぞれ三つ編みにした真紅の髪を揺らす、人懐っこい笑みを浮かべた少女と相對する。黒をベースとして緑の模様が入ったゴシックアンドロリータを身につけ、手首や首元には赤、左足には黒に白の模様のリボンが巻かれている。外の世界の言葉で言うなれば『あざとい』ファッションなのだが、そんなものよりも目が行ってしまうのは頭に生えた黒い猫耳であろう。

この少女の名前をお燐と言い、さどりの飼う多くのペットのうちの一匹であった。猫耳が生えていることからわかる通り人間ではなく、火車という猫又の妖怪である。

妖怪——そう、外の世界と違い、さどりの住んでいる地域には妖怪や神などと言った、およそ幻想とされている種族が数多く生息している。

そして人間にはない三つ目の目という器官があることからわかる通り、さとりもまた例外ではなく、その一匹であった。

「お燐。なにか用かしら？」

「はい。実は……あれ？」

お燐がくんくんと鼻を動かし、訝しげに目を細める。

「どうかしたの？」

「いえ、なんでも」

お燐はそう否定をするが、さとりにには第三の目を通して見えていた。目の前の少女——かえんびょうりん火焰猫燐。愛称はお燐——が、『さとりさま、お風呂に入ってたのかあ。でも、いつもはこの時間は部屋で本を読んでいるのに、どうして今日だけ?』と不思議に思っている、その心が。

さとりはその名が示す通り、サトリ覚という種族の妖怪であった。第三の目で他者を捉えることで心を見透かすことを可能にし、本来は、その内心を口にしてみせることで相手を驚かせることを生業としている。

そう、本来は。

お燐の内心が刻々と変化していくのが窺えた。疑問は推測へと昇華し、過去や現在の情報から立てた推測は、やがて迷いを交えながらも解答へと至る。すなわち『もしかして、そわそわして私の報告が待ち切れなかったんじゃない?』と。

いい加減話を進めてほしかったので「お燐」と名前を一言読んでみると、彼女の肩がビクツと跳ねた。当然ながら、お燐はさとりが心を読めることを知っている。お燐は精一杯の愛想笑いを浮かべては、今の推理のことを心の中で何度もさとりに向かって謝ってきた。

……なんだか必要以上に怖がられて、ちよつとへこんでしまったのは内緒である。

「はあ、まあいいわ。それで、なにか用かしら? もちろんわかっているけれど、あなたの口から直接教えてください」

「え? あ、はい」

いつもはこちらの心を読むだけで済ませるのに珍しいこともあるものだと、瞠目しているお燐の心が見える。当然、それと一緒にお燐が思い浮かべた、主人を訪ねた要件についても読み取れていたけれど、一方的にしゃべるだけだと嫌われやすいと外の世界の本には書いてあったので、お燐に言わせてみることにした。

お燐が頭の中で言葉を整理しているのが第三の目から見える。彼女は他のペットとはタメ口で話しているようだが、主人にはきつちりと敬語を使うようにしていたのだった。

「地上から来ていた河童がやっていた変調復調装置って機械の取り換えが終わりました。もう問題なくネットワークに接続できるそうですよ」

「それはよかったわ。それで、その河童たちはどうしたの？」

「昨日のぶんの金塊を適当に代金として渡したら、ほくほく顔で帰っていきました」

怨霊とは強い怨みや悪意を持った幽霊のことなのだが、その欲望を溶かしたりすると金塊が湧く。基本的に地霊殿——さとりが住む屋敷は、その金塊を収入として日々を過ごしていた。

まあ、怨霊から出てくる金塊には水銀やら砒素やら人間には毒とされる成分が含まれたりしているのだが、妖怪である河童ならばなんの問題はない。

「そう、わざわざ報告をありがとう。手間をかけさせたわね。もう行ってもいいわよ」

「あ、えっと、そのお……さとりさま」

退去の許可をもらったにもかかわらず、場に留まって、なにやら言いにくそうに目を逸らしているお燐をじっと見つめる。

もちろん彼女の言いたいことは第三の目を通してわかっているし、いつもならここで「わかってるわ」と告げて安心させてあげるところなのだが、今回もまた外の世界の本に則ってお燐に言わせてみることにする。

お燐は首を横に振って思考から逡巡を払いのけると、さとりへ向かって勢いよく頭を下げた。

「お願いしますっ！ 今回のことでおくうを処分するのはやめてくださいっ！」

お燐がさとりへと真摯にお願いをしていることは、その声音から十分に伝わってくる。第三の目でお燐を見つめれば、その懇願の真剣さが十二分に理解できる。

さとりが飼うペットの中には、れいじゅうつほ霊鳥路空——愛称はおくう——という地獄鴉のペットがいた。これまでも幾度か悩みのタネを作ってきた問題児のペットなのだが、先日そのペットが、地霊殿のさらに地下

の各所に設置された電波を交信するための機器をショートさせてしまったのだった。

ただ、さとりはおくうを処分するなんて一言も口にした覚えはない。

お燐はおくうととても仲がいい。おくうはこれまでも何度も問題を起こしてきたので、今回のことがきっかけで始末されてしまわないかとお燐は気が気でないみたいだった。

お願いします、お願いします、と何度も心の中で呟くお燐のすぐ近くまで歩み寄って、その頭を上げさせた。そうして不安そうな表情をしているお燐へと、さとりは優しげなものになるように意識して微笑んで見せた。

「心配しなくても大丈夫よ。おくうも反省していたようだから、今後同じ失敗は起こさないでしょう。それに、おくうがいなければ灼熱地獄跡の管理ができない事情もあるんだから、処分なんてできるはずもないわ」

「さとりさま……ありがとうございますっ！」

最大の感謝の気持ちを胸に再びお辞儀をするお燐の頭をぼんぼんと撫でる。

地霊殿は、かつて灼熱地獄と呼ばれていた場所の真上の方に建っている。おくうというペットには、地霊殿の下の方にあるその灼熱地獄跡の管理を任せていた。

しかし、おくうがいなければ灼熱地獄跡の管理ができない——それは真つ赤な嘘だった。

確かにおくうは他の地獄鳥とは違う特徴を備えてはいるけれど、それと灼熱地獄跡の管理ができるかどうかはまるで関係がない。おくうを処分して、他の地獄鳥に管理の役割を与えることもできる。そして、お燐もさとりが嘘を吐いたこととその事実についてはわかつている。

ここでわざわざ「いなければ」なんて言葉をさとりが使ったのは、ひとえにお燐をより安心させるためだった。実際にさとりにはおくうを始末する気なんて欠片もないし、お燐にも絶対に処分されないと思

わせることで、できるだけ軽い心落ちにしてあげたかった。

お燐はそれらの意図をすべて瞬時に理解したからこそ、最大限の感謝の気持ちを込めて礼をしている。

さとりはペットに対してはかなり甘い。特にお燐などはよく尽くしてくれているため、ほぼ絶対の信頼を置いていた。たとえさとりは第三の目がなかりうと、さとりがお燐の言葉を疑うことはないことだろう。

「どういたしまして。それじゃあ、私はもう部屋に戻るから。あとは任せたわよ」

「はいっ！ 怨霊の管理ともども、がんばりますっ！」

直立し、満面の笑みを浮かべるお燐の様子にわずかに微笑みつつ、さとりは今度こそ自室に足を踏み入れた。

扉を閉めたらその場に立ち止まり、どこか軽やかさそうに思えるお燐の足音が遠くなっていくのを聞き、それが完全になくなったところで鍵をかける。

「……あいかかわらず、怖がられているようね」

慕ってくれているのはもちろん理解できる。それでもペットたちが、どこか一歩引いた立ち位置で飼い主であるさとりと接しているのも確かだった。

さとりは肩を疎めると、電気をつけ、いつも座っているイスのもとへと足を進めた。

そこは寝室と執務室を足して二で割ったような部屋だった。

廊下の床は赤や黒などの市松模様で彩られた少々派手なデザインだったのだが、さすがに自室だけあって落ちついた色合いの絨毯を敷いている。壁には赤と青のバラが描かれた絵画がかけられており、天井からぶら下がる照明の光は白く明るく、なかなか広い部屋の全体を照らしていた。

元々地霊殿は来客が皆無と言っていいほどであり、この部屋にさとりとお燐たちペット以外が立ち入ることはまずないと言っている。だからこそ、内装にはさとり自身の趣向や生活感の度合いが如実に表れる。その点、さとりの部屋は生活感に関しては何んの問題はない。

そして趣向は、外の世界風で言うなれば『文学趣味のお嬢さま』と言ったところであろう。

左手側の壁に沿うようにして隅から隅まで本棚が置かれ、それぞれにぎっしりと本が詰め込まれている。部屋の中央にある机の前のイスへとさとりは向かっているのだが、その机の上にも少々の本が積まれており、読みかけなのか、どれもこれもしおりが挟まれているのが窺えた。

また、部屋の隅には天蓋つきのベッドが設置され、そのすぐ近くにはランプの備えられたベッドサイドテーブルがあり、ベッド等のある隅と辺を共有する頂点近くには、服や日用品などが入っているキャビネットやタンス、軽く身だしなみを整えたりするための鏡台が据えられている。

「さて」

昨日までならこの時間はずっと本を読んで過ごしていたものだけ
れど、今日からは違う。修理が終わってネットワークに繋げるようになつたとのことで、早速それをするつもりだった。

机の上に置いてある写真立てを開き、写真——さとりともう一人、少々緑がかつた灰色の髪の少女が手を繋いで笑っている写真が入っている——の裏側に隠しておいた小さな鍵を取り出す。写真立てをもとに戻すと、机の二つの引き出しのうち、右側の方について鍵穴へと手に持った鍵を差し込んだ。

その中から出てきたのは、可愛らしいデザインの赤いチョーカーだった。

それを首元に巻いて、つけ心地を確かめる。あまりキツくし過ぎると感触が鬱陶しいので、気にならない範囲まで締めつけを弱くしていく。その調整が完了すると、さとりは満足そうに頷いた。

「では……行きましょうか」

接続——さとりが右の瞼を閉じつつ呟くと、真っ暗になるはずの右の視界が不可思議な色の凶形で彩られた。

俗にデスクトップと言われているその画面には小さな絵が描かれたアイコンがいくつも羅列し、背景には動物たちが仲睦まじく戯れて

いる壁紙が貼りつけられている。

一般では、さとりがつけているような首輪のことを、正式名称をカラー型パーソナルコンピューター、通称をカラパソやチョーカーとして呼ばれていた。地霊殿中の地下に張り巡らされている機械と電波的ななにかで繋がることで、ネットワークという摩訶不思議な電子空間へと接続ができる機器だとされている。

本来、さとりのような妖怪や神と言った幻想の生き物が住んでいる、この幻想郷と言う地域は、外の世界換算ではおよそ明治時代ほどの文明——諸事情により平成までの文化がところどころに混ざっているが、根本は明治辺り——しかなく、外の世界を越えた未来の技術を備えるのには相当な理由がなければ為し得ない。核融合炉などは未完成ながらに幻想郷では実現されているのだが、それも相当な手間をかけられていた。そして首輪を通してネットワークに接続するなんてこともまた、外の世界では未だできていないオーバーテクノロジーの一つだった。

さとりが聞いた話によれば、これはかつて行われた第二次月面戦争と言う、戦争とは名ばかりの潜入作戦によって月から盗み、幻想郷用にアレンジした技術の結晶なのだという。あまり興味はないので、詳細は知らない。

ちなみにデスクトップ等が出てくる仕組みであるが、このカラパソを手に入れた際の説明書によると、『なんだかよくわからない原理で生命の信号的なアレが首元からチョーカーに送られ、なんやかんや装着者の存在に干渉した結果、視界内に使用者にしか見えない半透明の画面を出す。両目、片目の設定変更可。なお、目を閉じているとはつきりした画面が出現する』とのこと。月の技術が多分に含まれているこれには解明されていない部分も数多くあるようで、正直説明書を読んだ直後は、そんな意味不明でもしかしたら危険かもしれないものを売るなんて、と河童の豪胆とも呼べる精神に呆れさえ抱いたものだ。

しかし使い始め、これに慣れて染まってしまった今では、これほど便利な技術は完全に解明されていなくても活用すべきだという気持ちが強くなってしまうていた。

「さて、なにしようかしら」

適当にネットサーフィンでもするか、面白そうな動画を探してみるか——そうしていくつか頭の中で候補を挙げてはみるのだが、実は、さとりはとつくになにをやるかということを決めていた。

手を伸ばすと、デスクトップ以外浮かんでいない右目の暗闇の中に、まぶたを閉じているはずなのに、なぜか肌色の自分の手が見えてくる。この現象については説明書には『存在の位置情報がなんやかんやで電子がこーなって範囲を補完して、ぶるぶるしたらこうなる』と書いてあった。要するになにもわからないということだが、説明書の説明の大半はこんな感じの記述なので気にならない。

たくさんあるアイコンのうち、山と森が一緒に描かれているものに人差し指で触れる。不思議なことに、トンツとわずかに物理的な感触が存在しているようにも感じられた。

画面全体が切り替わる。静かな水面に一つの水滴を落としたように揺らぎが生じ、気づけば、大きな湖と大自然が特徴的な立体ホログラムがそこに形成されていた。

次に画面の中央から少し上辺りに変化が訪れる。一つずつ、左側から順に文字が浮かび上がってくるのだった。一文字ずつ、F、a、n、t、a、s、t、i、c、そしてC、o、u、n、t、r、y、s、i、d、e。

【Fantastic Country sideへようこそ】

頭の中に響いた機械音声に、半ば反射的に誰かが声をかけたのかと視線だけで軽く辺りを見回してしまう。鍵をかけた部屋には当然誰もおらず、カラパソがさとの存在に直接語りかけているのだった。

【こちらはネットワークで繋がる方々と一緒にもう一つの世界を楽しんでください。だ、く、た、め、の、遊、戯、Massively Multiplayer Online Role Playing Gameとなります】
「ふむ」

外の世界ではこういう、もう一つの世界を仮想体験をする遊戯とやらが人気らしく、河童が他の種族とも合同してこれを作ってみたと言

う。つい数か月前にはカラパソ所有者は全員βテスト用だとかでアップデートとともに無理矢理このプログラムをダウンロードさせられた。

ただ、そのβテストとやらは規定人数しか参加できないらしく、その人数が集まったら即座に締め切られ、多くのカラパソ保有者が起動できもしないβテストプログラムを抱えることとなったのが実情である。ちなみにさとりもまた、その多くのうちの一人だった。

半ば強制的にダウンロードされたそのプログラムを削除することもできたのだが、正式なサービスが始まった際にこのプログラムがあれば余分なダウンロードの手間が省けるとのことで、さとりは取っついておいていた。そうして肝心の正式サービスなのだが……それが始まる少し前におくうが機器を壊してしまったせいでカラパソではネットワークに接続できず、現在ではとっくに正式サービスは始まっている状況に陥っている。

「別にいいけどね」

出遅れたことはちよつとは不満ではあるが、元々のんびりとやればいいと考えていたので、さとり自身はそこまで問題だとは捉えていない。

機械音声が続切れたので、なにかさわった方がいいのかと、さきほど出てきた文字に触れてみる。すると鈴を鳴らしたような音が鳴って、文字が光って消えていった。

湖と大自然のホログラムが、一つの真っ白な球体へと変化する。

【注意事項。その一。このプログラムの起動時にはログアウトまで現実世界での意識が失われます。五感のいずれかに一定以上の強さ、あるいは不快さを覚えさせる感覚を察知した際は強制でログアウト処理が行われますが、できる限り安全な場所か、親しい者の近くに移動してから起動してください】

音声とともに、注意事項が白い球体に黄色い文字で浮かぶ。球体をタッチしてみると、注意事項がその二へと進んだ。

【その二。できるだけ二時間以内ごとにログアウトをし、休憩をお取りください。連続で二時間三〇分以上ログインを続けると、強制的

にログアウト処理がなされます。不正な手段を用いて連続的に仮想世界へと接続を続け、なにかしらの損害を負ったとしても、当社は一切の責任を負いません」

説明書の雑さ加減からして、どんなことにも責任なんて取る気はないだろうに。ただ、そんな責任管理ががばがばだろう連中がわざわざ注意事項に入れるだけあって、これは本当に重要なことなのかもしれない。とりあえずしつかりと頭に入れておくことにした。

球体をタッチすると、さらに注意事項の項目が進む。

「その三。ゲーム内では食事の概念が存在し、満足感や満腹感を得ることもできますが、現実世界のそれらとはなんら関係がありません。栄養不足で倒れないよう、自己管理にお気をつけください」

ほどほどにしろ、ということなのだろう。妖怪にも多種多様存在するが、さとりは食事を必要とする種族だ。きちんと肝に刻んでおく。

「その四。この項目のまま、一〇秒間お待ちください。タッチを行いますと、注意事項のその一へ移動いたします。こちらは人の話を聞かず注意事項さえ連打して飛ばしてしまうような妖怪や妖精などへの対策です。ゲーム内においても、他の人々の話はしつかりと聞くようにしましょう」

どうやらこれで注意事項は終わりのようだった。最後の一字まできちんと読んでから、さとりは、注意事項がめんどうだとして球体を連続で叩くような輩は永遠にループから抜けられないのね。くすりと笑う。

一〇秒間なにもせずに待っていると、球体が下の方からブロック化して崩れ落ち、右目の景色が真っ暗に戻った。次はなにが起きるのかと期待していると、右の視界に水が溢れ出て、明るい海の底の光景が映し出された。

そうして出てくるのは、ゲームで使用するキャラクターのデータ入力欄。

「……なるほど」

性別や外見設定などの項目は薄暗くなっており、変更することができない。どうやら基本は今のさとりの姿そのままゲーム内へと入

り込む仕組みになっているようだ。

ならばなぜわざわざ性別等の欄が用意されているのか。少し思索すれば、その答えはすぐに求められる。おそらくは性別がどちらでもなかったり不明であったり、肉体が不定形だったりする妖怪や神などのためだ。そういう存在はこれらの項目が薄暗くはなっておらず、設定が可能だというわけだろう。

現状、さとりがデータの変更できるのはジョブだけのようだ。種族には『人間(サトリ)』と書かれており、変更はできない。その表記の仕方にさとりは首を傾げざるを得ないのだが——『人間』、あるいは『覚』^{サトリ}だけでいいだろうに——、最終的には、これは本来の種族は覚^{サトリ}でもゲーム内では人間として扱われるという解釈なのだろうと結論を出した。

「さて、大抵は変更できないみたいだし、決めるべきはジョブね……」
そのジョブとやらは、なんと設定できる項目数が三つもある。試しに一つをタッチしてみると、戦士や魔術師など、三〇近い職業^{ジョブ}の一覧が表示された。どうやらこの中から三つの組み合わせを選べということらしい。

事前の情報から一つはなにをやるか決めていた。口元に小さく笑みが浮かぶのを自覚しながら、そつと手を伸ばしていく。

一つ目のジョブ欄に、大量にあるジョブの中から『調教師』を選んで入れた。特徴の説明には『動物や魔物の調教に優れている。サポートもできる。若干耐久が高い』とだけ書かれている。

「まあ、動物は嫌いじゃないもの」

お隣やおくうの他にも、黒豹やコモドオオトカゲなど、数え切れなほどの動物を地霊殿では放し飼いにしている。動物は心を読まれても嫌がらず、むしろ慕ってくれる。嫌いじゃないというより、むしろ好きだ。

……しかし、残り二つはどうしたものか。

一つ一つジョブの特徴説明を見ていくのだが、これじゃないと思うものが多い。戦士や剣士などはどう考えても向いていないし、弓にあまり興味はないので射手も却下、こんなにも多い中から錬金術師のよ

うに奇をてらったようなジョブを選び切るのにも抵抗がある。

「ふむう……」

さとりは、自分がサトリ妖怪だと言うことを考慮して、『斥候』を選択してみることにした。特徴説明によると『観察と隠密に優れている。能力値を二つ、Bランクに上昇させることができる』とのことなので、観察に特化させてみることにする。

あと一つだ。

ここまでを選んで二つは直接的に戦闘できるジョブではないので、三つ目はそれに類するものを入れた方がいいかもしれない。

そう思っているいろいろと見直してみるものの、しかし、これと言ったものは見つけれなかった。どれもこれも選ぶ際に唸ってしまうようなものばかりだ。

「このまま悩んでたってしかたないわね」

途中で変更もできるようだから、さっさと決めてしまおう。

とりあえず、オススメであるらしい『魔術師』を選択しておく。『戦士』等もオススメに入っていたが、自分が大きな武器を持って戦う姿が想像できなかったので不採用にした。

上の方から入力が誤っていないかをチェックし、一番下の『設定完了』の文字に触れると、項目がステータス確認とやらに切り替わった。『ジョブ補正により、五つのパラメーターのうち二つをBランクぶん上昇させることができます。どれにしますか？』

筋力、耐久、知力、精神、敏捷——それぞれの横に左右二つの矢印が表示された。元々の値は左からD、C＋、A＋、A＋、Cとなっており、試しに筋力の右の矢印にタッチしてみると、DがCへと変化する。

外の世界ではこういうものの順位をSを頂点として次をA、B、Cと下げて行くと聞いたことがあった。おそらくはそれに則っているのだろう。

アルファベットを二つ、一だけランクを上げることができるのか。そう思って次はC＋の耐久の矢印を押してみたのだが、どういうわけかB＋ではなくBになった。首を傾げつつ、筋力と耐久をもとに戻

し、他の三つの値も試してみる。

知力はA+からSへ、精神もA+からSへ、そして敏捷はCからBとなった。

「いまいちどういう計算になっているのかわからない。C以下だけが特別なのか、そもそもプラスがどういう役割を持っているのかさえ――。」

「まあ、なんでもいいわね」

どうせいくら小首を傾けていたって正しい答えはわからない。仮に解明できるとしても、どうせかなりの時間がかかる。

特化してみるのもいいが、さとりはプラスぶん得ができるらしい筋力と敏捷を選択することにした。これでステータスは筋力C、耐久C+、知力A+、精神A+、敏捷Bとなる。

設定完了の文字に触れるとすべての項目が消え、赤い文字の羅列が出現した。

「これよりMMORPG『Fantastical Countries』のサーバーへと接続を開始します。五感の遮断を行いますので、任意の場所への移動が完了したのち、こちらの文字を崩してください」

このままイスに座っていてもいいけれど目覚めた時に体が痛くなっているのは勘弁だ。立ち上がって電気を消し、ベッドの前まで行くと、ごろんと寝転がった。

なんとなく、お隣の『もしかして、そわそわして私の報告が待ち切れなかったんじゃない』という思考を思い出す。間違っていない、と苦笑した。さとりはあまりに待ち切れなくて、部屋でじつとしていられなくて、無理矢理落ちつくたためにお風呂に入っていたのだった。

「さて」

右目だけでなく、左目も閉じる。大きく息を吸って、吐いて――深呼吸を繰り返す。

さとりがMMORPGをやりたいと思ったのは、純粹に楽しそうだと思ったのが意図の一つではあるが、一番の理由は別にあった。

すなわち、心を読む能力が自身に備わっていない世界をこの身で味

わうということ。

本来、サトリという妖怪は相手の内心を口にしてみせることで驚かせることを生業としているとされている。しかしさとりは心を読むことで他人に疎まれることが耐えられず、地霊殿から一步も出ないような引きこもり同然の生活を送っていた。

ペットたち動物以外には一切好かれず、友達と呼べるような存在は一人としていない。ペットにしても、好かれているとは言え飼い主のさとりを少なからず畏れている部分があるため、さとりが気兼ねなく内面をさらせるような相手なんて妹くらいしかいないのだった。そしてその妹はそこらを放浪してばかりで、基本的に地霊殿には気まぐれでしか帰って来ず、さとり自身でさえその帰還に気づかないこともある。

要するに、誰ともまともに関われないという現状が、非常に寂しかったのだ。

地霊殿への客人はほぼ皆無と言ってもいいけれど、もちろん少なくとも数人は、つまりは数えるほどになればこれまで訪れたことがあった。しかしさとりは、常にそれらをすべて心を読む能力を存分に使って遠ざけてきた。なぜなら、中途半端に心を開いてしまい、いざ嫌われてしまった時に自分が傷つくことが怖かったから。

心が読めない世界なら、そのことで他人に嫌われることはない。心が読めない世界なら、自分が傷つく確率はぐっと下がる。心が読めない世界なら、自分もまともになっていくことができるかもしれない。寂しさを和らげることができるかもしれない。

さとりは、そういう懇願にも似た類の感情をMMORPGとやらに抱いていたのだった。

「……行きましょう」

ごくりと生唾を飲み込んで、腕を振って赤い文字を全部掻き消した。

すると『Start』と書かれた白い文字が浮かび上がり、直後、眠気に支配されたように段々と意識が遠くなっていくのがわかった。

これから体感する仮想の世界とやらでは、普通の人間みたいに誰か

と付き合うことができるのか。

不安や怪訝の念はある。しかしそれ以上に強い期待の思いを胸に、押し寄せてくる仮想への誘いに身を任せた。

遮断cut off——投入throw——接続connect——進access入com完pletion了ion。

ようこそwelcome。そんな歓迎の声が頭に響くとともに、幻想から仮想へと、さどりの意識は想像の壁を越えた。

二・無表情 (wooden face)

ざざあとうるさい音が耳に届く中、眠りから覚めるように、ゆつくりと頭と体が覚醒していく。回転を始めた思考が現状の確認をしようとは半ば無意識に瞼を開けさせ、視界は景色の情報を読み取って脳へとどうすべきかの判断を仰ぐ。

気がついた時、さとりは砂の上に寝転がっていた。

「……は……」

倒れたままでは見えるものも限られてくる。上半身を起こし、まったく見覚えのない周囲の光景を一つ一つチェックしていく。そうして目を見開いて、感嘆の息を漏らした。

川や湖など比較にならないほどの量の透き通った水が、地平線まで窺えるほど遠く、広くそこにある。青い空には爛々と輝く太陽が鎮座し、その美しさをわずかに浮かぶ白い雲が装飾品のように彩っていた。独特の潮の香りが鼻を刺激し、なんとも言いがたい落ちついた気分させてくる。

海だった。生を受けてから一度たりとも直接見たことはない、本でしか知らなかった広大な情景が目の前に広がっていた。

灰色がかった薄い黄色の砂浜は海沿いにどこまでも続いており、いつまでも見ていたくなるような気分になってしまう。

元々、さとりは美しい光景とはほとんど無縁の生活を送ってきた。地霊殿自体も地底と言う、主に嫌われ者の妖怪が住む闇ばかりの世界に建てられており、光溢れた壮観に目を奪われてしまうことは必然であつたと言えた。

少なく見積もっても三分は、座ったままの状態で海を眺めていただろう。正気を取り戻して見入っていた自分に気づくと、さとりは小さく頬を綻ばせた。

その笑みの中には、これからもこういう美しい景色がたくさん見れるのだろうかという、わずかな期待も含まれている。

「ええと」

海があるのはわかった。だが、それ以外はなにもわかっていない。

他にはなにかないかと、辺りを見回してみた。

まず自分の近くだけに木片が散らばっているのが見かけられる。一つ一つだけではなんとも言えなかったが、いくつかの形からして、さとりはそれが元は簡素な小舟だったのではないかという推測を立てた。海とは反対側には砂浜に沿うようにしてどこまでも続いていく森があり、目を凝らせば木々の上で追いかけてこらしきことをして仲良く戯れる小鳥の姿が窺える。

MMORPGを起動し、仮想世界とやらにやってきた。それはいいのだけど、さて、ここからなにをすればいいのだろうか。

腕を組んで考えようとして、ふいといつもと比べてなにかが決定的に足りないという違和感が駆け巡る。

目をぱちぱちとさせる。しかしすぐにその原因に思い至り、さとりはぱつと自身の体を見下ろした。その時に着ているものが簡素な灰色の布の服に変わっていることに気がついたが、そんなことよりも何倍も重大な変化がさとりの身に起こっていた。

第三の目サードアイがなかった。当然、いつも心臓付近に浮かんでいたそれと体中を繋いでいた管もない。

「……………ふっ」

本来なら、妖怪としての力が使えなくなってしまうことに落胆を覚えるところなのかもしれない。けれどさとりからしてみれば心を読む能力が備わっていないということに改めて実感が湧いてきて、歓喜や期待と言った感情がより高ぶってきたのだった。

このままだと海を観賞した時のように何分も笑っていてしまいそうだったので、一度深呼吸をして落ちつくことにする。その際に潮の空気から、ほんのわずかな痺れが頭を刺激するような特有の感覚を味わった。少しだけ、目をぱちぱちとさせる。

「とりあえず……………」

いつまでもここにいてもしかたがない。足の裏を砂浜につけ、その場に立ち上がった。

木片と一緒になにか役に立ちそうなものが転がっていないだろうか。もしもあってもなくても、その確認が終わったら、とりあえず森

の方に行ってみよう。

そんな風に考えながら一步を踏み出したところで、目の前に真っ白な球体が出現した。そこには黒い文字で『チュートリアル』と書かれている。

「対象の移動を感知しました。これよりチュートリアルを開始します」

「あ、はい」

妖怪という種族はいい加減で自分勝手な者が多い。製作者が妖怪ならば、なんの説明もなしに仮想世界とやらのどこともわからない変なところに放り出すなんてことも普通にやりかねないと思っていたため、きちんと解説機能があることにさとりは若干驚いた。

しかし少しだけ頭を働かせてみて、それも当然かという結論に至る。カラパソは多くの人間や妖怪、それこそ製作側の妖怪よりも強いとされる者たちも利用したりする。それなのに少しの手間を嫌がって、そんな存在たちにわざわざ文句を言われる要素を残すのはリスクが高い。

「その一。メニュー画面の開き方。デフォルトでは『メニュー・コール』と呟くことで開くよう設定されています。では、そのように口にしてみてください」

『『メニュー・コール』』

指示通りしてみると、胸から三〇センチほど先の位置に四角い形をした半透明の画面が出現した。ステータスやインベントリ、コンフィグやヘルプ、クエストやメッセージなどさまざまな項目が並んでいる。

MMORPGとやらは今日までやったことはなかったが、普通のゲームならば何度か妹とやってみたことがあったので、この時点で大体の使い方を把握した。

「ステータスではあなたのパラメーターや装備の確認、ジョブに沿ったスキルやアビリティの新規習得などを行うことができます」

ステータスという文字がいかにも押してほしそうに点滅していたので、指で触れてみる。画面が切り替わり、桃色の髪をした半眼の少

女——さとり自身が直立した状態の絵が中央に表れた。やはり第三の目はどこにも見当たらず、服はなぜか見覚えのない簡素な布の服となっている。

さきほどは第三の目にばかり注意が向いていてまったく気にしなかったが、ほぼ引きこもりゆえにおしやれに気を遣う方だとは言えないようなさとりでも、さすがにこれだけ特徴もない服装には不満を感じざるを得なかった。なにか他にマシな服があればすぐにそちらに着替えようと密かに誓っておく。

さとの絵のすぐ横にはレベルやジョブ、筋力Cや耐久C+等のアルファベットほか、それらの実際の数値も記されていた。上の方には『装備』や『能力』、『メッセージ』と言った項目がまとまっており、『装備』に触れれば装備の詳細を表示、『能力』に触れればスキルやアビリティの新規習得やらができるようだった。

「インベントリにはあなたが獲得したあらゆるアイテムを保存することができません」

説明が次に移っていたので、右下の方にあった『戻る』から画面を最初のものに戻す。

「保存は非戦闘時に限り行うことができます。対象に触れた状態で『保存する』と口にする、もしくは保存の意志を持って強く念じること、対象をインベントリに保存することが可能です。ただし、合計所持制限を越える際は保存を行うことができません」

制限とやらが量によるものか、大きさによるものか、重さによるものか等は不明だが、その辺りの比較的重要でない事柄は『メニュー』の『ヘルプ』を参照しろとも言おうのだろう。

「保存したものの具現化はインベントリの画面から直接行うことのみに限られます。非戦闘時には一瞬で具現化させることが可能ですが、戦闘時に実行する際はクールタイムが発生します。ご注意ください」
普段使うようなものができるだけ身につけておけ、ということらしい。

「コンフィグではメニュー画面の呼び出し方法や出現位置、デザインの変更、痛覚等の再現度、シンクロシステムのオンオフなどを設定し

直すことができます」

『コンフィグ』をタッチしてみると、いろいろとややこしい項目がたくさん出てきた。ほとんどは後日いじる時間ができた時にでも設定するとして、とりあえずメニュー画面の呼び出し方法だけは指を鳴らすと出てくるように変更しておく。なにせ何度も口頭で『メニュー・オープン』なんて言うのは煩わしそうだ。

痛覚も重要な風に思えるが、妖怪は元々肉体が丈夫に作られていることもあって痛みに強い者が多く、さとりも例外ではない。痛覚を完全になくすと逆に障害が出そうであるし、三〇パーセントがデフォルトのようなのでそのままでもいいだろう。

他に気になることと言えば“シンクロステム”とやらのおかしな項目なのだが、よくわからないのでデフォルトであるオンのまま放っておくことにした。

【ログアウトからは仮想世界からの離脱を行うことができます。非戦闘時には一瞬で実行することが可能ですが、戦闘時には二〇秒ほどのクールタイムを要します。また、クールタイム中に一定以上動いた際はキャンセルと見なされますのでご注意ください】

殴られる直前にすぐに消える、みたいなことはできないらしい。この世界に入る前の注意事項にあった強制ログアウトの判定が少しばかり気になるが、それもヘルプを見れば載っているだろうと思う。製作者がめんどくさがって書いていない可能性もあるというか、普通に高いけれど。

【その他のことはヘルプをご覧ください。大体そこに載ってます】

いきなり説明が雑になって、ちよつと笑ってしまった。まあ、あんまり解説ばかりしているとつまらないと苦情が来るからかもしれない。もしくは説明を作っている最中に普通にめんどろになつてきたか。どちらもありえそうで困る。

【その二。現在のあなたの境遇、および目的について簡潔に説明いたします】

表れた文字を確認しつつ、ちらりと改めて足元を見渡してみた。おそらくは小舟の残骸だろう木片が転がっている。この辺からおおむ

ねのことに予想がつくが、それに間違いがないか確かめるために球体をタツチして説明を進めた。

【あなたは小さな舟に乗って海を漂流していたところ、魔物の襲撃か竜巻の発生か、なんらかの事件に巻き込まれた結果として今の場所まで流れ着きました。どうやら記憶に混濁が見られ、言語等の基礎的な知識しか備わっていないようです】

世の中にはロールプレイ勢というものが存在すると聞いたことがある。キャラクターの境遇を脳内で設定し、それに沿った行動を取るというものだ。こういう設定が事前にあるのなら、それに則つてみるのも面白いかもしれない。

それも基礎的な知識しか備わっていないとは、この世界に来たばかりのさとりにまさしくふさわしい境遇である。いや、あるいはこれは密かにそういう親近感や没入感を覚えさせるための製作者の意図の一つなのかもしれない。

【基本的にこの世界でのあなたの行動には現実と同様に制限はありません。ノンプレイヤーキャラクターNPCの依頼を受けていくもよし、こなすだけの力があれば街を一つ攻め落とすこともよし。クエストや立ち位置の関係から他のプレイヤーと敵対することももあるかもしれませんが】

街が一つ攻め落とされようものならNPC以外にも他のプレイヤーへの被害も尋常でないものになりそうだが、その辺は問題ないのだろうか。

ちよつと不安になったものの、さすがにそれほどのおおごとになれば守る側の戦力もかなりのものとなるはずだ。そこまで心配しなくても大丈夫だろうと思うことにする。

【特にすることが決まっていなければ、今後は街を探すことをオススメいたします。チュートリアルは以上となります。もう一度行いますか？】

はい、いいえ。二つの選択肢のうち、いいえに触れてチュートリアルを終了させる。

すると白い球体が消え、鈴が鳴る音とともに、『クエストクリア！』という虹色の文字が宙空に浮かび上がった。

「クエスト……」

そういえばメニュー画面を開いた時にそんな項目があったような気がする。指を鳴らして「メニュー」を呼び出し、「クエスト」に人差し指で触れてみた。

画面が切り替わり、クエスト一覧の中に『チュートリアルを受けよう！』があること、そしてその横の小さな枠の内が『clear』と虹色に光っていることを確認する。

報酬を受け取れるようだったので、『クエスト完了』を押して、報酬の受け取りへと移行した。

どうやら数多く候補の中から一つだけ武具を手に入れることができるようである。

「ふむ」

ショートソードやロングソード、ランスやナイフなど、刃物系統が最初に目につく。そこから徐々に視線をずらしていくと、弓や猟銃と言った遠距離武器、杖や魔導書等の魔法を使うのに便利だろう道具が確認できた。

『魔術師』なので杖でも選ぶかと思いかけ、ふいと、さとりは妄想世界に来たばかりでそんなものが役に立つだろうかと疑問に思う。さきほどステータスで確かめた限り、当然ではあるものの、今のさとのレベルは一番低い一桁の数字であった。おそらくは魔法を使うのに必要なM マジックポイント Pも決して多いとは言えないほどだったし、一対一ならばともかく、あれでは連続で戦うことになったらすぐにやられてしまうだろう。

ここは手軽に扱えそうなショートソードを選択することにした。
「ひゃっ」

指で決定を押しした瞬間、光とともに小振りの直剣と鞘が現出する。いきなり目の前に刃物が現れたせいで、思わず悲鳴が出て数歩後ずさってしまった。

ざくつと砂浜に刺さったショートソードの柄に、ちよつとだけ及び腰気味になりながらも触れてみる。きちんと硬い金属の感触があることを実感し、一度小さく深呼吸をして息を整えると、改めて剣の前

に立ってそれを引き抜いてみた。

鈍色の刀身が太陽の光を反射し、薄っすらとさとりの顔を映し出す。

金属でできているからそれなりには重いが、片手で振り回せる程度は容易にできた。現実ならば妖怪としての力もあつて、もつと楽に持てると思うのだが、やはりこの仮想世界ではパラメーターに則った力しか発揮できないらしい。

「これでとりあえずは安心、なかしらう？」

鞘も拾つて、それに刃を収める。とりあえず曲がりなりにも近接戦闘ができるようになったのはいいが、魔法なんかはどうやって使うのか。一切説明はなかったので、おそらくはヘルプを見ろということなのだろうけど……。

『メニュー』から『ステータス』を選び、『能力』へと画面を移す。スキルやアビリティの新規習得をしようとしてみると、ジョブごとに分かれた無数の選択肢が表れた。

『調教師』の枠には『意思疎通』や『調教』、『支援』や『魅了』など、『斥候』には『観察』や『隠密』、『畏』や『追跡』ほか『地形把握』等、『魔術師』には『魔術』や『魔術改造』、『強化魔法』や『弱体化魔法』。

気になるのは、それぞれの枠が重なっている部分があり、そこにある文字も選択できることだった。『調教師』と『魔術師』では『魔術継承』、『調教師』と『斥候』の間には『感覚共有』等、『斥候』と『魔術師』では『術式保存』等々。なによりも目が行ったのは三つの枠が重複した位置にある『術式共有』だった。

ただし、そのどの項目も薄暗くなっている。選択しようとしても『レベルポイントが足りません』と拒否されてしまう。

しかたなく新規習得画面を閉じた。もしかしたら今は使える魔法がないのかしら、と今度は習得済みのスキルやアビリティに目を向けてみる。

どうやら、別になにも使えないわけではないらしい。『魔弾』^{まだん}というスキルだけは使用することができるようだ。

「『魔弾』……」

ふと口に出してみた瞬間、あまりにも不可思議な感覚に、無意識に左手を額に添えていた。

スキルの概要と魔術の使い方が頭の中に流れ込んでくる。

——仮想世界における魔法は、現実で妖力——妖怪としての力——を扱うのと同じ要領で、指先に力を灯して魔法陣を描く、もしくは声に込めて詠唱をすることで発動が可能。熟練度が高ければ思考内で形成した魔法陣を扱うこともできるが、その場合は威力が極端に下がる。

——『魔弾』は魔術に区分される魔法の一つであり、MPを直接エネルギーへと変え、弾として相手へぶつける技。MPの量を調節することによって、量や威力の調整も可能。

ちよつと口に出すだけで使い方がわかるとは。なかなか便利な機能だと舌を巻く。

基礎的な知識を把握し終えると、左手を額から下ろした。

「弾幕が張れるのは助かるわね」

武器を手に入れ、現状使える魔法も確認した。次にやるべきは、やはりチュートリアル最後の言われた通り、街探しであろう。このまま誰もいない海岸なんかでぼーっとしていたってなんの意味もない。

「とは言え……」

海、砂浜、森。見事にその三つしか見当たらず、生き物と言えば森の方でたまに見える小鳥くらい。

海沿いに歩いていけば港街の一つくらい見つかるかもしれないが、近くに森があるという事実が、どうにもシステムが暗にそこへ入れと告げてきているような気がしてならない。ただ、チュートリアルの途中で『魔物の襲撃』という言葉が出てきていたことから察するに、森の中にも魔物とやらが闊歩していたりして危険そうだ。

どちらにするか。

少し考え、ここは勘を信じて森へ入ってみることにした。現実ならば迷わず堅実に海沿いに進むことにしていたけれど、ここは仮想世界なのだから好きに動いてみるのも一興だ。

砂の足が取られるという独特の感覚を味わい、森の方へ向かって歩き始めた。右手に抜身の剣を持ち、左手はいつでも「魔弾」の魔法陣を描けるように空けておく。剣の鞘はインベントリに保存しておいた。

「荒事は、あんまり得意じゃないのだけど」

それでも妖怪だけあって多少は戦える自負がある。そんなよそこの魔物とやらにおくれを取るつもりはない。

足場が確と踏み込める土へと変わったのを確認しつつ、森の中へと歩を進めていった。

一步一步足を動かすたび、段々と森が深くなっていくのを実感する。絶え間なく木々を揺らしていた潮風は勢いを失い、ゆらゆらと変化し続けていた草木の影は次第に落ちついていく。潮の匂いは未だ漂うものの、気づけば緑溢れる草や土の匂いの方が強くなっていた。

海岸は海や砂浜がこれでもかというほどに日差しを反射して明るかったが、森の中はその何分の一にも薄暗い。夜というほどではないにしても、若干の不気味さを覚えざるを得ない。

「むう」

最初は平坦な足場ばかりだったけれど、進むごとにそれも荒れたものへと変わっていく。大きさを問わず石があちこちに転がり、木々の根っこが進むのを邪魔してきて、無意味に上がったたり下がったりと傾斜もひどい。最初は林くらいのものであったのに、樹海というほどではないにせよ、すでに間違いなく森と言った地形になっていた。

「いたっ！」

棘のある植物に手が当たってしまい、思わず声が漏れる。涙目になりつつ、足元の他に植物がどんな風になっているかも注意するようにし、歩みを再開した。

さすがに不安定な足場をずっと進んでいると疲れてくる。途中で休憩しようと思い、手ごろな大きさの根っこに腰を下ろす。一息をこうとして、ふいと、足元に視線を下ろしてみた。

すぐそばでアリがなんらかの甲殻類の昆虫の死骸を食い破っていたり、ムカデとクモが威嚇し合っていたり、小さな陸生ヒルが今まさ

に靴に引ついて来ようとしていたりして、ぞわつと寒気が体を駆け巡った。

即座に休憩をやめにして、さらに先へ進む行為を再開する。この頃になると、森へ立ち入ることと海沿いに進むことの二択で、どうして後者を選ばなかったのかと激しい後悔の念が胸の内を渦を巻いていた。

さとりは今でこそ地底という地下深くの世界に住んでいるが、かつては地上で生活をしていた。そしてそこそこ力のあった妖怪ゆえに、普通の虫はさとりを恐れ、危害を加えてくることはなかったのだ。

しかし、この仮想世界ではさとりは人間という判定である。

完全に森をなめていた——大分焦燥した顔で、さとりはほぞを噛んだ。

「でも、今更戻るわけにもいかないし……」

もうかなり進んできてしまっている。戻る選択をしなければこれまでの苦労が無駄になってしまう。というかそもそも道を覚えていないので、正しく海岸に帰れるかがわからない。結局さとりにはこのまますすぐ進む選択しか残されていないのだった。

肉体以上に気分が消沈し、ショートソードを握る手が重い。魔物との戦闘を警戒していたのに、実際には森の恐怖と大変さを味わうという、あまり面白くない事態になっている。

ここまで役に立っていないし、この剣はインベントリにしまっってしまったてもいいだろうか。少しだけ悩んだが、すぐに頭を振ってその考えを掻き消した。

戦闘中にインベントリからなにかを取り出すにはクールタイムを必要とする。つまりショートソードをインベントリに収めてしまえば、急に戦闘に陥ってしまった時、さとりには一度も使ったことのない“魔弾”という魔法しなくなってしまう。いざという時、それではあまりにも心もとない。

海を初めて見た時と真反対の感情を抱きながら、初期と比べてずいぶん遅いペースで歩を進めていく。

早く森が終わってくれ、勘なんて頼りにならないものを信じて意気

揚々と森に入ることにした過去の自分を殴りたい。幾度とそんな風な思考を繰り返して、それでも足だけは止めなかった。止めれば虫が足を伝ってのぼってくるからである。

「はあ……ん？」

いい加減もうログアウトしようかしら……でもそうしたら森から始まるのが嫌になって、このゲームをやらなくなるのは目に見えてるから、もう少しだけ……いや、でも。やっぱりやめようかしら。

そんな風に苦慮してしまいうくらいには精神が摩耗してきた矢先、不意と、大きな影がさどりのいる辺りを遠すぎていく。

木の葉が折り重なっているせいでわかりにくかったが、なにやら巨大な物体がはるか上空を通りすぎていったのは確かだった。

「あれは……」

半ば反射的に空を見上げてみると、どこかに飛び去っていく鳥型の影と、ちょうどこの付近に落ちてくる人型の影の二種類が目に見え込んできた。

厄介なのは、日の光のせいで落ちてくる方の人型の影がどんな容姿なのかわからないことだ。人型の魔物である可能性は十分にある。

傍観するか、受け止めるか。

そんな思案も、落下が迫っている現状では長くは続けられなかった。

瞬きを一つ。

決意を固めたさどりはショートソードを放り出すと、人型の影が地面に衝突する地点を予測し、いち早くそこへと体をすべり込ませた。さらに合間の時間を使って素早く足元の虫をどけ、人型の影との距離が目測五メートルを切ったところで全力で真上へと跳んだ。

現実世界でさえ妖怪としては非力の部類だったと自負しているさどりは、それ以上に筋力のない現状で、高いところから落ちてきた一人をまともに抱きとめるのは危険だと判断していた。だからこそこさどりも直前で跳躍し、その勢いを利用しての空中での落下の減速を図ったのである。

「うっ……」

ただしそれは人影と地面に挟まれる危険性を大幅に下げる代わりに、自身のジャンプと相手の降下の衝突の負担が、空中でまとめてさとの肉体にかかることを意味していた。

がつしりと支えた両腕が軋みを上げ、取りこぼしそうになる。抱きしめるようにしてなんとか耐えてみても、さとの跳躍よりも人影の落下の勢いの方が強かった関係で体の向きが逆に、つまりは抱えている誰かの方が下側になってしまった。

これでは下敷きにしてしまう。

「ふ、んっー」

すでに不安定な体勢であることを織り込み済みで、つま先が上空を向くように宙空を蹴り上げた。無理に伸ばされた体が軋むように痛み——三〇パーセントと言えど、痛くないわけではない——、苦悶の表情が浮かぶものの、さとの目論見は達成された。

くるりと人影との位置がちょうど半回転し、代わりにさとの方が人影の重みと土の固さに挟まれた。

「あぐっ——!?!」

一拍。まったく息ができなくなると同時、一瞬のうちに白に黒にと視界が幾度となくちかちかと切り替わった。

ほんのわずかなその時間が過ぎ去ると、強烈な苦しみのすべてが瞬きのうちに襲いかかってきて、げほげほと何度も荒い咳をする。暴れるように人影を振り払い、空気を求めて胸の付近をかきむしった。

「えっ、えっ!? その、えつと、だ、だ、大丈夫? うーんと、うーんと……ど、どうしよう……」

「は、うぐ……」

涙でにじむ視界の中で、人影が立ち上がったのがわかった。どうやらさとりが下敷きになったおかげか、無事なようだ。

落ちついて呼吸ができるようになり、なんとか心も平静を取り戻したところで、よろよろと立ち上がる。涙を拭おうと手を上げたところで、その腕が土だらけなことに気づいた。服も髪も同様で、正直言ってあまりいい気分ではない。

目元を拭うのは却下だ。少しだけ考え、さとりは思い切り目をつむると、それを勢いよく開いた。そのおかげである程度は視界もマシになる。目の前に立つ人影の詳細も、ようやく確認できるようになった。

どうやら危惧していた魔物なんかではなく、その人影は、頭半分ほどさとりよりも大きい人間の形をした女の子だったらしい。服装はさとりと同じなんの変哲もない単なる布の服だが、さとりが下敷きになった関係上、さとりとは違って汚れてはいない。薄い桃色のロングヘアはとても緩やかで、なんだか触ってみたらとても気持ちよさそう

だ。

問題は、その表情だった。どうしていいかわからないという風な感情が、よろよろと所在なさげに動く仕草から嫌でも伝わってくる。しかしその顔はまるで人形のように一切の変化がなく、無をそのままに映している。

「そんなに慌てなくても……もう、平気だから」

本当に本心から慌てているかは半信半疑で。だけれどさとりがそう告げると、薄桃色の髪の少女はふいにぴたりと動作を止め、桜色の瞳でじっと見つめてきた。

ちよつとだけ警戒していると、少女は息を大きく吸って、ほーっと大げさなくらいに安堵の息をつく。

「よかったよかったあ。いやー、本当に焦ったわ」

少女は今さつきまでの慌てようが嘘のように、完全に安心した風に胸を撫で下ろしている。

……わけがわからない。

さきほどあたふたとしていた時も、こうして相対している時も、この少女はずっと変わらず無表情のままだ。動作のおかげで感情の機微は容易に察することができるとは言え、表情のせいでもそれらも本当かどうかまるでわからない。あまりにも歪だ。

「ところで私の名は秦はたのと申します。今後ともよろしゅうございます」

本当に『ところで』だった。それに、慌てようがなくなったのと同

じように、今度は助かったことへの安堵の様相が完全に消え去っているのが、これまで多くの生命の心を読んできたさとりにはわかった。切り替えが速すぎるというレベルではない。

なんというか、感情を自由自在に操っているというか、異様にメリハリのよなもの、ハッキリしているというか。顔はずっと無表情のくせに。

妙に馴れ馴れしげな口調に変わった少女——ところが、手を差し出してきた。ほんの少し警戒しながらも、さとりはそれを握り返す。

「……私はさとり。古明地さとりよ。よろしく、でいいんでしょうか」「うんうんー、よろしくう」

ところがぶんぶんと握った手を振ってくる。それから思いついたようにぱつと離れたかと思ったら、突然頭を下げてきた。

「さつきはありがとう。とっても助かった」

その顔があいかわらず無表情であることは確かめるまでもないことだろう。しかしそのお礼の声は明らかに喜びと感謝に満ち溢れていて、さとりは思わず、微笑みを浮かべてしまっていた。

これまでまともに人と関わらない生活を送ってきた上、ペット以外の、それこそ他人に感謝されるようなことなんてろくにやっつてこなかった。だからなんというか、今、こそばゆいような気持ちになっってしまったている。

「どういたしました。こころさん」

「ふう、優しい人でよかったー。これが喜びの表……え？ あれ？ 表……情……？ あれ？ あれ？？」

落下直後の慌ただしさが戻ったきたかのごとく、こころがきよろきよろと辺りを見回し始めた。あの時と違うのは、まるでなにかを探しているかのようなことだった。

こころの頬を冷や汗が伝っていくのが見える。よく見れば目じりに涙が溜まり、その体が震えているのもわかった。

「ないー！ ないー！ き、希望の面どころか、全部の面がないぞ！ どうして……？ なんとという、なんとということだっ……！」

こころは、がくと膝については、がくりと項垂れた。表情がない

代わり、あいかわらず過剰なくらい仕草で感情を示してくる。

さとりが見る限り、こころは自分と同じようにMMO^{ゲーム}を始めたばかりに思えた。だというのにこの仮想世界で面だなんて変なものを、それも複数手に入れていたなんて考えにくい。だとすれば導き出せる答えなんて一つである。

「ええと、こころさん？ 現実で持っていた道具とか服とかは、ここには持ち込めないみたいですよ」
「え？」

顔を上げ、あつけにとられたように口を半開きにするこころ。そのくせして無表情なことがちよつとおかしくて、くすくすと笑ってしまった。

こころは顔を真っ赤に染め上げると、素早く立ち上がって顔の前でぶんぶん両手を横に振り始めた。

「ち、違う違うっ！ 慌ててない慌ててない！ 今の私は至って平静の表情っ！」

「ふふっ、ええ、わかってます」

「本当、本当にわかってるの？」

「わかってますよ。だから落ちついて……」

さとりは、こころを警戒することをやめることにした。なんだかアホらしくなつてしまったというのもあるが、なによりも、目の前の不思議の少女が理由もなしに他人に危害を加えるようには思えなかったからだ。

ふと、自分が笑っていることを自覚する。

ペットや妹以外の前で笑顔を浮かべたのは、ずいぶんと久しぶりのような気がした。

三．凶暴性 (bestial nature)

こころを受け止める際に邪魔になるからと放り投げたショートソードを回収に行くと、どうやらちようど木の幹に刺さっていたみたいだった。幸いなことに虫などは寄っておらず、特に苦勞することなく引き抜くだけで済んだ。

切っ先の方を観察してみても、刃こぼれした様子はない。

「武器かー。いいなあ、私も欲しいわ」

そういえばこころは手ぶらだ。さとりは、もしかしてこころも自分と同じようにこのゲームを始めたばかりなのだろうか、と予想する。

だとすれば、開始地点から一步でも動くところから始まるらしいため、普通に出歩いているこころはチュートリアルを終えていらずなのだが……。

「もしかして報酬を受け取っていないのですか？」

「報酬？」

「チュートリアルを終えてるのなら、“メニュー”の“クエスト”から受け取ることができると思います。一通りの中から一つだけ選んで、もらうことができますようです」

「ほうほう」

『メニュー・コール』と呟くこころを横目に、ぐるりと一周、さとりは辺りを見渡す。

……まいったわ。急いでこころさんを助けに行ったせいで、どっちの方からここまで歩いて来たのか忘れちゃった。

木々が乱立し、傾斜が複雑なせいで方角がまるでわからなくなってしまっていた。そもそもこれまででさえまっすぐ進めていたかもはなはだ疑問であり、そのことが引き返さない理由の一つでもある。

はてさてどうしたものか。空でも飛べれば——現実でならば妖力を使って飛行ができる——行くべき方向を簡単に決められて楽なのだけれど。

「おおつ、出たー！」

足元に虫が近づいてこないよう注意しつつ思索していると、こころ

が嬉しそうに声を上げるものだから、ちらりと視線を向けた。

剣とは比較にならない、それこそさとりの身長に届こうかというほどに長い柄を備え、その先端にそりのある鉄色の刀身をつけた槍に似た刃物——薙刀を両手で握っているこのころの姿がそこにある。

「おめでとうございます。なんというか、センスのいい武器ですね」「ふっふっふ、これがあればいくらでも最強の称号が手に入るぞっ！」目をきらきらとさせて、なんだかバカっぽいセリフをはくこのころに、さとりは苦笑した。

ずっと変わらず無表情なくせに、どこまでも自分の心には正直そんな少女だ。裏がなさげなぶん、普段のように心が読めなくとも気楽に話せる。

慣らすためか、ぶんぶんと薙刀を振り回し始めたこのころからちよつとだけ距離を取り、さとりは空を見上げてみた。当然のことだが、このころが落ちてくるのと一緒に上空を飛び去って行った巨大な鳥の影の姿はもうどこにもない。

「このころさんはどうしてこんなところに落ちてきたんですか？ 私は森の隣にあった海から、この森の中まで歩いてきたのですけど」

「あっ！ そうだ……あの怪鳥めっ！ 次あつた時はただではおかぬぞ！」

このころは憎々しげにぐつと拳を握りしめては、誓いを立てるかのようにならぬ薙刀を掲げ、天へと切っ先を向けた。

しばらくはその薙刀を掴む手が怒りにふるふる震えていたが、小首を傾けたままのさとりの様子に気づいたのか、このころは薙刀を下ろすとさとりに向き直る。

「ええと、目が覚めた時、私はあの怪鳥の足に掴まれていて……確か境遇とやらは『よくわからないけど鳥に攫われています。あと記憶がないです。チュートリアル終了と同時に落とされます』と」

「な、なるほど」

あまりに雑というか、さとりと違って記憶を失った原因がまったくわかっていない。漂流は案外まともな境遇だったのかもしれない。

「あなたは どうしてここに？ なんだかすごく疲れてる顔してるわよ

？」

「ええ、まあ……私は森に迷い込んだというか、森に入って迷ったというか……」

海沿いに進んで行けば村や街の一つくらいはいつか必ず見つかっただろう。そんな境遇をドブに捨てて森に迷いに来てしまったわけだから、自業自得とは言え、なんとも気の滅入る話だ。

この際もう贅沢は言わないから、海辺でもどこでもいいから森から脱出することを目標にすることが賢明かもしれない。帰り道さえわからなくなってしまうた今、自分は遭難してしまっていると言っても過言ではない。というか遭難している。

難しい顔をするさとりの視線の先で、こころがふふんと自慢げに胸を張る。

「ふっふっふ、あの怪鳥に捕まえられてた時に、上空から街が見えたのを覚えてるわー。そっちに行けば森から出ることができると思うわ」
「そうなんですか？ 助かります。じゃあ、どちらへ行けばいいんでしょうか」

問いかけると、こころが片脚を軸にゆっくりとその場で一回転した。周囲の地形を確かめているらしい。

こころはさとりに向き直ると、しかし何事もなかったかのようにもう一回転をする。今度はかなりゆっくりだ。再度さとりと対面すると、さらにもう一回転。

計三回回ったこころは、こほんと一つ咳払いをすると、気まずそうに視線を逸らした。

「……上から見たのと景色違いすぎて、どっちがどっちだかわからない……」

「まあ、二回回り始めた辺りから、そんなことだろうとは思ってました」

「ごめんなさい……」

「謝ることではありませんよ。顔を上げてください」

上空から見える程度の範囲に街があるとわかっただけでも儲けもの、と考えよう。怪鳥は今の非力なさとりが落下してきたこころを受

け止めて平気な程度の高さを飛んでいたのだから、意外と近くにあると予想することができる。

わずかながら希望が見えてきた。剣を柄を強く握り、その硬さと重みを意識することで、改めて気合いを入れ直す。

「ごころさん、もしよければ私と一緒に行きませんか？」

「行く行くー」

はい先生ー、とても言いそうなくらいに片手を高く上げて、こころは二つ返事で了承した。というか早すぎる。

彼女はあいもかわらず無表情だったが、そのぶん体の動作の方が子どものように素直なことが今更ながらおかしく感じられて、さとりの口元に微笑みが浮かんだ。

「さて……では、どの方向に行きましょうか」

大してヒントがあるわけでもないので別にどの方角でもいいのだが、正解があると考えるところでも悩んでしまう。

そんなさとりの前を横切って、ごころがとある一本の樹木の近くに立った。その木の幹をよく見れば鋭い刃物が刺さったかのような部分が見受けられる。

「せっかくだからこの木の向こう側の方に行こうよ！」

「そうですね。じゃあ、そっちに行きましょう」

さとりが一度ショートソードを放り投げた際に、その刀身が刺さった木。その横を通って、さとりとごころは森の中を歩き出した。

足場が不安定なせいで普通に進む以上に大変な上、時間が取られる。ここまですでに数十分は足を動かし続けてきたさとりはそこそこ慣れたものだったが、森に来たばかりのごころは非常に歩きづらそうにしていた。

「うーん、なんで飛べないんだろう……」

飛べればもつと楽なのに。そうぼやくごころに、さとりは心の中で「まったくね」と同意する。

妖力を使って飛行しようと意識してみても、妖力がまるで別の力に置き換わっているように、まるで手応えがない。この世界では妖力の代わりのようなものとしてMPとやらがあるみたいだが、それをその

まま飛ぶ力として利用することがはできないようだった。不便なところの上ない。

今はさとりは人間として扱われている。そうは言っても幻想郷では、人間でも空を飛ぶことができる輩はいるのだけど。

ため息をはきつつ、どうにもならないことはどうにもならないとして割り切ることにする。

棘のある植物に気づかず通り過ぎようとしたところに注意を促したり、急な段差で転びかけたところをこころに支えられたりと、互いに助け合いながら前を目指していく。

互いに気を遣い合うぶん、一人で進むよりも時間がかかってしまっていることを、さとりは重々承知していた。しかし同じ苦勞を分かち合っている仲間がそばにいるおかげで、精神の方は一人の時よりも何倍も強く保っている自覚がある。

誰かと協力してなにかに臨む。

少し辛くとも、他人との付き合いを拒んでいたがゆえに滅多に覚えたことのなかつた心地のいい感覚に、無意識のうちにさとりの顔は綻んでいた。

「ぶんぶんぶん」

しばらく進み続けていると、こころの歩みにも幾分か余裕が出始める。さとりと同様に森の足場に段々と慣れてきたようだった。

互いへの気の遣い合いも最小限なものへと変化し、さとりは、そろそろなにか世間話でもしてみようかと思案する。

話題はなんでもいい。どうしてこのゲームを始めようと思ったのかとか、好きなものはなんなのかとか、趣味はあるかとか。相手の心が読めないなら、どんな話をしても楽しく感じられるような気がした。

とりあえず好きなものでも聞いてみよう。そうしてさとりは口を開きかけ、不意に響いた甲高い鳴き声に、思わず「ひゃっ」と声が漏れた。

「キィー！ キィー！」

音のした方へと視線を上げると、樹木の枝の上からこちらを見下ろ

す、一匹の人型動物の姿が目に入った。

目と鼻だけで見れば非常に人間に近いが、口は人よりも広く出っ張っており、耳はより丸みを帯びた大きなものになっている。顔は比喩ではなく真っ赤で、それ以外の部分はすべて朽葉色の毛で覆われていた。手や足の構造は非常に人間に近いものものどどこか獣じみた作りになっていて、背の曲がり具合からも、人のような二足ではなく四足歩行であることが窺える。

世間一般的には猿と呼ばれるその動物は、さとりとこころと順番に指差して、激しく鳴いていた。森中に響き渡るその音色が仲間を呼ぶ役割を果たしているかと理解するのに、そう時間はかからない。

倒すべきか——倒していいのか。初めて出会った敵と思しき存在に、初めてだったがゆえにどう対処していいのかわからず、どうしても硬直してしまう。

そんなさとりに目がけ、枝の上にはいた猿が高くジャンプして跳び下りてきた。その手には石を削っただけの乱雑なナイフが握られている。

「ウツキイイイイイイ！」

「っ、『魔弾』！」

MPを二割ほど込めるイメージで素早く魔法陣を描き、猿との距離が詰まらないうちに完成させた。

さとりの身長のおよそ三分の一ほどとなる紫色の塊が魔法陣から出現する。そして電球のように溢れんばかりの力が収められているそれを、脳内に巡るイメージのままに撃つ。

空中にいる猿はまともに回避行動を取ることができない。全力で物を投擲した時のごとく速度で一直線に飛んでいった球体は見事に命中し、そして燻っていた力を一気に解放するかのごとく爆散した。

「キ——」

猿が瞬きのうちに軽く五メートルは飛んでいくと、次の瞬間には木の幹に鈍い音とともに頭をぶつけ、どさりと墜落していった。

こころと顔を合わせ、恐る恐る近づいていく。いつでも迎撃できるような手元の剣をしっかりと握り込みつつ、そっと倒れた猿を覗き込

む。

どうやら、首の骨が折れて絶命しているようだった。

「……やりましたね」

「やったね。ここは喜びの表情？」

幻想郷には人間を喰らう妖怪が多く存在し、逆に妖怪が互いに争い合ったりもする。加えて言えばさどりの住む地底は『強い者が正義』を地で行っている地域なので、襲いかかってきた相手の命を奪う程度のことには大して忌避感はない。

仮に今のさどりの立場が地上の人里に住む人間だとしても、彼らだっていつも妖怪の脅威にさらされているのだから、動物一匹を殺すくらいのことを気負ったりはしないだろう。というか、そもそもMMORPGとは元々が『魔物を倒したりする』ことを主に楽しむものなので、敵を倒すことにいちいち戸惑ってはいはやっていられない。

「喜び……は違うかもしれませんが。ちよつとまずいです。倒すのが遅れてしまったみたいだから……」

すでに死んでしまっているこの猿が最初に叫んだ時に即行で攻撃していれば速やかに立ち去ることも可能だったかもしれないが、躊躇してしまつたせいではないかと仲間が集まつてきてしまつているようだった。

遠く、それも四方八方から断続的に複数の猿の鳴き声が聞こえる。

「急ぎましょう」

こくりと頷くところの手を取り、森の中を走り出した。

傾斜がめちやくちやだつたり段差があつたりと、ただ走るだけでも疲れるのに、木の根っこに足を引っかけると転びそうになる。それでもなんとか立て直し、とにかく森の中を駆けた。

あの猿が叫んだ場所にずっといれば、大量の猿に囲まれてやられてしまう。仮想世界での死は現実でのそれと直結せず、復活ができたりするみたいだが、三〇パーセントとは言え痛いものは痛いだから自分から進んで死にたくはない。

ちょうど木の影から出てきた二匹の猿と鉢合わせをし、びくりと震えつつこころの手を離して、右手の剣を構えた。

甲高い鳴き声とともに猿が振り下ろしてくる石のナイフを思い切り右斜め前に飛び込むことで避けると、勢いのままに剣を横に振り回す。すれ違いざまに猿の首を両断することに成功し、猿の体が倒れるところを見送りながら、ぶんと刀身についた血を軽く払った。

ちらりとこのころの方を確認してみれば、彼女は自分と違って攻撃を避けるまでもなく、薙刀とナイフというリーチの差を利用して相手の攻撃の届かないところから胸を一突きにして倒していた。

彼女は猿から刃の部分を引き抜くところちらに目配せをしてきたので、頷き合うと再び一緒に走り出す。

「足を止める時間は最小限に抑えましょう！ 遭遇した敵は、できるだけ鳴く前に倒す方向でっ！」

「わかったわ！」

前から二匹、上から二匹——さとりが自分と上を交互に指差すジェスチャーとともにアイコンタクトをここに送ると、その意図を読み取った彼女はこくりと頷いた。

二割のMPを込めて魔法陣を描きつつ、さとりは軽く跳ぶ。直後、こころが全力で薙刀を薙ぎ払い、自分の他にさとりに迫っていた猿ごと、合計二匹の地上の猿の胴体を真っ二つした。

さとりはそんなこころの勇姿を収めつつ、初めて撃つたものよりも一回り小さい「魔弾」を二つ作り出し、上の二匹へと放つ。どうやら一番最初に殺した猿に撃っていた球体はオーバーキルだったようで、今回のように威力を抑えて「魔弾」でも二匹の猿を軽く樹木まで吹き飛ばして絶命させることができた。むしろもつと制限しても大丈夫かもしれない。

「ナイスですっ！」

「あなたも！」

最初に森に入った時が嘘のように、次々と敵が目の前に現れてきていた。

基本的に同時に出てくる数が一匹ならば小回りの利くさとりが対処し、二匹ならそれぞれ分担して倒し、三匹以上の時はこころの薙刀で一気に薙ぎ払い、残党をさとりが狩る。上からの敵は二匹以上なら

ばさとりが対処し、一匹ならばリーチの差を生かした一撃でこころが葬り去る。

言わずとも戦いを通じて互いの攻撃の利点や欠点を把握していき、戦い方をよりよいものへと進化させていった。時には敵の数だけでなく地形の広さや狭さも考慮して、戦術を変則的に切り替える。剣の欠点を薙刀が補完し、薙刀の欠点を剣が補完する。およそ即席とは思えないほどに息のあったコンビネーションは、いくら猿が集まろうとも絶対に破れやしない。

ただし、それはさとりとこころのどちらかが連携を崩さなければの話だ。さとりたちは常に走りながら転ばないように足元に注意し、いつ猿に襲われてもいよいよ周囲を警戒しながら、休むことなく幾度と金属製の武器を振るっている——つまり、その疲労の溜まる速度は尋常ではない。

先にガタが来たのは、森を歩いている期間が長かったさとりであった。足元への注意がおろそかになり、根っこに足を取られて地面に倒れ込む。そこへちようど木の後ろにいた猿が出てきて。

「はあっ！」

間一髪、こころの振り下ろした薙刀がさとりに近づいていた猿を一刃両断した。さとりは「ありがとうございます」とお礼を口にするのと同時に、こころの差し出す手を取って立ち上がると、再び駆け出した。初めに崩れたのはさとりの方だったが、こころも薙刀なんて大きいものを振り回している関係上、すでにさとりの一歩手前まで疲労が溜まってしまっている。さとりたちのコンビネーションは崩壊の一歩手前まで来てしまっており、最初は瞬殺できていた猿への対処も、三匹以上となると少しづつきつくなってきた。

あまりに猿が多すぎる。このままでは……。

「ど、どうし、はあ、します、かつ……このま、まじや、はー……ジリ貧、です」

「立ち、立ち止まっ、て、休む？ つ……疲れた、みたい」

「いえ……困まれ、るかも……追い、つかれるのは……一番、はあ、まずいです」

このまま森の外まで出ることができればそれが一番いいのだが、世の中そううまくは行かないことは重々承知している。

なにか手はないか、なにか打てる手段は——そんな風に思いながら、正面からこちらに敵意を向けてきていた猿の首をはねた。もう幾度こうして敵を倒したかわからない。

だがその直後、さとりは体が軽くなったような心地のいい違和感を覚えた。ここもそれは同様のようで、疲労で衰退するばかりだった動きのキレが急激によくなり、息もある程度回復する。

原因不明ながらも都合のいいそれを不思議に思っていると、さとりの目の前に『レベルアップ!』と虹色の文字が浮かんだ。

「レベルの上昇を確認、各パラメーターが潜在値に沿ってわずかに上昇しました。また、ジョブごとにレベルポイントを取得しました」

当然ながら、頭の中に響く機械的な声はさとりだけでなくここにも聞こえている。顔を見合わせ、互いに多少の余裕ができたことに安堵した。

しかし、疲労が完全に消えたわけではないので、すぐにでもまた動作が鈍ってしまうようなことになるだろう。おそらく体力等の最大値とともに現在値もちよっぴり上昇しただけで、単純に回復をしたわけではないのだ。

ほんの少しのいいこと。現状を打破するにはそれだけでは足りなかった。もつとなにか激しい事件がなければ、いずれさとりたちの疲労は限界を迎え、猿に囲まれてしまうことになる。

レベルアップよりも大きな変化が欲しい——そんな望みが通じたのだろうか。

幸運によるものか悪運によるものか、走り続けていたさとりとこのころのもとに、確かに状況を変質させる看過できない事態が訪れた。

「これは……?」

何匹かの猿が近くに現れ、これまで通りに攻撃して突破しようとした。けれど猿たちはさとりとこころが構えているのを見向きもせず、全員、さとりたちから少し離れたところを通って必死に走り去っていく。

その慌てようはまるで、自分たちでは決して太刀打ちできない巨大な存在から逃げているようにも見えた。

「どうしてどこかに行っちゃうんだろ」

「……いったん立ち止まった方がいいかもしれません」

さとりが提案をするが、それはどうやら一歩遅かったらしい。

二本の木の合間を抜けた時、二人はそこだけ樹木の生えていない開けた空間に差しかった。

西へと落ちていく太陽の輝きは高い木々やその枝葉に遮られ、赤らんできたばかりの空の何分の一にも薄暗い。傾斜は鳴りを潜め、ほとんど平地であるこの場にはクモや陸生ヒルと言った生物はいないようだった。

そんな、ただなにもないだけのなんの変哲もない森の隙間には、しかしなくなつたぶんだけ他とは一線を画した異常が鎮座している。

全長は三メートルにも及ぶだろうか。鼻や口は獣らしく顔から前方へと飛び出ており、目や耳は小さく、また耳は丸い作りをしている。胴体の大きさは人間の何倍にも及び、四肢も同様の太さを備えているものの、長さだけは巨軀と反して少々短かった。

全身の真っ黒な毛に反して腹にだけ横に一本の線とその上に二つの点、顔のような模様が白で描かれている。

「これは……まづいかもしれませんね」

俗にはクマと呼ばれるその獣は瞑想でもしているかのごとき静けさで広間の中央に座り込み、目を閉じている。

そして、さとりもこのころも、そんなクマの姿を一目見ただけで理解できた。

——この獣は、レベルアップした今の自分よりも明らかに格上の相手だ。

猿も同じような危機感を覚え、早急に退散することにしたのだらう。

「ね、ねえ」

「わかってます。ここは」

私たちも早く逃げましょう。そんな言葉を吐こうとして、クマの目

が徐々に開かれるのを目にし、喉に詰まる。

赤く血走った目は、つい数瞬間前の、静寂さを体現したかのような雰囲気とはまるで別物だ。

その瞳がさとりとところの二人を捉えると、クマはゆったりとした動作でその場に立ち上がった。

ただ見つめられているだけなのに、その時だけは思考が停止してしまつて、動くことができない。蛇に睨まれた蛙、ということわざが頭をよぎつた。

クマが口を大きく開き、歓喜にも似た吐息と涎を垂らし始めてから、ようやくとさとりは正気を取り戻す。

「ハハハハヤ——」

——猿の甲高い鳴き声とはまるで別物の、獲物を絶対に逃がさないとても叫んでいるかのごとき、大気の震える低い重圧の咆哮——

口に出しかけた言葉の内容を一瞬忘れかけてしまうほどの強烈な怒号は、さとりとところに隙を生まれさせるには十分すぎた。

一〇メートルは確実に遠くにいたクマが、気づけば目の前に迫っている。雄叫びとほぼ同時に走り出したただけだったが、隙を突かれたにしても、それが単にさとりたちよりもはるかにずば抜けた速さを誇っていたことに間違いはなかった。

「うっ——！」

クマの前足がさとりに襲いかかる。咄嗟のことに魔法陣は描けず、足が固まったかのように動かない。半ば反射的に剣の腹で防御をしようと試みるも、その結果がクマの力押しでの勝ちで終わることは火を見るよりも明らかだった。

死ぬことはないだろうが、間違いなく動けなくなる。そんな直感的な確信で思考が占められる中、一筋の閃きが視界の端をよぎつた。

「させないっ！」

こころは、さとりへとクマの前足が振り下ろされる直前、その側面をタイミングよく薙刀の石突きで突いた。こころの狙い通り前足の攻撃は斜めへと逸れ、さとりに直撃という事態はなんとかまぬがれ

る。

咄嗟の状況での最善の一手。こころの見事な手腕に少々舌を巻きつつ、さとりもまた体を動かす。

さとりとこころは思いも寄らぬ事態に倒れ込みそうになっているクマの右半身側へと回り込むと、警戒しながら大きく距離を取った。

「こころさん、ありがとうございます」

「どういたしまして。でも、お礼はまだ早いわ」

さとりは剣を、こころは薙刀を構え直す。すでに体勢を立て直しているクマは、そんなさとりたちを一瞥すると、すつと右の前足を真横に伸ばした。

前足、つまりは腕。だがクマとさとりたちの距離はあまりにも開きすぎている。あのまま振るったところで決して届きはしないだろう。しかし、さとりの第六感とでも呼ぶべき感覚は、これでもかというほどにがんと警報を鳴らしてきている。

しゃきん、と。クマの右の前足の鉤爪が瞬きのうちに一五センチほど伸長する。そして。

「ごめんなさいっ！」

こころが突如そんな大声を上げると、さとりの体を横に突き飛ばした。それからすぐにこころも体を伏せ、回避行動に移り始める。

クマが右前足を横薙ぎに払った瞬間、倒れたさとりの真上をとてつもない風圧が過ぎ去っていくのがわかった。

こころは伏せていたおかげで、さとりは突き飛ばされて範囲内から逃れていたおかげで助かった。さとりは心の中でこころにお礼を言いつつ、立ち上がりざまに背後から聞こえたぎしぎしとした音が気になって、振り向く。そして言葉を失った。

三本。それなりに太さのある木の幹が五つの斬撃によって断ち切られ、今まさに倒れ込むところだった。

あのクマは衝撃波を飛ばしたのだ。あの長く飛ばした爪から、真空の衝撃波を。

これが現実世界であれば、多少力がある妖怪ならこの程度のことはいち早くやっつけてのけるとして納得できる。戦闘はあまり得意ではない

と自負しているさとりでも、似たようなことは確実にできるだろう。しかし現実よりもはるかに非力な肉体しか持っていない現状では、ただただクマの引き起こした常識離れな事象に血相を変えて戦慄わななくばかりだった。

「つ、クマがいない……？」

視線を前に戻してみると、どういうわけかクマの姿はどこにもなくなっている。深く踏みつけられただろう草花の跡が二つ残っているだけ。あれほどまでに敵意をあらわにしていた存在がどこかに去ったということは絶対にはずだ。

鉤爪から飛ぶ一振りの攻撃に、さとりとところが目を離した隙にどこかへ身を隠した——けれど身を隠すほどの障害物なんて、この広間にはありはしない。

ならばどこへ行ったかなど、答えは一つしかなかった。

足跡が残るほど強く踏み込んで、上へと跳んだのだ。

「……さとりっ！ 上ですっ！」

クマは落下の勢力をそのままに、きよろきよろとクマを探しているところに右前脚の鉤爪を振り下ろそうとしていた。

さとの声にこころは弾かれたように顔を上げ、即座に薙刀で防御の姿勢を取る。

防御と言っても、こころは受け止めようとしているわけではなかった。遠くからでも木々を斬り裂くほどの苛烈さを有する鉤爪を前にしては、同じく木でできた柄など豆腐も同然なのだから、まともにガードしても無駄である。

ならばどうするか。止めるのではなく、流す。

こころは薙刀を斜めに構え、クマの鉤爪を柄に沿ってずらしていった。こころ自身にはクマの込めた力の半分も負担がかかっていないはずなのに、あまりの重さに腕が折れそうになるほか、立っていられなくなっって片膝をつく。

受け流した五つの斬撃はこころのすぐ横に落ち、容易く大地を斬り裂いた。さらにクマの前足が落ちた衝撃で大きく地面が揺れて。

ほぼ同時にこころは薙刀を取りこぼし、苦悶の表情の代わりと言わ

んばかりに顔に脂汗をにじませる。

——元々、こころは無傷でこれをおうにかできるなんて思っていなかった。

ほんの少し鉤爪が右肩に掠っただけ。しかしそれでできた裂傷は深く、血は傷口付近の服を染めてあまりあった。薙刀を持っていられないほどに。

その痛みの奔流に加え、足元が揺れていることよって、こころはすぐに立ち上がることができないでいるようだった。

「くっ、う……い！」

けれどクマも渾身の一撃が逸らされたせいで、最初にこころから石突きで前足を突かれた時と同じように大きく体勢を崩している。どうにかこころが持ち直す時間くらいはある——そんな風に瞬時に浮かべたさとのりの推測は、どうやら甘すぎたらしい。

クマはまるで鉤爪が当たらないこと、というよりもこころの手腕によつて攻撃後に体勢が崩されることがわかっていたかのように、不安定になった体勢をさらに傾けて、右前足に全体重を預けた。

「こころさんっ！」

そうして繰り出される片手だけの逆立ちからの回転蹴り——以前書物で知ったカポエイラという腿法にある技の一つ、エリコーピテロに酷似していた——に、こころは苦悶の声を上げる暇もなく蹴り飛ばされた。

一秒もせず、彼女はさとりから比較的近い位置にあった木の幹に叩きつけられる。さとりは、さすがに動きが無理矢理すぎたのか今度は完全にどうにもならないほどぐらぐらと体を揺らしているクマを確認すると、すぐにこころのもとへと近寄った。

「だ、大丈夫ですかっ？」

「う……ぐ……けほっ、けほっ！　ん……な……んとか。これで、ガード、したから」

こころの右手と左手には、それぞれ二つに折れてしまった薙刀が握られていた。おそらくクマが追撃をしかけてくると察した直前に、咄嗟の判断で薙刀を拾い直して盾代わりに使ったのだろう。

一応薙刀の刃物部分は無事なため、かなり柄が短くなってしまったものの、武器としての利用は可能だが……それではあまりに心もとなすぎ。

「……このころさん、さきほどはありがとうございます。あなたに突き飛ばされていなければ、私は今頃……」

「ふ、ふっふ。どういたし、まして」

ある程度息を整えたところは、折れて二つになった薙刀のうち刃のない方を適当に捨て、よろよると立ち上がった。

そうして負傷した右肩を押さえながら、こちらを観察するようにして動かないクマを見据える。

「あのクマ……かなり体が柔らかいわ。いろいろと巨体に見合わないみたい」

「そう、ですね。加えれば、観察力と対応力もかなりのものです。さきほどこころさんに受け流されることを予見していたかのように回転蹴りに移行できたのは、おそらく最初に私へ腕を振り下ろした際にこのころさんにそれを逸らされたことを覚えていたからでしょう」

でなければ、これだけの凶暴性を備えたクマが、こんなにも理知的にこちらを観察してきたりはしない。すぐにでも攻め込んでくるはずだ。それをしてこないのは、おおかた、蹴りを防がれたのは予想外だったからか。きっと今頃はこころの身体能力を頭の中で修正し直している。

知恵を備えた獣。現実にも多く存在し、まさにお隣などがその通りなのだが、貧弱な身で相手にするとここまで厄介なのか。

「逃げる?」

「……確かに、それをしたいところではありますが……」

果たしてあのクマが許してくれるかどうか。

じつと、クマの目を見据えてみる。心の中を見通すように。

血走ったその目の奥は本能と理性が混在し、いかに確実に獲物を仕留めるかという思索を広げていることが透けて見えた。当然ながらそこに獲物を逃がす意思は欠片もなく、むしろ森の中に入ろうとも確実に仕留めるとも言うような覇気さえ感じさせる。

「たぶん、無理です」

「そうかー。これはもう絶望するしかないか……たぶん、これが哀しみの表情」

あいもかわらず無表情のまま心情を表現するところ。そんな彼女に、でも、と人差し指を立ててみせた。

「一つだけ、希望のある推測があります」

「希望？」

首を傾げるこころを視界の端に収めつつ、クマからも視線を逸らさない。クマは未だこちらに襲いかかってくる様子は見せていないが、いつそれが転化するかわからないことを自覚すると、さとりも自然と早口になってしまう。

「体が柔らかいということとは、それだけ筋肉に柔軟性があるということです。もしかしたら、案外刃……あるいは攻撃自体、当たりさえすれば軽く通るかもしれません」

それは本当に、かなり希望的な観測だった。なにせ現実では、妖怪というものは皆、人の形をしていようがなんだろうが頑丈な者ばかりなのである。人間にとって非常識な事象を軽く引き起こすこのクマがそれに当てはまらないなんて保証はまるでない。

しかし、さとりは自分の立てた推論は存外間違っていないと考えていた。

これまでこの森で見てきた魔物とも呼ぶべき生物と言えば、大して強くもない猿だけだ。これだけ圧倒的な力を持つこのクマほどの動物ならば、猿程度は適当に力を振るうだけでも軽く殺すことができるだろう。つまりこの森で住むのには本来、知恵なんてものはあまり扱う必要がないはずなのだ。

それなのに目の前のクマは随一こちらを観察、分析しながら、一手先まで読みながら戦うようにしている。

もしかしたらクマは、たとえ相手が有象無象の猿であろうとも、その武器がたかが石のナイフ程度であろうとも、当たってしまうえば少ない傷を負ってしまうのではないか？

巨体ゆえに相手の攻撃に当たりやすく、柔らかいゆえに防御に難が

あるからこそ、生き残るために知恵を絞らなければならなかったのではないか？

さとりはそう推理を立てていた。

今のところクマが基本的に奇襲しかしてこないところなどがそれを裏づけてもいる。最初は咆哮混じりの突進、次は予測困難な遠距離斬撃、相手が目を離れた隙に跳び上がった上空からの急襲。

すぐに攻め込んでくればいいのに、こうして過剰なまでに様子を窺ってきているのはきつと、まともに二人同時に戦えば怪我を負ってしまう可能性が高いから。次はどう奇襲するか考えているから。

「どうせなら、あちらが動き出す前に、今度はこちらから攻勢に出てみましょうか」

「えっ？ それって、大丈夫なの？」

「どうでしょう。でも意外と、逃げるよりも助かる確率が高いかもしれませんよ」

なんだか仮想世界に来てから思い切って行動することが多い気がする。海沿いに歩くのではなく森に入ることにしたのもそうだし、落ちてきた当時は人型の影にしか見えなかったところを、地面との衝突から助けることにしたのもそうだし。

案外、自分も変革を望んでいたのかもしれない、なんて思う。なにもない、なにもしようとしなかった鬱屈で退屈な日々——たとえしよせん仮想とは言え、少なからずこの世界はそこから逸脱している。

ちらりと、こころに見やってみた。

無表情なのに不愛想じゃないどころか、とても愛想がよくて、言動がいちいち大げさ。まだ会って少ししか経っていないはずなのにコンビネーションは組みやすく、クマの強襲からは二度も助けられた。薙刀の扱いがうまく、現実でも達人級の強さをおさめているだろうことが容易にわかる。

視線に気づいたところが、不思議そうに小首を傾けながら、見返してきた。

それを見て、なんとなく、別れたくないと感じる。

この世界で死んでも多少のペナルティを払った上で別のどこかに転移するだけだと、事前の情報から知っていた。けれどそれはここらと同じ場所だろうか。またここらとは会えるのだろうか。会えるとして、それはいつの話になるのだろうか。

そんな疑問が湧き上がってくるのと一緒に、少しずつ、別れたくないと思う心が強まってくる。

「ふふっ」

無意識のうちに笑ってしまっていた。隣でこころが目をぱちぱちとさせているのが視界の端に映る。

——私は私自身が思っている以上に、寂しがり屋なのかもしれないわね。

一つ大きな深呼吸をすると、さとりは軽く指を鳴らして『メニュー』を開き、『能力』からスキルやアビリティの新規取得の画面に移った。

迷っている暇はない。表れたジョブごとに分かれた無数の選択肢のうち、いくらあつたポイントを迷わずすべて「魔術」につき込む。

——知識が流れ込んでくる。手に入れた力の仕組みが、使い方が。

「こころさん、何度も助けられておいて差し出がましいのですが……どうか、私と一緒に戦ってくれませんか？」

こころと初めて会った時、さとりが下敷きなって、こころが手を差し伸べてきたのとは逆。今度はさとりが手を伸ばし。

「こころはちよつとだけ戸惑いつつも、快く、確かにその手を取ってくれた。

四．信頼関係 (trust relationship) p)

「一緒に戦うのもこつちから攻めるのもいいけど、どんな風にやればいいの？」

「作戦は特にありません。猿をたくさん倒してきたように、普通に連携を取って攻め込みます」

「うーん、それでうまくいくのかな」

「連携については、どうせ取れなければ死ぬだけなので心配するだけ無駄です。仮に連携が取れたとして、それが通用するかどうかの不安でしたら、たぶん大丈夫だと思いますよ」

じーつとさどりの顔を覗き込んでいるところに、さどりは安心させるように微笑んでみせた。

「確かにあのクマは私たち個人個人よりも強いみたいですが、絶対的と言うほどではありません。それに古今東西、人間は不利な局面のほとんどもを数で乗り切ってきているのです。私の仮定した弱点が間違っていないければ、勝機は十分にあります」

逆に言えば、クマの防御力が低いという仮説が間違っていれば、一気にこちらの勝ち目は薄くなる。

これは一種の博打とも言えた。しかし、もしその博打に負けたのだとしても勝率は決してゼロにはなるわけではない。

いざとなればこの手に握るショートソードの刃をクマの目玉に突き刺して脳を抉るなり、口内から内臓をかき回してやるなり、いくらでも方法はあった。

だから必要以上に悩むことはない。やれることをやるだけだ。さどりは自分に言い聞かせる。

「……わかった！ 私もがんばるっ！ でも、剣は少し苦手だから、あんまり役に立てないかも……」

ところが、折れて柄が非常に短くなった薙刀を見下ろして、肩を落とす。

心配ない、とさとりは首を横に振った。

「ここまで私は剣を使ってきましたが、実は私も剣の心得なんて知りません」

「えっ？ 余計不安になってきたな……」

「ふふつ、大丈夫ですよ。いざという時は私がフォローしますから」

こころは薙刀を完全に扱い切っていた。なんらかの武術の心得がある人は他の似た武術だってある程度は使いこなせると言うし、少なくともこころはほとんど経験のないさとり以上にはうまいはずである。

補足すれば、それは別にさとりがほとんど戦力にならないこととはイコールするわけではない。ついさきほどさとりが「メニュー」から取得した新規スキル「魔術」は、薙刀が折られていなかった時のところ以上の強さをさとりへともたらしていた。

「さて……今度は私たちのターンですね」

そろそろクマがいつ襲いかかってきてもおかしくない頃だ。早めに行動しなければならぬ。

こころとアイコンタクトを交わし、互いに領き合う。特に作戦を決めているわけではないが、それは今から攻めるという合図だった。

足を前へ。

さとりとこころがクマに目がけて走り出すと、クマは威嚇するように喉を鳴らし、豪快に吠えた。

空気が振動する。心臓へ直接轟くかのごとき爆音は、肉体を越えて精神さえ震わせてくるかのようだった。

それでも、さとりとこころは一番最初にけたたましい叫びの中にさらされていたために、クマの咆哮を浴びても怯むことはない。

むしろその隙に全力で駆け、距離を詰める。ただ、それだけで詰め切れる距離ではなく、クマとの間にはまだそれなりの空間は空いていた。

「こころさん、上へー！」

「えっ？ いいのっ？」

クマが右前足の鉤爪を構え始めたのを目にし、こころに指示を出し

た。こころが疑問符を乗せて聞き返してしまうのも無理はない。

なにせ上になんて避けてしまえば逃げ場がなくなってしまう。この世界では空を飛ぶなんてことはできないのだから、単なるいいのだ。それはさとりもじゆうぶんわかっている。

ならば、なぜそんな指示を出したのか。

その説明をしている時間が今はなかった。さとりはただ信じてほしいという思いを込めて、こころに視線を送った。

目線の交錯は一瞬。こころは、首肯した。

クマの右前足が横薙ぎに振るわれる。その直前に、さとりとこころは両足に力を入れて虚空へと身を投げ出した。

一五センチにも届く鉤爪が大気を斬り裂き、怪奇に塗れた五つの衝撃波を発生させる。それはさとりとこころの真下を通りすぎていき、背後で何本もの木々を容易に斬り裂いただろうことがわかった。

その木が倒れる音が届くよりも先に事態は次の変化を見せている。クマの前足から繰り出される飛ぶ斬撃を回避するためには、それなりに高いジャンプをしなければならぬ。当然、その着地までには進路を変更することはできず、クマは迷わずそこを狙ってきた。

クマが滑り込むようにしてさとりとこころの目の前に躍り出ると、まずは厄介な方を始末しようと考えたのか、こころへと右前足の鉤爪を振りかぶる。こころは体を庇うようにして折れた薙刀を斜めに構えた……が、足場のない空中で受け流しを成功させるにはかなりの安定感を体現しなくてはならない。得意な薙刀が完全な状態を保っているのならばともかく、折れている現状で鉤爪を逸らすことは絶対にかなわないだろう。

クマもそれがわかっているのか、どこかその口の端が吊り上がっているようにも見えた。

しかし。

「心配いりません！ 防御は捨ててそのまま振り下ろしてください！」

さとりは跳躍するのとほぼ同時にショートソードをクマへ向けて全力でぶん投げていた。クマは攻撃に使おうとしていた鉤爪を慌て

て顔を庇うようにすると、投げられた剣の刃から身を守る。

そこへさらにこころが、斜めに構えていた折れた薙刀をそのまま攻撃に転じさせ、さとりの指示通り思い切り振り下ろした。そうなれば当然、クマは鉤爪のガードを継続しなければならぬ。

さとりはその間に左手で魔法陣を描きながら、それとはまた別に剣を投げてからすぐに右手で書き出していた陣を自身の右斜め上へと向けて、発動。

『魔弾』。

一割のMPを込めて繰り出したそれは、しかしクマへ当てたためのものではない。

さとりの意思によって即時撃ち出された紫色の球体は、その反動でさとりを少なからず逆側、すなわち左下方向へと押し出した。自由落下へさらに力を加え、左側へと早めの落下——それはクマにとって予想外の事態だ。

「行きますよ」

さとりの投げた剣、こころの振るう折れた薙刀。それらの対処のために、クマの右前足は顔の前まで上げられている。

さとりはクマの右半身のすぐそばに着地すると、クマが反応するよりも早く、がら空きの胴へ思い切り右の拳を裏拳のごとく叩き込んだ。

それと同時に、左手で書き表していた魔法陣が完成する。

『^{インパクト}衝撃』

『魔術』にレベルポイントをつぎ込むことで取得したこの魔法は、『魔弾』とは違って魔法陣から直接なにかが発生するタイプではない。しかし効果は至ってシンプルであり、すなわち、触れた対象へと物理的衝撃を食らわせること。

クマの脇腹に押し込んだ右の拳から猛烈な荷重が瞬間的に発出され、皮や肉を通し、体内の器官さえ必要以上にかき乱す。

思いも寄らぬ一撃を食らってしまったからか、クマの口から苦悶の呻き声が漏れ、よろめいた。

「うま〜い〜きま〜したね」

——クマが右前足を振りかぶっているのを見た時、さとりが上へ跳び上がるよう指示を出したのは、そうすればクマが隙を突いてくるだろうことがわかっていたから。そして実際に突いてほしかったから。なぜなら、こちらが明確な隙を見せてしまった時の相手の反応ならばある程度は予測が可能だからだ。それも着地までの時間はそう長くないのだから、判断は咄嗟のものになる。

さとりは、その反応が三パターンに分かれると予想していた。

一つ目はその安全な瞬間を狙って距離を取ったり左右へと回り込んだりとクマにとって都合のいい状況を作り出すとしてくること。

二つ目は、右前足を使った飛ぶ斬撃を連続で繰り出してくること。

三つ目は、こうしてこちらの前に躍り出てくること。

しかし一つ目の、それも距離を取るといふ選択だけはしてくる確率はあまりないだろうとさとりは睨んでいた。なにせクマはおそらく傷を負うことを嫌がっているだけで、さとりやこころ自体を恐れているわけではない。ならば突如自分より格下だと思っ^ンている相手に隙が生ま^剋れた時、互いの空間を空けるなんて手は普通は打たない。打つてくるとすれば二つ目か三つ目、あるいは一つ目のうちの左右へ回り込むという動作に自然に絞られる。

加えれば、クマはどうにもこころを少なからず危険視しているようであつたから、下手に飛ぶ斬撃に頼ったりはせず三つ目の直接仕留めようとする選択をして、こころを確実に殺しに来る可能性が高いとも予想していた。そうして事実、それに間違いはなかった。

さとりの投げた剣から続くこころの一撃でクマに強制的にガードを続けさせ、「魔弾」の反動で早めに着地して相手の空いた脇腹を突く——完全にさとりの思い描いた通りの展開だ。

ちなみに二つ目の飛ぶ斬撃の連打を相手が選んだならば、その動作を投げた剣で連撃を抑制しつつ、そのまま近づいて「魔弾」で隙を探しながらこころにそれを突かせるつもりだった。そうなるこちららは真正面から戦うことになる上、さとりが武器を失ってしまうので、少々さとりたちの方が不利になる。

一番選んでほしくなかったのは一つ目のサイドやバックなどに移

動されることだ。そうなるときとりが投げた剣は相手にとつてはあまり障害にならない上、もしも一定の距離を保って右前足だけで遠距離攻撃をされ続けては目も当てられない。その選択をしてこない根拠と見通しが立っていたからこそその作戦だったが、実際にこうして成功すると、さとりの口からほつと安堵の息が漏れた。

「ついでっー」

ところが着地してすぐに跳び上がり、返す刀でクマの右前足の指の根元に刃を当てた。肉や骨の薄いほか、こころが相当に力を込めていたからか、容易く切断することに成功する。

大量の血とともに鋭利な鉤爪を宿した厄介だった五指が宙を舞い、ほとほと地面に落ちていく。

これで相手は、ちよつと力が強くて体が柔らかいだけの手負いのクマになった。

あまりの痛みに耐えられなかったのか、悲鳴にも似た獣の絶叫がすぐ近くから発せられる。真っ赤な瞳に怒りだけでなく、憎悪さえ混じっているのは見間違えではないだろう。

クマが嘶きのままに開けた口でさとりの方を狙ってくる。それは今までの動作の中で一番素早く、しかし代わりに知性が抜け落ちてしまっているようにさとりは感じた。

避けられない。だが、問題ない。

『円盾』
シールド

しよせんは獣だ。知恵を持つと、しよせんは中途半端。ずっと忌避していた攻撃を食らってしまった後、怒りに飲まれて凶暴化することは想定内の範囲内だった。

あらかじめ描いていた魔法陣が発動し、さとりを守るために半透明の白い円盾が出現する。この魔法も至って単純、魔力で作られた物質の壁を形成すること。

結果的にクマは盾に顔面を強打することとなり、しかし仮にも野生で生きてきた意地か、ひるまずに指のない右前足で半透明の円盾の上面を掴んできた。それを支えにし、そのまま盾の上側から左前足を突き入れてくる。

これはさすがに予想外。でも、好都合でもある。

さとりは顔を庇うように左腕をかざした。右前足とは違って普通の長さだが、確と鋭い鉤爪が前腕を抉り、さとりを突き飛ばす。

「い、う……い！」

たかが三〇パーセントと言えど、痛いものは痛い。血飛沫というほどではないが、流れ出た血が指先に溜まっていき、ぽたぽたと落ちては地の草花を赤く濡らしていく。

だが、これくらいは必要経費だろう。

クマが冷静さを欠いているのは火を見るよりも明らかだった。〃
円盾^{シールド}を前に意固地になってしまい、牙と両腕をすぐに使えない体勢になるといふ決定的な隙を少なからずさらした。それは、こころがクマの命を刈り取るまでの時間としては十分すぎる。

クマの懐に潜り込んだところは折れた薙刀の切っ先を素早くクマの首元に添え、思い切り力を込めて押し込んだ。

皮を貫き、肉を裂き、骨を断つ独特の音。クマの目が見開かれ、次の瞬間にはそこから光が失われていく。

「わ、わわっ!？」

崩れ落ちるクマの下敷きになりそうになったところが、慌てて柄から手を離してその場から退いた。それから一秒もしないうちにクマが倒れ伏し、さきほどまで獣の咆哮ばかりでうるさかったこの場が、出し抜けに静寂に包まれる。

クマは首の後ろまで刃が飛び出ていて、ぴくりとも動かない。それでも死んだふりの可能性もあるかも、と試しに危険覚悟で右手をクマの顔の前に差し出してみたが、噛んできたりはしなかった。

完全に息絶えている。そのことの確認をきちんと終えると、さとりは急に緊張が解けて、思わず座り込んでしまった。

「やり、ましたね」

左腕を庇いながら、さとりは口元に笑みを浮かべてみせた。本当は素直に嬉しさをたたえた微笑みになるはずだったが、噛まれた痛みのせいで意図せず少々引きつったものになってしまう。

そんな彼女の姿も言葉も目に入らないように、こころは無言で肩を

震わせていた。

もしかしたら、自分と同様に緊張が解けてしまつて、そのせいで命を失いかけたという事実を改めて恐怖を抱いたのかもしれない、なんて思う。別にこの仮想世界で殺されても現実では死なないとは言え、現実と見紛うほどに精巧に作られているために、そうなつてもなんら不思議ではない。

なにか声をかけてあげた方がいいのだろうか。それとも、なぐさめるように背中を擦ったりしてあげるのがいいのだろうか。あいにくとまともな人付き合いが圧倒的に少ないさとりには、こういう時にどういう行動を取るのが最善なのかいまいち判断できず、結果的に黙り込んでしまった。

しかしこころはそんなさとりにはさえ目もくれず、胸の内に燻ぶつていた感情を吐き出すかのように右手をぎゅつと握りしめると、それを高く天に振り上げた。

ガッツポーズである。

「勝つたっ！ 嬉しい！」

ずいぶんと直球な喜び方であった。

さとりは自分がまったくもつて的外れな予想をしていたことに、この早とちり、と肩を竦めた。それから、わかりやすく「やったやった！」とはしゃいでいるところを眺めていると、さきほどこころへの勘違いのために萎んでいった勝利の余韻が再び湧き上がってくるのを感じた。

勝つた。そう、自分たちは格上の敵を協力して挑むことで見事打倒し、生き残つてみせたのだ。

大抵、現実での妖怪同士の本気の勝負では妖力の格で勝敗が決まる。それは多くの妖怪は自分たちの力に絶対的な自信、あるいは誇りを持つているため、基本的に小手先の技術には頼ろうとせず真正面からの戦いを望むから。それはその妖怪が強ければ強いほどに顕著な傾向にある。太古より最強の妖怪として君臨し続けている鬼などがいい例だ。

つまり、妖怪同士の争いにおいては地力の強さの格の違いはほぼ絶

対。それが今回はどうだろう。

さとりとこころは自分たちの力がクマよりも確実に劣っているという不利な実態を知覚しながら、二人がかりとは言え格上の敵を倒してみせた。まるで人間のように策を弄して。

妖怪として、さとりはこの勝利がただの勝ちではないことを、改めて噛み締めていた。

「こころさん」

左腕はまだ痛んでいたが、その状態が続いているせいか、そろそろ慣れてきた。多少は無理をしてもなにも問題ない。

さとりは立ち上がると、声をかけながらこころのそばに寄った。

こころはさとりの真つ赤に染まった左腕を見て、それがクマに鉤爪で肉を抉られたものによることだと思いついたらしい。早く治療しないと、と慌て出すところを、さとりはどうしようと牛のように落ちつかせると、しっかりと向き直ってお辞儀をしてみせた。

「二度も助けていただいた上に、大して信頼できるはずもない私の指示にも従ってくださいって……本当にありがとうございます。今回この……クマさん？ に勝てたのは、あなたのおかげです」

さとりだけでは確実に殺されていた。たとえあらかじめ『魔術』のスキルを習得していたのだとしても、それは変わらなかったに違いない。

最初に狙われた時、こころが助けてくれたから死ななかった。鉤爪の衝撃波が来た時、こころが突き飛ばしてくれたから死ななかった。自分に恐ろしい鉤爪が振り下ろされんばかりの危険な状況にも関わらず、さとりが指揮した時には防御を捨てて即座に攻撃に転じてくれたからこそ作戦が成功を収められた。

こころは会って間もないさとりを幾度となくサポートし、一度も自分を上回るような武力を見せていなかったにもかかわらず、土壇場でも迷わずに信用をしてくれた。こころがそれだけ自分と他人にどこまでも素直で純粋な性格だったからこそ、さとりはこのクマとの戦いに勝利することができたのだ。

そうして謝意を示すさとりを、こころは目をぱちぱちとさせて見つ

めていた。

「なにを言ってるの？ このクマさんは私たちで力を合わせて倒したんだから、私だけの手柄じゃないよ」

「でも、こころさんのおかげで勝てたのは事実ですから」

「私だけでも勝てなかったわ。私もきつと、さとりがいたからクマさんに勝てたの。だから、たぶんこれは」

何気に名前を呼ばれるのはこれが初めての気がする。この数百年、限られた相手にしか名前を呼ばれたことがなかったので、なんだかちよつとむず痒いような感覚を覚えた。でも、悪くない。

こころは、片手を上げると、さとりにも同じようにしてほしいとジェスチャーで示してきた。

この時点でさとりはこころがなにをしたいかを把握する。だからなんととはなしに口元を緩めつつ、さとりも両手のうち、無傷な方の右手を上げた。

ぱあん、と。こころとさとりはハイタッチを交わす。

「きつと、私たち両方のおかげっ！」

こころの表情はずっと変わらず、無表情だ。けれどさとりはなんだか、今は彼女が満面の笑みを浮かべているように思えた。

ハイタッチをした手を胸の前まで持つてきて、その手の平を見つめてみる。

ぎゅつと握ってみて。そして、今度は開く。

——今、なにかを。目には見えないなにかを手に入れた。なんとなく、そんな気がした。

「……これからどうしましょうか」

勝利の余韻に浸るのもほどほどに、そろそろ現状の打破について意識的に思考するようにする。クマを倒したのはいいが、森の中にいるという事実は変わらないのだ。むしろ脅威たるクマがいなくなつたせいで猿が集まってくることを考慮すると、早めにこの場を離れる必要がある。

こころもじゆうぶん喜んだからか、さとりと同様に感情を切り替えたようだった。初めて会った時からそうであったけれど、こころは感

情の転換が早い。浮ついた雰囲気は急に落ちついたものになったのですぐにわかった。

「ねえねえ、それならあれが怪しいわ。ほら、あの変な光―」

こころが指差したのは、この小さな広場の真ん中、最初にクマが立っていた位置である。そこには、いつの間にか薄い水色の光で構成された円柱が存在していた。大きさはギリギリで八人が入れるかどうかというところで、入りたいなら入れという空気をこれでもかというほど発している。

さとりはそれをじつと見つめ、右目を閉じて腕を組んだ。

ロールプレイングゲーム
「R P G 的に考えると、ボスを倒したのでステージの入り口に戻るとか、街に転移するとか、そういうものですね」

「そうなの？ そういうの、私はよくわからないけど……」

「とりあえず入ってみるしかないと思います。どうせこのまま進んでも街にたどりつける保証はないどころか、かなり可能性に乏しいでしょうし、試してみる価値はあります」

ただ、その前にやっておくべきことがある。

さとりはクマの死体の前に立つと、すつと手を伸ばし、触れてみた。毛皮はそれなりに硬いものの、少し押し込んでみると、その内部の異常なまでの肉の柔らかさが伝わってくる。やはり予想通り、このクマは防御に難があるようだった。

さとりはここに来るまでにずっと不思議に思っていたことがある。すなわちなぜ死体が残るのかと。

現実ではむしろ死体が残るのが普通だ。しかしMMORPG、ゲームにおいては邪魔にしかならないはずである。この世界がどれだけ現実に準拠しているかはわからないが、亡骸がいつまでも残るとすれば、何度も狩り続けているうちに処理されない死骸が腐臭を発するようになる。それはプレイヤーにとって気分がいいものではないし、当然苦情が出るに決まっている。他のプレイヤーが倒したぶんもずっと放置されてしまうことも視野に入れると、こういう森などのモンスターが出る地域は死骸ばかりになってしまう。

つまり生き物の死体は、できるだけ倒したらすぐになくなってしま

う方が都合がいいはずなのだ。ならばそうならないのはなぜか。

推測は二つ。一つはこの仮想世界が現実に近いものと思わせるため。死骸の周りからプレイヤーがいなくなったり一定時間が経ったりすれば、おそらく消える仕様になっている。

もう一つは、倒したモンスターの素材を手に入れるため。現実でも動物の革を使って防具を作るなどはよく聞く話だ。インベントリという隔絶した性能の収納機能があることも考えると、死体は回収ができるように作られているはず。

その辺も“ヘルプ”を確認すれば全部載っていると思うのだけど、あいにくとそこまで悠長にしていられる時間はなかった。

「“保存する”」

呟いてみれば、クマの死体が白い光に包まれて一瞬で消え失せた。代わりに飛び散ったクマの赤い血、切り離された右前足が死体のあった場所に残る。

指を鳴らして『メニュー』を開き、『インベントリ』の項目へと画面を移行した。するとさきほどまで鞘しかなかっただろう収納欄に、『鋭き右の柔熊の毛皮』やら『鋭き右の柔熊の牙』やら、個別に素材が保存されている。あとで切り分けなければいけないということもあるかもしれないと思っていたので、こうして勝手に素材ごと区別されているのは助かった。

足元に転がるクマの右前足に触れ、これもまたインベントリへと保管する。追加されたのは『鋭き右の柔熊の風裂きの鉤爪』が一つ。どうやら説明欄が開けるようで、そこには『“鋭き右の柔熊”が備えていた右の前足の鉤爪。鉤爪に一定以上のMPを込めることで、その通った跡にできた真空の領域を見えない刃として、前方に飛ばすことができる』と書いてある。

今手に入れたクマの素材をまとめて選び、半分ずつに分けた。奇数のものがある場合、一度片方を一つ多くしたら、次の奇数が来た時にはもう片方を多くすると言った手段を取った。

それでも最後に一つ、さとりが回収した『鋭き右の柔熊の風裂きの鉤爪』だけが余ってしまう。どう考えても、これが一番レアなドロツ

品だろう。

「さとりさん」

トレード機能——プレイヤー同士でアイテムを取引できるらしい——でここを対象にし、クマの素材の半分、それから、鋭き右の柔熊の風裂きの鉤爪”を指定する。そのままOKの項目に触れ、同じくこころが了承するのを待った。

こころは交換の対象となるアイテム、それもクマの右前足と思われる素材を目にすると、じつとさとり視線を送った。

「いいの？」

「私は『魔術師』ですし、おそらくそこまで必要はないかと。それにきつとこれは、いい近接武器の素材になりますよ」

こころで少しでも名残惜しさを見せればきつと遠慮されてしまう。とにかく精一杯、笑顔を作ってみせた。

こころはそんなさとりを数秒ほど見つめてから、こくりと、なんだか感慨深そうに首を縦に振った。なにもトレードには出さずにOKを押し、最終確認も同じように。さとりも同様だ。

トレード完了。そんな文字が浮かび上がったので、きちんと『インベントリ』から規定数のアイテムがなくなっていることを確認する。

「さとり。ありがとう」

無表情のままに、ただ言葉だけ。しかしさとりには、その一言に今までで一番強い感情がこもっているような気がした。自然と頬を緩むのを自覚しつつ、どういたしましてと返事をする。

さとりは、クマに投げて右の鉤爪で弾かれてちよつと遠くの方の地面に刺さっていたショートソードを回収しに行った。猿を幾度となく斬ってきたせいで多少の刃こぼれはあるものの、手入れすればまだ使えそうである。

こころにクマの鉤爪を上げたのは、彼女が武器を失ってしまったからという事情もあった。あの鉤爪を素材にして新しい薙刀を作れれば、あのクマの右前足と相応に強力な武具ができて上がるはずである。

こころの近くに帰ると、一緒に薄水色の円柱のすぐ手前まで移動した。

円柱の中に手ごろな木の枝を投げ込んだりとしてみたがなんの變化もなく、やはりプレイヤーであるさとりとこころが直接中に足を踏み入れるしかないようだった。

「あ、さとりー」

「どうかしましたか?」

「これこれ」

こころがなにもない空間を指差す。おそらくはメニュー画面を示しているのだろうが、あいにくと他人のそれは見えないようにされているようである。

そのことを伝えると、こころは「ほほお」と感嘆の声を上げて、「うーん、こうかな?」と悩みながら一人でメニューを操作していった。

「これは……」

「あ、できた! やった!」

目の前に『秦こころ』からフレンド申請が届いています。承諾しますか?」なんて項目が出現し、瞠目する。選択肢は三つに分かれており、YESとNO、それから保留。

こころに視線をやると、実際は変わらぬ無表情のはずなのに、なんだかどこかもの欲しそうにこちらを見つめてきているように見えた。

それが少しだけおかしくて、さとりは表情が和らげつつ、断る理由はないとYESを押して了承する。

『『秦こころ』をフレンド登録しました』と。そんな機械音声を聞きつつ、こころと目線を通わせた。

「さとり、これからもよろしゅうございます」

「はい、こころさん。私からも、どうかよろしくお願いします」

頷き合って、再び光の円柱と向き直る。

意を決し、二人で同時にその中に入り込んだ。

【最寄りの安全地帯への転移を開始します。五秒間、そのまま動かないでください】

そんな音声がこの場に響いてすぐに、さとりの視界では宙空に赤色の文字が綴られていった。

【ゲームを始めてから二時間が経過しました。戦闘中の際は速やかに

離脱し、ログアウト処理を行うことを推奨いたします」

まだ二時間と取るべきか、もう二時間と取るべきか。なんにせよ今のさどりの心には、こころに出会う前のような森に辟易とした後悔にも似た気持ちは一切なかった。

楽しかった。それが今ある一番強い思いである。

さどりとこころの足元から白い光の粒子が這い上がってきた。やがてそれは全身を包み込み、膨大な光の奔流に思わず目を瞑る。

一瞬の浮遊感。温度も場所もなにもかも、すべてが刹那に入れ替わったような感覚。

とんつ、と地に足がついた。これまでの土や草の敷き詰められた大地とは違った、石のように確と硬さを持っている平らな地面だった。

喧騒が耳を打つ。空気の匂いもがらりと変わり、少なくとも自然味溢れたものではなくなったのは間違いなかった。

どうやらあの薄水色の円柱は予想通り、街に転移するためのものだったらしい。

ほつと息を吐く。それから、瞼をそつと上げていく。

ちようど、光の粒子も晴れてくるところだった。

地底はいつも薄暗く、昼も夜も大して変わらない。ただ、行動の目安にはなる。今はおそらく夕方と言ったところで、なにをするにも微妙な時間帯だ。

夕刻ではあるが夕餉にはまだ早いし、仮想世界で肉体を動かした直後だから、読書のような少なからず頭を使うことをやる気は起きない。こんな時間から仮眠を取るというのもだらしのない気がするうえ、夜に寝られなくなる可能性がある。

右目を閉じ、腕を組む。そうした時に右の眼に浮かび上がるのは暗闇ではなく、くつきりと色を出したデスクトップだった。さきほどから半透明状態で映り込んでいたが、瞼を閉じたことでより明瞭に捉えられるようになっていた。

その右上の部分に、メールの着信を知らせる手紙のアイコンマークが出ていた。

タッチしてチェックする。差出人は『秦こころ』、内容は。

『すごく楽しかった！もしよかったら、明日一緒に遊ぼう！』、か」
光の粒子に包まれ、目を開けた時にさとりとこころがいたのは街の中だった。観光もほどほどに、さとりは名残惜しさをどうにか振り切って、こころにまた会うむねを話してから警告に従ってログアウトをした。そうして、さきほど目が覚めたところである。

こころはさとりよりも遅くゲームを開始したために警告はまだ来ていない。現在、武器を作ってくれる場所を探して街を探検していると追伸の方に書かれている。

すぐに返信の画面に移行し、森から出ることを手伝ってくれたことへの感謝や、自分も楽しかったこと、明日の遊びのお誘いへの返事等を入力していく。

「ふふっ」

自然と頬が緩む。こんなたわいもないやり取りで、自分がひどく嬉しがっていることが理解できる。

そうだ、私はこういう関係を望んでゲームを始めることにしたんだ。心を読めない世界でなら覚の自分でも人並みの付き合いができる、友達を作ることができる。そう思い、願って。

返信完了。さとりは、メールの機能を閉じた。

「やること、決まったわね」

さとりの脳裏によみがえるのは、こころとともにクマへと挑んだ時の光景だった。

最後は賭けじみた相手の行動の誘導やこころとの連携で仕留めることに成功したけれど、最初の方は確実にさとりが足を引っ張っていた。

クマから咆哮まじりにさとりが狙われた時、さとりがいなければこころはクマへとなんらかの攻撃的アクションを取ることができていただろう。鉤爪の飛ぶ斬撃が迫ってきた時、さとりを突き飛ばさなければこころはクマから目を離さず、クマが上から襲いかかってくることも容易に感知できたはずだ。

こころは薙刀を手に入れた時、目を輝かせて喜んでいた。だからこそ思う。自分がいなければそれが折られることは、あの喜びが無為にされることはなかったかもしれない。クマの右前足の素材を譲ったのは、わずかながら密かにそんな負い目を抱いていたからこそでもあった。

明日、今のままこころと行動をとるとすれば足手まといになる確率が高い。それは嫌だ。嫌だから、それまでにできるだけ強くなるなくてはならない。

そのために必要なことは、理解している。

「うろおぼえじゃなくて、深くまで見通さないと。本気で能力を使うとするのは久しぶりだけど……」

机の前のイスに腰をかけ、ちらりと一瞬だけ第三の目を見やった。自身の両目と同じく半眼で、見る人によっては不気味だと怖がられるようなデザインをしている。

——少しとは言え、まさかこの力があることをよかったと思うような日が来るなんてね。

さとりはデスクトップからインターネットのアイコンを選ぶと、動画の検索に移った。

この短時間で爆発的にパワーアップするなんてことは普通に考え

ればできやしない。ましてや仮想世界では仮想世界での強さがあり、現実世界でどんな妖怪だったとかはまるで関係がなくなる。現実から持ち込めるものは非常に限られていた。

しかしその限られたものの中に、重要視すべきものが詰まっている。

「始めましょうか」

目的の動画を見つけて、さとりはそつと深呼吸をした。

集中する準備はできた。

最後に肺の空気をいっぱいまで吐き出すと、普段通りのぶんだけ息を吸って、再生ボタンを押すと、流れ出した動画にじつと三つの目を凝らした。

cut off ——— throw ——— connect ——— access completion
遮断 ——— 投入 ——— 接続 ——— 進 入 完 了

存在そのものが世界を飛び越えたような、たった一步で宇宙の果てまでたどりついてしまったような、どうにも表しようのない逸脱した感覚ののちに、とんとと地面に足がつく。

瞼を開けた時、さとの目に入ってきたのは、本で見たことがある古い西洋に酷似した街の風景だった。

地面には平らな石が敷き詰められており、それのないそこかしこの箇所には木が植えられている。建物は主には石造り、いくらか木造のものが混じっていた。その建物の壁からつり下げられたランタンが夜の光源となっているようだが、現在は天高くで太陽が爛々と輝いているため、ランタンに火は灯っていない。

「さて……」

動画は一通り見終わる頃には体の調子もいつも通りとなり、ついでに夕食を食べてから、またこうしてログインをしていた。

今回仮想世界にやってきた目的は戦闘ではなく、装備の新調が主だ。なにせ視線を下げれば、こころを助けた時や森での猿との連戦についてしまった土や血の汚れが、簡素な布の服に付着している。今はインベントリにしまっていて手元にはないが、ショートソードもちよつと刃こぼれしてしまっているし、研ぎ直すか買い換えるかしな

ければならない。

前回すぐにはログアウトせず、ほんの少しこころと見回っていたためにちよつとだけなら地理を把握している。自分のいる場所がログアウトする前と同じであることを確かめてから、さとりは街の中を歩き始めた。

さどりの歩いている通りの人の行き交いはまばらだ。こころともにも転移してきた直後は表通りにいたためにそれなりに人の往来も多かったのだが、ログアウトはできるだけそれの少ないところを選んで実行した。

これまで地^自霊^宅殿に引きこもっていたさとりからしてみれば、どうにも人が多く集まるという状況には慣れなかった。ペットの動物たちにならいつも囲まれているにせよ、人型の生き物となれば別である。表通りの側面には数多く露店が並べられ、そこかしこで商売が行われていたのに比べ、そこからいくらか外れた道であるさどりの歩く通路にはそれらは見受けられない。

「ま、当たり前前よね。人のいない場所で商売なんてしたってしかたがない」

しばらく歩き続けてみたが、武器屋や防具屋、あるいは鍛冶屋や服飾店と言ったものはあまり見つからなかつた。たまにあつたと思つても、店の外観が今にも潰れそうだったり店員がよぼよぼのおじいさんだったり、正直入るのが戸惑われる店ばかりだ。

やはり人の多い表通りに向かうのが確実なのだろう。わざわざ横道でよさげな店を探すということがそもそも無理があつたのだ。

小さくため息をつく。それでも明日にまたこころと遊ぶためだと考えて、重くなりかけた足を持ち上げた。

と、その時。

「ちよつとちよつと、そこの桃色の」

誰かを呼び止める幼げな声が響き、さとりは足を止めた。

桃色？

さつと周囲を見渡し、それらしい人物が近くにいないことを確認する。それならこの声が話しかけてきているのは、髪が桃色の自分とい

うことになるのだろうか。でも、勘違いで反応してしまうのも恥ずかしいから、もう一度だけ辺りを観察してみても……。

そんなさとりを見かねたのか、幼げな声が呆れたような感情が含まれたもの変わった。

「あー、その桃色の髪の人。今立ち止まった人ー」

これはもう確実に自分に声をかけてきている。そう判断したさとりは、ゆっくりと後ろに振り返った。

「私ですか？」

「そうそう。もう、二回も周り確認しなくたっていいのに。桃色って特徴が当てはまる人が二人いたら普通目的の方だけに当てはまる別の呼び方にするしさー」

そこにいたのは、蛙の着ぐるみを身に纏い、蛙座りをしているおかしな少女だった。

蛙の着ぐるみの配色は当然ながらほとんどが緑色で、胸からお腹にかけての部分や手元だけが白色となっている。蛙の口の中に当たる部分から少女の顔が見え、金髪のショートボブやまん丸とした桑染色くわぞめの瞳が窺えた。そして、どういうわけか着ぐるみの目玉がぎよろりとおちらをまっすぐに見つめてきている。

「なんでふらふらしてるの？」

「いえ、なんでもありません」

右に行っても左に行ってもついてくる不可思議な視線に小首を傾けつつ、改めて目の前の少女と向き直った。

「私に、なにがご用でしょうか」

「うーん、用って言うか、たぶんあなたの用が私なら叶えられるかもっってお誘いかな」

「お誘い？」

「ふふんっ、これ見てみてよ」

着ぐるみの少女が左腕で彼女の左側を指し示す。特に逆らうこともなく視線をその方向に向けると、そこには『よろずや』と書かれた木製の看板が立てかけられた、石で造られた小さな建物があつた。

扉は開かれており、その直線上に蛙の着ぐるみの少女がいる。そし

てこうして店の紹介をしてきている。それだけの情報があれば、目の前の少女がこのよろずやの店員であることには察しがついた。

よろずやという名称には、確か二種類の意味があつたと覚えている。一つ目がいろいろな商品を売っている店のことで、二つ目が頼まればなんでもする店や職業のこと。

はてさて、いったいどちらなのだろう。そんな風に思考を巡らせようとしたさとりの手を、少女が取る。

「まあまあ、とりあえず入ってみてよ」

「はあ」

されるがままに店の中へとついていく。店内は窓もなく薄暗かったが、着ぐるみの少女が壁にかけたランタンに火を灯していくと内装が明らかになった。

ところ狭しと棚や長机が並べられ、その中や上には剣や盾などの武器類からタオルやコップ等の日用品など、多種多様な商品だろうものが見て取れる。どうやらよろずやとしての意味は『いろいろな商品を売っている店』の方が正しかったらしい。

奥の方には一段上がったのちに畳の敷かれたスペースがあり、さとりは着ぐるみの少女に手を引かれてその手前まで移動した。少女が着ぐるみの靴を脱ぎ始めたのを見てさとりも同様にし、畳床の上に足を乗つける。

「はい、どうぞぞ」

「ありがとうございます」

着ぐるみの少女の敷いてくれた座布団の上に座り、ちゃぶ台を挟んで向き合った。

店内を見渡して、思う。

目の前の少女の言う通り、確かにここでなら自分の用も果たせるかもしれない。武器も服も売っているようだし、一目見た限りでは不良品というわけでもなさそうだった。問題は、専門店ほどの性能や見た目は期待できないということだけだ……。……。

少女が宙で指を動かしていたかと思えば、ちゃぶ台の上に急須と二つの湯呑みが出現する。すでに急須にはお湯が入っているようで、注

ぎ口からは白い湯気が立ちのぼっていた。

お茶の淹れられた湯呑みを差し出され、再度お礼を口にする。一口だけ飲んで、現実とまったく変わらない味と満足感に目を見開きつつ、湯呑みを置いて少女の方に目を向ける。

「それで、どう？　これならあなたの望みも叶えられそうでしょ？」

「そうですね……でも、どうして私が剣や服の新調を求めているとわかったんですか？」

「いやだって、服がぼろぼろだしねえ。剣は知らなかったけど」

肩を竦める少女の目線の先にあるのは、さどりの着ている血や土で汚れた薄汚い布の服だ。

好きでそんな恰好で居続けるやつはいない、なんて。ごもつともだと納得をする。

「それに別になにを求めたってとりあえず案内すればいいしね。よろずやなんだからその人の目当ての品はたぶん大抵あるし」

「確かにそうですね」

現実のよろずやなら武具なんて置いてないと思うのだけど、やはりそこは仮想世界だからこそか。店内を再度見渡してみる限り、冒険に必要なようなものはとりあえず一通り揃えていると言った具合だった。

「それで、えーっと、新しい服と剣が欲しいんだっけ？　選びやすいようにまとめて並べてみようか？」

「お願いします。あ、剣は新しく買うのではなく、研ぎ直すだけでもいいんですが……できますか？」

指を鳴らし、インベントリから鞘に入ったショートソードを取り出すと、ちやぶ台の横に置く。対面する少女はそれを手に取ると、柄を持つて慎重に鞘から刀身を抜いて、しげしげと刃こぼれしている刃を眺めた。

「んー、こんな程度の傷なら全然大丈夫だよ。確実に成功させられる。ただ……」

「ただ？」

「これ、初期装備だよ。しかも『祝福』をしてない」

初期装備なのは当たりだが、祝福？　たぶんしていないので、

ちよつとだけ戸惑いつつも頷いてみせた。

対面の少女はそんなさとりの様子を確認すると、口元を緩めながら肩を竦め、鞆に剣を収める。

『祝福』って言うのはこういう刃こぼれとか……つまり耐久値の減少を抑制するスキルの一種だよ。『祝福』してれば武器が使い物にならなくなる速度も目に見えて遅くなるし、研ぎ直したりする時も最大値が減少する確率が小さくなる」

「最大値の減少、ですか？」

「武器でも防具でもなんでも、この世界での修理には耐久値の最大値の減少っていうデメリットが伴うの。基本的にそうなる確率が高い店は値段が安くて、確率の低い店は値段が高いようになってるんだ。基本的には、だけど」

ちやぶ台の横からショートソードを返してくるので、それを受け取って自分の横に置いた。

「私みたいなプレイヤー（ノンプレイヤーキャラクター）が経営してる店だとそうと限るわけじゃない。さすがにNPC……あ、NPCの意味はわかる？」

「現実からログインしているわけではなく、そもそもからプログラムでできた仮想世界だけの生き物……ですよ？」

「そうそう。さすがにそのNPCの店よりは安くしないと話にならないからねえ。プレイヤーの店は確率が同じだとしても、値段はどこもまちまちだよ。NPCのその値段に限りなく近かったり、あるいはそこそこ遠かったり、常連さんだけには安くしてるところとかね」

目に見えた稼ぎが欲しい人はNPCの値段よりほんのちよつと安い程度にし、とりあえずたくさんの人に知ってほしいという人はもつと安くする。固定客が欲しい人は常連だけへのサービスをつけたりと、いろいろな戦略が繰り広げられているようだ。

「あー、あと武器とか防具とかのランクが高いと修理も失敗しやすくなるから、ランクの高いものの修理は必然的に成功確率が高いところに行かなきゃならなくなるね。さっきあなたが出した初期装備だとランクは三、石の武器で二、木の棒で一ってところ。ランクが一ならどこでどう修理したってまず失敗しないわ。あとはー、直すものの状

態がひどくても失敗しやすくなるかな」

「ランク、ですか。最高はいくつなんですか？」

「さあ？　一応、私が聞いた限りでのランクの一番上は七だけど、そんな中途半端な数字で終わるとは思えないし、まだまだ上はありそうだね」

そこまで言うと、着ぐるみの少女は湯呑みを口元に傾けた。そうして満足そうに顔をほころばせ、「話を戻すよ」と宙に指を置いてなにかを操作し始める。

「装備の新調だったっけ？　まあ、とりあえずこんなところかな」

少女が手を下ろすと、さとりと少女の座っている横に一瞬にして大量の服や鎧などの装備が並べられた。いくらか見覚えのあるものが、と店内の棚や長机の上に目を向け、そこにさきほどまであったはずのものがいくつか消失していることを確かめる。

「自分の店の中になると、店に置いてあるものは全部インベントリに入ってるのと同じ扱いになるんだ。建物から出たらそういう機能はなくなるけど」

「そうなんですか」

「それから剣だけだね。修理と一緒に『祝福』もどうかかな？　一応私も

『祝福』のスキルは持っているし、お安くしとくよ」

「あ、お願いします。でも……」

メニューを開き、ステータスの欄から所持金を確認する。森で魔物を倒してきたからか、ログイン直後よりは増えているものの、決して多いと言えるほどではない。

表情の具合からさとりの悩みを察したのか、少女が考え込むように顎に手を添えた。

「えーっと、まあ今更だけど、お客さんって初心者だよね？　武器も防

具も初期装備だし、祝福してないし」

「はい」

「だからまあ、お金をあんまり持ってないなんてことは見た時からわかってたし、そう心配しなくてもいいって。でも、んー、そうさねー……血がついてるってことは、魔物かなんかと戦闘したんだよね？

それなら素材をいくらかインベントリに入れてると思うけど、それをここで売って見ない？」

猿の素材は回収する暇がなかったから、クマのものしか入っていない。しかたがないにせよ、せっかく倒したのにインベントリに入れることができなかったことを悔やみつつ、さとりはクマの素材を取り出して着ぐるみの少女の目に入るところに置いた。

着ぐるみの少女が、ほほう、と感嘆の声を上げる。

「柔熊じゆうゆうの毛皮に耳に牙に……へえ、あれと戦って生き延びるどころか、よく勝ち星を拾ったね」

「防御力はそう高くありませんでしたから」

「そんな簡単な話じゃなかったでしょ？ あのクマ公って自分より強い敵の匂いを察知するとすぐ逃げるから、自分より弱い敵の前にしか姿を現さないんだよ。一応こっちの方が強くても逃げるより先に捕らえる方法もあるけど、それができる頃には別の魔物狩った方がいろいろと効率いいし……で、出回ってる絶対数が少ないからあのクマ公の素材って一部の人は結構欲しがってね、たまに高値で買い取ってくれたりするんだ」

右の前足の爪はないの？ と目を輝かせて問いかけてくる少女に、さとりは首を横に振ってみせた。

「そっちは一緒に戦ってくれた人へ上げちゃいました。すみません」
「ありやりや。ま、素材の少なさからもう一人一緒に戦ってた人がいたってのはわかってたけど……うん、でもこれだけあれば十分だよ。全部売ってことでいいの？」

「そうですね……その素材で武器や防具を作れたりはしませんか？」
「作れるけど、右の前足がないから武器を作るなら初期装備と同じランク三になるよ。牙とか右の前足以外の爪じゃ大したものではないもん」

「むう、防具はどうですか？」

「そっちもランク三。あ、ちなみに今あなたが着てるのがランク二ね。一はぼろっぼろの布きれとかそういうの」

木の棒とかぼろぼろの布とか、なんとというか、使い道がほとんどな

いものがランク一ということなのだろう。

「ただ、ランク三ならここに並べてる防具の中にもいくつかあるし、無理に毛皮のやつしなくてもいいんじゃない？ さつきも言ったけどクマ公の素材って一部じゃ高値で取引してくれるから私もそれなりに高く買い取ってあげられるし、そのお金でこの並べた中から選んだ方が残るお金は多いわよ」

「ふむ……そうですね。では、そのようお願いします」

「はい、まいどー」

トレード機能を利用し、そこにさとりはクマの素材を提示した。着ぐるみの少女は素材の数を確認しながら徐々に金額を増やしていき、やがてすべてを数え終わると上昇はなくなった。

これくらいでいい？ と首を傾げる着ぐるみの少女に対し、さとりは頷く。ほぼ同時にOKの項目をタッチし、最終確認も同じようにする。

トレード完了。そんな告知が自分にしか見えない画面に表れたのち、『ステータス』からきちんと所持金が増えていることを確かめた。「今のぶんのお金だけでもここに並べた防具の値段には十分に足りるし、さ、どれでも好きなの選んでよ」

「ありがとうございます」

「これは商売なんだからそういうのはいいって。ぎぶあんどていくだよ、ぎぶあんどていく。あ、選んでる間にさつきの剣の『祝福』と修理も済ませちゃった方が早いし、これちよつと借りてもいいかな」

「どうぞよろしくお願いします」

着ぐるみの少女がさとの横に置かれる鞆に入ったショートソードに目を向けていたので、さとりは快くそれを受け渡した。

少女がインベントリから透明な液体の入った小瓶や白い石を取り出すのを横目に、さとりはさきほど少女の並べてくれた防具を眺め始める。

会話が途切れ、着ぐるみの少女が作業をする音だけが響くようになった静寂に近い空間の中で、服の吟味とはまた別にさとの思考は加速していく。

初心者だということではぼったくられている可能性がなきにしもあらず、だ。しかも自分は表通りを歩かずに人目を嫌うように脇道を歩いていたのだから、世間知らず——仮想世界知らずとでも言い直すのが正しいか——で情報をろくに手に入れていないことも丸わかり。それ以前に、『祝福』という比較的基礎的らしい知識を知らなかったという時点で、相場なんて熟知していないのは明白だった。なんとかいうか、今の自分はネギをしょつたいいいカモなのかもしれない。

でも、今はとりあえず装備をどうにかできるのなら別にいいともさとりは思っていた。仮に本当に騙されていたとしても、いくらか有用な情報も教えてもらえたのでその対価と考えれば特に気にする必要もない。

第三の目があれば相手の真意もわかるのだけど……と、そんなことを考え始めた自分にはつとし、さとりはぶんぶんと首を横に振った。

ダメだ、心が読めればなんて考えては。私はこの能力を嫌って、それが無い世界を望んだからこそ今ここにいます。それなのに都合のいい時だけ欲しいなんて思うのは傲慢がすぎる。

「どう？ 決まった？」

着ぐるみの少女に声をかけられ、弾かれたように顔を上げた。不思議そうに見つめてきている少女の顔がさとりの瞳に映る。

「そう、ですね。では、これとこれと、これとこの靴のセット……」

ついさっきまでの考えごとをまとめて頭の隅に追いやり、さとりは気になっていた服飾を示していく。

「それから、この赤いリボンをお願いします」

「ふむふむ」

着ぐるみの少女はさとりが指定した防具を抜き出し、ちらりとさとりこれこれ合っているかという裏づけの視線を送る。さとりが首を縦に振ると、しばらくして少女がさとりにトレードの申請をした。

「金額は……そうだねー。さつき渡したぶんの二分の一……いや、四分の三くらいでお願い。ランクは三で特に珍しいものでもないけど、デザインがそこそこいい感じだしね。ちよつと高値で」

「わかりました。でも、四分の三くらいと言われても……なんという

か、曖昧ですね」

「あー、うん、まあね。四分の三程度の金額ならちよつとの増減は気にしないから好きにしてー。私は別に、お金が欲しくてこの世界で商売やってるわけじゃないし」

少しだけ悩んで、ちよつと多めにお金を提示しておいた。最終確認も含めて互いにOKを二回押すと、トレード完了の告知が出現する。

「はいまいどお」

着ぐるみの少女が持っていた、さとりの選んだ服や靴、リボンが消えた。さとりが『インベントリ』へ画面を移行させると、きちんとそれがそこに入っている。

「こちらこそ。それでその、話の続きというか、興味本位なんですけれど、お金のためじゃないならなんのためにお店を？」

「暇潰し、かなあ。正直に言っちゃうとあなたが初のお客さんなんだよねえ。こんな場所だから人なんて全然来ないし」

「暇潰しでお店を、ですか」

「そうそう。暇だし神奈……じゃなくて、私の知り合いの真似してみようかなって。その知り合いもお店持っていて、そっちは結構人気みたいだけど……真似って言っても私はもうちよつとのんびりしたかったから、こんな辺鄙なところの建物を買ってみたのよ。それで今に至る感じかな？」

「なるほど。でも、この世界に入れるようになってからそんなに経ってませんよね。それなのに、どうしてそんな暇潰しするほど暇に？」

口にしてみたら、踏み入りすぎた質問かもしれない、なんて危惧を抱く。気づかれないように着ぐるみの少女の顔を覗き込んでみると、あちらはまったく気にしていないことようで、ほつと息を吐いた。

「まあ確かにー、私が見てない景色とか行ったことない場所もまだまだたたくさんあるけどさー」

ぱたんっ、とつまらなそうに少女が背中から後ろに倒れ込んだ。

「飽きちゃった」

「ゲームに……ですか？」

「ううん。強者として戦うこと」

ゆったりと、少女が体を起こす。その顔は見ている者にどこか薄ら寒さを覚えさせる不可思議な笑顔をとたえており、試すような視線がさとりを貫いた。

「だからこうやって暇潰しをして待つことにしたのよ。周りがいっぱい強くなって、いつか私を越えて……そしてその時、私が戦って楽しめるように」

ざわり、と一瞬にして全身に怖気が駆け巡り、鳥肌が立つ。ほんの刹那にして放たれた圧倒的な威圧感に、さとりは完全に飲まれてしまっていた。

口の中が乾く。頭から血の気が引いていく。どうしても、笑みを浮かべる目の前の存在から目が離せない。

くすり。

着ぐるみの少女がまた種類の違う子どもらしい微笑みを見せた瞬間、さとりは正気を取り戻した。

胸に手を当て、少しだけ荒くなっていた息を整える。

「ごめんごめん。まだ初心者あなたには刺激が強かったね。大丈夫？」

心配げな声音の少女に、さとりはなんとか笑顔を浮かべてみせた。安心させるために浮かべようとしたそれは、引きつった苦笑いになってしまっていたが。

理解したのは、この着ぐるみの少女は間違いなく、それこそ自分とこころの戦ったクマと比べ物にならないくらいに強いこと。何度も何度も命を奪い奪われの応酬をしてきたような——MMOのサービス開始からそんなに日数は経過していませんので、おそらく現実でもそういう経験がおびただしいほどにあるのだろう——歴戦の風格は、まさしく格が違いすぎる。暇潰しにお店を持ち始めたというのも間違いはないような気がした。

「んー……まあでも、こうやってのんびりしていると、なんだか戦いたって欲求もなくなってきたちゃうわねー」

着ぐるみの少女がお茶を口に運ぶ。さとりも同じようにした。やはり現実と変わらない味がする。

さとりは開きっぱなしだったインベントリの画面から、さきほど少女から買った服を選択した。しかしそこで指が止まる。どこにも装備するという選択肢がなかった。

「あー、そうそう。装備を外すのはステータスから一瞬でできるけど、着るのは具現化して自分でやらないとダメだからー」

さとの悩みを看破した着ぐるみの少女から助言が漏れる。

「敵によってすぐに装備を変えられないようにする処置みたい」「なるほど……」

さきほど買った服や靴などをインベントリから出したところで、半ば無意識にちらりと着ぐるみの少女に視線が向いてしまう。目ざとくそれに気づいた少女は、なに？ と不思議そうに小首を傾けていたが、すぐにその意図に気がついた。

「別に目の前で着替えくらいしても私は気にしないよ？」

「目を背けるとかはしてくれないんですね……やっぱり誰も見てないところではします」

「その様子だと外じゃしないでしょ？ 室内で誰も見てないところっ

て言うって宿だけどさー、あそこお金かかるよ？ どうせ私しかない

んだし、ここで着替えちゃった方がいいと思うわよ」

「でも……」

「別に防具全部外しても下着はデフォルトで装備してるし、それ他人からは破壊不能に設定されてるし、そんなに恥ずかしがらなくていいってば」

少々逡巡して、さとりはしぶしぶ頷いた。引きこもって生きてきたからか、他人に必要以上に肌を見せるのはなんというか……結構、恥ずかしいけれど。その羞恥心を理由に着替えのためだけにお金を使うと言うのも少女の言う通り、憚れる。ここは着ぐるみの少女がいるのは我慢して、ここで装備を変えることにした。

立ち上がり、土と血だらけの布の服を脱ぐと、さきほど買った服に素早く手を伸ばす。見られているのかも、と意識すると顔が熱を持つのを止められない。服を取ると同時に盗み見るように着ぐるみの少女に視線を向けてみれば、彼女は特にこちらを気にした様子はなく、

両手で持った湯呑みの中に入ったお茶を幸せそうに嗜んでいた。

なんだかこつ恥ずかしく感じていたこと自体がちよつとバカらしくなってきた、多少は平常心を取り戻したさとりは、焦らず自分のペースで新しい服に袖を通していく。

最後に赤いリボンをカチューシャのようにして巻くと、改めて自分の姿を見下ろした。

白に近い水色をした長袖のブラウスの上から、淡い紺色の線や模様、装飾がところどころになされた藍色のワンピースを着用している。ブラウスは手元の辺りだけは藍色の革で装飾がなされていた。

ワンピースは動きやすさと防御力を両立させるために布ではなく革で作られており、横幅の広い肩紐のほかに激しい動きをしても脱げないようにと薄い桃色の革ベルトのようなものを腰に巻いて、それを背中のホックでしっかりと固定していた。

スカートの丈は脛^{すね}までガードできるほど長くありながら、動きやすさも重視して、前後それぞれの真ん中に膝の高さほどまで切れ目が入っている。またスカートは革の硬さも相まって、あまり垂れることなく下に行くにつれてドレスのように全体的に広がっていた。

「うん、似合うじゃん」

いつの間にか着ぐるみの少女がお茶を置いてさとりの方を向いていた。さとりは照れくささを隠し切れず、こほんと咳払いをする。

これオマケ、と着ぐるみの少女がさとりに紺色のアームカバーを投げ渡してきた。

「所有者権限……えーつと、お店の商品とか自分の装備してる武器とかに発生する権限ね。それは破棄してあるから、そのままつければあなたのものになるよ」

袖をまくり、アームカバーをつけるとブラウスを元に戻した。布地は腕の大部分のほか、手の平や甲まで及んでいる。

「それで剣を取りこぼしたりってことはなくなるでしょ？ 素手だとたまにすっぽ抜ける人がいるからね。ほら、いざという時それじゃ大変じゃん」

「なるほど……重ね重ね、ありがとうございます」

「いいっていいって。私も初めてのお客さんで嬉しいんだもん」
無邪気な笑み。さとりもつられて笑顔になった。

「はい。あと剣」

古い服をインベントリにしまい、再度座ったさとりに、着ぐるみの少女が鞆に入ったショートソードを差し出した。

『祝福』完了、修理も完璧。耐久の最大値減少はないよ。ついでにその服の背中につり下げられるようにしといたから」

「ありがとうございます」

「お礼ばかりだねえ。悪い気はしないけど」

インベントリに入れているといざという時に大変だし、かと言ってずっと手に持ち続けているのもめんどろうだ。背にかけられるようになったというのは本当に大きい。

剣を背負うという初めての作業にちよつとだけ苦戦しつつ、なんとか成功して顔を右に動かすと、右肩から剣の柄がはみ出して見えた。

「さて、これでもう用事は終わりかな？」

「んー……回復アイテムのようなものはありませんか？」

「うちはなんでもあるよー」

着ぐるみの少女にアドバイスを受けつつ、あまったお金で今後の役に立ちそうなものを買ひ揃えていく。なんの準備もなしに魔物の出没する森を彷徨うとどうなるかは先日思い知ったばかりなのだ。

クマの素材ぶんのお金がなくなる頃には冒険前の最低限の準備は終え、今はもうこのよろずやで買うものはもうなくなってしまった。

「それじゃ、そろそろ今日はお別れ？」

「そうなりますね」

さどりの湯呑みはすでにからになっていた。さとりが湯呑みに視線を注いだのに気づいた着ぐるみの少女は、急須から新しいお茶をそこに淹れる。

「まったく、そんな顔しないの」

「……そんなにお茶をもの欲しそうにしたつもりはありませんけど」

「そつちじゃなくてさー」

「でも、美味しくいただきます」

「うんうん。それから、まあ」

と、さとりの目に入ったのは『洩矢諏訪子』からフレンド申請が届いています。承諾しますか?』という文字。

思わず目を見開いて、さとりは着ぐるみの少女——諏訪子を凝視する。諏訪子はそれに、ただ肩を竦めてみせた。

「お客としてじゃなくても、またいつでもお茶しに来てもいいよ。ほら、私ログインしてる時はいつも暇だからね」

「……ありがとうございます」

「違う違う。こういう時はそうじゃないでしょ?」

「えーっと……よろしくお願いします?」

「はい、よろしくー」

互いの選択はYES。

【『洩矢諏訪子』をフレンド登録しました】

「古明地さとり、か。ふうん……」

「どうかしましたか?」

「いんやー。なんでも。素直そうな名前だなーって思っただけ」

お茶を一杯分。さとりは諏訪子と雑談を続け、二人の湯呑みがからになったところで、今度こそお開きとなった。

ただ装備を新調するだけだったつもりが、とんだ誤算で二人目の『友達』^{フレンド}ができた。無意識のうちに口元に笑みが浮かぶ。

また必ずこのよろずやを訪れよう。そんな思いとともに、店の外に出ると、さとりは仮想世界からログアウトをした。

六・付喪神 (artifactual spirit)

cut off — 遮断 — throw — 投入 — connect — 接続 — access completion — 進 入 完 了

ほんの一度の歩みでまるで知らない場所にたどりついてしまったかのような、あいかかわらず他とは逸脱した異質な感覚の後、さとりはすつと瞼を開く。

さとりがいたのは、ほとんど人気のない狭い横道だった。壁にかけられたランタンが少なく、夜ともなれば相当に暗くなるのが容易に想像がつくが、太陽が真上に来ている時間帯だったので今はその心配はなかった。

後ろに体を向ければ、出入口のすぐ横に『よろずや』と書かれた看板が立てかけられた、あまり大きくない石造の建築物が目に入る。扉は固く閉じられており、どうやら現在は店は開いていないようだ。

視線を下げる。きちんと昨日購入した通りの長袖のブラウスと、その上に革のワンピースを着ていた。

「行きましようか」

確認するように呟いて、さとりは路地を歩き始めた。武器や防具が調達できる場所という風に目的地が曖昧だった先日とは違って、行く先がはつきりと決まっていたさとの足は速い。

一つ問題があるとすれば、速いことと比べ、あまり足取りが軽いとは言えないことだろう。

さとりが進むたびに人通りが多くなっていく。それは横道から表通りへと近づいている証拠でもあった。

——昨日のちょうど寝る前の時間にこころと明日の何時頃に一緒に遊ぶかの詳細をメールで話し合い、クマを倒して転移した直後の地点を集合場所とすることになっていた。そしてそこは行き交う人の多い表通りにある。

基本的に自宅で引きこもっていたさとりからしてみれば、周囲を見知らぬ人たちが歩いていてただで、そちらに必要以上の注意や警戒を払いたくなくなってしまふ。できるだけ気にしないように前だけを向くようにしてみるのだが、もしかしたら見られているのでは、なんてあ

りもしない危惧が頭をよぎるのを自覚する。

そんな妄想を振り切るように歩く速度を上げた。走れば目立つので、ギリギリ歩行と言える程度の速さで道を進む。

そうして、気づいた時にはすでに目的地にたどりついていた。

そこはいくらかの通路が合流した大きな円形の広場になっていた。街路樹はそこかしこに、中央にはそこそこ大きな噴水が置かれ、うるさくない程度に水を噴き出している。これまで歩いてきた表通りよりも人は多く、隅の方にある露店や屋台もなかなか賑わっていた。

腰^{ベンチ}かけや噴水の縁にはまばらに人が座っている。そこには屋台で食べ物を買った人のほか、さどりのように誰かと待ち合わせをしているような人もいるようだった。早歩きで来てしまったせいで事前の予定よりも早く来てしまったこともあり、さとりもまた、噴水の縁に近づいて腰をかけた。

「ふう……」

一度落ちついて、辺りを見渡す。

多くの人が往来を繰り返していた。通路を行き来するためだけに広場を通過する人、なにかいいものがないかと、あるいは冷やかしてして露店を見回っている人、食べ物を口にしながら自分のように周囲を観察している人、特になんの用事もない人――。

さとりは、その誰もが自分へは特に注意を向けないことを再確認する。そうしてさきほどまで抱いてしまっていたような、無意味な自意識過剰さを抑制するように心がける。

落ちつけ。慌てなくてもいい。私が今いるのは『他人の心を読めない世界』だ。誰もかれも、理由もなしに私へ嫌悪の感情を向けてきたりはしない。

さとりは言い聞かせるように心の中で囁き、胸に手を当てて長く息を吐く。なにも問題はない、自分はここにおいても構わない。

それから、いつも通りに空気を吸い込んだ。

「――なあ、知ってるか？」

精神が平常心に近づいてくると、周りに溢れる情報を冷静に聞き取れるようになる。

人二人ぶんほどの空間を挟んで、同じく噴水の縁に座っている二人の会話に、ふいと耳を傾けてみた。

「またアレ、出たんだってよ」

「アレ……？ あのな、アレなんて急に言われてわかるわけないだろ」
「だからアレだって。ほら、最近有名の、炎の剣の」

「……ああ、もしかしてあれか？ 《恐ろしい波動》とか呼ばれてるプレイヤーキラー」

「そうそれ！」

炎の剣？ 『恐ろしい波動』？ それに、プレイヤーキラー……？
妙に気になって、さとりは無意識のうちに耳を澄ませていた。

「《恐ろしい波動》ねえ……確かに最近有名だけどき、あれだろ？ そいつって、なんか一〇歳くらいの見た目してる上に精神も大して成熟してないとか。仮にそいつの元がすごい強い妖怪なんだとしてもこの世界にその力は持ち込めないし、そう考えていくとあんまり強そうには思えないんだが」

「わかってないなあ、お前。いいか？ よく聞けよ。まず第一に前提として、元々弱い力しかない人間の俺たちは、こつちの世界の力を完全に扱うことは困難だ。それはお前にもわかるだろ？」

「まあ、目に見えて力が強くならたって、正直感覚が違いすぎていろいろ振り回されるよな」

「でもそれは元々力の強かった妖怪どもにとっては『この程度』とか言えちゃうレベルでしかないんだよ。俺たちと違って完璧に使いこなすことができる。なにが言いたいのかというと、強い妖怪はこの世界でもある程度強い、らしい」

妖怪としての強さは仮想世界でのそれにも少なからず関係する。そんな事実を匂わせる発言に、さとりは少々目を丸くした。

しかし、確かにそうなのかもしれない、と納得もする。

確かに、人間などの力のない種族が急に超人的な能力を得たって、そうすぐに使いこなせるはずがない。しかし逆に人外の力に何十何百何千年と付き合ってきた中級以上の妖怪からしてみれば、超人程度の力を操るくらいは造作もない。

力を扱う感覚。それもまたこの世界に持ち込める限られたものの中で重要なものの一つということだ。

「あー、つまりお前が言いたいのはあれか。《恐ろしい波動》はその力を完全に制御してるから手強い、と」

「むしろ『もつと強く』と言わんばかりに滅茶苦茶暴れてるとかいう噂だぜ」

「ほー。そんなじゃ、俺とかお前じゃぜってえ敵わねーな。あー怖い怖い。街を歩いてて急に襲われたりなんてのはごめんだけ」

「そいつは同意だけど、ま、目撃証言はゲーム内時間での夜にしかないっぽいし、気をつけてればまず遭遇することはないだろうさ」

「へえ。あれだな、夜にしか活動しないってなんだか吸血鬼みたいだな。ゲーム内でも夜にしか活動しないってのもおかしい話だが」

さとりの眉がぴくりと動く。

吸血鬼。何百年か前に初めて世界に出現し、ほんの少し前に幻想郷にも姿を現した、妖怪としては新参ながらも非常に強大な力を持つひどくわがままな悪魔という種。

かつて地上から地底へと移り住み、そのまま数百年の間を過ごし続けているさとりは、ちよつと前まで地上を騒がしていたその吸血鬼とやらとは一切面識がない。特徴もほとんど知らず、せいぜいが『日差しに弱い』、『わがまま』、『見た目が幼い者が多い』、『とにかく強い』というくらいしか情報を持っていなかった。

さとりとしては、吸血鬼がどれだけ強いにしても、古来より最強の妖怪と謳われ続けている鬼にはさすがに劣るだろうと考えている。鬼なんて、まともに戦えばまず勝ち目はない。

だが、今のようには妖怪の中でも規格外とまで言われる鬼を引き合いに出してしまうくらいには、吸血鬼の強さの噂は地底、ひいては地霊殿のさとりのもとへ広がってきていた。

普通に考えれば《恐ろしい波動》とやらが吸血鬼の確率なんてかなり低いのに。どうしてだろう。無意識にのうちに想像が確率の低い方へと寄ってってしまう。

——吸血鬼のプレイヤーキラー、か……もし、その《恐ろしい波動》

とやらの遭遇してしまったとしたら、私はきちんと逃げ切れるのかしら。

「——とり、さとりー」

「あっ……」

自分の名を呼ぶ声に気づき、さとりは顔を上げた。

「すみません、ちよっと考え込みすぎていました。おはようございます、このころさん」

「おはよー。ふむふむ、その服似合ってるねー！　って言えばいいのよね？　こういう時って」

つい先日森の中で初めて出会い、そのままともにクマ——鋭き右の柔熊——を倒した薙刀使いの戦友が、さとりの顔を覗き込んできた。一切の感情を映さない表情はあいかわらずなのだが、その服は昨日とはまるで違う。

「このころさんもその服、似合ってますよ。とても」

「えへへー、ありがとー！」

首周りがもふもふとした茶色い毛皮に包まれた少々ぶかぶかな青いコートを着込み、胸元ではリボンを小さく結んでいる。リボンの結び目から先端までは意外と長さがあり、こころが動くたびにひらひらと揺れていた。下には桃色のフレアスカートを穿いていて、それをよく観察してみると、なにやらケイトウらしき花の模様が赤色で描かれているのがわかる。

それだけなら、ずいぶんと可愛らしい変化を遂げている、という感想で終えることができたのだが、どうにも無視できない奇妙な要素も一つ追加されていた。

「それでその、このころさん……ええと、それは？」

「その質問を待ってたわっ！」

こころは、歓喜に満ち溢れた声音で返事をする、頭の横につけていたそれを顔の前まで動かした。

「ふっふっふ、これはこの世界での私のお面一号である！　ひとまずは全部の感情をこれからこれで表現していくわ！」

こころの頭には、昨日戦って倒したクマの仮面……と表現するには

あまりに覇気がなさすぎる、かなりデフォルメされたクマのお面が装着されていた。

全部の感情をクマの面で表現……それってこれまでのように無表情でいることとなりが違うのかな。

質問してみようかとも思ったが、上機嫌にお面をつけたり外したりと繰り返すところを前にして、さとりは口を閉じて苦笑いを浮かべる。

「こころが満足なら、わざわざ水を差すようなことなんて言わなかった方がいいか。」

「こころさんは、お面、好きなんですか？　初めて会った時もお面がないって騒いでいましたけど」

「好きというかなんというか、お面が私、ひいては我々というか……」「お面が私？　……もしかしてなんですが、こころさんは付喪神つくもだったり？」

「そう！　最近自我に目覚めたばっかりなの！　いやまあ、目覚める以前から元々意識はあったんだけどね」

妖寿命の長い生物怪の言う『最近』ほど当てにならないものはないが、まあこのろのことなので、本当にそう昔のことではないのだろうとさとりは感じた。

名神の宿つたのつけられた道具がきちんと供養されずに放置された結果として発生する、道具の妖怪化。それによって生まれるものが付喪神と呼ばれている存在だ。

付喪神は、神という字が名に含まれてはいるものの、実際的には妖怪というくくりにあるために神としての特徴は一切備えていない。少々ややこしいが、こういう事情は後神うしろがみなどの妖怪も抱えているし、天邪鬼という妖怪だって鬼の字が入っているのに鬼とは分類はされていない。妖怪社会の間ではそう珍しいことではない。

しかし、こころはお面の付喪神なのか。しかも最近目覚めた……そうになると、少しだけ不可解なことがある。

「確認なのですが……こころさんは薙刀の付喪神ではないんですよ。それならあれだけの技術はどうやって身につけたんでしょう。」

少なくとも、一朝一夕には身につけられないくらいには洗練されていたと思うのですが」

「褒められてるのかな？　ありがとう。薙刀はねー、えーっと、我々の元々の持ち主が能楽に通じてたから、妖怪化した時に私もその特徴を受け継いだみたいなの。それで能楽には武芸が混ざってるのもあつたりして、その時に薙刀を使うことがあるから、なんだかよく手に馴染むのよ」

「そういうことでしたか」

能楽。その単語を耳にしたことは、これまでの人生でも数えられる程度でしかない。自室に大量の本を保管しているさとりでも、能楽に関しては、大勢の人の前で芸を試してみせるというほどしか知識がなかった。

「……能楽というのは、あまり想像が付きませんね。そういうものは無縁の生活を送ってきましたから」

「大丈夫だよー、最近の人間や妖怪は皆ほとんどよく知らないみたいだから。さとりは能に興味あつたりするの？」

「そうですね、それがころさんの特技だと言うなら、一度くらいは見てみたいです」

「本当っ？　それなら今度さとの前で舞ってあげるよ！　演目は、えっと、えーっと、前に評判がよかつた『心綺楼』とかっ！」

「ふふっ。ええ、そういうものかまるで想像が付きませんが、楽しみにしています」

ころの弾んだ声を聞いていると、自然とさとの頬も緩んできてしまう。ただ見せてほしいと言っただけでこの喜びようだ。ころは能楽のことが相当好きらしい。

「さとりはなにか特技とかある？」

「特技は……そうですね、モノマネが得意ですよ。それからよく本を読みますので、あまり役に立たない豆知識なども結構知っていると思っています」

「へー、モノマネかあ。その豆知識って、たとえばいったいどんな風なものなの？」

「ふむ、たとえば……」

いくらか頭の中に候補が浮かび上がる。さとりはそのうち一つを適当に選定すると、こころに見せるように指を一本立てた。

「眠い時にはあくびが出ますよね」

「出る出るー」

「そういう時のあくびというものは脳を活性化させるために行われるようできて、いっぱい口を開けて息を吸い込んでしまいますと、逆に目が覚めてしまうんです」

「え、そうなの？」

「みたいですよ。ですから、眠いから起きていたい、という風な時にあくびが出かけたら、我慢なんてせずに思いつ切りした方がいいんです。そうすれば睡眠への欲求を多少和らげることができますから」

「へえー。さとりって物知りなのね」

「ですから、豆知識程度ですよ。そもそも思い切りあくびをする効果なんて微々たるものですし、周りに人がいればあくびなんて見せてしまうのは恥ずかしいものです」

そもそも妖怪は体が丈夫にできているため、あまり睡眠などは必要としない。本で手に入れた知識であるのだが、妖怪であり、地底という時間間隔が曖昧な世界に住んでいるさとりにとっては、あまり役に立つ情報だとは言えなかった。

こころも付喪神という妖怪の一種である以上、こんな雑学を知っていようといまいとほとんど関係はない。さどりの言う通り、単なるどうでもいい豆知識にしかない。

それでも、目を輝かせて——いるように見える——こころを眺めていると、自然と頬が緩んでしまうのをさとりは感じていた。自分の話で、自分の好きなこと^{読書}で得た知識を喜んでもらえるのが、自分もまた嬉しい。それは当たり前前の感覚ではあるのだが、これまで心が読めてしまうがゆえに人付き合いを拒絶し続けてきたさとりにとっては、とても新鮮で心地のいいものだった。

こころがさどりの隣に座る。それから、また違う豆知識のことを教えてくれとせがむ。さとりはさきほど脳内に浮かんだ候補の中から

再び選び、それをこころに話す。イルカという海に住む生物の睡眠の仕方。ウサギはなぜ匹ではなく羽と数えるのか。ピーナッツはナッツ類ではあるが、ナッツではなく豆である等々。さとりがさまざまな雑学を披露し、そのたびにこころが興味深そうに頷いた。

「——というわけです」

「それなら治療して三〇日で治る怪我はいったいどういう分類になるの？ 軽症？ 重症？」

「ぎりぎり重症ですね」

「重症なんだ。これが驚きの表情！」

「三〇日以上の以上というのは、その数値を含むということですから。というかそのクマのお面、ちよつと口の両端が上がってて笑ってるようにしか見えませんが……」

ふいと、さとりは今回集まった目的を思い出す。

「つと、今更ですけど結構話し込んでますね」

こうして落ち合ってから、すでに二〇分、あるいは三〇分近くの時間が経過してしまっていることに、ようやく気づく。

さとりはこころが口を開くよりも一瞬早く頭を下げた。

「すみません。元々は一緒に冒険をするために待ち合わせをしていたのに……」

「そんなんっ！ さとりと話してるの、私はすっごく楽しかったよ！

さとりはそうじゃないの？ 私からは話せることがあんまりなくて、

さとりにしゃべらせてばかりだから、ちよつと申しわけない……」

「そんなことはありません。とても楽しかったですよ」

「そう？ ならよかったわ！ これが喜びの表情！」

それは励まそうという気遣いから出た言葉ではなく、不安と言う感情から垣間見えたこころの本心。だからだろう。意識せず、さとりの口元にまた笑みが浮かんだ。

「そうですね。きつとそのクマのお面のような感じが、今のこころさんの本当の表情なのかもしれませぬね」

微笑しているように見えるクマのお面を見つめ、思ったままのこと

をさとりは口にした。それに、こころは無表情のままにぱちぱちと目を瞬かせる。

「そうなのかな」

「そうですね、きつと。今のこころさんは仕草も声音もとても嬉しそうで、楽しそうですから」

「楽しそう、なんだ……うん。ありがとう」

ほんの少しだけ、本当にわずかにこころの口の端が吊り上がったように見えたのは、気のせいだろうか。

さとりには、こころが感情豊かながら、その顔がずっと無表情である理由に大体の察しがついていた。

お面というものはつけた者の顔を隠し、決められた役になり切るために扱うものだ。そして、こころはそのお面の付喪神——数ある『役』や『感情』を司るお面が元となっている以上、こころは表情人型の体を持ち得ない。否、仮面が感情であるがゆえに、そもそも本体が表情を持つ必要がない。

妖怪にはそのように、人間と比べれば欠陥や欠点とも呼べるものを抱えている者が少なくなかった。特に付喪神は多くがその対象にある。まず付喪神の共通事項として、道具が本体である以上その道具が壊れれば死ぬし、弱い力しかない付喪神であれば、本体たる道具が人型の肉体の手元を離れただけでも自我が消滅してしまうこともある。妖怪は人間と比べれば非常に丈夫で長生きではあるものの、決して人間の上位互換というわけではない。妖怪とひとくくりにされてはいてもそれぞれが別々の生物であり、別々の特徴を抱えている。そしてこころという妖怪には表情という特徴がなかったという、ただそれだけの話。

「こころさんは、表情が欲しいんですか？」

ただ、そんな自分の特徴を疑問視しているようなこころの態度が少し気になった。最初に会った時は無表情であることを不気味に感じただものだけれど、今はそんなものはまったくなく、むしろ無表情こそが『秦こころ』という妖怪のトレードマークのように感じている。

興味から湧き出ただけ。しかしそんなさとりの問いかけに、こころ

はまつすぐとさとりを見据えて、こくりと頷いた。

「えつとだな。昔の話になるが、実は我々が妖怪としての自我を確立したのは、ちよつとした事故が原因だったのだ」

「事故、ですか」

「うむ。その事故は一応は解決したのだが、そのせいでというか、感情というものを正しく理解して制御できるようにならなければ我々は物言わぬものくじゅう六六のお面に戻ってしまうように……」

いつの間にか普段の調子から、ずいぶんと大仰な話し方になっている。というか彼女の口調はいつもだいぶ不安定だ。おそらく、彼女の中でなんらかの変化があった時だけ口調を変えているのだろう。

少なくとも、今は付喪神の立ち場として話す、真剣な時の口調。さとりは口を挟まず、黙って彼女の話を聞き続ける。

「もうすでに放っておいても大丈夫だと言われはしたのだが、やはりたまに怖くなるのだ。またなにかの拍子で物言わぬ道具に戻りかけてしまわないかと」

「物言わぬ道具に……」

「妖怪としての自我に目覚めてからは毎日が充実している。我は、我々は、これからもずっとこの生活を続けていきたいと思っている」だから今もさまざまな感情を学ぶように努めている。そうして締めくくるころの発言に、さとりはなるほどと呟いて目を閉じた。

感情を学ぶ、か。

覚サトリ妖怪であるさとりはおそらく、人の感情、思いがどういうものなのか、幻想郷で誰よりも知っている。

心というものがどんな構造、仕組み、形をしているか。感情がどう変化し、どう組み合わさり、どんな思いを構成するか。

それは単純怪奇でありながら複雑明快。数多の心を読んできたさとりでさえ、知っているにしても、決して理解し切っているわけではない。そもそもさとりだって相手の考えていることがわかる程度であり、深層心理などという無意識に潜む感覚や記憶を見通すことはできなかつた。

しかし。

——さとりがこれまで覚妖怪としてもっとも多く見てきたものは、心を盗み見る覚妖怪というものに向けて唾棄、嫌忌、嫌厭、忌諱。刺々しく、濁り切った泥のような思い。

それだけは完全に理解してしまっていた。嫌悪の感情が、どんな回路をたどって生まれてくるのか。

人が、妖怪が、その心のどす黒く染まりゆく変わりようを。

どくんつ、と心臓が強く鳴る。傷口を抉られ、広がっていくような感覚に、視界が歪む。

「さとり？」

「あ……」

無意識のうちに、自分の胸を強く押さえていたことに気がついた。すぐに手を下ろし、笑みを浮かべるように意識して、なんでもないと首を左右に振る。

そうだ、なんでもない。なんでもないのだ。この世界は人の心なんて読めやしない。自分が嫌われる理由なんてどこにもないのだから。

大きく一回、二回。深呼吸をして、改めてここへと向き直った。そしてその頃にはもう、さきほどまで体を襲っていた嫌な感覚は消失している。

「大丈夫です。気にしないでください」

「……今日はもう、冒険はやめておく？ 調子が悪いなら無理しない方がいいよ」

すでにいつもの口調に戻っているところに向け、さとりはもう一度首を横に振った。

「大丈夫ですから。その、ちょっと昔の苦い経験を思い出してしまっただけです」

「苦い経験？」

「大したことじゃありません。もう解決だつてしてます。今は……いい経験だと、思っていますし」

嘘だった。

でも、浮かべた笑みが不自然なものになっていないか。それを一番注意して、さとりはこころと見つめ合う。

笑顔の具合の答えは、自分の表情を見れないために定かではない。見抜かれているか、いないか。しかし、こころがこくりと頷いたのを見ると、さとりの口からはほつと息が漏れた。

「さとりが言うなら……でも、無理しちゃダメだよ」
「もちろんです。さて、もう行きましようか。少ししゃべりすぎましたね」

噴水の縁から立ち上がり、こころと並んで歩き、街の外を目指す。広場から続く大通りをまっすぐ進んだ先に外へ通じる門があるので、訪れて二日目と言えど迷う心配はなかった。

さとりができるだけ笑顔を浮かべるよう意識していたからか、数分も経てば、少し暗くなりかけていた空気は完全に弛緩している。門につくまでの間に、さとりはこころに現在の装備を手に入れる経緯を話していた。

「そうかー、じゃあその服は、その変なカエルの着ぐるみを着た人が店主のよろずやで買ったのね」

「はい。いろいろと親切にしてもらいましたから、今後もお世話になるうかと思ってます。こころさんはその服とお面はいつたいてどこで？」

「こころは反対の大通りをまっすぐ進むと、なんだかお屋敷みたいに大きなお店があるの。その中で青い髪の店員さんにちよいちよいっとお面と、あとついでに服とか武器の方も仕立ててもらって」
「服の方がいいですね」

こころが当然とでも言いたげな雰囲気を出しているような気がして、さとりの顔に思わず苦笑いが浮かぶ。

「それにしても新しい武器、ですか。インベントリにしまっているんですか？」

「うん。いやあ、最初はそのまま背負って歩こうと思ってたんだけどさー。お店の中を歩いているだけでいろんなものに引っかかって、なんだかいっぱい迷惑かけちゃって……」

「ああ、なるほど」

確かに、薙刀ほど長いと常に所有しているだけでもめんどくさそう

だ。こころの言う通り、特に室内などは大変だろう。上にもものがあるかどうか注意しなくちゃいけなかったり、扉の上枠に引っかかったり。

さどりの持つ剣はちょうどいい長さのため、そういう弊害はなく普通に背負っていられる。薙刀はリーチやパワーなどいろいろと兼ね備えているが、やはり利点ばかりとはいかないようだ。

「そのうち狭いところでも戦えるような武器も使うようにしようか
なって思ってるの。扇子とか」

「そうですね。室内で持ち運ぶだけで大変だったように狭いところで
薙刀を使いこなすのも難しいでしょうし、いいと思いますよ」

扇子が武器、と当たり前のようにこころが口にしていたのはつまらないことにする。というか現実には、天狗という鬼に次ぐ強大な種族はうちわを武具として扱ったりもしているので、別に扇子程度が武器だと主張したところでなにも問題はない。少しでも攻撃に使えればそれは武具なのだ。妖怪社会の常識である。

「私も、近いうちに杖でも買ってみようかと思ってるんです。この世界に
来た当初は、慣れない魔法だけでは不安でしたので初期装備として剣を選
びましたが、今はもう十分ですから」

「じゃあこれからは剣は使わないの？」

「いえ、杖を手に入れたとしても使っていくつもりですよ。相手に近
づかれた時などはそちらの方が断然いいですからね」

それに、剣を使わないとなれば昨日第三の目を使って動画を眺めた
意義がなくなってしまう。『魔術師』が剣を使ってはいけないなんて
ルールもないのだし、好きにやればいいだろう。

そろそろ門が見えてきた。森へは半強制的に入ったようなものな
ので、自主的に冒険に出るのは初めてのことだった。

さどりの胸の内には、この世界に来たばかりの時のような期待にも
似た感情が燻ぶっていた。そしてそれはきつとこころも同じことだ
ろう。気づかぬうちに、さどりとこころの声は弾んでいる。

ただ一瞥するだけでなにもしてこない衛兵のNPCの横を通り抜
け、こころとともに門を跨いだ。

門からまっすぐ続き、途中で三手に分かれる舗装された道と、木々の点在する緑に溢れた丘。三手のうち左の道の先にはさととりやころが迷い込んだ森があるらしく、さととりところは互いにほぼ同時にそちらを一瞥してしまふ。そのことに気づいて二人して目を合わせ、さととりは小さく笑った。

空高く、少し西側にそれた位置から爛々と降り注ぐ太陽が、草木や野花に元気を与えているように見えた。

「さて、行きましようか」

「よしっ、やってやるぞー！ おー！」

三手の道を右側へと進むと、道中に初心者用の小さな洞窟があると言ふ。メールでこころと相談し、事前に決めていたそこへ行くために、さととりとこころはともに歩き出した。

七．子鬼妖精（the goblin）

——太陽の光の届かない世界は、きつと、ずっと日差しのもとに暮らしてきた人々の想像を軽々と越えていく。

——松明なんて灯しても、魔法で周囲を照らしても、それがほんのちっぽけな希望でしかない恐怖を、皆、この洞窟で必ず思い知った。

——希望であるはずの光は魔物を呼び寄せる。そして暗闇の中にもまた、絶望が潜む。

——それらに挑む勇氣と、目の前の恐怖を打ち砕けるだけの力が、ここで初めて試されるのだ。

【子鬼の洞窟】 Goblin Cave

洞窟と聞いていたから、狭い通路が続く足場の不安定な地形なのではないかと想像していた。しかしこうして目の前に広がる光景はそれに反し、足元は言うほど歩きにくくはなく、洞窟と呼ぶにはずいぶんと広いため、通路よりも大空洞と表現した方が正しいくらいだった。

壁や天井にはごつごつとした岩肌が露出しており、しかしところどころには明らかににか知性のある生物が掘り進んだ跡や、そして少し高い上の方へ行き来するために削って作っただろう、少し急な小さな坂道が見受けられる。また、炎の灯った松明も飾られていて、一応は必要最低限の光源は確保されていた。

ただ、あくまで必要最低限。松明の光は、自信を持ってすたすたと歩いたり走ったりするにはあまりにも心もとなすぎるほど、全体からしてみれば本当に小さな明かりに過ぎない。

「やはり……大して見えはしないわね」

妖怪は人間と比べて夜目が利き、わずかでも月の光が差し込んでいれば、まるで昼間のように闇の世界を見渡すことができる。この洞窟は月明かりは差し込んでいないにせよ、そこらに設置された松明によつてわずかには光が取り入れられているため、現実でならば今より

もずっと暗闇の奥を見渡せるはずだった。

それが今はどうだろう。足元をよく観察し、一步ずつ足場を確かめて慎重に進まなければ、すぐにでも転んでしまうだろうほどの不便さを、さとりは感じている。

それは現実では付喪神であるというところも同じであるようだった。不安そうな様相であちこちに視線を動かしている。

「ごころさん。洞窟とは言っても、これだけ広ければ薙刀も十分に扱えるでしょう。そろそろインベントリから出してもいいのではないですか？」

「そうだねー。私も手ぶらじゃ不安なもの」

こころが宙空に手を当てる、おそらくはメニュー画面を操作し始めたのを横目に、さとりもまた指を弾いて『メニュー』を呼び出す。そこから選ぶ項目はこころと同じ『インベントリ』。

そこには昨日カエルの着ぐるみの店主——諏訪子の店で、彼女のアドバイスをもとに買い揃えた、冒険の役に立つだろう数々の便利アイテムが入っている。さとりの目的はその中にある『光源ライイトの巻物』という、発動者に追従する魔法の明かりを作る巻物だ。

巻物。諏訪子いわく、それを開くだけで、登録されている魔法を魔法陣や詠唱等なしに即時発動することができるのだという。聞いた直後、さとりは「それはちよつと卑怯じゃないか」と思ったものだが、当然ながらそれだけ有用なアイテムには制限があるようだった。

まず一つ目の制限として、登録された魔法を一度でも解放してしまえば、巻物はなにも書いていない白紙に戻ってしまうということ。つまり、巻物は一卷につき一回しか魔法を使うことができない。

二つ目に、発動する魔法の性能はそれぞれ固定であるということ。検証によれば、巻物に魔法を書き込んだ本人が使える本来の魔法の、ほんの四分の一の性能しか出せないらしい。それでは書き込んだ者が相当な高レベルの魔法使いでもない限り、攻撃として使ったところで牽制程度にしかならない。

そして三つ目。これは制限というよりもデメリットとでも言った方がいいかもしれないが、たくさん持っているとかくかさばるの

だ。戦闘中はゲームの仕様によりインベントリから即座にアイテムを取り出すことはできないので、戦闘で使いたければ基本的に身につけるなりしていなければならぬ。しかし巻物なんて一度にそう大量に持ち歩けるわけでもないし、戦士からしてみれば剣などで近距離で戦っている最中に巻物を取り出してから開くなんて動作を行うのは、あまりにも隙が大きすぎる。そして魔法使いからしてみれば、わざわざ数が限られている弱体化した魔法を使わなくとも、多少手間をかけてでも魔法陣や詠唱を行って強い魔法を繰り出した方が明らかにダメージ効率がよい。自分の扱えないタイプの魔法を巻物で代用する、なんてプレイヤーももしかしたらいるのかもしれないが、そんなことをする者はごくわずかだろう。

以上の大量のデメリットが原因となり、巻物は基本的に補助的な魔法を込める用途で使われているようだ。たとえば今回の「光源」^{ライト}は光源を発生させる魔法であり、多少性能が本来の魔法に劣ろうが、松明やランタンに火を灯して持ち歩くよりは機能的だと言える。他にも巻物には「治癒」^{ヒール}や「筋力強化」など、直接的には戦闘に関わらないような魔法が込められていることが多いらしい。

「さとりさん、少し眩しいかもしれません、驚いて武器を向けてきたりはしないでくださいね」

「そんなことしないよー」
「ふふっ、すみません。では……」

インベントリから具現化した巻物の封を解き、そのまま開くと、巻物に書かれていた文字が浮き上がって一つにまとまり始めた。一秒もしないうちに金色の小さな塊と化したそれは、次の瞬間にはガラスの碎けるような音とともに白色の閃光を走らせた。

さとりの頭上一メートルほどに光の球が浮かび、辺りを照らしている。その明るさは松明の火の五割増しと言ったところとなっており、あまり遠くは見通すことはできないが、その場にとどまって敵を迎撃するぶんには申しぶんないほどだった。

一歩踏み出せば光源も同じようについてくるのを確認し、さとりはこころの方へと視線を向ける。

「それがあなたの新しい薙刀ですか」

「ふっふっふっ、どう？　かつこいいっ？」

「ええ。絵になってますよ」

ポーズを取るころに、さとりは素直に頷いて見せた。

真つ先に目に入るのは先端についた象牙色の刀身だ。昨日ころとともに狩ったクマの右前足の爪よりも少し長いくらいのそれは、切っ先まで綺麗な曲線を描き、「光源」の光を反射して煌めいている。逆輪はクマの毛皮で覆われており、柄部は上方の三分の一ほどが焦げ茶、残りには黒の色が塗られていた。

あいかわらず、こころよりも薙刀の方が大きい。別にそれはこころが小さいというわけではないのだけど、身長よりも大きな武器を元気に振り回している彼女を眺めていると、なんだか段々と微笑ましいものを見るような気分になってきた。

「さとり？　どうかした？」

「いえ、なんでもありませんよ。そろそろ行きましようか。魔法の明かりにつられて魔物も集まってきそうですし、警戒は怠らないようにしましょう」

「はーい」

背につり下げた鞘から剣を抜き放ち、それを右手だけで持って、左手は開けておいた。こうしておけばいつでも魔法陣を書いて魔法を発動することができる。

『「光源」の魔法のもとに足元の様子を確認しながら、二人は慎重に洞窟を進んで行く。松明以外の明かりとなる『「光源」は暗闇の中で非常に目立つのだが、まだ洞窟に入ったばかりだからか、魔物が襲ってくる様子はなかった。

かつかつ、と。

さとりはこころが、こころはさとりが少し大きな足音を立てるたびに、びくりと震えて互いを見合わせる。辺りが静けさに包まれていることに加え、洞窟というものはほぼ密閉空間であるために二人の出す音がよく響くのだ。

「……あまり警戒しすぎるのもよくないのかもしれないかもしれませんね。これだ

け静かなら私たち以外の足音もよく聞こえるでしょうし、もうちよつと気楽に行きましょうか」

「そうねー。元の世界じゃこんな暗闇滅多に味わえないから、なんだか変に緊張しちやつてたみたい」

無意識のうちに剣を強く握りしめすぎていたことに気づいた。私も、私が思っていた以上に緊張していたようだ、ときとりは肩を竦める。

一度大きく深呼吸をしてみた。あまり美味しい空気だとは言えないけれど、張りつめていた精神が多少は和らいだ気がする。

さとりが横を見れば、さとりを真似てか、こころも大きく息を吸っているところだった。彼女がそれを吐き終わった頃を見計らい、さとりはこころに軽く合図をして、再び歩き出す。

と、その時。

「——ギャギャギャアアアッ！」

「さとりっ！」

ちようど通りかかった道の角から、人ならざる雄叫びを上げて飛びかかってくるさまが、かろうじてさとりの視界の端に映った。

——光を反射する鈍色。刃物を持っている？ 回避——刃物の長さによっては間に合わない。だったら迎撃を——無理だ。今の筋力の程度で剣をこんな一瞬で持ち上げることはできないし、同様に魔法陣も書けない。他に撃てる手は——。

刹那のうちにあらゆる手が脳内を駆け巡る。なにができるのか、なにをするべきなのか。

それを終えたさとりが選んだのは、剣を捨て、飛びかかってきた相手に向かって一步を踏み出すことだった。

「ギ——」

剣を捨てることで身軽になった手で、今まさに振り下ろされんとする刃物を持っている腕そのものを押さえつけ、逆の手で相手の首元を狙って掌底を繰り出す。飛びかかってきた勢いも相まってか、さとりは手の平になにか硬いものを砕くような感触を味わった。どうやら首の骨を折ったようだ。

どさりっ、と糸の切れた人形のように相手が倒れる。

「ふう……」

「おおー！ さとりすごいわー！」

こころの賞賛に若干口元がニヤつくのを自覚しながら、落とした剣を拾い直し、今しがた殺した敵の方へともう一度向く。

それは一〇にも満たない子どもほどの身長をした人型の化け物だった。

暗緑色の肌に毛は一切生えておらず、汚れからか、ところどころくすんでいる部分が見当たった。頭は胴体ほどに大きく、口は優に人の三倍は裂け、四つの鋭利な牙が上下に二つずつ飛び出している。逆足はずいぶんと短い。しかし爪は獣のように鋭く尖り、また、太く長い鼻と耳から、およそそれらの感覚が他と比べて発達しているだろうことは容易に想像がついた。

「これは……う？」

化け物を倒した際に転がった粗雑なナイフを回収したのち、それを持っていた化け物自身に触れ、*“保存する”*と念じて死体をインベントリに保管する。

周囲を見渡し、敵の影がないことを確認してから、さとりは*“インベントリ”*を開いてみた。

素材の名称から、その元となるモノの呼び名を特定する。

「これは、ゴブリンという魔物みたいですな」

「へー」

昔、西洋の妖怪について書かれた本を読んだような記憶がある。ゴブリンというのはその中にいたような記憶がある。確か、有名な妖精の一種だったか。とても邪悪で人間に忌み嫌われている、とのことだった。

妖精——現実ではあまり強くないというか、頭が足りない者が多いというか、大半が人間の大人に負ける程度の実力しかないのだが、この世界ではどうなのだろう。こんな序盤でその一種が出てくるところから見ると、そう強い立ち位置だとは言えなさそうだけど。

まあ、なにせよ一概にこの世界の妖精が弱いとは断言できない、

と結論を出す。ここでは人に害為す化け物は全員魔物という区分で
あると諏訪子には教わったし、だとすれば妖精の中でも相当に強い者
だっているかもしれない。

「しかし、突然襲いかかられましたね……」

「うーん、なんで待ち伏せなんてできたんだろ。こんな暗闇で」

「……見る限り、ゴブリンはなんだか聴覚や嗅覚の辺りがずいぶんと
発達してそうですし、それで私たちの足音を察知してこそそと動い
ていたのかもしれない。あるいは、現実での妖怪私たちのように闇の中
も目がよく見えるのか……なんにせよ、こちらの動きだけがバレて、
こうして罠を張られてしまったことは事実です」

「……もしかして、それって結構まずい状況？　これが焦りの表情……」

「あ、すみません。あんまり叫ばないでください。まだ近くにゴブリ
ンが潜んでるかもしれないですから」

「ごめんなさい……」

「あ、その、はい」

しゅん、とするところに、若干申しわけないような気持ちを抱きつ
つ、さとりは一度呼吸を整えると、すつと右目を閉じた。

右の視界を遮断する。これは、第三の目を集中的に使ったり、ある
いは考え込む際のクセだった。

ゴブリンがなんらかの手段——可能性が高いのは、おそらくは発達
している耳と鼻——を用いて、こちらの居場所を察知してきている。
対してこちらは相手の場所がまったくわからず、全力で走って移動す
るには乏しすぎる光量しかない魔法の光しか持ち得ていない。素早
く進むことが難しい以上、ゴブリンが罠をしかける前に突破すると
言った手段は行使できないわけだ。そもそも、この洞窟にゴブリンし
か魔物がいないなんて保証もない。

さて、こんな状況でどうするべきか。環境や得ている情報量的にこ
ちらは圧倒的に不利、相手側はその真逆。これを完全に覆すのは難し
いというか、現状では不可能に近い。

今できることなんて本当に限られている。でもきつと、やらないよ
りはマシだ。だって今さつき、突然のゴブリンの襲撃にだってこちら

は対応することができた。そこにさらに対策を講じれば、不意打ちでやられるよう確率はかなり低くなる。そうなれば……。

さとりは、閉じていた右の瞼を開いた。

「このゴブリンという生き物は、あの森での猿と同じような強さだと仮定してみましよう。事実、急所に叩き込んでにしても魔法系のジョブを主に取っている私のたった一発の打撃で沈んだわけですし、そこまでは強くないはずですよ」

「さとりって『魔術師』だっけ？ あと二つはなんなの？ 『剣士』とかなにか？」

『調教師』と『斥候』です。近接で戦うようなジョブは基本一つも取ってませんよ」

「なのに剣を使ってるんだ。これが驚きの表情」

さきほどのさとりの注意を顧みてか、ずいぶんと小さな声で、おそらくはこころの口癖だろう言葉が呟かれる。

「さて、そういうわけでゴブリンはまず間違いない強くありません。そうになると、私たちが注意すべきなのはゴブリンが張ってくる罠のみということになります」

「え？ 一つの間にか囲まれてたー、みたいなことは警戒しないの？」
「さすがにそんなに大量に集まられたらわかると思いますよ。いくら明かりが少ないにしてもまばらに松明が設置されてるんですから。そして松明を避けて通れる程度の数しかいないゴブリンなら、まともに戦うことができればまず私たちの敵にはならない」

森では猿を相手に逃げ回っていたが、あの時と今ではまるで状況が違う。あの時はその場にとどまっていたら無数の猿に囲まれているという危険性があったが、今回のゴブリンは、待ち伏せ等をしかけてくるところから見ても、猿のように無策で飛び込んで自身の命を無駄にしようとするごとき真似はしない余計な知恵がある。森では猿たちに囲まれないためにもほぼ全力で走り続けなければならなかったけれど、今回は休み休みに慎重に進めるだけの余裕がある。そして森では無数に生える木々のせいでこちらが相手の動きに気づけない部分が多分あったけれど、今回は大量のゴブリンに動かれた場合は察

知が可能なのだ。

なによりも、さとりもこころもあの時よりもレベルが上がり、クマとの戦闘で仮初とは言え命のやり取りを経験し、装備もきちんと整えられている。少しや普通にではなく、本当に『まるで』状況は違っていた。

「魔物が待ち伏せていそうな場所は、いつ敵が出て来てもいいように事前に準備しながら進む。つけられていないどうか、定期的に後ろをチェックする。そういう風にしていくだけで、ゴブリンという魔物やこの洞窟の環境という脅威はぐつと下がるでしょう」

「へー、さすがさとり。ちよつと不安だったけど、『これをやっておけば大丈夫』ってことを教えてもらっただけですごく気持ちが悪くなったわ」

「さすがだなんて、そんな大層なものではありませんよ。私はただ、状況を改めて整理してみただけです。出どころのわからない不安心を抱えていたってしかたがありませんから」

妖怪とは人の抱く恐怖から生まれたもの。ゆえにこそそれを解明されることをなによりも恐れる。そしてその恐れるべきことを人間のようにやってみただけだ。

どういうことになるのが自分たちにとって不都合なのかを明示し、どうしてそうなるってしまうのかを思索し、それに対してなにができるのかということ、一つ一つ頭の中で形にしていく。具体的な対策を導き出すことができたなら、それはつまり、出どころのわからない不安心の出どころの部分がわかったということだから、簡単に自身の精神を落ちつかせることができるようになる。

「では、洞窟探索再開と行きましょう。街で時間を取られたこともありませんし、ログイン時間も押してきているでしょう」

「ボスまで行けなかったら休憩挟んで再ログインかな？ 攻略までどれくらい時間がかかるんだろうね」

「ここらにとっては今日中にこの洞窟を踏破することは決定事項らしい。」

せつかくさとりと一緒なんだから、二人でクリアしたい。そんなこ

ころの思いが見えた気がしたが、今の自分に第三の目がないことを思い返し、かぶりを振った。

「こころの思いではない。今は、自分の思いだ。」

「街で話したカエルの着ぐるみの店主は、ほんの一、二時間で終わると言っていましたよ。ログインし続けていられるのは二時間までなので、洞窟に来るまでの時間も考えると一回は休憩を挟むでしょうね」「そうなのかい。じゃあ、根気よくがんばろっか」

「ふふ、はい。根気よく進むとしましょう」

こころと並んで、再び洞窟の中を歩き出す。もしなにかが隠れていそうな曲がり角や岩陰に出くわした時は、いつでも対応できるよう最大限に気を張り巡らしつつ、敢えて回り込んで進んだりもする。

そうすることで不意打ちを未然に防げたり、隠れていたゴブリンを見つれたりと言ったことができたことも多かった。時には待ち伏せではなく落とし穴のような仕掛けもあったが、元々待ち伏せ以外の罠もあると考えていたさとりにとっては予想の範疇だったため、引かかることも危なげもなくずんずんと洞窟の奥へ奥へと潜っていく。

「そういうえば」

近くに罠がなさそうな開けた道を進んでいる最中、ふいと思いついた質問を試してみる。

「こころさんはジョブをなににしたんですか？ 近接のジョブはまず

間違いなくあると思いますが」

「えーっと、私は『槍士』と『奇術師』と『精霊術師』にしたよ」

「……ふむ。なるほど、薙刀を扱うジョブはなにかと思ってみました、『槍士』で扱えるのですね。『奇術師』と『精霊術師』というのはどういうジョブなのでしょう。『精霊術師』は『魔術師』と同じように魔法を扱うジョブだと予想はできますけど……」

『奇術師』——奇術というと、つまりは手品？ 絵札を入れ替えたリ、シルクハットからハトを出したり……いや、さすがに私が今考えたような子供だましではないと思うけれど。

「うーん、『精霊術師』は『炎、水、風、地、雷、氷に適性を持つ。耐久面に劣る』とか書いてあったような気がするわ。たくさんスキルが

あつて、昨日はレベルポイントをどれに振ろうか迷ったんだっけー」
「……おそらくは魔法スキルの適正なのでしようが……確かにずいぶん多いですね」

『魔術師』はなんと説明にあつただろうか。三つ目として適当に決めたので、そう読み込んではいなかったが……そうだ。『魔に適している。光と闇に強いが、呪に弱い』とか、そんな感じだった気がする。やはり、『精霊術師』はかなり適性が多めだ。

『奇術師』は……『奇抜なことに優れている。能力値を二つ、Bランクに上昇させることができる』つて。奇抜なことつてなんなんだろ？」

「いえ、私に聞かれても……」

『能力』もよくわかんないのが多いし……あ、でも、三つの複合で『仮面舞踏』つていうのがあつてね、なんだかすごく面白そうだからちよつとポイントつき込んでみたんだよねー」

「なるほど、こころさんにぴったりそうですね」
「でしよでしよ」

クマに対抗するために『魔術』にすべてつき込んださとりには、好きな『能力』に好きな風にポイントが振れたらしいところが少し羨ましく思えた。『能力』にはスキルやアビリティの選択肢がまさしく無数にあつて、余裕があればさとりだつて好きに選ぶことができたのだから。

ただ、あの時のことを後悔するような気持ちは微塵も湧いてこない。

——私だけでも勝てなかったわ。私もきつと、さとりがいたからクマさんに勝てたの。だから、たぶんこれは。

——きつと、私たち両方のおかげっ！

ふつ、とさとの口元が緩む。

そう、後悔なんてまったくしていない。こころと共有したあの短くも鮮烈な時間を、たかが一レベルぶんのポイントで得ることができたのだ。安いも安い、安すぎる。そもそも、一レベルぶんのポイントなんてこれからいくらでも取り返しがつくのだし。

「それで、その『仮面舞踏』というのはどういいうスキル……いえ、アビリティなんですか？」

『仮面を装備中、仮面に設定した属性の力を近接スキルに付与する』って書いてあってね、とりあえずクマの仮面には風を設定してみたわ」

「なるほど、確かにあのクマさんには風の属性がふさわしいです」

諏訪子いわく、スキルとは能動的アクティブに繰り出すカー——『魔弾』や『円盾』、『衝撃』など——のことで、アビリティとはオンオフで切り替えるような常時発動型パッシブの力のことらしい。こころの話聞く限り、『仮面舞踏』は『スキルに影響を及ぼすアビリティ』のようだ。

「私も聞いていい？」

「はい、なんでしよう」

無表情ながら、どこか心底不思議そうな瞳の色で、こころはさとりをじっと見つめた。

「ここに来るまで結構な数のゴブリンと戦ってきたけど、さとり、昨日と比べてずつと……それこそ、どんなに才能があつたって『一晩がんばった』じゃ絶対済まされなくらい剣の扱いがうまくなってる。それだけじゃなくて、体術も。どうして？」

「……そんなに変わってましたか？」

「結構振り回されてた感じだったのに、今日はきちんと剣を操ってる。自分のものにして使いこなしている。最初にゴブリンに不意打ちをされた時も……あんな超反応、さとりは昨日はできなかった、はず」

「それは……」

返答に困っていたところで、さとりの視界に、宙空に描かれ始めた赤い文字が留まった。

「ゲームを始めてから二時間が経過しました。戦闘中の際は速やかに離脱し、ログアウト処理を行うことを推奨いたします」

ちらり、ときとりはこころに視線を送る。こころは不思議そうに首を傾げていたが、数秒もすると、目をぱちぱちとさせてなにもない空間を見つめ始めた。彼女にも同じメッセージが届いたのだろう。

さらに、歩いていた洞窟の光景にも変化が見え始め、さとりとこころ

ろの足が自然と止まる。

二人の目の前に現れたのは、粗雑な金属で造られたとても大きな扉だった。質の悪いぼこぼことした金属の板に取っ手を不格好に取りつけたような、大した知恵のない生物が人間の真似事をして作ってみたかのような。

その扉の左右の壁には一つずつ松明が設置されており、暗にこの先が重要な場所であると示してくる。

「ねえねえさととり、これは」

「十中八九、ボス部屋でしょうね」

二時間が経過する前にここまで来れたのは案外早いのではないかとさとりは思う。暗闇の中でも、慎重ながら着実に進んできたからこそ、この成果なのだろう。

「ごくり、と生唾を飲み込む。さとりの脳裏をよぎるのは、ここと力を合わせてなんとか倒すことのできた『鋭き右の柔熊』との戦い。

この洞窟は初心者用と聞いているし、ここまでのゴブリンの強さをかえりみても、そこまで強いボスが出てくるとは考えられなかった。しかし、あのクマの脅威を体験しているさとりところからしてみれば、そんな程度の理屈がボス戦前に油断をする理由にはならない。

「二度ログアウトをして休んでからボスに挑みましょうか」

「うん、わかった。万全を期さないかね」

「そういうことです。時間は……どうしましょうか」

「三〇分？ は、ちよつと短いな……昨日ログアウトした後、なんだかすつごく体がだるかったもん……」

「でも、一時間はちよつと長い気もします」

あれこれと話し合い、間を取って四よんじゅうご五分ということに決まった。

さとりとこころはそれぞれ『メニュー』を開き、ログアウトをしようとして、その項目に指を当てかける。そんな時、ふいとこころが思い出したかのようにさとりの方に顔を向けた。

「そういうええさつきさつきの質問の答え、まだ——」

さとりはこころと違い、すでに『ログアウト』を押してしまっていた。

消えかけている自分の体を見下ろしながら、さとりはこころへと急ぎ気味に返答をする。

「それが、私の能力なんですよ」

半分嘘で、半分本当。いや、違うか。

嘘はついていない。でも、語っていない部分が数多くある、ただそれだけ。

——すべて、能力を応用して行使した結果だった。

——でも、この世界での私は心を読むことができない。だったら、私が現実でなら心を読むことなんて明かさなくてもいいじゃないか。

だって、心を読むことを知られることで幾度となく嫌われてきた。

——嫌われたくない。せつかくできた、初めての友達に。

「また、四五分後に」

少し後ろめたい気持ちを抱きながらも、こころの次の言葉を聞くよりも早く、さとりの姿は仮想世界から消え去った。

八・ 大子鬼 (big goblin)

cut off — 遮断 — throw — 投入 — connect — 接続 — access completion — 進入完了

ログアウトから、四五分ジャスト。世界を一步で飛び越えたような感覚ののち、さとりはゆつくりと瞼を開いた。

暗闇の世界、そのうち、左右の壁に松明が取りつけられた巨大な扉の前。周囲を見渡し、ゴブリンが近くにいないことと、こころがまだ来ていないことを確認する。

「……少し、スキルの確認でもしておこうかしら」
指を鳴らして『メニュー』を開き、そこからさらに画面を移行させる。

スキルやアビリティの一览からあるものを一つずつチェックしていった。そしてそのたびに、それぞれの知識が頭の中に直接流れ込んでくる。

——『魔弾』は魔術に区分される魔法の一つであり、MPを直接エネルギーへと変え、弾として相手へぶつける技。MPの量を調節することによって、量や威力の調整も可能。

——『衝撃』は魔術に区分される魔法の一つであり、接触対象に物理的な衝突エネルギーを叩き込む技。準備さえしておけば対象に触れるだけで繰り出すことができるが、その特性上、遠距離からの攻撃には向かない。

——『円盾』は魔術に区分される魔法の一つであり、魔力を物質化して壁を形成する技。この壁は術者の意思で動かすことができるが、その距離の限界は術者の体の端から半径一メートルとなる。

スキルは今のところこれしか習得していない。ただ、これ以外に「魔術」の能力を取得した時に手に入れたアビリティが存在していた。

——『瞑想』は魔術に区分されるアビリティの一つであり、一定条件下のもとでMPの回復速度を速める効果を持つ。非戦闘中の場合、微動だにしていなければ三倍、歩行中は二倍の速度。戦闘中の場合はそれらが二分の一された数値の倍率を誇る。

戦闘中は効果が薄いにせよ、少なからずMPの節約に繋がるこのア

ビリティは有用と言えた。そもそもアビリティはスキルと違って常時発動をしているので、所有しているだけでも意義があるのだから。「本来ならきつと、その場にとどまって固定砲台にでもなるのが正しい選択なんでしょうね」

『瞑想』でMPを効率よく補給しつつ、攻撃は『魔弾』で行い、相手からの反撃は『円盾』で防ぐ。いざという時は『衝撃』を使い、敵を遠ざけたり意表をついたりしていく。おそらくはそれが『魔術師』としての正しい戦い方なのだろうと推測した。

自身の背につり下げた鞘に収まった剣の柄に、ちらりと視線を送る。

本当なら絶対、こんな近接上等な武器で戦ったりなんてしない。それも近接で戦えるジョブを一つも取得していないようなさとりが。

「このころさんが前衛、私が後衛……普通に考えればそれかしら」

剣を使うことをやめるつもりはないが、やはり近いうちに『魔術師』らしく杖の一つは手に入れておいた方がいい。改めてそう思い直した。

と、そんな時、どういうわけか、すぐそばの地面がぱつと突然光り始める。

「む……」

驚きの声を上げそうになるのをどうにか堪えつつ、剣の柄に手を添えて警戒をする。

諏訪子から聞いた洞窟についての情報の中に、こんな現象に関することは含まれていなかった。

鬼が出るか蛇が出るか。そう身構えたところで光った地面の上の人が一人ちようど入れるくらいの光の輪っかが形成され、さとりは目を鋭く細めた。

輪の上に絵を描くかのように光の帯が紡がれる。やがてそれが人の形をしているとわかってきたところで、一瞬だけぱつと眩い光を放った。

少しだけ刃を鞘から抜きかけて、しかしさとりはすぐにその行動を中断する。

輪っかも帯も消え失せた後にはこころがそこに降り立っていた。

「こころさんでしたか」

ほっと息を吐き、さとりは柄から手を離す。こころは眠りから目覚めるようにゆっくりと瞼を開けると、すぐにその目を瞬かせた。

「わっ！　なんでさとり正面に立ってるの!?!」

「同じ場所でログアウトしたじゃないですか」

「そうだった!」

どうやらログインは、今さとりが目にしたような工程を経て成立していたらしい。なんとというか、相当目立つ。

周りにいつ敵が出てきてもおかしくないような場所でログアウトした時は、ログイン直後に襲われることも考慮しておいた方がいいかもしれない。これからは魔物が出てくる場所でログアウトする時は、できるだけ安全そうな箇所を探してから行うことにしよう。

その懸念、思いついた対策をこころにも伝えるとともに、ボス戦前の準備を促した。さとりはすでにスキルの確認などは終わっている。

「さとりー、準備できたわ」

ある程度メニュー画面を操作するように手を動かした後、薙刀を両手に持ったこころがさとりにそう告げた。

さとりは頷くことで返答をし、二人は不格好な金属製の門に向き直る。あまりにも粗雑な出来の、おそらくはこの洞窟のゴブリンが作り上げた——という設定——だろう粗雑な扉。

二人して取ってに手をかけ、それを引っ張った。開かなかった。押してみると開く。

顔を見合わせて、くすくすと笑みをこぼした。

「行きましようか。クマさん以来の、二度目のボス戦に」

「ふっふっふ、この先に待つ難敵よ！　あの時の我々と同じだと思うなよー!」

こころの意気込みに、さとりもこくりと頷いてみせた。

そう、あの森でのクマに挑んだ時とはまるで状況は違う。今の自分たちは万全の体調、装備、準備、戦術を持っている。生き残るためにもクマと戦わなければならなかった切羽づまる状態だった時と

違って、今度は自分たちの方から戦おうとしている。

さとりは、いつなにか来ようと対処できるように薙刀を構えているところを頼もしく感じながら、こころとともに門の向こう側へと足を踏み入れた。

……が、真つ暗でなにも見えない。

「ちよつと待ってください」

ログアウトしたせいで『光源』^{ライト}の魔法が解けてしまっている。さとりはインベントリから『光源』^{ライト}の巻物を取り出すと、その封を解いた。宙に浮かんだ光球が広げる明かりによって、辺りの地形があらわになる。

そこは簡易な祭壇のような部屋だった。円錐状の大きな空洞になつており、壁には定期的に火の灯つていない松明が取りつけられている。さとりとこころの入ってきた扉の直線上に石を削り取っただけの雑な石壇のようなものがあり、その左右には少しだけ溶けたろうそくの乗った燭台が一つずつ置かれていた。

不気味なほど静かな空間の中、慎重に石壇の方へと近づいていくのだが、部屋の中央まで来たところで急に後ろの方で勢いよく扉の閉まる音がした。

「さとり、今のつてもしかして」

「帰り道を塞がれましたね」

そんな一言二言を言い終わるがやいなや、壁についた松明が、ぼぼぼっ、と独りでに青い炎を灯していく。五秒もしないうちにすべての松明に火がつくと、次に石壇のすぐ横の二つの燭台に置かれたろうそくが勢いよく暗青色の炎を噴出し始めた。

ふと、ここでこの炎を消そうと試みてみるというイタズラじみた選択が頭の中に浮かんだが、すぐにそれを片隅に追いやる。どうせそんなことしたって大して意味なんてないだろうし、もしもこれがボス出現の演出だとすれば、ボスが出てこなくなったりなんてしてしまった場合、逆にこちらが困ってしまう。ボスと戦うために扉を開けて部屋に入ったというのに、その出現のためのイベントを妨害してどうするというのがこのだ。

——これがあの子なら、思いついた段階でなにも考えもせずに行きそうだけれど……。

ここにはいない困った妹のことを一瞬だけ思い浮かべたが、すぐに振り払った。今は、これから始まる戦いに集中しなければ。

石壇の上が妖しく暗い光を放ち始め、やがてその少し上に人が三人は入れるほどの少し大きな輪が形成された。輪つかの内側で青い光の帯が紡がれていき、それは自分たちの三倍ほどの身長を持つ巨大な人型を作り出した。

それはプレイヤーがログインする時と酷似した、出現の前兆とも言うべき現象。

刹那、この空間を青黒い閃光が稲妻のごとく駆け巡ったのちに、気づけばそれは輪つかのあった位置に立っていた。

「ゴブ、リン？」

こころが首を傾げた。

こころの感想通りだ。出現したものは、ゴブリンをそのまま三倍四倍にでもしたような見た目をしている。違うところと言えば、耳をすっぱり覆い尽くす灰色の王冠をかぶっていることと、あちこちに寶石のついた薄汚れたローブを纏っていること、そして巨体に見合う大きな黄土色の杖を持っていることだ。杖の先端は三角錐の頂点をくつつけているかのように枝分かかれし、その根元には黒い宝玉が埋め込まれている。

その巨大ゴブリンは、閉じていた目をすっと開くと、まっすぐにさとりとこころを見据えてきた。

紫色の光を放つ不気味ながら鋭き瞳。さとりはすぐに、あの巨大ゴブリンがこれまで倒してきた通常のゴブリンと比較にならない強さを備えていることを感じ取る。こころもそれは同様のようで、ただのゴブリンかと困惑しかけていた態度を消して、クマを前にしていた時のように油断なく武器を構えていた。

さとりも右手で剣を抜き、左手はいつでも魔法陣を書けるように開けておく。

出現から数秒、互いににらみ合うだけの静寂の中、ついと巨大ゴブ

リンが足を踏み出して石壇から降りた。

それが開戦の合図のごとく、さとりとこころも動き出す。

「こころさん！…最初は攻めすぎず、危ないと思つたらすぐに退いてください！…まずは相手の出方をうかがいます！」

「了解っ！」

こころは巨大ゴブリンへとまっすぐに駆けていき、さとりは「魔弾」の準備をしつつ、それを打つ時に直線上のこころに当たらないように左側へ回り込むように走る。巨大ゴブリンは二人に交互に視線をやると、とりあえずは近づいてくる方を迎撃しようと考えたのか、こころへと体を向けた。

巨大ゴブリンの持つ杖の先端、三角錐の中央から紫色の光の帯が生まれ始める。巨大ゴブリンは手元で杖を器用に細かく動かすと、こころが自分のもとへたどりつくよりも早く、その光の帯で小さな魔法陣を作り出した。

魔法陣を伴った杖の先端がこころに向けられる。なにか来るかところろが杖に注意を向けて身構えた途端、そのなにかは予想外の位置から彼女へ襲いかかった。

巨大ゴブリンがつま先でとんとと地面を叩くと、作り出されていた魔法陣が消え、こころの足元の石が盛り上がる。

うまい、とさとりは思った。

さとりの所有するスキルのうち『魔弾』は魔法陣から繰り出されるが、『衝撃』は触れさえすればどこからでも繰り出すことが可能だ。巨大ゴブリンが使ったのはその『衝撃』と同じタイプの魔法のよう
で、わざと杖の先端を突きつけることで
こころの注意を一つに集中させ、ほぼ警戒していないであろう足元から魔法を発動させた。

どうやら巨大ゴブリンもまた『鋭き右の柔熊』と同様に知性を有しているらしい。

「わっ、わわっ!？」

まるで予想もしていなかった事態につまづいたこころ。その隙を見逃す巨大ゴブリンではない。

巨大ゴブリンは素早くこころに走り寄り、その巨体の腕力が成せるがままに杖を思い切り横薙ぎに振り払った。

「う、つくうー！」

迫り来る杖を目にし、こころは倒れゆく不安定な体勢のままに、半ば無理矢理に薙刀を自分の体を守るように動かした。間一髪にそのガードが間に合って、振り回された杖はこころの体ではなく、彼女の持つ薙刀の柄に衝突する。

ただ、ガードに成功したと言っても巨大ゴブリンの攻撃は転びかけているような状況で防ぎ切れるような生半可な一撃ではない。こころは武器ごと体を吹き飛ばされ、中途半端な態勢で防御の姿勢を取ってしまったがゆえに受け身を取ることもできずごろごろと地面を転がった。

そこへさらに巨大ゴブリンは追撃をしかけようとしていたが、それはさとりが許さない。とつくに完成していた「魔弾」を威力度外視の素早さ重視で放ち、巨大ゴブリンがなんらかの行動を起こそうとすることを阻害する。

「こころさん、大丈夫ですかっ？」

「な、なんとか……だが、むぐぐ、なんとということだ……！ 先手必勝、せつかくの最初の突撃だというのにつ！」

憤慨したような声音で、けれどあいかわらずの無表情をたたえたところが、薙刀を支えにして立ち上がる。

さとりは低威力の『魔弾』を連発して巨大ゴブリンを牽制しつつ、こころのそばに駆け寄った。

「杖を持っていた段階で察してはいましたが、どうやらあのゴブリンは魔法を使ってくるみたいですね。それもフェイントを入れてくるだけの狡猾さもありません」

「けど、打撃はそんなに威力はなかったわ。吹き飛ばされた私が言うことじゃないんだけど……少なくとも森のクマさんよりは全然弱かった」

「なるほど、クマさんのそのぶんの力を魔法に回した感じでしょうか」
「こころに思った通りの一撃を与えられず、追撃もさとりに邪魔され

たからか、ずいぶんと不機嫌そうに巨大ゴブリンは睨んできている。

「でも、それなら十分につけ入る隙がありますね」

「どうして?」

「クマさんのように圧倒的な一撃がないぶん、こちらも余裕を持って自由に動くことができます。いろんな手を打てるというわけです」

それに、とさとりが続ける。

「あちらが近接と魔法をある程度両立しているのだとしても、こちらだって近接ならこころさんが、魔法なら私がいいます。勝てない道理はありません」

「おー! それも人数が多い方が有利なものね!」

こころの先手は出鼻をくじかれたにしても、少ないダメージで十分な情報を得ることができた。フェイントを使ってくるだけの頭があること、魔法陣とは関係のない位置から使える魔法を有していること、近接戦闘はおそらくさほど強くはないこと。

できることならもう少し様子見を繰り返したいところだが、相手は曲がりなりにも“鋭き右の柔熊”と同じボスクラスの魔物だ。ついさきほどは咄嗟のガードが間に合ったからこそこころへのダメージは最小限に済んだけれど、何度もそんな土壇場の機転が成功することは限らない。多少のリスクは承知の上で早めに攻勢に切り替えた方がいい。

「……一つ、作戦が——」

さとりが自身の考えをこころへ伝えようとしたところで、いい加減痺れを切らしたのか、巨大ゴブリンが動き出した。

どうやらさとりとこころに見えないように杖を持っていない方の手で背後にずっと魔法陣を構築していたらしい。巨大ゴブリンはその複雑な構成をした魔法陣を見せつけるようにその手を前に突き出してから、地面に叩きつけた。

ぼこぼこつ、となにかがへこむような音が連鎖して響き、同時に地震が発生したかのごとき大地の脈動が轟き始める。

地面の石が隆起し、変化する。川に流れる水のように洞窟の床面が容易く揺れ動く。

「う、く」

さとりはその場にしゃがみ、倒れないようにバランスを取る。足元をこれでもかというほどに不安定にされてしまい、歩くどころか立つことすらままならない。

対し、巨大ゴブリンの方は何事もなかったかのように動かさず立ち竦んでいる。いや、実際に何事もないのだ。大地の波とでも言うべき現象の発生源である巨大ゴブリンの足元にだけは隆起が起こっていない。

どうか「魔弾」の魔法陣を描こうと片手を動かそうとするが、大地の揺れが激しく、両手を地につけていなければしゃがんでいることさえままならなくなる。このままではこちらが一方的に魔法で攻撃を受けるだけに——そう危惧したところで、桃色のなにかがさとの視界を横切った。

「これで絶対、外さない」

こころが高くジャンプをし、空中で薙刀を振りかぶっていた。なるほど、確かにどうにかして跳び上がることができれば、大地の揺れの影響は受けなくなる。だが、それからどうしようと言うのだろうか。

巨大ゴブリンとこころの間には埋めようにも埋められない絶対的な距離がある。柄のどの部分を持って薙刀を振るおうと、それは決して縮まらない。せいぜい手があるとすれば投げるという選択くらいだけれど、そんなことをして巨大ゴブリンを仕留められなければ武器を失ってしまうことになる。それではもっとこちらが不利な状況に陥ってしまう。

いったいどうするつもりなのか。そんなさとの疑問は、こころの持つ薙刀の刃が不可思議な鋭い気迫を発し始めたことで氷解した。

『武器スキル——『真空斬』！』『仮面舞踏』エヴオリューションっ！』

それはかつて森で見た、*“鋭き右の柔熊”*が右の鉤爪で繰り出した飛ぶ斬撃とまったく同じ——否、*“仮面舞踏”*により、それよりもさらに強化された力。

振り下ろされた薙刀が作り出した真空が目視不可の鋭き刃と化し、甲高い風切り音を立てながら巨大ゴブリンへと襲いかかった。

巨大ゴブリンはそれにまったく反応ができていない。

真空の刃は巨大ゴブリンの杖を持っていない方の腕を根元から断ち切り、それでも威力を一切緩めずに向う側にある石の地面に深い傷を刻んだ。

「ギ、ギャ——アアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

絶叫。己が肩から飛沫を上げる緑色の液体を、そしてぼとりと落ちた己が肩腕を見下ろし、巨大ゴブリンが空間に響き渡るほどの叫び声を上げる。

ダメージを与えたおかげか、相手が集中を見出したおかげか。地面の揺れが収まったため、狂いかけたバランス感覚をどうにか持ち直しながら、よろよろとさとりは立ち上がる。

体勢の崩れやすい空中で武器を振るつたにもかかわらず、こころも何事もなくさとの隣に着地をした。

「うーん……頭から真つ二つにするつもりだったのに、残念。変に足元が揺れてたから飛んでからの狙いもずれちゃったみたい」

「いえ、じゅうぶんですよ。本当に、じゅうぶんすぎるくらいです」「そうかな？ ふふん、さつきはかつこ悪いところ見せちゃったものねー。これくらいはやらないと！」

まるで森で苦戦したあのクマが味方になったかのようで、ずいぶんと頼もしい。いや、あのクマをともに打倒したところがその力を手に入れたというのならば、その何倍も頼りになるというものだ。

これなら作戦——さとりも混ざり、こころとともに近接で巨大ゴブリンを攻めること——を實行しなくても押し切れる。さとりがそう思ったところで、それを否定するかのごとく、巨大ゴブリンがさとりたちに顔を向けてきた。

怨嗟のこもった憤怒の視線。その迫力に、さとりは少しだけ気圧されてしまった。

「ギギ、ガギゴガギゴガガギギゴギガ、ギャギャギャ——」

巨大ゴブリンが呪文のように奇声を唱えながら、残った片手で杖を動かして魔法陣を構築する。はっとしたさとりはすぐさま“魔弾”で妨害しようとするが、一瞬でも気迫に吞まれてしまったこともあ

り、魔法陣の完成はあちらの方が一瞬早かった。
魔法陣が完成し、がつんっ！ と杖の先端が地面に打ちつけられる。

「ガガギゴッー！」

今度はなにが来るのか。警戒するさとりとところの視界に、杖の衝突した部分の石が盛り上がるのが見えた。

ぼこぼこつと隆起する音を立て、まるで四足歩行の狩人のごとく一直線にこちらへ迫ってくる。

さとりとところは視線を交わし、それぞれ右と左へ分かれるのだが、石の隆起は過ぎ去ることはなかった。突如進行方向を変更し、こちらの方へと走り出す。

「武器スキル——って、あれ？」

真空の刃で石を抉ろうとしたところの視界から、突如石の隆起が消え失せた。彼女は目を瞬かせて消えた直前の場所を見据えるのだが、そこはどういうわけか何事もなかったかのように平坦な石床となっている。

有効距離から離れたために魔法が失敗したのか。首を傾げつつ、ところが改めて巨大ゴブリンに向き直ったところで、それは起こった。

「——わっ!?! わわ、わあ!?!」

棘だ。ところの立つ場のすぐそばの地面から、何本かの石の棘が飛び出してきた。

こころは間一髪でそれに気づいて避けることに成功し、石の棘はすぐに引っ込んでいくのだが、引っ込むたびにまた新しく突き出してくる。前の地面だけでなく、右から、左から、時には後ろから。

ただ、その速度は大したことはなく、どうやら棘の出てくる場所は事前に隆起するらしく、注意していれば避けるだけならばそう難しいことではない。こころならば体力の続く限りいつまでも回避し続けることが可能だろう。

だが、それはあくまで避けるだけならの話。棘の妨害を掻い潜りながらこころが攻勢に加わるのは難しい。

つまり、巨大ゴブリンの狙いは。

「……こころさんを動けなくして、私を初めに排除しようってこと？
ずいぶんと舐められたものね。地底でもつとも恐れられる存在たる、この私が」

「ギギギヤギギヤギゴガゴギガガギゴ」

「あいにくとゴブリン語なんてものはわからな……いえ、なるほど、そういうことか。そうやって詠唱を続けていないと、あの棘は維持することができないわけね」

すたすたとまっすぐに歩み寄るさとりを、巨大ゴブリンは呪文らしき呟きを繰り返しながら見下ろしていた。その瞳は「まずはお前だ」と、「自分の腕を斬り落としたあいつを殺すには、お前が邪魔だ」と告げているようであった。

いや、実際にそうなのだろう。

さとりは現実では覚^{サトル}として心を読む力を有している。その力と何百年も付き合ってきた膨大な経験があれば、たとえ心の読めない世界であろうとも、多少相手の内心を読む程度のことならば造作もない。ましてやそれが相手が怒りで思考が単純化していればなおさらだ。

笑う。妖怪として、本来ならば他者に恐怖を与える畏怖の具現として、さとりは笑ってみせた。

この世界ではさとりはただの人間に過ぎない。そういうことになっっている。だが、妖怪とはもとより精神の存在だ。たとえ今の身が人間であろうとも、その心までも違えるつもりはない。

あいかかわらず自分をこころを倒すための『通過点』としてしか見えない巨大ゴブリンをまっすぐに見据え、さとりは妖怪としてその言葉を放った。

「——見下すな、妖精風情が」

剣を強く握り、踏み出す。真正面から巨大ゴブリンの攻撃が届く範囲内へと入った。

即座に振り下ろされた杖がさとりに迫る。こころの言っていた通り、確かにこの攻撃からは森のクマほどの重圧は感じられない。今のさとりであればじゅうぶん対処できる程度の威力だ。

右か左へ避ける、剣を斜めに構えて受け流す。どちらにしようか

迷って、結局さとりはどちらも選ばなかった。

見下すな、と。そう大見得を切った以上、少しでも『逃げ』の意の混ざる行動を取ることはしたくなかった。

「ふっー」

踏み出した勢いを乗せ、それでいて重心のバランスを崩さず。腕の力だけで振るうのではなく、ひねりを利用して全身の荷重を乗せる感覚で。

さとりは剣を横薙ぎに振り払うと、がきんつ、と容易く巨大ゴブリンの杖を弾き返した。

「ギ、ガ？」

「隙だらけ」

そのまま今振り切った勢いを殺すことなく、むしろ増強させるように一回転。回転斬り。素人がやろうとすればバランスを崩して形だけになってしまいうだろう技を、さとりは体勢の安定性を保ったまま容易く繰り出してみせた。

一撃目よりもさらに威力が乗った横薙ぎが巨大ゴブリンの胴体を斬り裂き、濃緑色の血飛沫を散らす。

「ギャ、ギィギァァー——！！」

「うるさいわね」

ついでに逆袈裟にもう一撃お見舞いすれば、さらに液体が飛び散った。さとの顔や服にもかかり、多少の不快感が生まれるが、そんなものを気にしている暇はない。

トドメとばかりに巨大ゴブリンの首元へ剣を突き出す。が、それはギリギリで相手の杖に弾かれてしまった。

「あら、なかなか」

さとの攻撃の手が緩んだ隙に、巨大ゴブリンは血走った目で杖を振り回す。さとりは一切退くことはせず、すべての攻撃を受け流し、あるいは受け止めてみせた。

腕だけで受けるのではなく、体全体で迎え撃つ体勢と感覚。クマには遠く及ばない巨大ゴブリンの力くらいならば、それさえしつかりしていればどうでも対応することができる。

つい昨日、クマと戦った時には欠片たりとも知らなかったはずの技術の数々を、さとりは一日という短い時を経て体現していた。

「ほら、どうしたのかしら？　これで終わり？」

「ギャギャギャア！」

別にこの現象のタネはなんてことはない、至って単純で、けれども妖怪らしく理不尽な道理から成り立っている。

さとりは昨日、剣や拳と言った武術を扱う者が戦う映像を第三の目を通して見た。ああいった武術家がどんな精神と感覚によつて体を動かし、武具を操り、どういう思考回路を持つてして戦いに臨むのか。さとりはそれをただ単に己が心を見通す力で見、読み、投影しただけ。

見ただけで技を奪う。ともすれば、なんて無茶苦茶で不条理なことだと文句を垂れたくもなるかもしれない。しかし得てして妖怪とはそういうものなのだ。理屈の一切が通じず、実に非論理的かつ理不尽な幻想の具現。

さとりの頭の片隅に、ついと、こころに自身の特技を語った場面がよぎった。

——特技は……そうですね、モノマネが得意ですよ。

「こころさんっ！　トドメを！」

巨大ゴブリンが詠唱をやめた以上、とつくにこころは棘の魔法から解放されている。

さとりがわざわざ一歩も引かずに受け止めたりしていたのは、なにも大見得を切ったからというだけの理由からではない。巨大ゴブリンに、気づかれられないように後ろに回り込んでいるところに気づかれられないようにするためだ。

こころは巨大ゴブリンの背後で跳び上がり、巨大ゴブリンの首に薙刀を全力で振るった。

真空を纏ったその刃に、巨大ゴブリンの首が斬り落とされる。

さとりが前を向いたまま数歩下がると、首を失った巨大ゴブリンの体があくんと膝をつく。重力に従って倒れると、斬り裂かれた首から多量の体液を垂れ流したまま、もう起き上がってくることはなかった。

た。

それが終幕の合図。

「……上々ですね」

一応つんつんと剣先で死体をつついてみるが、復活してくる様子はない。

勝った。その実感がさとりの心を満たす。

それも今回は前回のような辛勝ではない。誰一人としてクマとの勝負のように重傷を負うことはなく、少ない被害でボスを打倒した。まさしく快挙と言えるだろう。

「さとりー」

「はい」

互いに武器から片手を離し、ハイタッチ。無表情でも溢れんばかりの嬉しさを放っているところを見て、さとりの口元に笑みがこぼれた。

石壇の前に薄い水色の光の円柱が生まれる。外への転移装置。あの森で見たものと同じ、まさしく二人でボスを打倒した証であった。「レベルの上昇を確認、各パラメーターが潜在値に沿ってわずかに上昇しました。また、ジヨブごとにレベルポイントを取得しました」

九・秦こころ (Kokoro Hatanô)

——武器とか防具とかにランクがあるっていうのは言ったよね。でもそれだけじゃなくて、そういうものの素材にもランクっていうのは存在するんだ。

——素材……クマさんの牙とか皮とか、そういうアイテムのことですよね。

——クマさん……？ ああ、柔熊のことね。そうそう、そういう感じの。魔物のドロップ品以外にも、レアな宝石とか珍しい花とかもね。

——素材のランクが高いとなにかあったりするんですか？ 武器の方は、修理の時に最大値が下がる確率が上がってしまうというのは聞きましたけど。

——うーん、その素材でなにか作ろうとする時の難易度かな。あと、単純にレアリティ。基本的にはランクが高いと入手しにくくて、ランクが低いと入手しやすいよ。例外もあるけどね。

——具体的にはどんな基準なんでしょう。

——三が普通、四がちよつとレア、五はかなり珍しくて、六は上位勢でも手に入れるのには苦労するレベル。七以上の素材はまだ数えるくらいしか手に入れたことがある人はいないんじゃない？

あと、二はそこらでばら売りされてる程度で、一は単なるゴミ。さとりが諏訪子のそんな言葉に少しだけ笑ったところで、その会話は締めくくられた。

フレンド登録を終えたのち、お茶の一杯ぶんの時間だけ彼女と雑談を交わしたが、そんな短い時間で身につけた知識でも、初心者のさとりにとっては役立つものばかりだった。げんにゴブリンが多く出没する初心者用の洞窟のこともその談笑の中で教えてもらっており、数十分前にはそのボスを相手に快勝をしたばかりである。

諏訪子によれば、転移装置からは基本的に自分の入ってきたダンジョンの入り口に戻るとのこと、不正規の手段で入り込んでいた場合のみ最寄りの街に転移させられるらしい。ボスを倒した後の光の

円柱の中に入ったことで、前回のようには街ではなく洞窟の入り口に転移したさとりとこころは、洞窟での探索のことを語り合いながら街に帰る道を歩いていた。

西の空は暗く、街から出発した時は少し西に落ちていたくらいだった太陽は、すでに地平線に半分ほどその顔を埋めてしまっている。あれから三時間ほどしか経っていないはずだけれど、どうやらこの世界は現実よりも時間の流れが少し早いようだ。

「その、本当にいいんですか。このアイテムはランク六……このゲームの上位の人たちでも手に入れるのが難しいレベルみたいなんですよ。その、私なんかがもらっても」

「いいよいいよー。私は前回クマさんの右の前足の爪をもらったもん」

さとりとこころは、巨大ゴブリンこと「ゴブリンキング」を見事に打倒した。その時にドロップ品を整理したのだが、その時に一つだけ妙にランクが高いものがあったのだ。

それは「子鬼ゴブリンキングの王の宝玉」。どうやら、巨大ゴブリンが持っていた杖の先端についていた黒い宝玉のようだった。

「でもあれは、ランクがたったの四だったはずですよ」

「そうだったけ？ でもいいよ別に。前は私がもらったんだから、今度はさとりの番ー」

「そんな簡単に……」

さとりが何度渡そうとしても、こころは「いらない。さとりに上げる」の一点張りで、受け取ろうとはしない。もしかしたらランク六の価値がわかっていないのかもしれない、とさとりは諏訪子にされた説明をそのまましてみたりもしたのだが、それでもこころの返答が変わることはなかった。

クマの右前足の爪をくれたんだから今度はさとりの番だ、と。こころはそう繰り返す。

「さとり……しついで」

「す、すみません。でも……」

いい加減しびれを切らしたらしいこころが肩を竦めて口にする、

さとりが縮こまる。

これ以上突つかかるのは迷惑だろうけど……そんな風に落ち込んだように顔を伏せているさとりに気づいたところが、なにやら慌て出す。

「あ、えつと、その、うーぐ……ほ、ほら！ 私って付喪神だから、『いい道具』とか『悪い道具』とか、そうやって道具にランクづけするのって、あんまり好きになれないというか……だから珍しさだとかなんだとか、私にはあんまり大したことじゃなくて、えつと」

「大したことじゃない……ですか？」

「さとりからもらった素材で作ったこの薙刀……私はすつごく大事に思ってる。ランクだとかそういうのは関係ないの。ただ、さとりと一緒に強い敵を倒して、その時にさとりがくれたもののおかげで、こんなにかつこいい武器が作れて……ただ強いだけの武器なんかより、私にとってはやっぽど価値がある」

街中を歩く時はインベントリにしまっている薙刀も、こころは今はまだ街へ戻る道ということで装備済みのままだった。

「だから、今度は私がさとりに上げたい。こんなに大事に思える武器をくれたさとりにお礼をしたい。それから、よかつたらさとりには……その、その素材で新しい武器を作ってほしい。そうすれば、私とお揃いでしょ？」

「……ふふっ」

さとりの思わず口元に笑みが浮かんだ。それから、頷いた。

「わかりました。こころさんが、そう言うなら」

いい加減こころもしつこく思っているようだから、退かなくてはいけないこともわかっていた。さとりはこの素材で新しい杖を作ることを決意し、『子鬼の王の宝玉』について考えることをやめることにした。

それから話したのは洞窟での探索のことだ。あそこがあれが出てきて驚いた、あそこであれがあつて焦った、楽しかった。そうやって二人でしたことを振り返る。

「それにしても、いやー、今日は快勝だったねー！ 思ったより暗くて

動きにくい部分もあったけど、さとりの明かりの魔法のおかげで十分動けた！」

「あれは私の魔法ではないんですけどね。それよりも私はこころさんがあの森でのクマさんの技を使ったことが驚きでした。途中、普通のゴブリンと戦う時は一度も見せてくれませんでしたから」

「む……本当はすぐにでも見せたかったのだが、危なくてできなかったのだ。ゴブリンどもが襲ってきた時は乱戦模様でむやみに撃つたらさとりの方にも行きかねなかったからな。だが、あれこそ我の真の力！ ふっふっふ、我を吹き飛ばしたやつを今度は我が斬り飛ばしてやったわ！」

口調を変えて胸を張るこころの自慢が、なんだか少し面白くて、笑みがこぼれる。

「気を遣われていたんですね。すみません、もしかしてやっぱり足手まといになったりとか……」

「そんなことはないっ！ さとりがいないとあんな暗い中を進むことなんてできなかつたし、数々のゴブリンの不意打ちに対応することもできなかつたはず！ ボスだつてさとりがいたからあんなに簡単に倒せたんだから……前も言ったけど、こういう勝利は」

「私たち二人のおかげ、ですか。ふふ、ありがとうございます。でも、そうですね。そういうものなのかもしれないですね」

基本的に広い通路ばかりだったが、洞窟の中ということもあって狭い道を歩くことも少なからずあった。その時はこころが薙刀を十全に扱うことができず、主にさとりが剣と魔法を使って敵を殲滅していた。他は自信が持てないのでとりあえずともかくとしても、ああいう場面では確実に自分は役に立てていたという実感があった。

こころの真剣な瞳を見つめ、自分が友達の役に立つことができていると、さとりははつきりと心の中で自覚する。

「……ところで、こころさんって妖怪でしたよね」

「そうだけど、それがどうかしたの？」

「いえ、なんだかあんまり妖怪らしくないなと思ひまして」「え」

なんとなくこのころの頭の上に、がーんつ、と擬音でも浮かんだように錯覚した。なんというか、こころは常に無表情のくせして、そんなこと関係なしに態度やリアクションのせいで感情がわかりやすい。

落ち込んでいるようなところに、さとりは首を横に振って、決して悪い意味ではないと伝えた。

「妖怪というのは基本的に自分勝手に、自分本位で、自分の都合しか考えなくて、他人なんて頼らずに一人で生きていくような生き物です。事実妖怪にはそれだけの力がありますし、多くの妖怪は自分の力には実際以上の自信を持っている。だから、他人を頼る必要がない」

人間からしてみれば見た目が幼い少女でしかないさとりでさえ、妖怪の中では上級に匹敵するほどの力を持っている。さすがに規格外とまでされる大妖怪クラスとは行かないが、さとりもまた自分の力にそれなりの自負を持っていることも確かだった。

さとりは『他人を頼らない』普通の妖怪と違って、能力のせいで嫌われるために『他人を頼ることができなかった』のだが、今はそこはさしたる問題ではない。

「最強の妖怪なんて呼ばれてる鬼なんて特にそうです。仲間内で飲みあったり、楽しそうに談笑したりなんかはしますが、どんなことがあるうとも絶対に周りと協力したりなんてことはしない。腕相撲でも喧嘩でもなんでも、戦う時は絶対に一人でやろうとする。そして周りもそれを邪魔はしたりはせず、応援もせず、ただ観戦する。なにせ全員が『これはその鬼一人の戦いでしかなく、自分はまったく関係がない』と心の底から思っているから」

さとりは地獄に続く鬼の住処たる地底に住んでいるからこそ、それをよく知っていた。やつらは皆、一人で生きていくことを誇りに思っている。自分たちほどの強大な存在が他人を頼ることは恥だと、他人に助けられることは最大の屈辱だと、自身の力に誇りある者に手を差し伸べることはその者への侮辱だと信じている。

「しもべを作る妖怪は多々存在します。でも、ともに戦う戦友なんてものは作る妖怪は多くありません。もちろん例外もありますし、その例外の中には有名な妖怪も存在しますが……」

たとえば天狗などはとても仲間意識が強く、仲間がやられたとなると敵対体勢を取って仕返しに行ったり、住処に侵入した者には容赦なく総出で排除に当たったりする。古くより名を馳せている彼らは最強と謳われる鬼に次ぐほどの実力を持つとされているのだけど、そうやって巨大な群れを作って行動をしているのだから、場合によってはただ単純に強いだけの鬼よりも厄介だと言う。

ただ、天狗を除けば、力ある者が仲間とともに協力をしてことに当たるといふ事例は驚くほどに少ない。おそらくはここ最近耳に挟んだ吸血鬼もそうだろう。あまりにも強大すぎる力を持つて生まれた者には、そもそもとして他人を頼るといふ思考回路が存在しないことが多い。なにせ最初から、どんなこともなんだつて自分一人でごなすことができるのだから。

「……現実でのこのころさんがどれほどのものかはわかりませんが、これまでの戦いぶりを見ればきつと相当な強さの妖怪だということはわかります。そのこのころさんが、仮想世界であるとは言え、こんなにも抵抗なく自然に私と一緒に戦えているというのは……なんというか、とても不思議に思いました」

さとりはそう締めくくり、胸を見下ろした。普段ならば第三の目が浮かんでいる、左胸の前を。

——抵抗なく一緒に戦うことができているのは、私も同じだった。それはどうして？ 私もこれまで、ずっと一人で生きてきたのに。

心の中で自信に問いかけるも、さとりにはとっくにその答えがわかっってしまった。

これまでずっと望んでいた。ともに横に立ってくれる者の存在を、互いを助け合えるような存在を——自身を嫌わず、信じ、頼つてもいいような対等な存在を。

たとえ仮想でも、その妄想が現実となった。だからこそ自分はこんなにも抵抗感がなく、むしろ満ち足りたような気分であることができる。だからこのころと助け合いながら森や洞窟を探索することに一切の違和感を抱かなかった。

でも、このころはどうして自分と一緒に戦うことができている？ 自

分たち二人のおかげだと、そんな言葉が自然と出てくるような考え方ができている？

さとりはそんなことをずっと心の隅で疑問に感じていた。

「……うーむ、多くの妖怪がどうだとか我がどれだけ強いのかとかは、正直、よくわからないが……」

立ち止まり、考え込むように目を瞑ったところに、さとりも足を止めて向き直る。

西の空に沈みゆく太陽は、すでにその顔をわずかしか残していない。あと少し経てば完全に見えなくなり、それに代わって月が明かりの代わりとなるだろう。

「さとりには、我々は最近自我に目覚めたばかりだと言ったはずだと思おう」

「はい」

「だからかもしれない」

こころは目を開き、さとりの瞳をまっすぐに見つめ返した。

「我らの住む幻想郷では人間と妖怪が共存をしている。昔のようなただ単純に捕食し、退治されの関係ではない。その証拠に、我が能楽を行えば人も妖怪も関係なしに、皆が楽しそうに観劇してくれる」

地底に引きこもっているさとりが地上の光景を実際に目にしたのは、何十年、あるいは何百年も前のこと。けれど地上の話はペットや新聞などから知るすべがある。だから、人間と妖怪がともに楽しくしているという、昔ならば決して信じられないようなこころの語る話が嘘ではないこともわかっている。

今の幻想郷とはそういうところなのだ。何年か前にも、大人しくしていたおくうが久しぶりに地上に迷惑をかけてしまったりして、それを懲らしめに地霊殿に地上から人間が訪れてきたりもしていた。それも、地上の妖怪の力を借りながら。

「悪の宗教家ども、かつての希望の面を所有する我が宿敵ライバル、よく仮面を売ってくれるけどたまに怖い河童の店員に、おかしな口調の化け狸……他にもいる。我は自我に目覚めてすぐ、それらさまざまな者どもと戦い、多くの事実と感情を学んだ。それはとても刺激的な出来事

だった」

「刺激的、ですか」

「うむ。自我に目覚めるより前にも妖怪としての我らも存在してはいしたが、自意識なんてなかったと言っている。そんな我らが自分の心で初めて捉えた情景が幻想郷だった。だから、その幻想郷と、その住民たちに影響されたのだと思う。人間も妖怪も関係なしにともに在ろうとする、なんとも摩訶不思議な世界に」

「そこまで言うのと、こころは厳かな雰囲気を少しだけ崩して、自身の手を見下ろした。」

「……それに、我々は道具だからな。持ち主をなくし、供養されずに放置された神の欠片の残骸。かつては人に扱われることを本分としていた。だから無意識のうちにその頃の感覚がよみがえって、誰かとも在ることに違和感を抱かんのかもしれん」

「なるほど……よくわかりました。ありがとうございます、こころさん」

道具の妖怪たる付喪神は、本体である道具が持ち主の手を離れなければ生まれることはない。捨てられるなり忘れられるなり、持ち主がなくなるなりして放置されることで、道具に宿っていた神霊が暴走し、人間に牙を剥く妖怪へと変化する。それこそが付喪神という存在なのだ。

多くの付喪神はかつての所有者に捨て去られ、そのことに憤りを感じて目覚めることが多いという。事実、ほとんどの付喪神は人間を嫌い、恨みを持っている。

ならば、ときとりは口を開いた。

「こころさん。その……答えづらかったら答えなくてもいいのですが、無意識とは言え人に扱われる頃を思い出すというのは、心情的にきついことではないのですか？　なにせ付喪神は皆、人間に怨みを……」

「えっ？」

目をぱちぱちとさせ、言っている意味がわからないという風にこころが首を傾げる。

「いえ、その……付喪神は基本的に、捨てられた道具がへそを曲げることで生まれる存在のはずですから。道具は基本的に人間が作り、扱うものです。こころさんもそうなのでしよう?」

「え、うん、そうだけど……別に私は捨てられたわけじゃないよ?」
「え?」

演技じみた口調を完全に崩してのこころの返答に、今度はさとりが小首を傾げる番だった。

「こころはしばらく考え込むように腕を組むと、なにか思いついたのか、頭の横につけたクマのお面を摘んだ。

「ただ、持ち主の人が死んだだけ……だったと思う。あんまり覚えてないけど。それからずっと放置されて、皆私の存在を忘れていつて……気づいたら、動けるようになってた」

「……なるほど、暴走して付喪神になったわけではなく、時を経ることによる自然的な付喪神化……」

ならば強いわけだ、と納得をする。長年存在し続けるものは道具でも妖怪でもなんでも、強い神秘の力をその身に宿らせる。基本的に長く生きた妖怪ほど強いし、たとえ弱いとされる種の妖怪であろうとも、何千年と生きた者であれば鬼でさえも打倒し得る力を持つ場合もある。

時間の経過による自然な妖怪化を為し得たところともなれば、その力は相当なものに間違いない。

「付喪神として生まれたのはいつ頃か覚えていない。ずいぶん前かもしれないし、案外近い過去かもしれない。だが、前にも言った通り、自我に目覚めたのはつい最近だ」

「それはいつたい、どういう」

「今の我はいろいろ驚いたり、楽しんだり、嬉しがったりできる。だが、目覚めるより前の我々は『安定』していた。我は六ろくじゅうろく六のお面により感情を操る力を持つが、その時の我々はあらゆる感情が他のあらゆる感情を抑え込み、何事にも感情を出さず、ただそこに在っただけ……怨みなど抱けようはずもない」

「感情を操る、力……」

さとりは、左胸の前で強く手を握りしめた。

心を読めるさとりは、人とまともな付き合いができるようになることを望んでいたさとりは、心の持つているような力が自分にあればと思いかけたこともあった。あの三つ目の瞳で見ゆるすべての嫌悪感を、ぐちやぐちやと泥色に混じり合う悍ましき闇を、たとえ力ずくでも目の前からなくすことができるなら、と。

こころの持つ力のことを聞いた時、さとりの中に生まれた感情は、なんとも表現しがたいものだった。羨ましさ、ではない。ただ、かつて望んだ力と同じものを初めての友達と言える存在が所有していることが、なにやら皮肉じみた奇妙なことに思えたのだ。

「だが我はそのうちの一つをなくしてしまい、感情の均衡が崩れてしまったことで自我に目覚めた。本来ならばそのまま消え失せるところを、今はもう新たな面を作ることと均衡をもとに戻し、その上でかつての『安定』に戻らぬよう感情を学んで妖怪らしく生きようと心がけている。なにが言いたいのかというところ……我々は人間に怨みなど抱いてはいないし、抱く要素もない」

「わかりました。踏み込んだ質問だったというのに、わざわざお話しいただいて、ありがとうございます」

こころにとってはただの道具であったことを思い出すことは苦ではない、ということだ。幻想郷の環境のほかにもそういう事情もあるからこそ、さとりと同様に一緒に戦うことに抵抗感がない。

本当に自分は運がよかったのだろう、とさとりは思った。

初めて会ったのがこころという、人とともに戦うことに抵抗のない者だった。ともに戦っていただくだけの環境ときっかけがあり、それのおかげで仲良くなることができた。こうして後日には二人で洞窟の探索なんてこともできている。

あの森で会ったのが普通の妖怪だったなら、一緒に行くことを提案した時点で断られていたかもしれない。あるいは、その先で猿と遭遇した時にうまく二人で戦うことができず、そのままやられてしまっていたか。少なくとも「鋭き右の柔熊」と戦う時に詰んでいたことは確実と言えた。

あの時出会ったのがこころだったからこそ、ここまで来ることができた。ここまでの付き合いをすることができた。

それをわかっていているからからかもしれない。自分がこんなにも、こころに心を許してしまっているのは。

「こころさんは、どうしてこのゲームを始めたんですか？」

歩くのを再開し、さとりはついと思いついた質問をしてみよう。

長く立ち止まっておしやべりに興じすぎたか、太陽は完全に沈み込み、その残光もあと数分持てばいい方というところだった。

「どうしてって？」

「大した意味ではありません。誰かに誘われたとか、噂で聞いて面白そうだったからとか……そういう、なんでもない話です」

「こころは少し悩むように腕を組み、しばらくしてから口を開いた。「皆、仮想世界っていうところでいろいろやってるって聞いて、そこならいろんな感情を学べるかもしれないって思ったからかな」「なるほど」

「単純に皆が楽しそうだったからっていうのもあるけどねー」

さとりは？　とこころが問いかける。右目を閉じて考え込む。どうしてこのゲームを始めようと、この世界に来ようと思ったのか。

——純粹に楽しそうだと思ったのが意図の一つではあるが、一番の理由は別にある。

——心が読めない世界なら、自分もまともにやっていくことができずかもしれない。寂しさを和らげることができるかもしれない。

そう、思ったから。

「こころを見る。無表情ながら、その実感情豊かな初めての友人に目を向ける。

「……私も同じです。楽しそうだと思ったから、やりたいと思って」「ほうほう」

「でも、本当の理由は別にあるんです」

「本当の理由？　それって？」

「それは」

言いかけて、躊躇して、一旦口を閉じる。教えたくないわけではな

い。寂しかったから、なんて言うのが急に照れくさくなってしまったのだ。

こころは、どうしたの？　と言いたげに首を傾げていた。

早く答えなければいけないのはわかっている。だから「それは、その」ともう一度言葉にしかけるのだが、やっぱり恥ずかしくて、顔が熱を持ってしまふのがわかった。

顔を空に向け、一度深呼吸をし、胸に手を当てて心を落ちつかせる。空からは完全に日の光が消失し、世界は夜の色に満ちていた。薄い雲が星々の瞬きを覆い隠し、満月だけがその強い光を持ってして、雲を通り抜けて地上を照らしている。

意を決し、さとりはもう一度、口を開いて――。

「っ、さとりー！」

「――『紅蓮弾』っ！」

突然ここに突き飛ばされ、受け身を取ることもできずに地面に転ぶ。疑問や不満に思う暇もなく、次の瞬間には視界が真っ白に染め上げられた。

「っ――」

間近で爆弾が破裂したかのごとき轟音、衝撃、爆風。思わず上げてしまったはずの悲鳴さえ、その苛烈すぎる奔流に掻き消されてしまった。

すぐに立ち上がって、さきほどまで自分の立っていた場所を見る。そこに何事もなかったはずの平坦な地面はなく、その内部から黒い煙を立ちのぼらせる、荒れた小さなくぼみができ上がってしまった。土は溶け、周囲の草木は焦げ色に染まり切り、火花を散らしている。

月の明かりだけが頼りだった世界だったからこそ、その焰の光はなによりも強くさとりの目に焼きつけられた。

「これ、は……くっ、こころさんっ！　無事ですか!？」

間違いなく、何者かが故意的に襲撃をしかけてきた。それもさとりとこころの視界に入らないよう、ずっと潜みながら待ち伏せを。

洞窟の攻略を終えた後だったから完全に油断していた。あの洞窟

でのゴブリンたちの不意打ちは備えていたからこそどうにかなったが、いきなりやられては対処はかなり難しい。

「げほげほっ！ な、なんとか大丈夫！」

こころはさととりよりも爆炎の近くにいたようだった。膝をつき、咳を吐きながらの返答が耳に届く。

さとりはすぐにこころに駆け寄って、その様態を確かめた。

服が一部焦げ、腕や顔などにわずかなヤケドが見受けられる。確かに「なんとか大丈夫」と言えるだけの大した怪我ではないのだが、それでも傷を負ってしまったことは間違いない。

さとりは拳を握りしめ、こころに頭を下げた。

「すみません、私を助けるために……」

さとりに構わず、自分だけ先に離脱しようとしていれば、こころが怪我を負うことはなかったはずだ。

クマの時と同じようにこころに助けられてしまった。役に立てるようになったはずだと思っていたはずなのに、また迷惑をかけてしまった。それがとてもみじめで、申しわけない。

「私が勝手にやったことなんだから気にしないで！ 今はそんなことより……」

「……はい」

ぶんぶんと頭を横に振って、気落ちした思考を意識的に払う。そう、こころの言う通り、今はそんなことで落ち込んでいる場合じゃない。

少しだけ収まった爆風の向こう側に、小さな人型の影が見えた。

右手を肩の後ろに回しては素早く剣を抜き放ち、左手はいつでも魔法陣を描けるように構える。こころも背に吊り下げた薙刀をしっかりと両手で構えると、切っ先を人型の影の方へと向けた。

臨戦態勢を整えて数秒後、黒い煙の中を通り抜け、やがて一人の少女がさとりとこころの前に姿を現した。

「今日の獲物さんは二人組かあ……ふふっ、いったいどんな悲鳴を上げて壊れてくれるのかな」

「あなたは……」

ベレー帽を乗せた金髪のサイドテールの頭、炎よりも深く輝く真紅の瞳。金の装飾が目立つ真っ赤なカーディガンを羽織っているのだが、その虹色のボタンはすべて開けられており、内側の白いブラウスと十字架の首飾りがあらわになっていた。白いラインの入った紅色のプリーツスカートを着用し、白と赤の縞々のニーソックスの上に、また同様に真紅色のストラップシューズを履いている。

その少女を一目見て、特に気になった点は二つ。一つは人間の換算で一〇にも満たぬ幼い肢体でしかないこと、一つは口元に八重歯が見え隠れしていること。

さどりの頭の隅に、こころが来る前に小耳に挟んだ二人のプレイヤーの発言が断片的によぎった。

「まさか……恐ろしい、波動……？」

「あら、私のことを知っているの？」

燃え盛る炎の熱さゆえか、初めて遭遇したプレイヤーを殺す者キラーへの戦慄ゆえか、さどりの額を一筋の汗が流れ落ちる。

そんなさどりを眺め、《恐ろしい波動》と呼ばれる幼い少女は、愉快そうに口の端を吊り上げた。

一〇． 人殺し (player killer)

夜の静けさと暗闇に包まれて、どこか幻想的で美しい空気を漂わせていた草原の一角は、一つの火種が放り投げられたことで様変わりしてしまっている。静けさは荒々しさへ、辺りの暗黒は無慈悲さへ、それぞれがそれぞれの小さな地獄を形成するための部品へと生まれ変わってしまった。

熱い、とさとりは思う。肌を通してその熱気を味わい、まるで炎でできた大蛇にその長い体をもって囲まれているような錯覚を覚える。コンフィグで痛みを三〇パーセントに下げているとしても、こういう温度などに対する質感はダイレクトに伝わってくるらしかった。

「ちよつと『紅蓮弾』撃つの早かったかなあ……全然仕留められてないや。でもあれ以上待ってたらバレた可能性もあったしー。うーん」
さとりたちに聞かせるように、わざわざ口に出して自分の行いを顧みる襲撃者の少女。その声音や調子はのんきと表現できるだろうほどに至って平静で、それは彼女がこれまで何度もプレイヤーへの襲撃を繰り返してきたことの証明とも言えた。

すぐに追撃をしかけてこないのは、挑発しているのか。それともさとりとところがどんな反応をするか楽しんでるのか。どちらにしても、さとりからしてみれば気分のいいものではなかった。

そんなさとの睨むような視線に気づいた少女は、満足げに口の端をつり上げると、爛々と輝く赤い瞳を見せつけるように見開かせ、あざけるように笑う。

「ふふ、ふふふっ、あはははっ……いいねえ、その目。いいいいわ、そうこなくっちゃ面白くないもん」

「……残念だったわね、最初の不意打ちであまりダメージを与えられなくて」

「ああ、それ？ 別にどうでもいいわよ、あんなの。どうせ最後には全員殺すもん」

「さきほどは早く撃ちすぎたことを後悔しているように見えただけど？」

「そうだっけ？ 私は早すぎたかなって独り言してただけで、反省とか後悔とかしたつもりはないわよー？ ふふっ」

最後の小さな含み笑いから、少女が暗に、実際に言葉として外に出すことでさとりとこころをおちよくっていたと自分から言っていることが、さとりにはわかった。

やはり、趣味が悪い。さとりは眉をひそめた。そして同時に、これは決して話し合いでどうにかなる問題ではないことを少女の性質から察し、こころと視線を交換する。

戦うか、逃げるか。ここまでなめられたからにはやり返したいところではあるものの、それが想像以上に難しいだろうことがさとりにはわかっていた。

なにせ、まず間違はなく目の前の少女のレベルはさとりやこころを軽く上回っている。《恐ろしい波動》なんて渾名がつけられるほどに幾度となくプレイヤーを狩ってきたことは、裏を返せば、それをなせるだけの力がこの少女にあるということ。

そしてなにより、二対一という不利な局面においても少女は平然と完全に『狩る側』の気持ちでいる。自分がやられるはずがない、と。これまで何人ものプレイヤーを狩ってきたその眼から見て、こんな相手二人程度ならば簡単に狩りつくせる、と絶対の自信を持っているように見える。

どうしますか？ そんな風に問いかけるさとりの目線に、こころが答えようとして。

『紅蓮弾』

「なっ——」

少女の手のひらから「魔弾」の性質をそのまま炎に置き換えたかのような炎の球体が生まれ、こころへと放たれる。少女は、背後に隠した片手ですでに魔法陣を構築し終えていたようだった。

突然の事態に、しかしこころは慌てることはなく、素早く薙刀を縦に振るうことでそれを真つ二つにしてみせる。

「あら」

少女の関心したような声。

二つの半球がこころの左右を抜けて後ろへ流れていき、数瞬後には爆音が空気を轟かせ、爆風がさとりたちの服をなびかせた。

「ふんっ、この我にそんな姑息不意打ちな手、二度も通じないわっ！」

「へえ、思ってたよりはやるみたいね。じゃーあー、これならどうかなー」

少女がその手を自身の胸元へ運び、そこにある十字架の首飾りを握り込んだ。そして、ぱきんっ、と十字架を引きちぎる。

するとその十字架から灰色の光がこぼれ出し、それが少し眩しくて、瞬きを一つ。

再び瞼を開けた時には、少女の手にはその身長のご二倍はあるほどの煤色の鉄塊が握られていた。かろうじて十字架のような、あるいは剣のような形をしているのだが、どこもかしこもでこぼことして、刃は無い。ただ単に純度の低い金属の塊をそのまま大剣のような形にくり抜いてみた、と言った表現がもつとも当てはまるような不格好な鉄塊だ。

少女はその鉄塊の切っ先を天空へと振り上げると、まっすぐにこちらを見据え、にやりと笑った。

『オーバードレインズフレイド
『大紅蓮 剣』』

ぼうっ——と。少女の持つ鉄塊から炎が発生した。『紅蓮弾』の煙を掻き消すほどの勢いで漏れ出したそれは、天空を真っ赤に染め上げ、その眩さゆえに星々の光を隠す。

そして、その炎は徐々に縮小をしていく。しかしそれは決して熱気が消えたわけではなかった。収縮しているのだ。天にのぼる黒煙を掻き消すほどの炎の本流がすべて、少女の持つ鉄塊へと圧縮されていく。

そうして生まれたのは今にも暴れ出さんばかりの熱気が無理矢理込められた、すべてを焼き切る業火の大剣。

「ほら——これも通じないって言うんなら、防いでみせてよっ！」

「えっ!? わっ、ちよ!」

少女が地面を蹴り、こころへと詰め寄った。振り下ろされる莫大な熱気の塊の前に、こころは無表情ながら慌てた様相で横に飛んで、そ

の直線状からそれた。さとりもまた危険を覚え、即座にその場から離脱する。

そして、鉄塊の剣抑えられていた焰が解放される。

——莫大なまでの熱エネルギーが、少女の視界に映っていたありとあらゆるものを焼き尽くした。

自然を抉り、大地を溶かす。振るわれると同時に圧縮されていた熱エネルギーが切っ先を起点に解放され、それによる砲撃、あるいは衝撃波が、少女の視界に移っていただろう文字通りすべてのものを消し炭にしたのだ。

跡に残ったのは、およそ剣でできたとは思えない、溶け出した土だったものがドロドロと流れるだけの異常な地表。小さなマグマの池。

「あらら、外れちゃった。残念」

さとりには、わかっていた。そしてさとりにわかったのだから、それを受けかけたころもまた理解しただろう。

この少女は、最初から今の攻撃を当てる気がなかった。当たればいいなあ、程度の気持ちで思い切り振り下ろしただけ。

つまりは自分の力を見せつけたただけなのだ。さとりところの反応を楽しむために。

「……(こころさん)」

「う、うん」

さとりはこの時点で逃亡の選択肢を取ることに決めた。想像していたよりもはるかに、あまりにも格が違いすぎる。戦っても、まず勝ち目はない。

さとりは素早く視線を巡らせ、街のある方角を確認した。

そんなさとりに気づいた少女は、あざけるようにくすくすと笑う。

「鬼(ご)っ(こ)ってさあ、楽しいよねえ。私に恐怖して逃げる人たちを見るのがとっても愉快なの。追いついた時の、相手の絶望した顔がたまらないのよ。こういうの、ぞくぞくするって言うのかな?」

「あなたは……」

「ふふっ、ふふふ、あははははっ！ ほらあ、逃げるんでしょ？ する

なら早くしないと焼き殺しちゃうよ？　まあ早くしても、いくらでも追いついて後ろから焼き殺すけどねえ」

この少女は、追いかけることにも慣れていると言っている。逃げる相手を仕留めることも何度もやってきた、とさとりたちに教えている。

わざわざそんな風に言葉にして話してくる理由は一つだろう。より絶望を与えて、その反応を楽しむため。自身への恐怖をあらわにするところをその目で見るため。

だが、それをわかつていながら相手の望む感情をさらすつもりはない。

さとりは意識的に少女の声と言葉を頭から遮断し、左手で素早く魔法陣を描いた。相手の少女もそれに即座に反応する。

「『魔弾』」

「あははっ！　『紅蓮弾』っ！」

電球のように溢れんばかりの力が込められた紫色の塊と、轟々と燃え盛る炎の弾丸が激突する。互いが互いを刺激し合い、二つの塊はさとりと少女の間で爆砕した。

魔力と熱気の飛び散る衝突地点を横目に、さとりはこころの手を取って街のある方角へと走り出す。今の爆発が少しでもあの少女の気を引いてくれればいいのだが、やはりそううまくはいかないだろう。

振り返れば、少女が炎に包まれた鉄塊の切っ先を上空へ向けているのが見えた。

「ふふっ、そんなに遠くにいて避けられるかな？」

空気を焼き切って振り下ろされた業火の大剣から、刃の形に抑え込まれていた焰が弾け出す。

切っ先を起点に莫大なまでの炎の砲撃が発射され、放射状に広がったそれは容赦なく刹那にさとりとこころに迫る。

少女の近くにいればその横に回る等をして回避の手段もあったのだが、十数メートルは離れてしまった現状でそれを避けるすべはない。

「盾」を——と左手を構えるさとりを押しつけて、こころが業火の奔流へ薙刀を振りかぶった。

『真空斬』！ 『仮面舞踏』エヴオリューションっ！』

縦に振るわれた薙刀の刃から、真空で作られた不可視の衝撃波が放たれる。一帯を飲み込まんばかりの炎の波を前にしては一見無力に見えるそれは、しかし容易く業火の一角を引き裂いた。

膨大な熱気の砲撃の中に、人がぎりぎり二人入れる程度の穴が開く。そして次の瞬間には、さとりの視界が真っ赤な焰に染め上がった。

空気が薄くなり、温度が急激に上昇する。けれど、自身の身が焼かれる感覚はない。

炎の波が収まった後のさとりの周囲には、つい数瞬前の草木の豊かな草原からは想像できないくらいに、焼け焦げて荒れた大地が広がっていた。すぐ隣の地面が溶け、マグマのようにドロドロとしている。

さとりは体を震わせながら「盾」でこれを防ぐことができたかと自問自答する。おそらく、いや間違いなくそれは無理だった。

さとりとこころのいる位置だけが無事な現状を目にし、プレイヤーキララの少女は初めてその目を驚愕に見開いた。

「……なんで？ おかしいなあ。この程度の相手になら、なにされたって私の炎の方が強いはずなのに……」

「ふ、ふんっ！ この我に二度も同じ手は通じぬと言ったではないかっ！」

「むう……」

なぜかこころも少しばかり動揺しているように見えた。もしかしたら、さすがのこころも完全に防げるとは思っていなかったのかもしれない。

「真空です」

「え？」

今の状況は好機だ。小首を傾けるこころの手を引き、あの少女が動揺している隙に距離を稼ごうと街へ向かって駆け出した。

「火が燃えるには酸素というものが……らしいです。無酸素、つ

まり真空の空間では、火が広がることはかなわない」

「酸素？　なに、それ」

「この星に満ちる生命のエネルギーの源みたいなものです。どんな動物もそれがなければ生きることができません。そして炎もまた、酸素がなければ生きることができない」

「そうなの？　でも、太陽って燃えてるんだよね。なんで？　太陽も酸素を持つてるの？」

「八咫鳥の炎がそんな『科学』の理屈で消えるわけがない、ということでしょう。神さまの炎ですから」

「なるほどっ！」

外の世界の本に書かれていることは冗談半分のような事柄も多いので、無酸素が云々だとかはさとりは一切信用していなかったのだが、どうやら今回は本当のことだったようだ。本には例外もあると書かれていたので、つまりは太陽などの神秘の炎は酸素など関係なく燃え続けるということなのだろう。

とにかく重要なのは、こころの『真空斬』はあの少女の炎に対してとても相性がいいということだ。これはかなり有用な情報である。

『《恐ろしい波動》が攻撃の準備をするたびにこころさんに『真空斬』を撃ってもらえれば、逃げ切れるかもしれない』

「おおっ！」

幸い、あの少女の足はそう速くはないようだった。事実、レベルがかなり離れているはずなのに、走る速度はさとりたちとほぼ同じ——。

ふと、さとりたちを追いかけていた少女がその足を止めた。また『オーバーレイスフレイド大紅蓮剣』とやらを撃つつもりなのか、それとも諦めたのか。

訝しげに後ろの様子を確認するさとりの瞳に、面白くなさそうに口を尖らせながら魔法陣を描く少女の姿が目に入る。

「なにかしてくるつもりみたいです。こころさん、注意して——」

『オーバーレイスジェット大紅蓮噴射』

少女の作った魔法陣から、否、少女の両手から膨大な炎のエネルギーが放射される。その向けられる方角はさとりたちのいる方向で

はなく、そのまったく逆。

彼女は自身の背後に炎を一気に噴射することで推進力とし、焼け焦げた地面を滑りながらさとりたちとの間を詰め始めた。その速度はさきほどまでの比ではなく、数秒もすれば追いつかれてしまいそうなほど。

さとりは『魔弾』の準備をしながら、こころに目くばせをした。

『真空斬』！』

不可視の真空の衝撃波が相手の少女に襲いかかる。この攻撃はいくら炎を展開しようとも防ぐことはできない、少女にとって天敵の技。

さすがに避けるだろうと思っていたそれを、しかし彼女は真正面から迎え撃った。

「邪魔あー！」

片手で後方に炎を放射しながら、もう片方の手で鉄塊の大剣を操作し、彼女は巨大な刀身の腹にその身を隠した。真空の刃はその大剣に直撃し、ガリガリと音を立てて引き裂こうとするのだが、ただほんの小さな傷を刻むだけ。

森のクマの『真空斬』でさえ木の数本は容易く切り裂いてみせたというのに、『仮面舞踏』でさらに威力が上がっているはずの『真空斬』であれだけなんて。

いや、これもあるいは当然の結果か。さきほどは相性がよすぎるくらいだったから対抗できただけで、本来はこれだけの力の差があるということなのだ。

右手で大剣を前にかざしながらも、左手の炎の噴出は止まっていない。ガードしつつもさらに近づいてくる少女へ、さとりは慌てて『魔弾』を撃ち込んだ。

しかし『真空斬』をものともしなかった相手にそんなものが通じるはずもない。まるで障害にもならないとでも言うように大剣の腹で防がれた。

新たに『円盾』^{シールド}の魔法陣を描こうとした時にはもう、少女の大剣の届く範囲にさとりとこころはいる。

『フレイズブレイド紅蓮劍』!』

横なぎに振るわれる炎の大剣を前に、さとりは本能的な危機感にしたがってしゃがんだ。圧倒的な熱量が頭上を通りすぎ、カチューシャのように結んでいたリボンの両先端がちりちりと音を立てて焦げる。咄嗟にはさとりは攻撃を避けることしかできなかったが、こころは姿勢を低くして回避しながらも前へ踏み込んで《恐ろしい波動》の懐へもぐり込んでいた。

距離が近すぎるゆえに薙刀を十全に振るうことはできないが、なにも刃を使うことだけが攻撃方法というわけではない。

こころは刃に近い方へと柄を掴む両手を素早く持ち替えると、柄頭を少女へと突き出した。

「この程度——」
「えっ」

しかし少女はそれを左の手の平で容易く受け止める。

こころの薙刀の柄頭は金属製、それも刺突用に作られている。だどいうのに軽く止められた。予想打にしていなかったその事実にくころの動きが一瞬硬直する。

「私には、効かないのよっ!」
「え、わ!?! わあああああああああああつ!?!」

相手の少女はその隙を見逃さない。薙刀の柄頭を強く掴むと、それを思い切り上方へと放り投げた。

少女としては武器を取り上げることが目的だったのかもしれない。だが、こころは薙刀の柄を強く握りしめて離さなかった——武器と一緒には、上空へと身を投げ出すことになった。

こころは少女のすぐ近くにいた。即座に武器から手を離す選択をしてさえいれば、さらに素手での追撃が可能だっただろう。それをしなかったのはきつと、彼女の中に『この武器は絶対に手放してはいけない』という思いがあったから。さとりとのお話を、この場面においては『真空斬』が鍵を握ることを覚えていたから。

けれど今はそのせいで少女に対して決定的な隙をさらしてしまっていた。なにせ妖力で飛べる現実とは違い、こころに空を飛ぶ手段は

ないのだから。

「でっかいおまけがついてきたみたいねえ、あはは」

薙刀に加え、人一人を片手で軽く投げ飛ばしてみせた少女が、口の端を吊り上げつつ大剣を構えた。刀身に熱線が這い、膨大な熱量が刃の形に収縮し始める。

さとりは少女が『大紅蓮剣』オーバーブレイズフレイドを放とうとしているのに気がついた。今のところには逃げ道がないうえに、投げ出されたばかりのために不安定な体勢で、しかもそれを立て直しにくい空中にいる。いくら『真空斬』が相手の技に対して相性がよくとも、これでは迎撃することなんてできやしない。

ならばさとりがどうか『大紅蓮剣』オーバーブレイズフレイドの発動を止めるしかない。急いで立ち上がると、さとりは少女のもとへ駆け出した。

だが、それこそが少女の狙いだった。

少女は走り寄ってくるさとりの方へ振り返ると、その赤い瞳を爛々と輝かせながら口の端を吊り上げる。

『大紅蓮剣』オーバーブレイズフレイド

「なっ、ん!」

さとりは、ぎりぎり少女がさとりの方へ技を撃とうとしていることに気づき、慌てて体を横に投げ出した。すぐ横をとてつもない熱気の焰が流れていくのを感じながら、さとりは地面を転がる。

こころへ撃とうと見せていたのは、慌てて近寄ってきたさとりを騙しうちするためのフェイク。

さとりは、今回避できたのは運がよかったからだと直感した。少女がさとりの正確な位置を把握するために振り返ってくれたから。立ち上がることなくなんて考えずに全力で横へ飛び込んだから。さきほどの『紅蓮剣』ブレイズフレイドのようにしゃがまれて避けられることを考慮してか、少女が大剣を縦に振ってくれたから。

しかし、その運のよさは完全なる危機の回避へは直結しない。

体の回転を止め、立ち上がろうと顔を上げたさとりの視界に、すでに書き終えた魔法陣が映る。少女はさとりが起き上がろうとする瞬間を狙っていたのだ。

『紅蓮弾』！』

「う——！！」

膨張する光の前に、咄嗟に剣を構えることができたのは恐怖ゆえなのかかもしれない。この攻撃をまともに食らってはいけないという危機感が、その臆病さゆえにちょうど手に持っていた剣を顔の前に突き出させた。

おそらく、持っていたものがガードに使おうとしてもなんの意味もなさない木の棒や本などだったとしても、それをこうして自分の体を守るために使おうとしていただろう。手に持っているものがないかなど意識しようとしてもしない、それほどまでに本能的な行動だった。

だが、そのおかげで窮地を免れる。少女の放った『紅蓮弾』はさとの立てかけた剣の刃により真つ二つに割れ、さとの左右を抜けて、すぐ近くの地面に着弾した。

なんとか直撃は避けることができたが、真後ろで発生した爆風がさとの体を吹き飛ばし、そしてその方角は今まさに『紅蓮弾』を撃つた少女のいる方向。

「っ、あああああ！」

体勢が悪すぎるだとか考える余裕はなかった。目まぐるしく変化する視界に、一瞬だけ少女が大剣を振り払おうとする姿が目に入り、無理矢理にでも腕を動かして強く握りしめた剣を振るう。

がきんっ、と甲高い音を立てて火花が散った。

力の差は歴然だった。さとの剣はすぐに押し返され、横腹に大剣の刀身が衝突する。

「あははっ！」

「あ——」

勢いのままに振り抜かれた大剣に、さとりは突き飛ばされた。苦悶の声を上げることすらできない。

幸いだったのは、その大剣の刃がぼろぼろだったことだろう。もしもこれが研ぎ澄まされた刃だったなら、こうして宙を飛ばされることはなく、体を上下で半分ずつにされて死んでいた。

……いや、実際はそれも幸いと言えるかどうか。

無防備に大地に体を落とす、何度も転がったすえにようやく体が止まる。痛む全身を叱咤して、どうにか起き上がろうとして気がついた。

口から真っ赤な液体がこぼれ落ちてくる。少しでも体を振じろうとすると、お腹の奥から、体内から激しい痛みが伝わってくる。無数の針で突き刺されるような激痛が全身を駆け巡る。

どこかまずいところの骨が折れて、内臓に突き刺さったか。ゲームのくせにどうしてこんなところまでリアルなんだ、と苦悶の表情を浮かべながら、さとりは心の中で文句を漏らした。

幾度試そうと痛みがひどすぎて立ち上がれなかった。ただただ地面に横になって苦痛に喘ぐさとりの前に、小さな影が差す。口の端を吊り上げた、紅蓮の瞳の輝く残酷な悪魔の姿が目に入る。

「あ……ぐ、うう……！」

「ふふっ、そう、それよ！ その目よ！ 私が見たかったのは、そういう風に恐怖に満ちた、震えた目……ああ、たまんない。たまんないっ、たまんないっ！ ふふっ、ふふふ、あはははははははっ！」

「あ、なた……は……！」

「あ、そうだあ。ねえ、知ってるー？ この世界での死は本物じゃあないから命はなくならないけどね、失わないものがないっていうわけでもないの」

「どういう……！」

「レアアイテム」

さとりの眉がぴくりと動いた。それを少女は見逃さない。

「そのログイン中で手に入れたアイテムは、一度でもログアウトしない限りは『仮の所有者権限』しか持っていないことになってる。そしてこの世界で死ぬと、その人はレベルアップに必要な経験値の一割と、『仮の所有者権限』で所持しているいくつかのアイテムを失う。正しくは、倒した魔物と同じように死体っていうオブジェクトになって、その中にそのアイテムが保存されるんだけどね」

「それは、つまり」

「ここで死んでしまえば、ゴブリンキング“子鬼の王の宝玉”をなくす可能性がある

ザートとしゃれ込もうかしら」

少女は無情に、動けないさとりへ向けてこれ見よがしに大剣を振り上げた。

「ぐ、う」

これを受ければ間違いなく死ぬ。立ち上がれなくても、地面を転がってでもかわさないと。でなければ自分は。

わかっていた。わかっているでも、それでも痛みが邪魔してろくに動けなかった。たった三〇パーセントの痛み能耐え切れない。

「さあ、あなたはこうやって死ぬ瞬間、いったいどんな顔をするのかな——」

少女は、無駄に足掻こうとするさとりを恍惚とした表情で見下ろしながら、剣を持つ力を緩めた。

重力にしたがって大剣が落ちてくる。その落ちる先にいるさとりは、それを眺めていることしかできなかった。

時間に見れば一瞬。しかしさとりには、何十秒にも長い時に感じられた。

そういえばこんなことが書いてある本もあったな、と。死ぬ瞬間はこうやって時間がゆっくりに感じられることがあるだなんて、外の世界に書いてあったな、と。そんな風なことを考えられるくらい、長く。

しかしそのおかげでさとりには見えた。大剣を振り下ろす少女の向こう側、十数メートル上空で人の形をした影が長い棒のようなものを構える光景を。

「——『真、空斬』っ！ 『仮面舞踏』エヴォリユーション、二連打あ——」

「む」

少女はさとりに当たる寸前だった大剣を咄嗟に引き戻すと、刀身を盾のようにして上部に構えた。その後すぐに振ってきた二つの不可視の刃のうち一つがそれに直撃し、ほんの少しだけ金属の削られるような音が響いた。

残る一つの斬撃は明後日の方向にそれ、大地に傷を刻んでいる。

さとりには見えていた。こころは体勢を整えるなんてことは度外

視して、体を振じつて同じ方向に複数回回転させることで、一回ごとに薙刀を振るつて“真空斬”を連続で繰り出していた。

だが、これはあまりにも。

「このっ……『紅蓮弾』！」

「まだだ、まだいける……！ 三、連打目！」

迫り来る炎の球体を、こころは三回目の回転で斬り裂いてみせた。しかし三発目の真空の斬撃もまた、少女のいる位置とは関係のない方向へすつ飛んでいく。

これはあまりにも、命中力が悪すぎる。ただめちやくちやに撃ちまくっているだけだ。

これではMPを無駄に消耗するだけ——そう考えるさとりの目に、どこかイライラとした様相でこころを見上げる少女の姿が映る。そうして、こころの狙いを理解した。

「もう、一度お！ 四連打！ さらにもう一回つ、五連打あああああ！」

「ああ、もう！ 鬱陶しい！ 『大紅蓮——』」

当たる確率が低くとも、当たるかもしれないのなら少女はそれに注意を向けなくてはならない。つまりこころはこの少女の気を引いているのだ。どうかさとりが殺される暇を少女に与えないように。

こころはさとりのためにがんばってくれている。なにもせず見ていれば自分に攻撃が飛んでこない確率が高かったのに、わざわざそれを捨ててまで。

さとりは拳を握りしめた。

また足手まといになるのは、嫌だった。私もこころの力になりたい。全力を尽くして、今できる精一杯をするんだ。

さとりは地面に転がったまま、少女の足に触れる。それから、もう片方の手で魔法陣を描き始めた。

剣を振ることができなくとも、体に力を入れられなくとも、立ち上がれなくとも。さとりには一つだけ少女に対抗する手段がある。

「剣——」

「衝、撃——！」

それは、触れた対象にのみ効果を与えることのできる『魔術師』の力。

猛烈な荷重がさとりの手の平から刹那のうちに発出され、皮膚を通し、その内側の筋や骨にさえ衝撃を伝える。

「いつ、つう!?」

痛みでスキルを中断してしまったのか、少女の持っていた大剣から炎が消え、がくんつと膝をつく。それからさとりへと恨みのこもった視線を向けた。

さとりはただ、してやったり、と笑みを浮かべてみせる。

「この——」

——そこへこのころの放った真空の刃が振ってくる。

それはさとりにも当たりかねない軌道にあった。元々めちやくちやに撃っているだけなのだから、さとりに当たる確率だつてもちろんある。しかしどういうわけか、この少女との戦いにおいてのさとりの運はかなり高いようだった。

「がつ、あ——!」

不可視の斬撃は運よくさとりからそれて少女の右肩へと直撃し、強烈な裂傷をその身に刻む。驚きなのは、これを受けても真つ二つにならなかったことであるが、それでも深いダメージを与えたことには変わりなかった。

少女は大剣を取りこぼし、あまりの痛みとその表情を苦悶に満ちたそれへと染める。そしてその頃にはこころは少女のすぐ頭上、ほんの数メートル上で薙刀を構えていた。

「これで、最後お！」

こころは薙刀の刃を少女の右肩の傷に押し込み、振り切る。両断する。

その瞬間、少女は目を見開いて——その瞳から光が消えた。

「うぐうつ!」

空中で何度も薙刀なんて重たいものを振り回していたから当然であるが、こころは受け身も取れずにさとりのすぐ隣の地面に激突した。

鉄球が土の中に落ちたような音とともに、さとりの視界が土埃に包まれる。それが晴れた後には、そこには凄惨な姿のころろが転がっていた。

右手と左足がありえない方へ曲がって使い物にならなくなり、さとりと同様に折れた骨が内臓に突き刺さったか、げほげほと咳とともに大量の血を吐いて苦しそうにしている。

こころは何十メートルと上空から無防備に突き落とされたに等しい状況なのだ。これほどまでになってしまうのは必然だった。

「こ、ころろさん……」

「さと、り……」

互いに手を伸ばし合い、手の平同士で触れる。本当は力を入れて、ぱしんつといつものようにハイタツチをしたかったのだが、今のさとりとこころにそんなことをなせるだけの力はなかった。

「運が、よかったですね……」

ぎりぎりだった。逃げるのが失敗し、それでもぎりぎりです、本当にぎりぎりでなんとか勝つことができた。

きつともう一度勝てと言われても、絶対になかない。それほどまでに運がいいことがたくさん起こっていた。

さとりは体勢をなんとか仰向けに切り替えると、そのまま空を見上げた。体を動かすと痛みが走るし、うつ伏せはちよつとばかり苦しすぎる。とりあえずは、この体勢のまま回復を待つのが賢明だろう。

ゲームなのだから、しばらく待つていれば動けるくらいまではすぐに回復できるはずだ。

「妖怪だった頃は……というか、現実なら……こんな傷、どうってことないのだけど……」

妖怪は人間と違って体が丈夫にできているし、回復能力もかなりのものだ。たかが内臓に骨が刺さった程度で、全身に痛みが走るくらいで動けなくなったりはしない。

……しかし、こうしてじつとしていると、そのぶん針を刺すような痛みを意識してしまう。今だけは、「メニュー」から「コンフィグ」を選んで、痛覚を○にでもしようか。○だと触覚の方にも影響が出て

きたり、いろいろと大変そうだけど……。

そんな風に悩むさとの耳に、消え失せそうなくらい小さくも、しかしどこか満足げな声音が届いた。

「さとり……楽し、かったね」

「……ぼろぼろにやられてますよ、私たち。もう痛すぎて、動けません」

「でも私は……なんだかちよつと、わくわくしてたみたい。一人じゃ、まず間違いなく勝てないって敵に二人で挑んで、打ち破ろうとがんばる……クマの時と一緒だね」

「元々は逃げるつもりだったんですが……でも、そうですね」

わくわく、か。目を閉じて、《恐ろしい波動》の少女と相對した直後の時のことを思い出してみる。それから、自分を見下ろして狂氣的なまでに高笑いする少女の姿も。

「……いや、やっぱりないです」

「そうなの？　もしかして、私だけ？」

「かもしれません」

「むう、そうかあ。残念」

もしかしたら、こころにとつては、少女と戦うことはクマや巨大ゴブリンなどのボスと戦うのと同じことだったのかも知れない。勝てるかわからない敵に二人で挑んで、倒すために四苦八苦する。ただ、その相手が魔物かプレイヤーかだけが違い。

あの少女に立ち向かうのが楽しかったか、と聞かれれば即座に首を横に振れる。でも。

「……こころさんと一緒に戦うのは、楽しかったですよ」

「さとり？」

「ふふっ……いえ、なんでもありません」

薄い雲が広がっていたはずの空はいつの間にか晴れ、星々が満月と共演を繰り広げていた。

あまりに綺麗なそれに、思わず手を伸ばして。

——どくんっ、となにかが強く鼓動したのが大地を通して伝わってきた。

「これ、は……」

ゆらり、と何者かが立ち上がったのがさとりの視界の端に映る。それは当然ながらさとりではなく、こころでもない。胴体を二つの斬撃に斬り裂かれ、そのダメージで動かなくなったはずの小さな悪魔。

満月を背にするそれは、驚愕の視線を受ける中でさらに変化を見せる。

確かにその身の半分以上を裂いていたはずの傷がたった十数秒で治癒し、口元の八重歯がより鋭く冴えわたる。背中からは、赤茶色の枝のようなものに七色の結晶をぶら下げたような、おかしな形をした翼が飛び出した。

赤い瞳はさらなる深さへ。纏う雰囲気は、まるで本物の吸血鬼のそれへ。

なにかのスキルか、アビリティか。まるでわけがわからないことが立て続けに起こる中、それでもわかることが一つある。

「……こころさん、すみません。あのアイテムで武器を作るという約束……果たせそうにありません」

それは、この勝負がさとりとこころの敗北で終わるということだった。

「ここで私がやられると、どうやらあのアイテムはロストしてしまうみたいで……ごめんなさい」

「……さとりは悪くないわ」
「でも」

少女がその紅の瞳の焦点をこころへと合わせた。斬られたことへの怒りゆえか、恨みゆえか、その目は震えている。

申し訳なさそうにするさとりに、こころはこんな状況でも満足そうな声で答えてみせた。

「明日も一緒に遊ぼう。そうすれば、またいいのが手に入るよ。必ず」
「……はい」

「すつごく楽しかったわ、さとり——」

こころの姿が炎の中に掻き消える。その熱量もまたつい数分前のものよりもはるかに上昇しているようで、こころを原型すら残さずに

消し去ってしまった。

少女の瞳が、今度はさとりの方へ向く。爛々と輝く紅色の眼は、こころを見る時と同じ狂気の怒りにまみれていた。

その内に抱える負の感情ゆえか、つい数分前のように楽しもうとせず、その手に灯した膨大な熱量で無情に焼き尽くそうとしてくる。これをかわすことは、どんな奇跡が起ころうとも不可能だろう。

だからさとりは、さきほどたくさん笑われたことへの意趣返しのもりで、少女に対して満足そうに表情を綻ばせてみせた。

「次は必ず勝つわ。こころさんと一緒に、あんたを打ち倒してみせる」
「っ——」

怨みがないと言えば嘘になる。怖くないと言えば嘘になる。それでも、たった数日と言えど信頼し合える関係になれた彼女と一緒に挑むのならば、それは決して悪くないことのような気がした。

炎に飲み込まれる直前、少女の眉がぴくりと動いたのがさとりにわかった。デザートだと言っていた死ぬ瞬間のさとりの表情が気に食わなかったのか。それともこの笑いが自分への意趣返しだったのか。かって、かんにさわったのか。

それがどんな思いによるものなのか、さとりに知るすべはない。けれどどうしてか、その時さとりには、この少女の真つ赤な瞳が寂しそうに震えているように見えて。

しかし、それも一瞬。

さとりはとてつもない熱量に焼き尽くされ、意識を暗転させた。

Chapter 2. 醒めたるは負を知らぬ氷結

一・双方世界 (two world)

地霊殿。嫌われ者だらけと言われている地底でも、その住人たちからさえも群を抜いて避けられている、呪われた館である。当然、今日も来客はない。

そんな館の中、寝室と執務室を足して二で割ったようなとある一室において、半眼と心臓付近に浮かぶ第三の目サードアイが特徴的な少女は、イスの背もたれに寄りかかりながらカップを口元に傾けていた。

その少女の名を古明地こめいじさととり。彼女こそがこの地霊殿の主であった。

「やっぱり、私には紙媒体の方があつてるわね……」

第三者の視点から見れば、さとりはイスに座って右目を閉じているだけのようにはしか見えない。しかし、さとりのその暗闇に包まれた右目の視界には、彼女しか見えない不可思議な画面が暗闇の中に浮かんでいた。

さとりはそこに書かれた無数の文字の羅列を見やり、つい今しがたのひとりごとを口にしたのである。

「電子書籍、か。こうして本を持ち歩かずに手軽に見れるのもいいけれど、どうにも本を読んでいう実感がない。私には紙の本の方があつてるわね」

とは言うものの、電子書籍そのものを否定しているわけではない。本に比べてかさばらないし、出かけた先でふとした拍子に読みたくなったり、本を持っていくのが煩わしくなった時、家に保管場所がない場合など、データの方が有用な場面もある。

もつとも、さとりは外に出かけることなど滅多になく、自宅も無駄に広いお屋敷のためにスペースは有り余っており、さとりととの相性は最悪なのだが。

電子書籍の文字列が映し出されていた画面を、バツ印のボタンを押して閉じる。すると端っこの方にアイコンが並ぶ、猫とカラスが背景

のものに切り替わった。デスクトップというデフォルトの画面である。

そのいくつものアイコンの中の、山と森が描かれているそれに目を向けた。それはMMO、つまりオンラインゲームを始めるためのアイコンだ。

「……ずいぶんと変わったわね、私も」

手を伸ばしかけて、それを途中でやめる。

これを初めて起動する前は、毎日日本を読んで、たまに書いてみたりすることだけが趣味の、なんの変わり映えのない日々を送っていた。それが満足できる日常だったかと言われれば、半分は嘘で半分は本当になる。

他人の心を読むのが嫌だった——嫌悪感を向けられるのが嫌だった。他人の心を読んでいる最中、まださじりりすることをどうとも思っていないその内心が、いつどこで嫌悪感へ変わるのかと思うと、心を読むのが億劫だった。そんな状態で他人とまともな交流なぞできるはずもなく、信頼できるのは自身を心から慕ってくれるペットたちだけ。

他人の心に振り回されないという点では、とても快適な日常だったように思う。けれど、そんな日々が鬱屈で物足りなかったことも確かだった。

「心を読めない世界に行けるだけで、ここまで変わるなんて」

いや、それも違うか。最初の森で誰とも出会わなければ、きつと二度とMMOを起動することもなかった。あの日あの時、秦ころとう少女に会うことができたから、こうして楽しくゲームを続けることができる。

感謝している。頼っている。慕っている。そんな自分の心が理解できる。

それはひどく心地がいいとともに、さじりりにとってはあまりにも抱かなすぎたものだから、それが失われてしまうかもしれない幻想を思うと、少し恐ろしい。

ずっと心を読んで、嫌われてきたから。他人に嫌われることが当た

り前になってしまっているから。

？ もつとも、そんな不安を抱いてもしかたがないことはわかっているのだが。

「恐ろしいと言えば……」

もう片方の目も閉じると浮かぶ、美しい夜の草原で乱れ咲き誇る紅の狂気の光景。炎よりも紅く幻想的な光を放つ瞳が特徴的な、一〇にも満たない見た目の吸血鬼らしき少女。

あの少女の言っていた通り、レアアイテムたる ゴブリンキング 子鬼の王の宝玉^①は失われてしまった。

しかし今は向こう側の世界で彼女に殺されてから、すでにそれなりに時が経っている。あの日と比べればさとりもこころも強くなった実感はあるし、今ならばやりたい放題やられるということにはならないだろうということも、自信を持つて思える。武器もこころとともに新しく倒した別のボスのもので新調していた。

ただ、一つだけずっと引つかかっていることがある。今日も電子書籍を読む前はずっと調べ続けていたのだが、どんなスキルやアビリティを探したところでそれに該当するものはなかった。

最後の、倒したと思った途端に《恐ろしい波動》が発現させた力。たったの十数秒で重傷の完治する超再生能力、赤茶色の枝のようなものに七色の結晶をぶら下げたような、おかしい形をした翼。

「いったいあれはなんだったのかしら」

やりたい放題やられるということにはならない自信はある。それでも、あの姿のあの少女に勝てるかと言われれば、口を噤まざるをえない。

それほどまでに圧倒的な存在感、肌で感じることでできる威圧感を放っていた。言うなれば、まるで本物の吸血鬼のように。

「……本物の吸血鬼、か」

ふとその時、扉の向こう側からかつかつと床を鳴らす音が聞こえてきた。落ちついたリズムの、靴を履いて床を叩く音。つまり、この部屋の近くを通ることに慣れている誰かの可能性が高いということになる。

それだけでその正体に大体のあたりをつけた。

さとりは視界に映っていた画面を消し、両目を開けると、肘をついて足音の主が来るのを待った。地霊殿のペットたちは不必要にさとの部屋の近くを通ったりはしない。足音がするほど近くにいたりということはずまり、ほとんどの場合がさとりに用があるということだ。

予想通り、足音は扉の前で止まり、こんこんとノックの音が響く。どうぞ入ってください、と許可を出すと、ぎい、と音を立てて扉が開かれた。

「失礼します、さとりさま」

真紅の髪を左右で三つ編みにし、ゴシックアンドロリータファッションに身を包む、黒い猫耳が特徴的な少女。名を火焰猫^{かえんびょうりん}燐、愛称をお燐。ペットたちの中でも、右腕と言ってもいいくらい信頼している火車の妖怪である。

予想通りだ、とさとりの頬が緩んだ。

まあ、もつとも、この部屋への来訪者自体が数えるくらいしかなく、お燐はその中でも一番回数が多いのだけど。

「どうかした？ お燐。なにか問題でも起こったのかしら」

なんて聞いてみるものの、お燐の落ちつきようから、それがありえないことはわかっていた。お燐は自分の感情に素直なので、慌てていたりする時はばたばたと忙しく動くものだ。

案の定、お燐は首を左右に振った。

「いえいえ、怨霊の管理はしつかりできてますし、おくうもきちんとして熱地獄の管理をしていますし、他のペットたちも大人しく過ごしてます。なにも問題はありません」

「それはご苦労さま。あなたもおくうも、いつも本当にありがとうございますね」「えへへ、滅相もないです。あたいもおくうも喜んでやっておりますから」

なんて謙遜するものの、お燐の背後には垂直に立った二本の黒い猫の尻尾が見えていた。これまでの経験から、これが嬉しい時や甘えている時の仕草だということは理解している。そして実際、第三の^{サードアイ}目を

通して見える彼女の感情も『もつと褒めてほしい』に近いものである。さとりが微笑ましいものを見るような目で見つめていることにお燐も気がついたようで、お燐は顔を真っ赤に染め上げると、こほんど一つ咳払いをした。尻尾もさとりの視界に入らないように隠してしまい、あら残念、とさとりはこれ見よがしに肩を竦めてみせる。「そ、それで、さとりさまのお部屋にお邪魔した理由ですけど……」

「……ええ。わかってはいるけど、あなたの口からお願ひ」

第三の目から窺えるお燐の心を覗く限り、それは確かに問題という問題ではない。しかし、少しばかりため息を吐きたくなるような内容であることは確かだった。

お燐はそんなさとりの様子を苦笑いで眺めながら、要件を告げる。「こいしさまが、この『かきごおり』をさとりさまに渡してほしい、と」お燐が取り出した、というより、ずっと後ろ手に回していた両手を前にして出てきたのは、かきごおりと表現するにはあまりにも無理がある赤色の液体の入ったグラス。というか完全に溶けている。

さきほどもではため息を吐きたくなる気分だけであつたが、実際に目を見ると「はあー」と吐かざるをえなかった。

「これが、かきごおり？」

「地上から持ってきたものだそうです」

「そんなものが地霊殿まで溶けずに残ってるわけがないでしょうに……で、その当人たるこいしは」

「ええと、あたいにあたいのぶんとさとりさまのぶんを渡したら、どこかに行っちゃいました」

「……あなたも苦労してるのね」

「いえ、まあ」

完全に否定し切れないあたりから、お燐の苦労が窺える。第三の目にはイチゴ味の濃いジュースと化したかきごおりを必死に飲み込むお燐の姿が映っていた。

こいし——古明地こいし。それは、さとりの妹であり、この地霊殿に棲まうもう一人の覚妖怪である。

こいしは常に地霊殿にいるさとりとは違い、ほとんどの時は外出を

している。飯に帰ってきたとしても、それに誰も気づかないことなんて日常茶飯事で、会おうとして会えるような相手ではなかった。

そのくせして、いつもこうやって問題だけはきちんと押しつけてくる。こいしからすれば善意のつもりかもしれないけれど……。

「ほんつとうにあの妹は……まあ、いいわ。お燐、それをこつちに持ってきてちょうだい」

「あ、はい」

お燐はさとりの方へ近寄ると、机の上に『かきごおり』を置いた。

さとりはその『かきごおり』を手元に引き寄せると、果てしなく微妙な面持ちでその中身を見つめる。しばらくするとグラスを動かした水面の揺れが収まり、そこに変な表情をしている自身の顔が見えてきた。

これを飲まなければいけないのか、と鬱屈な気分になりながら、さとりは肘掛けに肘をつく。

「……もう夏なのね」

「そうですねえ。初夏ですけど、地霊殿と違って、地上はもうとても暑いです」

「へえ。そういえばお燐は、たまに地上に出かけたりしてるんだっかわね」

お燐がびくんと一瞬震えたのが視界の端に見えた。ただの世間話のつもりだったのに、あいかわらず変なところで怖がられてしまう。

さとりはお燐がなにを危惧しているのかを第三の目で探りながら、安心させるように首を左右に振った。

「別に、そんな暇があるなら怨霊の管理をしつかりなさい、だなんて咎めてるわけじゃないわ。むしろお燐にはいつも尽くしてもらって感謝してるんだから。地上に遊びに行くくらいは自由にしてくれて構わないわよ」

お燐はほっと安堵の息を吐いた。

そもそも館の主たるさとり自身、起きている時は基本的にゲームをやっているか本を読んでるか書いてるかの三択なのだ。そんなさと

りよりも何倍も一生懸命働いてくれているペットたちに文句を言う権利は、さとりにはない。

「地上はどう？　楽しい？」

「あ、はいっ。地底と違って人間の死体が手に入れやすいですし、異変の時はお祭り騒ぎみたいに賑やかで、こっちも調子が上がっちゃいます」

人間の死体が手に入れやすい——人間からすれば不気味な発言かもしれない。しかし、こうして人懐っこくさとりに地上での話をする姿からは想像しにくいがお燐は火車の妖怪である。火車とは、人間の亡骸を奪うとされる猫又の妖怪だ。

MMOでは人間として立ち回ってはいるものの、さとりも現実では妖怪である。ゆえに、お燐の発言を特に問題だとは思わないし、咎めたりもしない。元来、妖怪とは人間の敵である存在なのだから。

「お祭り騒ぎ、ねえ」

もしかしたらこいしは、いつも引きこもってばかりな姉に、そういうお祭り騒ぎの一端だけでも楽しんでほしくて、『かきごおり』をわざわざ地底まで持ってきてくれたのかもしれない。

そう思ってみると、この赤色の液体を少しは飲もうとする気力が湧いてくる……気がしなくもない。

微妙な顔ながら、改めてグラスと向き直るさとりの視界の隅に、お燐が不思議そうに自分を眺めている姿が映る。どうしたのだろうか、その理由を考えたり訪ねたりするまでもなく、第三の目^{サイドアイ}が勝手に彼女の思想を読み取った。

すなわち、『さとりさまから地上のことを聞いてくるなんて珍しい』という心を。

「……大して地上のことが気になったわけではないわ。ただ、最近は地霊殿以外の景色を目にすることが多かつたから、自然とね」

心を読んだの発言に、お燐はまったく動じない。いつものことのようにさとりの言葉に対して首を傾げてみせる。

「地霊殿以外の景色、ですか？　でもさとりさまは外出なんて滅多にしないはずじゃ……あ、もしかしてあれですか？　ええと、ふあんた

すていつくかんとりーさいど」

「ええ。あの世界じゃ私の能力も使えないから、心が読めない。それがまた新鮮だね」

さとりが自身の能力を煩わしく思っていることは周知の事実だった。さとりの言葉に、お燐は納得したように頷く。

「さとりさまもあれ、やってたんですねえ」

「ええ。もしかしてお燐も?」

「はい! よくおうと一緒になります! ……あ、いえ。遊んではいますけど、その、あたいもおくも、さとりさまに任された仕事は」
「きちんとやってるのよね。わかってるわ。あなたたちに限って、そんな心配はしてないから」

外に出かけていようと、ゲームで遊んでいようと、ペットたちが自分の信頼を裏切るはずがない。そんな思いが込められた迷いなき声色でのさとりの断言に、お燐は少し照れくさそうに頬を掻いた。

それからお燐は、逡巡したような声音でさとりに問いかける。

「その……さとりさま。あっちの世界は、楽しいですか?」

さとりはそれに頷くと、小首を傾けた。

「ええ。どうしたの? 急にそんなこと聞くなんて」

「い、いえ! なんでもないですっ」

なんてお燐が誤魔化そうとしても、そんなことは関係ないと言わんばかりに第三の目は彼女の心を勝手に読み取る。

—— 『久しぶりにさとりさまと一緒に遊びたいなあ』。

「…………ふふっ」

「え、あつ。い、いえ! 今の思考はほんの冗談ですから!」

「いえ、いいのよ。そうね……確かに、あなたが人型の姿を取れるようになってからは、仕事を任したりお礼を言うだけで、この手じゃ構ってあげられてなかったからね」

小さく微笑みながら、さとりは小さな自分の手のひらを見つめた。

それから、盲目になっていたのかもしれない、と少し反省をする。

こんなに近くにいたのに、今日までお燐の小さな欲求に気づくことができなかった。ずっと自分のためにがんばってもらっていたのに、

彼女のためにしてあげられることを見つけようとしなかった。

以前までのさとりならもつと早く察することができていただろう。それができなかつたのはきつと、MMOが楽しくて、そちらにばかり気が行ってしまって、現実でのペットたちへの対応を少しと言えど疎かにしてしまっていたから。

「お燐。また近いうちに、久しぶりに一緒に遊びましょうか」

「え？ いいんですか？ さとりさま」

「ええ、もちろん。今日はもうあちらの世界での約束が先にあるから無理だけれど、明日以降ならいつでも」

そんなさとりの言葉に、お燐ははにかみながら「じゃあ」と頬を掻く。

ふいときとりは、改めてお燐を見つめてみた。二つの瞳で見えるのは、彼女のアイデンティティとも言える人懐っこい笑みに、上機嫌に立った二本の尻尾。三つ目の瞳に映るのは、いつも感情がそのまま顔に出してしまう、誤魔化せない正直な心。

いくら心を読めない世界に焦がれようとも、忘れてはいけけない。今日まで人の心を読めるといふ望まぬ力を抱えても正気を保って生きてこられたのは、心を読む癖も一切気にしない動物たち^{ペット}がいてくれたからなのだ。

久しぶりに今度、放し飼いにしているペットたち一匹一匹のもとへ足を運んでみよう。相当な数がいるから大変だろうけれど、これまで一緒に過ごしてきた家族なのだ。たまにはそれくらいはしなければならぬ。

さとりはそんな風に思いながら、ずいぶんと久しぶりのお燐の我がままを聞き入れた。

「へえ。で、その『かきごおり』はどうしたの？」

「なんとか食べ切り……いえ、飲み切りましたよ。イチゴシロップの味しきませんでしたけど」

「まー、そりやそうだね。でも氷は全部溶けてたんでしょ？ 水の割合も多いし、そこまで嫌がるほどでもないと思うんだけど」

「……妹のことです。どうせ、氷が全部が真つ赤になるまでシロップを振りかけていたんでしよう。とても濃かったですよ」

「……うん。ご愁傷さま」

仮想世界。人のほとんど立ち寄らない路地に開かれた小さなよろず屋の中で、さとりは一人の少女と向き合って座っていた。

少女は子どもらしいカエルの着ぐるみを身につけており、身長はよくて中学生ほどしかないさとりよりもさらに小さい。一見すると年端のいかない純粹無垢な幼女にしか見えないが、実際はそうではない。おそらくは現実ではさとりと同じく、いや、それ以上に長きを生きた畏怖を抱くべき魑魅魍魎の一匹。さとりはそれを、この少女——洩矢諏訪子と初めて会った時に浴びせられた威圧感から感じていた。

さとりはお茶を飲むと、つい数時間前に飲んだ赤い液体と比べての程よい濃度の美味しさに、満足そうに頬を緩ませる。

「それで、今日はどうしたの。聞きたいことがあるって言ってたけど」「はい。どうしても気になることが一つ……」

さとりの頭によぎるのは、かつて自分とところを狩った焰の悪魔の姿。枝のような赤茶色の翼が特徴的な、真つ赤な瞳の吸血鬼。

あれがどういうものなのか、あの日からずっと探し続けていた。しかし、彼女が使っていた他のスキル、『紅蓮弾』や『紅蓮剣』、オーバーレイズブレイド『大紅蓮剣』の存在は確認できているのに、最後に見せた不可思議な姿へと変化する現象に関するスキルは見当たらなかった。

「……重傷がほんの十数秒で完治する超再生能力に、急激なパワーアップ。そして不可思議な翼を生やす……それらを同時にこなすことができるスキルやアビリティの存在を知道吗せんか？」

「えっ？」

だからずっと聞いてみたかった。さとりよりもはるかにこの世界の事情に詳しいだろう、洩矢諏訪子という少女にそのことを。

諏訪子はさとりの質問に、まるでわけがわからないという風に首を傾げる。

諏訪子が腕を組み、うーん、と唸り始めた。しかし、しばらく待ってみても、困惑をその表情に浮かべているだけで答えは返ってこな

い。

「どれだけネットで調べてもわからなかったのだ。やはり、諏訪子でも知らないのだろう。そう判断したさとりは、やっぱりなんでもないです、と言おうとして、その瞬間に諏訪子が「あ」と顔を上げた。

「もしかしてあれのことかな？」

「シンクロ、システム……？」

「そうそう。さとりは聞いたことないの、あれの噂。あのシステムなら確かに、さとりが言うようなでたらめなことも可能かもしれない」「それはいつたい、どういうものなのでしょう」

「コンフィグになかった？」「シンクロシステム」のオンオフがどうたらーって」

「コンフィグなんてゲームを始めた直後くらいにしか開いていなかった。さすがにそこに書かれていたことをすべては覚えていない。

「さとりは指を鳴らしてメニュー場面を呼び出し、コンフィグの欄を確認した。」

「あ、本当ですね……確かにそんなものがあります」

「たぶんさとりが言ってるその現象の正体はそれだよ。まあ、それって一応表向きはどういうものなのかまるでわからない謎システムって言われてるし、調べても見つからないのはしかたないかもね」

「謎システムって、どういうことなのでしょう。ヘルプにも載っていないんですか？」

「ないない。シンクロのシの字もないよ。ついでに言えばネットとかに書かれたその情報はどーいうわけか必ずすぐさま削除されるのよね。だから、表向きは誰も知らないし正体もわからない謎のシステムっていうことになってる」

「それは、誰かが情報操作をしているということなのだろうか。簡単にその真相を知ることができないように、情報が出回らないようにしている。」

「ネット上すべてでそれを行えるなど容易な所業ではない。少なくとも人間ではないだろう。おそらく、相当に強大な力と知識を持った魑魅魍魎が後ろにいる。あるいは、製作者たる河童ならば情報操作も

可能かもしれない。

「さとりが今考えてることは大体わかるけど、それが河童じゃあないことは確かだよ」

「どうして、そう言い切れるんです？」

「私が河童と身近なところに住んでるからさ。あいつらの動きは手に取るようにわかる。そもそもあいつらは自分たちの発明と商いあきなさえうまくいけばあとはどうでもいいって思ってるような種族だからね。そんな情報を隠ぺいする動機もない」

確かに、とさとりは頷く。しかしそれは逆に言えば、情報を隠すことによつて得をする存在がいるということになるのではないか。ならば、それはいったいなんのために？

そんな風に考えようとしてみるが、あまりにも情報が少なすぎるせいで、さすがになにも思い当たらない。不毛だろうと判断し、話を先に進めることにした。

「では……その情報が隠されている『シンクロシステム』とやらの正体はいったいどんなものなんでしょうか。諏訪子さんは、それを知っているんでしょう？」

「あーうー、まあ、知ってるけどねえ……んー」

諏訪子はお茶の入った湯呑みをちゃぶ台の上に置くと、じつとさとの目を見つめ始めた。

まるで自分が自分を観察しているように、その奥底を見据えられるように感じられて、さとりは少々身じろぎをする。

少しの間、そうやって見つめ合っていた。しかしふいと諏訪子は視線を外すと、再び湯呑みを口元に運んだ。

おかしな沈黙が過ぎ去ったことに、さとりは無意識にほつと息を吐いた。

「残念ながら直接は教えられないね。今のさとりには、あれを正しく知るにはまだちょっと早いだらうから」

「……おめがねにかなわなかった、ということでしょうか」

「ま、ざつくばらんと言えば」

遠慮のない諏訪子の発言に、さとりは肩を落とす。

「でもまあ、完全に教えることができないっていうわけでもない。せつかくあのシステムの力をその目で見て、その正体を知っている私のもとまでたどりついたんだ。私が知っているその真実にたどりつくための、いわゆるヒントを上げるだけならしてあげてもいいよ」

「ヒントですか？」

「そう、ヒント。率直に言えば、私はさとりに——そのシステムをほぼ自在に扱える使い手のことを教えてあげられる」

諏訪子はそう言って、不敵にさとりを試すような笑みを浮かべた。さとりはその中々の好条件と諏訪子の視線に、ごくりとつばを飲み込む。

「どうせ情報が隠されてるんだもん。せつかくだし、答えは自分で見つけるといいよ。その方が楽しいだろうし、真実にたどりついた時の達成感も相当ある。その間にさとりがそれを直接教えてもいいって判断してたくらいまで成長するかもしれないしね」

「実際にその目で見て、謎を解き明かせ、と」

「そう。私はただ、その真実へたどりつけるようにそこはかたく誘導するだけ」

なるほど、と心の中で呟いて、さとりは湯呑みに入ったお茶を口に含んだ。

秘匿されているものを教えてもらうだけではあつけないというのは、なるほど理解できる。そもそも今日までずっと探し続けてきたのだ。他人から与えられるよりも、自分でたどりつきたいという気持ちは確かに、さとりの胸のうちにもあった。

「ああ、一応言っておくけど、その使い手に『どうやってそのシステムを使ってるんですか？』なんて聞いても無駄だから。私が教える使い手は、真実を知ってたどりついた使い手じゃなくて、天性のそれだからね。どうすれば使えるかなんて……いや、たぶんそもそも、"シンクロステム"を使ってるっていう自覚もないんじゃないかな。っていうか存在を知ってるかも怪しい」

「その、よくわからないのですが」

「つまり、たぶんそいつは、『なんか知らないけどパワーが上がった！』

みたいと考えてるってこと」

「は、はあ。それはなんというか……」

すごいと言えればいいのか、間抜けだとも言えればいいのか。なんとも表現がしづらい。

……というか、システムの使い手がそんなだというのに、諏訪子にシステムのことを教えてもらえなかったということは、さとりはその頭の足りない何者かに及ばなかったと判断されたのだろうか。実物を見たわけではないが、地味にへこむ。

「あ。あと紹介はしないから。どの辺にいるー、とか、どんな特徴をしてるー、とかは教えるけど、あとは自分でどうにかしてね」

「え。その……知らない人に話しかけたりするのは、あまり得意ではないというか」

「うん、知ってた。だから言ってるのよ。さとりはそれくらいできるようになった方がいいもん。MMOっていうのは元々、そうやって知らない人と遊ぶためのものなんだから」

「それは……そうかもしれないですけど」

「そんなんだから、ゲームを始めてしばらく経つのに私を含めても二人しか知り合いがないのよ。いい加減、自分から進んで人付き合いができるようになった方がいいわ」

「う、うぐ」

一切遠慮しないストレートな諏訪子の指摘がさとりの心にぐさぐさと刺さる。

さとりは現実では数百年を生きてきた妖怪ではあるものの、あいにくと人付き合い、とりわけ知らない誰かに自分から話しかけるということに関してはほとんどしたことがない。

『生まれて』すぐに、心を読むことが嫌われることとイコールであることに気がついた。だから傷つきたくなくて、自分から話しかけることはしなくなった。

他人と話す時は、「どうせ嫌われるから」とかけらも心は開かない。常に冷たく当たって、わざと心を読んでみせて相手を遠ざける。自分にとっても相手にとっても楽しくない会話をするようにずっと心が

けてきた。

それでもしなければ正気を保てなかったからだ。誰かと接することにはほんの少しでも楽しさを感じたところで、すぐにでもそれは痛みに変わってしまう。数百年、そんなことを繰り返すことはごめんだつた。

心を読まれても気にしない動物たち、そして同じ^{サトリ}覚妖怪である妹のこいし。それだけが心を許せる唯一の相手であり、話していて『楽しい』と感じていい、心を許してもいい相手——。

ほんの少し前まではずっとさとりはそんなだったのだ。こんな心を読めない世界の存在を知らなかった。こんな誰にでも心を開いてもいい、誰と接^人することにも楽しんで^生いい世界^きでの過^方ごし方は、どうしてもさとりは慣れなかった。

しかたがない。そんな一言で片付けることは簡単である。けれどさとりはそれを、諏訪子にそんな言葉は言いわけにならないと言外に告げられていると感じた。

さとりもいつまでもこのままではいけないことはわかっている。

一度大きく深呼吸をすると、さとりは湯呑みの中身を飲み干した。

「……わかりました。がんばってみます」

「うん、よろしい」

その後、さとりはその使い手がおそらくいるだろう場所を大雑把に教えてもらった。そうして残りの時間、いつもよろず屋に訪れた時のように、冒険での必需品を買ったり雑談を繰り広げたりと、のんびりと時間を過ごした。

明日か明後日か、こころを誘って早速その使い手を探しに出かけよう。そんな風に思いながら、やがてよろず屋を出たさとりはログアウトをした。

二・第二森林 (second forest)

灰色の毛を持つ狼による突進を右にかわし、横薙ぎに剣を振るう。その刀身はちょうど狼の口から尻尾までを真横に裂いており、上下で真っ二つになった狼の死体が、どさりと背後で倒れ伏す音をさとりは聞いた。

だが、敵はそれで終わりではない。狼を一匹倒した瞬間を狙って、左右から同時に別の二匹の狼が飛びかかってくる。この狼たちが仲間の死に動揺したりと言った様子はなく、その目は狂気の赤色に染まっているように思えた。

今のさとりならば左右同時に襲われたところで対処はできただろう。ただ、その狼の目に、一瞬だけあの少女の姿を想起する。《恐ろしい波動》と対峙し、戦った際の実感が全身を駆け巡り、一瞬ぴたりと体が止まってしまった。

「さとりっ！」

気がついた時にはもう攻撃を受ける寸前だった。もう避け切れぬい、と痛みを覚悟しようとした直後、さとりの耳に自分の名前を呼ぶ声が届く。それと同時に二つの斬撃がさとりの左右——さとりへと突撃をしかけていた二匹の狼へ刹那の間隔で連続に振り下ろされ、その首を絶った。

狼の死体がさとりの足元に転がり、飛び散った血が足の肌や靴、服などに少しかかった。

諏訪子によると、こういう汚れは装備に『祝福』さえしていれば、ごくわずかの耐久値を消費して時間経過で消えてくれるらしい。肌や髪に関しては元々時間経過でなくなるみたいだが、そうなるも隠しパラメータの『清潔度』が下がってしまい、毒などの状態異常にかかりやすくなってしまうとのこと。血がついたらすぐに『タオル』等のアイテムで拭くことでそれを抑制できるとも言っていた。

辺りを見渡す。辺りには狼の死体が十数匹ほど転がっていた。

さとりは生き残りがいないことを確認すると、さきほど助けてくれた、自分の名前を呼んだ人物——頭の横に取りつけられたクマのお面

と無表情な素顔が特徴的な少女、秦こころに向き直った。

「ありがとうございます、こころさん。少しぼーつとしてしまっただけ……危ないところでした」

「ふふんっ、よいよい。これくらいはお安いご用！」

インベントリから『タオル』を取り出して、肌についた狼たちの血を吹いていく。実際には『清潔度』の減少率はほんのわずかのため、全身が血の海に浸かることほどのことがなければこういうことをする必要はあまりないみたいだが、ゲームの中と言えど汚れた状態にいるのはさとりには少し気分が悪かった。

血を拭き取りながら、さとりはあの時隙を作ってしまったことを頭の中で反省をする。

どうにも自分は《恐ろしい波動》のことを意識しすぎているような感じがしている。トラウマになるまでに恐ろしかったのかと問われれば、そうではないと断言はできる。彼女が最後に使った謎の力が気になるからか、それとも……。

なんでもいい。とにかく、こういう一瞬の判断が命取りになるかもしれない場面で頭をよぎることが危険なのは明確なのだ。おそらくはさきほどの攻撃を受けても生きてはいたし、こころに助けてもらったおかげで無傷では済んだが、次もそうだとは限らない。意識しすぎているというのなら、意識してそれを引き剥がすしかないだろう。

一通り吹き終えたことを確認して、『タオル』をインベントリにしまう。そして、今度は狼たちの死体を素材としてインベントリへ放り込み始める。

その狼は、どうやら『マッドウルフ』という魔物モンスターだったようだ。さとの住む地域での言葉に直せば、直訳で『狂気の狼』。いつも本を読んでいるさとりは多少は英語の心得もあったため、ぴったりの名前だ、と納得をした。

死体を素材として回収し終わると、さとりとこころは目的地のある方向へと向き直る。

木々の点在する緑に溢れた丘の道。その途中で、マッドウルフの群れに襲われたところだった。

さとりやこころが現在拠点にしている街の一番大きな門から続く道は、三手に分かれている。そのうち左の道がさとりやこころが出会った森に続き、右手の道の途中にゴブリンキングのいた洞窟があった。二人が進んでいるのはその道のうちの真ん中の道であり、それは左手の道とはまた別の森林へ繋がっていると言う。

「——それで、その『しんくろしすてむ』っていうすごい力の使い手っていうのは本当に森にいるの？ 街じゃなくて？」

「みたいですよ。もちろん、いつもその森にいるというわけではないみたいですが、そこが一番会える確率が高い、と私の知り合いは言っていました」

二人して歩きながらのこころの訝しげな質問に、さとりは受け売りの言葉で返答をした。

最初、さとりは『シンクロシステムをほぼ自在に扱える使い手』とやらはどこかの街や村でも拠点にしていると思っていたので、森へ向かえと言われた時はこころと同じように驚いたりもした。ただ、実際にはそうして人のいる場所以外を中心に活動したり、放浪していたりするプレイヤーというのは意外と多いらしい。

アイテムの補充や装備を整えたりと言ったことが難しくなるのに、なぜ？

その現象のわけは諏訪子から聞いていた。さとりの返事を聞いても、うーむ、と唸っているこころに、さとりはそのことを話してみることにする。

「街や村に滅多に立ち寄らないプレイヤーのほとんどは元が妖怪のようです。というのも、妖怪は古来から自分の力に絶対の自信を持っているような者が多いですから、他人を頼ることに抵抗を覚える者が多いんです。それから、他のプレイヤーと馴れ合うような街の雰囲気合わなかつたりするそうですよ」

「そうなの？ 私は別に抵抗を覚えたりとか、そんなことないけど……元の世界でもたまにお面の修理を頼みに行ったりするし」

「こころさんは付喪神ですからね。そういう種族や弱い妖怪、妖精などはもちろん違います。あくまで多いというだけです」

こころはある程度は納得したように「ほーほー」と声を上げた。こころが妖怪としての意識を確立したのはごくごく最近だというし、彼女の知り合いには『普通の妖怪』が少ないようだから、こういう妖怪の事情は意外と知らなかったりするのかもしれない。

しかし、その事情が示すことはつまり、これから会おうとしている相手もそういう『自分の力に絶対の自信を持っており、協調性が低い妖怪』だという確率が高いということでもある。あまり、気難しかったりしなければいいのだけど。

「そういえば」

さとりはこころの薙刀に目を向ける。こうしてこころと一緒にゲームをすることが日常となつてからしばらく経つが、それは未だ『鋭き右の柔熊』の素材で作つた薙刀だった。

「これまでの戦いでも、さきほどの狼との戦いの時もそうだったのですけど……こころさん、振り下ろしの間隔がずいぶん短くありませんか？　こう、片方の狼が真つ二つになつたと思つたら、次の瞬間にはもう片方も……重い武器を振り回しているには不自然に感じたのですが」

「あ、気づいた？　ふっふっふ、それこそ『奇術師』としての新たな我がスキル、『攻撃逆行』^{アタックリターン}！　自身の体勢を瞬時に攻撃寸前の状態まで戻す力よ！」

「なるほど、それで振り下ろした直後の体勢から即座に攻撃を準備する体勢に戻つて、もう一撃を別の狼に加えた、と。『奇術師』は奇抜なことが得意なんでしたね。なかなか面白い効果のスキルです」

「でしよでしよ」

体勢を戻す。一見すれば特に強力とは思えない効果だけれど、こころのように薙刀などの重量のある武器を扱うプレイヤーにとつては有用なスキルになりそうだ。敵の意表をつける上に、威力のある斬撃を連続で繰り出すことができるのだから。

お面をつけることで特定の属性攻撃を強化する『仮面舞踏』に、攻撃の動作を巻き戻して同方向からの連続攻撃を可能とする『攻撃逆行』。『奇術師』は奇抜なことが得意と説明に書かれていただけあつ

て、王道から少し外れたようなスキルやアビリティが多いらしい。

「さとりもその剣の切れ味、あいかわらずすごいわ。すれ違いざまに軽く振っただけで狼を、こう、すぱっ！ と斬れてたでしょ？」

「ふふっ、そうですね。最初は私も驚きました。これを作れたのもこころさんのおかげです。ありがとうございます」

「ふふん。我にかかればあの程度のこと、造作もないわー！」

むんっ、と無表情で胸を張るところが少しおかしくて、さとりはくすりと笑った。

薄く金色がかった刀身や鍔、柄頭に、焦げ茶色の包帯が巻かれた柄。さとりが今持っているショートソードは、『鋭き左の剛熊』というモンスターからドロップした鉤爪から作り上げたものだった。

ただ、その鉤爪はどうにも激しい使用の連続で大分劣化していたように——諏訪子によると、剛熊は柔熊と違って強い相手に近づいていく傾向にあるため、倒しやすく、ドロップ品も質が低いものが多いとのこと——、こころの薙刀と違って、武器スキルという装備している間だけ習得できるスキルというものはない。

それでもその切れ味だけは折り紙つきで、こころのそれと遜色はなかった。

あの剛熊との戦いではこころがずいぶんと気合を入れて、頑張っていてくれたように思う。きつと、あの洞窟でのレアドロップ品がなくなって落ち込んでいたさとりを立ち直らせようと奮起してきてくれたのだ。

切れ味以外は突出した部分がない、ちよつとレアな程度のランク四の装備であるが、こころのおかげで作ることができたこれは、さとりにとってはとても大切な武器だった。おそらく、これよりも多少性能がいい程度の剣を手に入れたところではそちらに装備を移すことはないだろう。

「——そろそろですね」

適当に話をしながら歩いていると、前方に古びた看板が見えてきた。

途中から木々は少しずつ増えてきていたが、その看板を越えた辺り

から樹木の数が急増し、まさしく森と言った様相と化している。

さとりとこころは看板の前で立ち止まると、そこに書かれている文字を読み込んでみた。

『この先、《蛇蛙の森》ですか』

「よくこの看板無事に立ってるね」

「まあ確かに、こんな道の真ん中に立ってる看板なんて邪魔ですからね。誰かが折ってでもいそうなものですけど」

看板が古くて今にも折れそうなことよりも、そちらの方が原因で折れる可能性の方がはるかに高いことはさとりもこころも理解している。人間を除く幻想郷の住民、つまりは妖怪や妖精と言った面々ならば、こんなものが道の真ん中に立っていれば蹴飛ばしそうなものだった。さとりの知り合いでも、思いついたことをすぐさま実行しようとする妹のこいしなどならば、即座に折りにかかりそうである。

というか、この森にはこれまで結構なプレイヤーが訪れたはずだから、誰かが壊しにかかっていなければおかしい。おそらく看板は時間経過で修復されるように設定されているのだろう。

どこことなく看板を壊したくてうずうずしているようなこころに苦笑いを浮かべつつ、その手を取って森の中に足を進めた。

看板から続く道は人の手が入っているかのように整えられており、進むことで苦勞することははない。森の風景もそこまで樹海じみたものではなく、枝と葉のすき間から漏れる日差しが自然をなんとはなしに美しく魅せている。

緑の匂い。いや、草と木と土の混じった、森の匂い。

「……………」

「さとり？… どうかした？」

「いえ、初めてこの世界に来た時のことを思い出しまして。最初、私は海岸に流れ着いていた……という設定だったんです。海沿いに進むか近くの森に入るか迷って、どういうわけか、どう考えてもいい方向に転ぶはずがない森の方を選んで……いつもの私なら絶対にしない判断でしたね。たぶん、浮かれていたんでしょう」

「浮かれたりとか、さとりでもそういうことあるのね」

「ありますよ。私だって、いつも冷静なわけではありません。嬉しいことがあれば浮かれますし、楽しみなことがあれば落ちつきがなくなったりしますし、恥ずかしいことは恥ずかしいです。気づかないうちに、無意識のうちに、いろんな感情が表に出てきてしまうこともあります」

「そうなんだー。ふっふっふ、その点我は感情を操る力を持つからな！感情のことならばなにもかも自由自在っ！」

「え？………あ、はい。そうですね」

「え？なんでそんな微妙な反応なの？もつとたたえてもよいのだぞー！」

無表情のくせに、こころほど感情が豊かな生き物はそうは存在しない。あるいは、自分の感情に素直だと言った方がよいのかもしれない。

今だって、褒めて褒めて！と不満げにさとりに詰め寄っている。こころは感情を操っていると思っっているようだが、完全に感情が先走っていた。

「たたえてもよいのだぞー！よいのだぞーっ！」

「わかりました、わかりましたから。肩を揺するのをやめてください。ちよつと痛いです」

「ごめんなさい……」

痛い、と言った途端にしゅんっ、とこころが小さくなる。あいかわらず感情の浮き沈みが激しい。

以前こころは『ちよつとした事故が原因で自我を確立した』と言っていた。その事故が起きるより前は、おそらくこころの言う通り、自身の感情さえ完全に支配することができていたのだろう。けれど自我を得てしまったことで、こうして感情が先走るようになってしまった。

想像してみる。こころの心がその表情と同じように本当に無の色に染まっていて、完全に感情を制御しているさまを。

——それは完全なる『道具』の化身だ。一つの付喪神として、感情を操る幻想として『完成』された姿だった。

なんとなく、嫌だな、と感じた。心を読む力を持つがゆえに、あるいはともに過ごした『友達』として。

「大丈夫ですよ。自分の思いに素直な今のころさんは、とつても魅力的です。誇ってもいいです」

「……褒められたの?」

「はい、褒めてます。たたえてはいないですけどね」

「なにっ!? 褒めることとたたえることは一緒ではないのかっ!」

「どういう理論ですか、それ。仮にたたえたのだとしても、自分の思いに素直な、という時点で感情を制御していることをたたえてはいませんよ」

「なんとっ! むぐぐぐう。いつか必ずさとりに我をたたえさせてやるう……」

どことなく支離滅裂な会話、不満げなころの言葉。

けれどその実、彼女が褒められて嬉しがっていて、それに気づかれなく突飛な理論を持ち出したことは丸わかりだった。

なにせ、普段よりあからさまに声音が浮ついている。

ふいところのころのことを、動物みたいだ、と思った。なんとなく彼女の背中に、忙しく左右に動くふさふさの尻尾を幻視する。

少しだけ、冗談を言ってみたくなった。

「ふふふ、ころさん。ころさんは可愛いですね」

「う、うん? 急にどうしたの? ありがとう?」

「うちの子たちと比べても引けを取りません。そういえば、まだ『調教師』のスキルは一つも取っていないんですね。どうですか? ころさん、私のペットになってみませんか?」

「え、ペ、ペットっ!? 待つて待つて、どういうことなのだっ!」

「いえ、私、動物がとても好きなんです。ころさんはなんだかちよつとやんちゃな小動物みたいで可愛いので、お試しにどうです? 私のペットになってみませんか? 歓迎しますよ」

「まるでわけがわからんぞっ! むむっ、もしやお前はさとりの姿をしたモンスターだなっ! さとりをどこに隠したーっ!」

表情はないくせに顔を真っ赤に染めて、さとりから後ずさって薙刀

に手をかけるところがおかしくて、さとりはくすくすと笑う。

それから、こころに小さく頭を下げた。

「すみません、からかいすぎましたね。あまりにもこころさんの反応が面白くて、調子に乗ってしまいました」

「む、むうう……？　ほ、本当に本物のさとりか？　騙そうとしてたりしてない？　こう、近づいた瞬間にがぶーっ！　と来たりとか！」

「しませんしません。私は生涯嘘なんて吐いたことはありませんよ。嘘っぽいですけど本当です。ああいった冗談はつきますけど」

こころはしばらくじつとさとりを見つめた後、そろりそろりと近づいてきた。それからなぜかさとの視界の前で手をぶんぶんとさせ、その後、その手をさとの口の前に持つてくる。

「食べない？」

「……？　食べませんけど」

なんのことだ、と一瞬思いかけたが、そういえばがぶーっと来たりだとかどうだとか言っていた。モンスターならこの瞬間を狙って食べようとしてくるかもしれないと思ったのかもしれない。もしかして本気でモンスターだと疑っていたりしたのだろうか。なんとというか、アホっぽい。

変なやり取りをしたせいで足取りが止まってしまっていた。こころが横に並んだのを皮切りに、再び歩き始める。

どことなく、こころがじとつとした目線で見つめてきている気がした。

「さとりでもあんな冗談つくんだね」

「こころさんの反応が面白いからいけないんです。でも、嘘ではありませんよ。こころさんは、もしも動物だったならすぐにでもペットにしちやいたいくらいに思ってます」

「む、むう。嬉しいがればいいのか、残念がればいいのか……困るぞー」
「残念というのは、自分が動物ではなかったことですか？」

「ペットにしたいって思われてたことっ！」

こころがぶんぶんと怒り出す。それがやっぱりおかしくて、小さく笑いながらさとりは謝った。

会ったばかりの頃と比べて、ずいぶんと仲良くなったように思う。こころと会って、さとりは自分が意外と冗談好きだということを知った。というか、人をからかうのが面白いのだ。元が覺妖怪だからだろうか。こうやって相手の心を乱してみることがどうにも楽しい。

心の底から慕ってくれるペットたちや、逆にこちらを振り回してくる妹が相手では、こんなことはできない。心の読めない世界で初めてできた友人という存在が相手だからこそできることだった。

だから本当のことを言えば、こころが動物だったら少し困る。

その場合にペットにしたいことは本当だけれど、きっとその時は、今のように冗談を言えるような仲にはならなかったことだろう。

「……それにしても」

さとりは呟くと、少しその場に立ち止まった。

こころとともに森に入って歩き始めてから、しばらく経つ。

後ろを振り返れば、これまで通ってきた道がずっと続いている。前に向き直っても、同じような道が続いていた。

「この森にいることは聞いてきたんですけど、思っていたよりも広いですね」

「森だもの。しかたないしかたない」

「目的のプレイヤー以外でも、誰か他の人を見つかるだけでも結構苦労しそうです。ここはどうやら、あまりモンスターが出てこないようですし……」

魔物が出現しないならばレベル上げ以外の目的で訪れることになりそうだが、街からは柔熊のいた森の方が近かった。それにあちらの方が森としても深い。レベル上げにせよ別の目的にせよ、わざわざ遠くのこの森まで足を運ぶ必要性はあまりなさそうである。

どこか人の集まりそうな場所でもあればいいんですが、とさとりは呟いて、歩くことを再開した。

「平原を歩いている時もそうでしたが、徒歩で長い道を進むのは少しめんどろいですね。近いうちに馬でも買いますか？ この世界では値段もお手頃で、もしも乗れる技術があるなら移動には便利だと、鼻屑

にしているよろずやの店主さんが言っていました」

「でも私、馬なんて乗ったことないわ」

「大丈夫です、私が教えてあげられますから。馬のペットもうちにはいますし」

現実では動物と心を通わせることができるから、乗ることの苦労が幾分か減少する部分もある。この世界で完全に乗りこなすのならば、多少なりとも訓練が必要となるかもしれない。

ただそれでも、ある程度ならこころに教えることができるのは本当だ。

こころは「ほほおー」と関心したように息を吐くと、わずかに憧れのような色の秘められた眼でさとりを見つめた。

「さとりはやっぱりいろんなペット飼ってるのねー。いいなあ、ペット。私も欲しいわ」

「ふふっ、そうですね。でもこころさん、もしもペットを飼うのだとしても、動物だって私たちと同じ感情を持つ生物なんですから、きちんと向き合って接しないとダメですよ。たとえば、家族と接するような気持ちで、とかですね。自分たちと違う姿をしているからと言って理解を放棄することはもつてのほかです。動物たちは、そういう私たちの言動をよく見ているものですから」

「ぬう、ちよつと難しい……っ」

「いえいえ、簡単なことですよ。こころさんならきつとできます。優しいですから」

なんとなく、いつもペットたちにするように微笑んでみせる。

こころはこれまでさとりのことを何度も守ってくれていた。クマの時しかり、《恐ろしい波動》と戦った時しかり、今日に至るまでのこの世界でのさまざまなる冒険でもそうだ。ゲーム的に言えばこころが前衛、さとりが中衛という立ち位置上、役割的にこころがさとりを守ることが多いのは当然のことなのだが、そんなことはさとりにとっては関係がない。

なにせ、きつとこころはそんなゲーム的な理屈なんて知らないだろうから。ただ単に、純粹にさとりに痛い目にあってほしくなくて、

守ってくれているはずだから。

こころはそんな風に思っているさとりをしばらく見つめた後、さつと視線を逸らした。

こころのその頬は若干の赤みを帯びていた。優しいなんて言われて、照れくさかったのかもしれない。

しかしその後すぐに、どういうわけか不満そうに歯を食いしばり始めた。そのくせして無表情なので、なんとうか変である。

「……ぬぐぐぐ。もしも自分が動物だったらさとりのペットにならなってもよかったかも、なんて思いかけたのがちよつと悔しい……」
「こころさん？」

「はっ!? さ、さとりっ! 私は動物じゃないわー!」

「いえ、それはそうでしょうけど、急にどうかしました?」

「や、やー……えつと、な、なんでもない?」

「疑問形……? まあ、なんでもないならいいんですが」

こういう時、心が読めれば、なんて考えかけてしまうことがある。それでも、すぐにそれを振り払う。この世界での自分にはそんな力がないからこそ、こうしてこころと仲良くなることができたのだから。そもそも、どうせこころのことである。きっとそんなに重要でない、どことなくアホっぽいことでも考えていたに違いない。

こころはまるで言及されるのを避けるように、「そ、そういえば」と話を切り替えにかかった。

「さとりは『調教師』だったよね? わざわざ馬を買わなくても、なにか乗れるモンスターをペットにした方がよくない?」

「ふむ、なるほど。それはそうかもしれないですね」

戦闘で利用する力はほとんどが『魔術師』のものである。『斥候』には相手とのレベル差を知覚できるようになる等の便利なスキルやアビリティがあるため、近いうちに取得していきたいと思っていた。

しかし『調教師』の力はどうにも、普通に冒険しているぶんには役に立たないものが多い。基本的に、モンスターの調教や配下のモンスターのサポート関連の技ばかりなのだ。それらは当然、どれもこれも直接的にさとりを助けてくれるスキルやアビリティではない。

だから、『斥候』もある程度育て終えて、本当に余裕ができた時にも改めて手をつけてみようかと考えていた。

けれど、確かにこころの言う通りでもある。ジョブのおかげでモンスター調教が比較的簡単に行えるのに、馬を買う必要があるのか。それならばモンスターをペットにした方が『調教師』としての力も有効活用できるようになって、一石二鳥なのではないか。

さとりは右目を閉じた。それは心を読む時、それから考え込んだ時に無意識でしてしまうさとりのくせだった。

——そうね。私が乗れるくらいの大きさがあって、敵対的ではないようなモンスターに出会ったら、それをペットにしてもいいかもしれない。

ただ、そのためにはもつと『調教師』のことを理解する必要がある。ペットにしたモンスターはどのように管理するのか、この世界ではどのように扱われるのか。この世界でペットを手に入れるにしても、もう少し調べてからにしよう。

さとりはそう結論を出すと、瞼をゆっくりと開いた。

「あれ？ さとり、今、悲鳴みたいなの聞こえなかった？」

「悲鳴、ですか？」

「こころとの話を再開しようとした途端に、そんなことをこころが呟いて、立ち止まる。」

その真相を確かめるには足音が少し邪魔だった。さとりも同様に足を止め、耳を澄ましてみる。

「ああ——」

確かに聞こえてきた。甲高い、怯えているような少女の声音が。

「こころと視線を合わせ、頷き合う。」

「ここまで歩いてきたある程度整えられていた道からそれ、道なき道へと足を踏み出した。」

「こころさん、この森で薙刀は振り回せますか？」

人の手が入っていない森の中。当然、木の間隔が安定しているわけがない。かつてのクマと戦った森はそれぞれの木がとても大きかったために木々の間隔がそれなりにあったが、今回は広かったり狭かつ

たりとさまざまである。

「できるけど、ちよつと使いにくそう……だから今回は」

進行上の樹木を避け、できるだけ最短のルートを進みながら、こころはすつと懐に手を入れた。そこから見えたのは、白い花卉が描かれた緑青色の扇子。

「なるほど、わかりました。では……ころさん、準備は」

「もちろんいいわっ！」

植物に足を取られて少々走りにくいにせよ、足元が不安定であったクマのいた森ほどではない。

悲鳴の主がいる場所は近かった。

さとりも背につり下げた剣の柄に手を添えて、やがて、声が発せられた。だろろうほんの少しだけ開けた場所に出ると、その剣を抜き放つた。

三．初友達（first friend）

「大丈夫ですかっ？」

少し大きめの樹木を背に、緑髪の少女が怯えた目で前方を見つめていた。この少女が悲鳴を上げたのだろうと予想しつつ、彼女を庇うように前に立ち、その視線の先をさとりとこころは見据える。

そこにいたのは、二本の後肢で立つカエルの化け物だ。

カエルとは言っても、その色や外見の大体のイメージからさとりがそう感じただけで、一般にカエルと呼ばれる動物とは大幅に体の構造は違っている。まず全長が二メートル弱もあり、後肢だけでなく前肢も太い。肘や膝、背中からは泥色に変色した棘のようなものが無数に生えていて、だらりと口元から垂れた舌には毒々しい紫色の液体が滴っていた。

カエルが獣に近づいたというよりも、獣がカエルに近づいた。そんな印象を受ける。そういうカエルのモンスターが五匹程度、樹木を背に怯える少女を睨みつけていた。

「あ、あなたがたは……っ？」

「あなたの叫びを聞いた、ただの通りすがりです」

緑髪の少女の質問に答えながらも、さとりは鋭い目線でカエルのモンスターを観察していた。

この森に来るまでの草原ではマッドウルフなどの魔物と幾度か戦ってきているが、森の魔物と出会うのは今回が初めてである。さすがに、すぐ隣にある草原とかけ離れたレベルの強さを持っているとは思えないが、初めて戦うタイプのモンスターのため、油断はできない。さとりはこころと視線を交わすと、互いに頷き合った。今のさとりとこころであれば、これだけで軽い意思疎通は可能だった。

すなわち、近接戦闘の得意なこころが先行し、さとりは緑髪の少女の護衛を主としてできるだけ動かないでいること。

「行くよー」

手慣れた手つきで素早く扇子を一回転させると、こころは地面を蹴って五匹のカエルのもとへと突っ込んだ。それに応じ、カエルたち

もそれぞれ威嚇するように口を大きく開き、ゲロゲロと、しかしおよそカエルのものとは思えない獣のごとき鳴き声を上げた。

こころはまず、一番近い位置にいたカエルを片付けることにしたらしい。一匹目のカエルに素早く走り寄ると、そのカエルが迎撃するように繰り出した裏拳を懐に潜り込むことで回避する。そして駆けていた勢いを乗せ、カエルの腹へと扇子の突き出した。

薙刀の柄頭でこれを打っていたならばこれだけで相手を戦闘不能まで陥らせることも可能だったかもしれないが、扇子にそれほどの威力はない。けれど腹を突かれた衝撃と苦しさゆえか、攻撃を受けたカエルにわずかな隙が生じる。

こころはそこへ薙刀ではほぼ不可能な怒涛の連続攻撃を繰り出した。まるで流れるような最小限の動きで、胸元や関節、首などの急所を的確に狙い打つ。そうして最後には、苦悶に膝をついたカエルの頭部を、わずかな風の刃を纏った扇子で突き刺した。

この間、五秒にも満たないほんの数秒の出来事である。あまりにもこころとそのカエルとの距離が近すぎて巻き込みかねなかつたためか、周りのカエルのモンスターたちが助太刀を戸惑っているうちに、こころは一匹目のカエルを確実に始末してみせた。

「さて……」

まずは一匹、と言った具合だろう。今のこころの突撃はうまくいったが、二回目以降はきつとそうはいかない。今のそれはスムーズに一対一に持ち込めたからすぐに終わっただけで、四匹と同時に戦うことになれば簡単にはいかないはずだ。ただ、こころならば遅れを取ることはないだろうとも思う。

さとりも、できるだけ動かないでいる作戦ではあるものの、手出ししないつもりではない。『魔術師』であるさとりには遠距離から攻撃する手段があるのだから。

「こころさん、舌から垂れている紫色の唾液にはできるだけ触れないようにしてください」

「もちろん。見るからに毒って感じだものね」

「それから後肢の攻撃も、受け止めるよりも避けたり受け流したりと

いった対応でお願いします。この二本足で立つカエルもそうだとはわかりませんが、普通のカエルはその構造上、他の生物と比べて後肢が発達しています。用心に越したことはありません」

まずはこころが突撃して様子を見てから、さとりが軽い指示を出し、こころが、あるいは二人で一緒に実行する。二人の間ではよく行われるパターンだった。

仲間をやられた怒りからか、さきほどよりも鋭い声音で吠えるカエルのモンスターへと、こころが再び駆け出す。さとりはそれをサポートするために『魔弾』の魔法陣を描き出していく。

緑髪の少女は、息の合ったコンビネーションを見せるそんな二人を、ほんの少し輝いた瞳ときよとんとした表情で眺めていた。

カエルたちは草原の魔物と比べれば強かったが、油断さえしなければ二人の障害になるほどではなかった。大した怪我もなく殲滅を終えると、さとりは他にカエルの気配がないことを『既知探知』——レベルが上がることにより自動で覚えた『斥候』のアビリティ。一度のログイン内で倒した魔物と同種類の魔物が周囲にいないか察知する——で確認し、それをこころにも伝える。そうていから、二人はやっと息をついた。

平原を歩いていた時は視界が開けていたのでこういうことは必要なかったが、入り組んだ森の中や洞窟ではこうしてこまめに警戒していかなければ、不意打ちを食らって二人ともやられてしまうということもありえた。

相手がいくら格下であろうとも、こちらは二人しか人数がないのだ。

たとえば、油断したところに奇襲され、さとりがこころのどちらかが、あるいはどちらもが麻痺かなにかの状態異常にさせられてしまうと言ったことが想像できる。そうなれば、よほどの力の差がない限りは戦況を覆すことはかなわない。

——せめてあと一人……いえ、少なくとも二人でも仲間がいれば、いちいちこんな精神をすり減らさないでいいんだけど。

とは言え、それが難しいことをさとりは知っている。

おそらくはプレイヤーの中では妖怪の数が一番多いのだろうが、妖怪などの幻想の存在は総じて協調性というものが欠けているうえ、基本的に自分勝手である。ならば人間を仲間に、なんて考えても、人間は妖怪と違って日々の生活を生きるために忙しいため、さとりやころのように頻繁にログインできる者なんてごく少数だろう。その少数を見つけるのはさすがに骨が折れるし、そもそも妖怪である自分たちと息が合うかも仲間になつてくれるかもわからない。

そしてなにより、さとり自身が人見知りをしてしまい、初めての人と親しくなりにくいということが挙げられる。冷たく突き放すことが目的ならばいくらでも刺々しい言葉を吐けるのだが、誰かとの親しくなり方というものが、ずつと人を拒絶してきたさとりには未だによくわからなかった。

「……さて」

ぐちゃぐちゃと中身を撒き散らすカエルの死体をインベントリに入れることで軽く片付け、改めて緑髪の少女に向き直る。

こんな辺鄙な森にいたこのプレイヤーらしき少女が、さとりの探していた人物なのかどうか。

……おそらく違う、とさとりは半ば確信気味に思う。

もしもこの少女が本当に《恐ろしい波動》が使っていたものと同じシンクロシステムを自在に操れる使い手なのだとなれば、あの程度のモンスターを相手に遅れを取るはずがない。たとえさとりところどころのように二人ではなく、一人であろうともそれは変わらないはずだ。なににせよ、話しかけてみないことにはなにもわからない、か。さとりは座り込んだその少女に視線を合わせるように膝をつく、そつとその瞳を覗き込んだ。

「もう大丈夫ですよ。怪我はありませんか？」

誰かと親しくなる方法はわからなくても、誰かを安心させるためのそれは知っている。ペットたちをいたわる時と同じように優しくな声音を意識して、ありきたりな言葉でさとりは問うた。

実は内心、これで正解かどうか不安でいっぱいなのだが。

これまでずっとぽかんとした表情でさとりたちの戦いを眺めていた少女は、さとりのその声にはっとしたように顔を上げた。

「も、問題ないです！ あ、あの！ ありがとうございます！」
少女がぼつと勢いよく頭を下げ、そのサイドテールが揺れる。

なんとなくさとりは、この少女が妖怪ではないことを悟る。よしんば妖怪であつたとしても大した力は持っていないだろうと感じた。

なぜなら、もしもこの少女が力のある妖怪だとすれば、この場面では心からのお礼なんて言ってきたりはしないだろうからだ。

力に自信のある妖怪からしてみれば、よほどの理由がない限りは、他人に助けられて、こうして心配されることなんて屈辱でしかないはずだから。

「いえいえ、どういたしましてー」

さとりの代わりに、後ろに立つところが軽快に少女のお礼に答えた。

さとりはさきほど抱いた『力のある妖怪にとっては他人に助けられて、心配されることは屈辱』だという考えに対して、もちろん例外はあるが、ところどころを横目で見ると、ここはどうか自分というものが他者と比べてどうなのかということに、それほどの執着を持っていない。

「怪我がないなら、急いで駆けつけたかいましたね。よかったです。それで……あなたはこうしてこんなところ？ ここは道から少し外れているようですが……」

さとりとこころは看板が立っていた、人の歩いたような跡がある道をまっすぐに歩いてきた。しかしここは辺りを見渡してみても、草木が好き勝手に広がっているばかりで、進んで入り込むべきような場所ではない。

あるいは、こういう人の手に入っていないところでこそ見つけることのできる特別な植物やアイテムでもあるのかもしれない——とも思ったが、別段そうでもないらしい。

「いえ、その、必死で逃げていたら道から外れてしまって……正直、ここが森のどの辺かもわからないんです。途中まで一緒に逃げてた友

達ともはぐれちゃったし……」

「友達、ですか。その方もあなたと一緒に、あのカエルの魔物に追われているんですね？」

「はい。たぶん、魔物の数も私の三倍くらい多いんじゃないかなあ……怒り買うようなこといっぱいやってたし。まあ、なんだかんだで生き延びてそうだけど」

「……こころさん、どうしますか？」

どことなく不安げな少女を横目に、さとりはこころに顔を向けた。
「こころはただ目をぱちぱちと瞬かせては、首を傾げる。」

「え？ 探さないの？」

まるで探すことが当たり前のように問い返された。さとりが「探そう」と思っていることを、言わずともこころはとづくにわかっていたようだった。

なんとなくさとりは、もしかしたら、こころの中で自分という存在は『お人好し』のように映っているのかもしれない、なんて思う。

なにせそもそも、悲鳴を聞いたからと言って、すぐに助けに行こうとすること自体、妖怪の思考回路としておかしい。妖怪なんてものは自分勝手に、自分のことしか考えてないのが普通で。悲鳴なんて耳にしても「助けに行こう」となるよりも、「面白そうだから見に行こう」という反応をする者の方が多いだろう。

別に、私は『お人好し』なんかじゃないのだけど。

きつと現実でなら、心を読む力を備えてしまっている世界でなら、どこかで誰かの悲鳴が聞こえたところで、ペットたちにその様子を見に行かせるくらいだ。特に興味も持ちはしない。自分の足を動かさうとも思わない。

なにせ行っちゃって感謝なんてされるわけがなくて嫌われるだけなのだ。自分自身が嫌な気持ちになるだけ。

でも、この世界ではそれが無い。なら、人探しをしていることもあるし、助けに向かってもいいかもしれない。今回はそんな気持ちになっただけだった。

「いえ、探しますよ。こころさんがそれでいいかどうかを確認しよう

と思っただけです」

「それなら大丈夫よー。今日はさとりの人探しの手伝いに来てるんだもん。さとのりの決定には従うわ」

「ありがとうございます、こころさん」

「いえいえどういたしまして」

そんな二人の様子を、緑髪の少女は不思議そうに眺めていた。

「どうかしたんですか?」

「あ、いえ、その……戦っている時のお二人は息ぴったり、つていう感じに見えたので。その、さつきから『こころさん』なんて他人行儀な呼び方なのがちよつと気になって……」

その少女の疑問に、こころが大げさに両腕を広げて、いかにも『驚いた!』と言ったりアクションを取った。

「はっ! そういえば確かにっ! 初めて会った時からずっと同じ対応だったから気づかなかったわ! 私は呼び捨てにしてるのにつ!」
「いえ、まあ、こころさんは初めて会った時から呼び捨てでしたが」
「それはそれ、これはこれ。さとりー、さんづけなんてしなくても、呼び捨てにしてもいいんだよー」

穏やかな催促とは裏腹に、両手を広げ、『どんと来い!』とでも言いたげに胸を張るこころ。これは、ここで呼び方を変えなければいけない流れなのだろうか。

こころとはもう数か月ほどの付き合いになるし、冗談を言い合えるほどにも仲は深まったと感じていた。彼女の言う通り、確かにもう呼び捨てで呼び合っても構わない頃合いだろう。

そう思い、試しに一度だけ呼んでみようと思いを口に開きかけて、喉に言葉が詰まった。

本当に、いいのかしら。

無表情ながらに、わくわくとした感情をめいっぱい主張する天真爛漫な少女を目の前にして、どうしてか、そんな風に迷う自分があることに気がついた。

急に呼び方を変えるのが恥ずかしいから。そうやって恥ずかしがる姿を見られたくないから。そういう気持ちはもちろんある。けど

それだけじゃなくて、どこか後ろめたいような、今の自分ではそれをしてはいけないような、言いようなない感覚。

こころは自分のことをさとりにいっばい話してくれるのに、さとりはずつと隠しごとをしたままだから。

「さとりに？」

「あ、いえ……」

こころに顔を覗き込まれて、さとりはぶんぶんと首を横に振った。

もしもこころのことを呼び捨てで呼ぶことに抵抗感があるうと、こうして、こころ自身がそうされることを望んでいる。なら、やはり呼び捨てで読んであげるべきだ。

一度息を吸い込み、はく。心を落ちつけたところまでこころに向き合いい、今度こそ呼び捨てで彼女を呼ぼうとした。

「こころ、さ……い、いえ」

「うんー？」

彼女の名を口にしかけた時点で、さとりの中から後ろめたい気持ちは消えていた。しかしそれに代わり、今度は羞恥の念が、胸のうちどころか血を伝って顔の部分まで浸透し始めている。

少し、頬が熱い。もしかして、赤くなってしまうているだろうか。それが、こころにもわかってしまっているだろうか。

咄嗟にこころから視線をそらしてしまう。視界の隅で、そんな自分の様子にこころが首を傾げているのが見えた。

気づいていないのだろうか。いや、こころのことだ。気づいていて、『どうして赤くなってるんだろう？』なんて疑問に思っているかもしれない。そして彼女のことだから、直接それを聞いてきてしまうかも。それはできるだけ避けたい。

——恥ずかしいから、なんて自分の口で言うのは、なんというか……もつとこそばゆいし。

早くこの少女の名前をしっかりと呼んでみせないといけない。そう思い直し、改めて彼女に向き直り、口を開く。さらに顔に熱がこもっていくのがわかるが、そんな気恥ずかしさを無理にでも無視して、さとりは思い切ってそれを言葉にした。

呼び捨てで呼ぶことを強要して、そのせいでこんな状態にしてしまったのではないか。この少女が、そんなふう不安を感じていることが理解できた。

ふふっ、と小さく笑う。そうじゃない。本当にただ言ってみただけのこと。いろいろなことが恥ずかしすぎたばかりに頭が真っ白になってしまっただけ。

ペットたちのことは昔からずっと愛称で呼んでいる。妹も、初めて呼び始めた時からずっと呼び捨てで続けていた。だからこれまで親しくなった誰かの呼び方を変えるなんてことはしたことがなかった。いや、そもそもとして、誰かと対等に親しくなっていくこと自体が、今の自分には初経験で。

頭に血がのぼっているせいかしら。

どうしてか、今なら、どんな素直な気持ちだっけ口にしてしまえるような気がした。どんなこっ恥ずかしいことだって聞いてしまえるような気がした。

今の自分に正常な思考ができていないことは理解している。それでも、たぶん、こんな時くらいでしか言えないだろうから。

わずかに涙目になっていた目元ごと、さとりはこころの胸に顔をさらに深く埋める。

「こころさん……いえ、こころ」

「う、うん？」

「あなたに会えてよかった。あなたと会ったあの日から、毎日が本当に楽しくて……あの時会ったのがあなたじゃなかったら、こうはなれなかった。あの時会ったのがあなただったから、私はこうしてここにいます」

「あり、ありがとう？ さ、さとり？ ど、どうかしたの？」

「こころ。あなたにとって、私はいったいどういう存在なんでしょう。あなたにとって、私は、少しでもあなたが利するような存在になれているでしょうか」

「少しだけ、気になります。そんな風に締めくくって、さとりは目を閉じた。」

この気持ちを抱くことがただの傲慢だということにはわかっている。現実の世界でならば、自分は他人の心を読み取ることが出来る力がある。だからペットたちが自分を心の底から慕ってくれているのがわかるし、それを疑う余地もない。けれど、この世界ではそんなことを可能とする力は自らに備わっていない。

多くの生命にとって心を読めないことが当たり前のことであろうとも、さとりにとって、目の前にいる他人の気持ちに確信を持ってない状況というものは初めての経験だった。

相手が自分をどう思っているかがわからない。態度通りに少なからず好いてくれているのか、それともその内心では自分を嫌っているのか。いつも理解できるはずのそれが、この世界ではどうしても見えてこない。

どんなに小さなことであろうと、ほんの些細な相手の言動で不安になってしまう。この世界で絆を深めたはずの少女の胸にこうして体を預けている今でさえ、こうやって自分勝手な憂心を打ち明けることを、この少女が煩わしいと思っていないかだろうか。

こころは初め、唐突なさとりの質問に動揺していたが、なにを思ったのだろうか。しばらくすると体の力を抜き、されるがままになった。

「うーんと、その……利するだとかなんだとか、難しいことはわからない……けど」

「……けど、なんですか？」

「さとりは私にとって、『友達』……なのかな。他の誰かとこんな風に毎日遊び合ったりとかしたことないから、本当はよくわからないけど……人間たちの関係で表すなら、きつとそう」

友達。こころは確かに、そう言った。

さとりはこころの胸の中で顔を上げ、彼女の顔を見上げた。あいかわらず、感情の読めない無表情のまま。けれど、こころもさとりを見つめ返していた。

今は他人の内心を正しく悟ることはできない。そのはずだ。けれどこの純粹な桃色の瞳を通して、さとりにはどうしてか、こころが本

心からそう思ってくれていることを理解できた気がした。

友達。そうか、友達か。

私の初めてのの、友達。

心地いい響きだ。そう思いながら、さとりはもう一度この胸の中に顔を埋めた。

「ふ、ふ……ありがとう、ごさいます」

「……う？ どういたしまして？」

こころはあいかわらず頭の上にハテナマークでもついていそうな反応しかなかったが、それでもさとりは満足だった。

顔に集まった熱が収まるまではこのまま甘えさせてもらおう。こんなにも鈍感なこのろのことだ。それくらいはなにも聞かずにされるがままでいてくれるだろう。

——でもたぶん、いや、きつと。この熱が収まった頃には、今この時のことを思い返して、あまりの恥ずかしさに穴があったら入りたい気分にもなるんでしょうね。

それでもいいか、と今は思う。きつと後になったら、こんな気持ちを抱いていたことに間違いなく心底赤面することになるんだろうけれど、そんな感情は全部後々の自分に丸投げだ。

今は、今抱いているこの感情と、体中に染み渡る優しげな匂いを大事にしていきたい。

そんな風に、さとりは感じていた。

「あ……あのー……わ、私もいるんですけどー……」

なお、緑髪の少女が二人から少し離れたところで居心地が悪そうにそんなことを小さく呟いていたが、誰の耳にも届いていなかったという。

「さとりー、どうしてそんなに急いで歩くの？」

「ちよ、ちよっとそういう気分なんですっ」

あれから数十分の時間が過ぎ、現在さとりところろは、元々進んでいた少しばかり開けた道のもとに戻り、緑髪の少女を連れて森の再探索を開始していた。

二人はろくにこの森のことを調べずに、大雑把な場所だけ把握して訪れていたが、緑髪の少女はこの森の構造をほとんど把握しているという。というのも、ずいぶんと前から友達とやらとこの森に住み込んでいたらしい。

森に住み込む、なんて回答が当たり前に出てきた時点で、さとりは緑髪の少女が決して人間ではないことを理解した。だけど妖怪でも、神でもない。そうなると、残る答えは一つしかない。

「さとりー……やっぱり、まだちよつとおかしいわ。まだ熱が収まらないの？ 体調悪いなら無理しちやダメだよー」

「だ、大丈夫だから……」

後ろの方からこのころの心配する声が聞こえてきて、少しだけ申しわけなくなるが、そうではない。そうではないのだ。

——バカ！ 数十分前の私のバカ！ なんてことを思って、なんであんなことしたのよ！ バカバカバカッ！

こころがすでに平然としていることが逆に羞恥の感情を誘う。気分的には、布団の中に潜り込んで思い切り丸になりたいような気分だ。こころのことを呼び捨てで呼ぶ時とはわずかに違った恥じらいの念が、さつきからずつと頭の中を巡っている。

こころの胸の中に飛び込んで。弱音を吐いて、甘えて。

明らかに冷静さを欠いていた。熱で頭がぼんやりしていたにしても、本当に、なんて恥ずかしすぎることをやってしまったのだ、自分分は。

「その、そ、それよりっ！ えつと、その、本当にこつちで合っているんでしょか」

こころにこれ以上追求されることを避けるために、振り返って、こころの鈍感さに苦笑を浮かべていただろう緑髪の少女に問う。

いきなりのことに彼女は一瞬だけびくりと体を震わせるものの、すぐに顎に手を添えて考え込むような姿勢を取った。

「うーん……あの子のことなので、もしかしたらまだ逃げ回っているかもしれないですけど……なんとかまいて逃げ帰ってたり、一度死んで、私たちが拠点にしていたその岩場に戻ってる可能性も十分にあり

ます」

この緑髪の少女たちは今のところこの森に住んでいる。それなら、その友達とやらはもうすでに二人が拠点としている居場所に戻っているかもしれない。そういう考えのもと、ひとまずさとりとこころは緑髪の少女の案内で進んでいた。

そもそも、さとりが熱を出してこころを困らせていた段階——つまりは緑髪の少女を助けてから軽く数十分の時が経過している。普通に考えれば、すでにどうにか逃げ切っているか、あるいは撃退、その逆にやられてしまっているだろう。

そう考えていたから、『まだ逃げ回っているかもしれない』なんて答えられたことに、さとりは目を瞬かせた。

「もうあれから結構な時間が経っていますよ？ 体力的に無理がありそうな気もしますが……それに、いくらなんでもカエルの魔物の方も、そこまで必死に追いかけてまわすとは思えませんし」

「あの子は元気が一番の取り柄みたいなものだし……あのカエルの化け物の怨みも、その、いっぱい買うようなことをやってたから……まだ追いかけてるってこともありえるかなー、なんて」

最後の方は言いづらそうに目線を逸らしながらの発言だった。単純に、適当にうろついていたカエルのモンスターから逃げ回っていただけだと考えていただけに、わずかに目を見開く。

「襲われた原因に心当たりがあるんですか？」

「心当たりっていうか、なんていうか……あっちから襲いかかってきたんじゃないかって、その実あの子の方から喧嘩を売ってたっていうか……その、自業自得？ な部分もあるんですよ……」

「……いったいなにをしたんですか」

緑髪の少女が襲われていたように見えたからカエルのモンスターを退治したが、もしかしたら悪いのは逆の方だったかもしれない。

そんな感情を込めた、じとつとした目でさとりに見つめられていることに気づいた緑髪の少女は、慌ててぶんぶんと首を横に振った。

「わ、私はなにもしてないですよっ!? やめなよってちゃんと注意はしたんですっ！ でもあの子は私の話なんて全然聞かなくて、えっ

と」

「ふむ……それで、その友達はいったいあのカエルの魔物に対して、なにをしたんですか？」

「そ、そのお……はぐれてた子どものカエルを水で包み込んで、外側の表面だけを凍りづけにして閉じ込めたり……それを蹴ったりして遊んだり……」

「ええ……」

その回答には呆れざるを得ないというか、さすがのさとりも啞然とするしかなかった。そんなことをして、あのカエルの魔物たちの怒りを買わないわけがないだろう。

立ち止まったさとりに対して、見捨てられるかも、なんて不安でも抱いたのだろうか。緑髪の少女はさらに慌てた風に、今度は両手をぶんぶん横に振って弁明を図っていた。

「ほ、本当は優しい子なんですっ！……たぶん。わ、私のこともよく守ってくれるし、遊ぶ時はいつも誘ってくれるしっ！……いや、まあ、大抵振り回されるだけというか、主にトラブルはあの子の方から持ってくるんだけど……と、とにかく！言うほど悪い子じゃないのは確かで、そのっ！」

「はあ……わかりましたよ。別に、初めから見捨てようだなんて思ってません。乗りかかった船ですからね。それに、妖精のやることなんてしよせん善悪のわからない子どものイタズラ程度です。人間が恐怖に苦しむさまをスパイスに、それを食している妖怪なんかよりも数倍はマシですよ」

さとりのペットたるお隣こと火炎車だって、葬式の最中にその死体を奪うことを本来の生業としているような妖怪だ。カエルだとかなんだとか、自分とは明らかに違う生き物を相手にするだけ、妖精の方がまだマシだと言える。

まあ、そういう動物たちをペットとして飼っているさとりからしてみれば、あまりいい気分にはなれないけれど。

「あ、ありがとうございますっ……って、あれ？ 私たちが妖精だなんて、私言いましたっけ……？」

「そんなこと、あなたを見ていれば簡単にわかりますよ」

妖精とは、この幻想郷でもっとも数が多い種族だ。それについて妖怪が多く、一番少ないのが人間である。

一番多いだけあって、地底にも妖精はいる。大抵はゾンビのフリをして遊んでおり、屋敷の中でもたまに見かけたりすることもあった。あちらがこちらを見つけると一目散に逃げていくが。

妖精には力がなく、一般の妖精となると大人の男性でも軽く勝てる程度である。総じてイタズラ好きであり、人間が見ていない隙に持ち物を盗んだり、木の上からつららを落としたり、という被害があることが地底に住むさとの耳にもよく届く。

あいにく、半ば妖怪化したペットたちがそこら中を徘徊している地霊殿から勝手になかがなくなっていたり、地底でもっとも嫌われ者たる自分がイタズラされたりしたことなんて、一度足りともないけれど。

「そ、そうなんですかつ！　すごいですねー！」

「すごくはないとは思いますが……こころさ、いえ、こころは気づいてました？」

「全然よ？　ふっふっふ、自慢ではないが、我には人間も妖怪も妖精も見分けがつかんのだっ！　みな、おんなじように見えるー！」

「さすがにこころはもう少し世間について学んだ方がいいと思います」

緑髪の少女からなぜか尊敬するような目線を向けられたり、こころに軽い見分け方を聞かれたりしながら、道を進んでいった。

しばらくすると前方に少しだけ開けた場所があり、その中央に大きな岩が刺さっているものが見えてくる。さとりが指で示して「あれがそうですか？」と緑髪の少女に確認すると、彼女はこくりと頷いた。

「こころさ……まだ呼び慣れないですね。こころ、一応、いつでも戦闘できるように準備はしておいてください。目をつけられるようなことをやっていたのなら、あの中でカエルの魔物たちが待ち伏せていた、なんてこともあるかもしれません」

「む、わかったわ。それから、呼び慣れないなら無理しなくてもいいの

よ?」

「無理はしてませんよ。ただ……あれだけ恥ずかしい思いをしておいて、なにも変わらないでいるっていうのは、ちょっと」

また頬が熱くなり始めたので、思考をかき消すように首を横に振った。それから今度は緑髪の少女に向き直る。

「あなたは背後の警戒をしてくださると助かります。もしもなにか出たら、叫ぶなりなんなりして私かここに知らせてください。すぐに対処しますから」

「わ、わかりましたっ」

さとりも背につり下げていた鞆から剣を引き抜くと、『既知探知』を使いながら歩みを再開した。

鬼が出るか蛇が出るか——いや、蛙カエルが出るか蛇へびが出るか。

警戒を重ねつつ、三人は巨大な岩のあるフロアへと足を踏み入れた。

四・冷凍剣士 (ice swordsman)

ざあざあ、と木々が風で擦れる音がさとりの耳に届く。そんな自然の音が目立って聞こえてしまうくらいには、この場にさとりたち以外の生き物の気配がなかった。

岩の根本辺りに、近づかなければわからない、中に入ることができない穴があることは事前に聞いている。

難なくそこまでたどりつくくと、意を決してその中に進んでいく。

「……いませんね」

そこに広がっていたのはほんの八畳ほどの空間と土の匂い。辺りが岩や土に囲まれているために薄暗く、昼間の今でさえ中が見えづらいが、中央に両手で抱えられる程度の大きさの丸い石がある以外は、どれだけ目を凝らしてもめばしいものは見当たらない。三人以外の誰かの気配もなかった。

警戒を解き、きよろきよろと辺りを見渡すさとりとこころの合間を、緑髪の少女が抜けていく。そうしてこの小さな空洞の中心に不自然に置いてあった丸い石の前に立つと、思い切りそれを蹴った。

鈍い音がこだました後に、ぽうつ、と石に淡い黄緑色の光が灯る。そのおかげで空洞内をはつきりと見渡せるようになった。

周囲を石に囲まれ、床は整えられた土でできた、強いて言うなれば部屋の隅に寝床らしきものが二つあるだけの空間。やはり、入ってきた時に感じたように誰もいない。

「その石は……う」

『感受光石』って言うみたいです。衝撃を与えると、しばらくの間、こうやって光源になってくれるんです」

そういう鉱石もあるのか、と感心する。持ち運ぶなら松明やランタンの方が安定するし、武器や防具の素材にもあまりならなそうだが、インテリアとしては少々神秘的で面白い。

緑髪の少女はその明かりをもとに辺りを見渡すが、さとりが確認したことと同じように、この空洞に誰もいないことを認識すると、がりつと肩を落とした。

「でも、やっぱりあの子は帰ってきてないみたい……まだ逃げてるのかな。どこ行っちゃったのかなあ」

「ここまで来たんです。見つかるまで探しますよ。とりあえず、いつまでもこの中にいると襲われた時に危ないですので、外に出まじょうか」

あまりここには魔物が近づかないとは聞いているが、今はこの緑髪の少女たちはカエルの魔物たちに目をつけられている最中だ。イレギュラーが起こったとしても不思議ではない。そうなった場合、出入り口が狭く、一つしかないこの空洞にいることは非常にまずい。

三人が外に出ると、爛々と輝く日差しと緑の匂いが出迎えてくれた。心地いい空気をこの身で感じるものの、反対に、緑髪の少女の雰囲気は少しどんよりとしている。

「……元氣出してください。あなたがそんな風になっていると、私たちも落ち込んでしまいます」

「す、すみません……でも、もうあの子がいる場所に私には心当たりがなくて……もうこの森を片っ端からさまようくらいしかなくて」

そんなことにさとりたちを突き合わせるのには申しわけない、とそんなことを彼女は思っているようだ。

妖精も通常は妖怪と同じように大概自分勝手なものだが、この少女はそういうわけでもなさそうだった。

「構いませんよ。私もどうせ人を探してこの森に来たんです。もしもあなたに出会わなくても、今頃もその人を探して森をさまよい続けてたでしょう」

「あなたも……う？」

もはやこの緑髪の少女がさとりの探している、シンクロシステムを自在に扱える使い手ではないことは間違いない。だとすれば、仮にここでこの少女と別れたのだとしても、さとりはここを連れて来た他の誰かを探して森の奥へと進むだろう。

緑髪の少女はさとりの返答にほっと息を吐いた後、思い出したようにぱちぱちと目を瞬かせた。そして、もしかして、というような思いが、第三の目がなくともなんとなく垣間見えた。

「えっと、あの、その……それってどんな——」

「——さとりっ！ 上っ！」

こころの咄嗟の声に、さとりは弾かれたように顔を上げた。そうして視界に入ってきたのは、空を埋め尽くすほどの数を持った尖ったつらら。

「わ、わわあっ?!」

『シールド
円盾』

すぐ近くにいた緑髪の少女を引き寄せ、自然落下を越える勢いで落ちてくるつららを、さとりは瞬時に構築した半透明の白い円盾で防いだ。

これまでのレベルアップぶんのポイントはほとんど『魔術』につき込んできている。たかが速度があるだけの氷の塊を防ぐ程度は造作もなかった。

ばきばきっ、と盾に衝突したつららは碎け散り、ぐさぐさっ、と残りのそれが地面に突き刺さる。つらら自体の落下速度が速かった関係上で一瞬しか見えなかったが、その尖り具合はまるでナイフのようだった。

辺りを見渡し、襲撃者を探すのと一緒にこころが無事かどうかも確認する。どうやら彼女はいち早くこの場から飛び退いていたようで、つららが刺さった範囲からは少し離れたところで、同じくこちらを窺ってきていた。

こっちは大丈夫。頷くことでこころにそのことを伝えると、彼女もこくりと頷き返してくれた。さとりは剣を、こころは薙刀を構え、未だ姿が見えない襲撃者を警戒する。

「襲撃です。カエルたちに見つかったのかもしれませんが。あなたはあの穴の中へ」

「は、はいっ！ って、あれ？ このつらら……」

足元に刺さっていたつららを見て、緑髪の少女は足を止めて困惑に顔を歪めた。どうしたのだろう。

また全体攻撃が来ても彼女を守り切れるとは限らない。さとりは少々焦り気味に言葉を続けた。

さとりは一度地面を転がった後、その勢いを利用してすぐに起き上がる。そして体を反転させ、さきほどまで自身がいた場所を見据えた。

そこには、その瞳に敵意をたぎらせる一人の少女が立っている。身長は歳が一〇にも届いていないんじゃないかというくらいに低く、髪は頭の後ろに大きな青いリボンを結んだ、薄い水色のセミショートヘア。髪よりも青い瞳をたたえた顔は童顔ながら強い意志のようなものを感じさせた。

着ているものは急所を軽く守る程度の革の装甲をつけた青いワンピースで、その手には白い冷気を放つ水晶の剣を握っている。

そこまで観察し、ちらり、ときとりは彼女の足元に視線を送った。それはおそらく少女の剣が地面を切り裂いた結果によるもの。彼女がその剣で傷つけた場所は、刃による跡が残っていると同時に、傷跡の表面が氷によって固まっていた。

氷を操ることのできる、装備からしてスピード重視の剣士と言ったところか。つららを落としてきたことから、遠距離攻撃にも通じている。さとりのように剣を握っただけの魔術師ではなく、おそらく、本物の魔法剣士。

「なるほど……襲撃者は魔物ではなく、プレイヤーでしたか」

《恐ろしい波動》の時も初めは不意打ちで魔法を撃たれた記憶がある。まさかとは思っていたが、悪い予想が当たってしまったようだ。

この少女もプレイヤーキラーだろうか。だとしてもとりあえずは、彼女の攻撃からは《恐ろしい波動》ほどの脅威は感じられない。

だからと言って完全に冷静に対応できるわけではないというか、あれは完全に規格外だった。けれど、かつて相對したそれよりも弱いだろうという事実は幾分かさとりの心に余裕をもたらしてくれる。ふう、と小さく息を吐くと、剣を握る手に力を込め直した。

氷を操る少女は斬ったものが地面だけだったことをその目で確かめるとすぐに顔を上げ、鋭い目線でさとりを睨みつけてきた。

「お前え、大ちゃんになにをしたあ！」

水晶の剣の切っ先がさとりへと向けられる。さとりはひるまず、た

だ、半眼で彼女を見つめたまま。

「なにをもなにも、聞きたいのはこちら。あなたは何者？　なぜ私たちに攻撃を？」

「寄ってたかって大ちゃんをいじめてたくせに、なにを今更っ！　あたいはお前たちを許さない！　二人まとめてこのあたいがぶっ倒してやる！」

「話は無駄、と」

大ちゃん、というのがなにを指すのかはわからない。もしかしたら、カエルのうちのどれか一つの個体が、あるいはカエル自体の総称を大ちゃんとしてこの少女が呼んでいるのかもしれない。それをさとりたちがいじめた、と。

なんでもいい。この会話でわかった重要なことはただ一つだけだ。すなわち、この少女が敵であるということ。

「あくまで私たちを殺すつもりなのね。いいでしょう、受けて立ってあげる」

「受けて立っても立たなくても、どっちだって関係ないわ！　さあ、このあたいの力で凍りつけえ！　おりやあああああっ！」

少女がさとりに向けていた剣を両手で思い切り地面に突き刺すと、ばきんっ、と刀身の触れた地面が氷面と化した。

そして次の瞬間には、その剣の先端が中心として、まるで地を這うがごとく一気に大地が凍りつき始める。

「自分を中心に、足場をすべて……」

これでは近づくことができない。そして、このままここに立っているのは足元から氷に侵食されてしまうだろう。

さとりはすぐに後ろへ下がると、一番近くにあった木に目をつけた。跳び上がり、乗っても大丈夫そうな木の枝の上に足をつく。

それでも氷は、木の根元まで広がってきた氷面は、さらにはその樹木の幹さえも凍らせてのぼってきた。このままではこの氷に飲み込まれてしまうか、この場を大きく離れなければならなくなってしまいうだろう。

あの空洞の中には緑髪の少女がいる。こころと二人だけの時なら

ばともかく、今はここを離れるわけにはいかない。

少し離れたところでさとりと同様に木にのぼっていたところと視線を交わす。それだけでやるべきことは決まり、互いに頷き合った。

『魔弾』！』

『真空斬』！ 『仮面舞踏』エボリューションっ！』

あくまで氷が広がる中心にあるのは少女が地面に突き刺した水晶の剣。ならば、あれが抜かれればこの侵食は間違いなく止まる。

さとりとこころは地面に剣を刺したまま動かない少女へと、まったく同時になるように遠距離攻撃を仕掛けた。さとりは速度を重視した魔力の弾丸、こころは見えない真空の斬撃。

並の相手ならばこれだけで終わるだろう。見えるさとりの攻撃に注意を取られ、何本もの樹木を容易く切り裂く不可視の斬撃に引き裂かれる。《恐ろしい波動》ほどではないだろうこの少女が相手では、さてどうなるか。

彼女は——その二つの攻撃を、微動だにせず受けた。

「ぐ、うう、ううあああああ！」

「なっ!？」

「え!？」

絶叫を上げながらも、決して動かない。右足の太ももに魔弾を受けて膝をつき、左肩から脇腹にかけて大きく引き裂かれ、大量の血を流そうとも、剣を地面に突き刺したまま氷を広がらせることをやめようとしない。

こころの真空の斬撃はともかく、さとりの放った攻撃は見えていたはずだ。つまりこの少女は、受ければ決して少なくないダメージを負うだろうことをわかっていて、受けることを覚悟して、避けなかった。驚愕にほんの数秒だけ動きを止めてしまう。だが、それは氷が木の上に至るまでのぼってくるのにじゆうぶんな時間だ。

まずい。すぐに次の木に移動しないと……でも、これ以上離れたら正確に攻撃することが難しくなる。

そして瞬時にさとりはこれが彼女の狙いだっただとも悟る。たとえばどれだけの傷を負おうとも、その場を離れない。氷を広がらせ続

ける。なにがあろうとも、必ず相手を追い払う。

絶対にぶつ倒してやる、なんて息巻いていた割に、やることはそれか。

——どうする？ 二択だ。傷を負った相手にトドメを刺すために突っ込むか、このままこの場を離れるか。前者を選んで仕留め切れなければ、氷の侵食に飲み込まれる。後者を選べば緑髪の少女を見捨てることになる。

迷っている時間はない。すぐ足元まで氷は迫っている。

さとりは苦々しく顔をしかめつつ、けれど体を前へと倒しながら杖を蹴った。

「さとりっー！」

「わかつてます！ このまま空中から決めます！」

あの凍りついた地面に着地すれば、足元から凍らされて終わりだ。だとすれば、それよりも先にすでに瀕死の少女を仕留めるしかない。

同じくこちらも相手の少女へと飛び出していた。互いに声を掛け合い、さきほどの焼き直し。さとりはもう一度「魔弾」の魔法陣を構築し、こころは薙刀を大きく振りかぶる。

氷を操る少女は、そんなさとりとこころを見据え、これを受けたら終わりのために撃退しようと思ったのか、剣を抜き放とうとしていた。だが、まともに受けた『魔弾』のせいで膝をつき、『真空斬』のせいで大きく傷を負っている体が行うその動作はあまりに緩慢だ。

これならいける——そう確信し、こころとともにトドメの一撃を放とうとした直後。

「やめてくださいっー！」

「なっ、どうしてー！」

「わあ!?!」

氷を操る少女を庇うように、緑髪の少女が躍り出てきた。さとりもこころも、さすがにそれは予想の範囲外だった。

すでに撃つ準備が完了していた魔法陣を、さとりは慌てて明後日の方向へとそらす。こころもすでに振り下ろし始めていた薙刀から手を離し、手から離れた薙刀は見当違いの方へと飛んでいった。

その後、空中で「魔弾」を撃った反動でさとりの体が反対方向に押しされ、そのせいで当たる軌道になかったはずのこのころと衝突する。二人してもみくちゃになりながら、まったく受け身の取れない体勢で地面に激突した。

「いつ、つぁ……！」

「む、ぐぐぐう……！」

ごろごろとぶざまに凍った地面を転がる。痛みを感じながらもすぐに立ち上がろうとするが、少し、頭でも打つただろうか。すぐにぐらりと視界が揺れては足元を滑らせ、この場に倒れてしまう。

それでもさとりは再度起き上がろうとしつつ、ぱつ、と氷を操る少女と、それをかばった緑髪の少女へと視線を向けた。

「く、う……いきなり、なにをするんですっ！ 危ないじゃないですか！ それも、あと少しでその襲撃者を倒せたというところで……！」

さとりが声を荒げると、緑髪の少女がぎゅつと目を閉じて怯みつつ「それは……」と答えようとする。

けれどそんな彼女を遮って、氷を操る少女が前に出てくる。その手には、大地から引きぬかれた水晶の剣。それを、起き上がろうとしているさとりとこのころに突きつけてくる。

「はぁ、はぁ……！ よくやった大ちゃん！ これでこの二人を倒すことができるわー！」

「くっ……これじゃ……！」

早く、とりあえず距離を取らなければ。そうは思うものの、視界が安定しない。こんな状態では凍った地面に立つことは絶対になかない。

「このころは？ このころはどうなった？ すぐ近くに倒れたはずのこのころに目を向ける。」

「さ、とり。こ、これ……抜けないい」

このころはさとりとは違って頭を打ったわけではなさそうだが、違う問題が発生していた。このころとぶつかった時に手放してしまっただろうさとりの剣が、このころの服の裾を地面に縫いつけている。

普段なら比較的簡単に対処できただろうそれも、不用意な力を少し

でも入れれば支えにした部分が滑ってしまう凍った地面のもとでは、瞬間的には非常に対処が難しい。剣を抜こうとしてもそもそも寝たままでは力が入らず、起き上がろうとしても、縫いつけられた不安定な状況からは、この氷面に立つことはできない。服を破ってしまおうにも、それだけの力を入れようとすれば支えにした部分を滑らせてしまう。

絶体絶命、というやつか。手加減はしなかった、油断はなかった。最初は確かに押していた。こうなった原因はただ単に、緑髪の少女の登場という不確定要素。

——せめてあと一人……いえ、少なくとも二人でも仲間がいれば、いちいちこんなに精神をすり減らさないでいいんだけど。

今日、一度だけ思ったことが頭をよぎる。そう、さとりとこのころの二人だけでは、こういう不祥事が起これば、格下だっただろう相手にもこんなに簡単にやられてしまう。あと二人でも仲間がいれば、きつともつと別の結果になっていたはずだというのに。

悔しげに顔を歪めるさとりを見下ろし、氷を操る少女は、この勝負はもらったと言わんばかりに片頬に笑みを浮かべていた。

そして、その手に持っていた水晶の剣を振りかぶり——。

「もうっ！ チルノちゃんももうやめてよおおおおおお！」

後ろから思い切り緑髪の少女に頭をぶん殴られ。

顔面から凍った地面に激突し。

ぷぎやつ、という小さな悲鳴とともに、ぴくりとも動かなくなった。

「……………あ、あれ？」

元々この氷を操る少女はさとりとこのころの攻撃をまともに受けたせいでとてつもない重傷を負っていた。そこから全力で殴られて顔を硬い面に打ちつけようものなら、それはまあ、死亡扱いになっても不思議ではないだろう。

ここまで来て、ようやくとさとりはすべての事情を理解していた。いや、遅すぎると言えばその通りなのだが、さとりからしてみれば突然攻撃されたのだから、氷を操る少女がプレイヤーキラーだと錯覚してもしかたがない。

きつとこの緑髪の少女が氷を操る少女が言っていた『大ちゃん』であり、氷を操る少女——『チルノちゃん』こそが、緑髪の少女が探していた友達なのだ。

すべては勘違いが招いたこと。だから、こうしてチルノちゃんとやらが友達によつてトドメの一撃を加えられ、死体オブジェクトになつてしまったことも、しかたがない……のかもしれない。

「……はあ。『大ちゃん』さん、どうせそのチルノさんはまたすぐ現れるでしょうし、その時はきちんと私たちが敵ではないことを説明してくださいね」

「わ、わかりました……そ、その、本当にごめんなさい……」

「構いませんよ。そんなことより、こころさん……じゃなくて、こころを動けなくしている私の剣を抜いてきてもらえますか？ 私はいくら動けそうもないので」

「りよ、了解ですっ!」

彼女がこころを助けに行くのを見て、もう一度、さとりは二人に聞こえないようにため息を吐いた。

「ちゃんと探してる友達の特徴、聞いておけばよかったわ」

ごろんと半回転して、仰向けになる。さつきまでは体の前面が冷たかったが、当然、今度は背中が冷えてきた。

ちよつと気持ちがいい。しばらくは、このまま横になっているとしよう。

「なーんだあ、あたいはてつきり大ちゃんがこの二人に『からあげ』でもされてるか」と

「そんなわけないでしょ! もう、さとりさんたちは私の恩人なのに……チルノちゃんはいつともそうやって先走つて!」

「うー、最近の大ちゃんは説教ばっか……そんなんじや口うるさい墓場の番人みたくなつちやうよ!」

「わけのわからないことを言つてないで、ちゃんと謝つて! チルノちゃんのことだつて一緒に探してくれたんだから!」

軽くスルーがされているが、『からあげ』ではなく『かつあげ』では

ないだろうか。呆れた目線で、さとりは二人を眺めている。

さとりはすでに動けるようになり、ここも自由を取り戻している。リスポンしたのか、数分もすればチルノはさとりたちのもとへ戻ってきた。そうしてまた勝負を挑もうとしてきたのだが、そこで緑髪の少女が乱入。チルノを羽交い締めにしてから事情を説明し、今に至る。

すでに地面は溶けている。ただし、緑髪の少女と言いつている新しいチルノと、さとりの足元に倒れている古い死体チルノがそれぞれ存在するという奇妙な状況ではある。

「別に、謝罪だとかはしなくてもいいですよ。私たちが勘違いであなたに大怪我を負わせてしまいましたからね。トドメを刺したのは、私たちではないですが」

「そうだよ！ 大ちゃんのせいでぴちゅーんってしちやっただから、大ちゃんこそ反省するべきだよ！」

「そ、それは私も悪かったけど……元はと言えばチルノちゃんが話も聞かずに勝手に勘違いして攻撃したせいだよ！ そもそも最初のつらら落として完全に私も範囲内だったじゃない！ さとりさんたちが勘違いしちゃうのも無理ないわ！ さとりさんが守ってくれなかつたら、本当に危なかつたんだからあ！」

不毛な言い合いは続く。仲がいいほど喧嘩する、というよく聞く言葉は、こういうことを指すのだろうか。喧嘩と言えるかは微妙だが、なんだかんだ言って確かに仲はよさそうだ。

そういえば、こころとは喧嘩したことがない。なんとはなしに、こころに目線を向けてみる。言い合う緑髪の少女とチルノの二人を見て「どうしよう!？」と言わんばかりに、あわあわとしている彼女を。

……なんとなく、この少女とはきつとこれからも喧嘩なんてすることはないんだろうな、と感じた。

とりあえず、そろそろ二人の言い合いを止めなければならぬ頃合いだろう。でないところろが可哀想だ。

「はいはい、そこまです。今回は勝手に勘違いしたチルノさんも悪いですし、うまくチルノさんを止められなかった『大ちゃん』さんも

悪いですし、迷いなく迎撃しようとした私たちも悪いです。ですから全員おあいごとということで、この話は終わりにしましょう」

「うー……さとりさんがそう言うなら」

「なに偉そうに仕切ってるのよー。あたいの方が強かったのに」

「私が邪魔しなきゃチルノちゃん負けてたでしょ！ 言い返さないの！」

言い合いを止めたはずなのに、また始まろうとしている。激昂する緑髪の少女を「どうどう」と落ちつかせ、さとりはチルノに向き直った。

「あなたも、私たちのことをどう思おうが構わないけれど、あまり『大ちゃん』さんを責めたりはしないように。この子は本当に、ずっとあなたのことを心配していたんですよ」

「むむう……大ちゃんは心配性だからなー。わかったわよー……」

ようやくチルノがおとなしくなる。これでようやく、まともな話ができる。

ふう、と一息ついたところで、しかし今度はこころが大声を上げました。

「すごいー！ すごいわさとり！ あんなに口喧嘩してた二人をこうもあっさりっ！」

「……ここは動物園ですか」

思わずそんなことを口にしてしまったことはしかたがない。動物園は、どちらかと言えば現実でのさとりの家の方だけけれど。

なんのこと？ とこころが首を傾げていたが、なんでもありません、とさとりは首を横に振った。

「とりあえず、これで一件落着と言ったところですかね。このチルノさんが、『大ちゃん』さんのお友達で間違いないんでしょう？」

「あ、はい！ それから、えっと、私のことはさん付けしてくださいませんか。結構ですよ。チルノちゃんみたいに、気軽に大ちゃんと」

「……あなたは私がこころさ、いえ、こころのことを呼び捨てで呼ぶ過程を見ていましたよね。そのうえでちゃん付けしろと申しますか」

「えっ!? いや、そのっ……ごめんさっ！」

ちよつと冗談半分にからかつてみただけなのだが、本気で頭を下げて謝られてしまった。さとりは内心少しだけ慌てつつ、ペットにするみたいに、彼女の頭を撫でてみた。

「ふふっ、冗談ですよ。では、あなたの言う通り、大ちゃん、と。そう呼ばせていただいてもよろしいですか？」

こころとは違って、この緑髪の少女とはまだ出会ったばかりだ。そもそもとして呼び方が確定していなかったのだから、別にどんなものでも構いやしない。

さとりの提案に、少女は撫でられる頭の感触に頬を緩ませながらも「はいっ！」と心よく頷く。なんとなく、人懐っこい犬みたいな印象を受けた。

「それでその、私を助けていただいたうえでチルノちゃんを探すことまで手伝ってもらって……なんとお礼を言ったらいいか……」

「構いませんよ。これもなにかの縁なのかもしれない。それに、私たちも人探しのついででしたから」

「あ、その人探しの件なんですけど——」

——げこおっ！ と。大ちゃんがなにかを言いかけた瞬間、そんな鳴き声がそう遠くない木々の奥から聞こえてきた。

それも一つや二つではない。三つや四つでもない。数え切れないくらい、それこそ二〇は軽く超えているだろうほどの鳴き声の数々。

……なんとなく、嫌な予感がする。というかなんとなくでも予感でもなんでもない。確実に嫌なことだ。

「……チルノさん、一つ聞いてもいいですか？」

「なに？」

「あなたを追っていたという大量のカエルの魔物たちは、いったいどこへ行ったんでしょうか」

「とりあえず全員適当に凍らせておいたけど。あたにかかればそのくらい楽勝ね！」

「それは、どの辺りにでしょうか」

「あっち」

と、チルノの指差す先は、大量の鳴き声がこだまする方向。

「ち、チルノちゃんんんんんん！」

「なっ、なにになにつ!? いきなりどうしたの大ちゃんっ!?」

また言い合いを始める二人を見て、はあぁー、ときとりはこれまで一番大きなため息を吐いた。間違いなくそのカエルたちは溶けて元に戻っている。

チルノの誤解を解いて終わりかと思っていたら、まだ厄介事は残っていた。大ちゃんの様子から察するに、おそらくはいつもチルノのこういうところに苦勞をかけさせられてきたのだろう。なんというか、心中お察しします、と言った具合だ。

それに今は、さとりやこころも巻き込まれているわけだけけれど。

「こんな数、まともに相手してられません。こころ、大ちゃん、チルノさん。さっさと逃げますよ」

「がってんしうちだぜ！」

「わ、わかりましたっ！ ほら、チルノちゃんも行くよ！」

「ふんっ、このくらいあたいの手にかかれば——」

「いいから行くの！」

確かにさきほどチルノが行った全方位への氷結ならばまとめて凍らせられるかもしれないが、おそらく、鳴き声に呼応してさらにカエルの魔物は集まってきている。さすがにそれだけの数を一気にには厳しいだろう。

というかそもそも今はチルノだけではなくてさとり自身やこころ、大ちゃんもいるので、あの全方位凍結はこちらも被害を負ってしまふ。やられたらこっちの方が困る。

「乗りかかった船ではありませんが……ボロ船どころか、不運艦でしたか」

さとりはそんなことを呟きながら、他の三人とともに鳴き声とは反対方向へとの森の中へと駆け出した。

五・ 混迷狂逸 (w a v e r i n s a n i t y)

人の歩いた跡のある道を進んでカエルの魔物たちを振り切れるわけがなく、さとりたち四人は、とにかくカエルの魔物と遭遇しないように鳴き声のしない方へと足を進めて行った。

とは言っても、鳴き声がしないからと言って、その先になにもいないとは限らない。当然、なんの発声もしていない魔物もうろついている。定期的にさとりが『既知探知』を行うことで多少は事前に戦闘を回避することができていたが、カエルの魔物にもいくらか種類がいたらしく、『既知探知』に引つかからないカエルの魔物と出くわしてしまうことが何度かあった。

そのたびにその魔物が「獲物を見つけた！」と言わんばかりに大きく鳴くものだから、すぐに倒しては、囲まれないようにするためにまた移動を開始していた。この世界に初めて来た頃、猿に襲われた時と同じパターンだ。

ただ、初めは新手の魔物と遭遇してしまうことが多かったが、逆にそのおかげで『既知探知』での探知対象が増えるにつれて、遭遇数は減少していった。

もはやどれだけ逃げ続けたかはわからない。少なくとも、一〇分以上は道なき道をうろちよろし続けてきただろう。

「……もう声はしないわね。探知にも引つかかりませんし、どうにか逃げ切れたみたいです」

これまでずっと森のそこから鳴き声が聞こえたり、唐突に魔物と遭遇したり、さとのりの探知に複数の魔物が引つかかったりということが多く、休める時間がなかった。さとのりの逃げ切れたというセリフと事実には、さとりを含む全員がほっと息を吐き出した。

「た、大変だった……」

無表情のまま、こころは額の汗を拭うようなしぐさを取る。カエルと遭遇した場合は早々にそれを倒さなければ次のカエルの魔物が集まってくる危険性があったため、こころは狭い森の中で、扱いにくいと言っていた薙刀を使って積極的に敵を倒してくれていた。

この四人であれば、こころの薙刀による一撃が一番攻撃力が高い。避けられさえしなければカエルの魔物をほぼ一撃で仕留められる。この森ではできる場所が限定されるが、振り回したりと広範囲へ攻撃すれば複数匹へ一気に大ダメージを食らわせることも可能だ。

こころが先行し、さとりがそんな彼女の補助。チルノは勝手に遊撃隊として動いたり、大ちゃんの護衛をしたり。大ちゃんは……応援してくれたり。連携を取れているかはともかく、即席のパーティとしてはじゅうぶんに機能していると言えた。

「お疲れさまです、こころ。チルノさんや大ちゃんも、お疲れさまです」

「はあ、はあ……ふ、ふんっ、あたいかかればこの程度、はあ、造作も、ないわねっ！」

「チルノちゃん、無理に意地はらなくてもいいんだよ……」

このパーティの中で一番動いていたのはこころだが、次に敵をよく倒していたのはチルノだ。カエルの魔物を見つけるたびに雄叫びを上げ——そのせいでカエルの魔物が集まってきたこともあり、大ちゃんにはたかれたこともあったが——、敵に猛突進をしかけたり手加減なしの水属性魔法を繰り出したりしていた。

チルノの一撃はこころの薙刀ほどの威力はないが、彼女の持つ水晶の剣は普通の剣よりも非常に軽いらしく、リーチに見合わない怒涛の連続攻撃が目につく。しかも見ていた限り少し切っ先をかすらせるだけでも、傷つけた箇所を凍らせることで徐々に相手の動きを鈍くすることができるらしい。さとりとこころと戦っていた時は全方位への凍結しか行わなかったが、本来の彼女は、近距離だろうが遠距離だろうが関係なく状態異常付加の攻撃を立て続けに繰り出すことで、相手を弱体化させつつ休める暇も与えず倒し切るスタイルなのだろう。

「ふう……」

さとりたち四人は敵がもういないということで、各々消耗した体力の回復に務めていた。さとりは木の幹を背に腰を下ろし、こころもまた、樹木へ肩を預けるようにして座り込んでいる。チルノは今いる少し開けた場所の真ん中で大の字で寝転がり、大ちゃんはそのそばであ

ひる座りをしていた。

ここに来た時はもう敵の気配はなくなっていたとしても、時間が経てばどうなのかはわからない。さとりは他の三人には心労をかけないように、休みつつもこつそり『既知探知』を使用して魔物がいないかをチェックし続けた。幸い、荒れた息や体力が元に戻るまで、この近くにカエルの魔物が近づいてくることはなく、やがては全員が問題なく動き回れるくらいには回復する。

「……それにしても、ここはいいじゃないどこなんでしょうか」

敵のいない方へいない方へと、やたらめったら進んでいったため、もはや森のどの辺りにいるのかがまったくわからない。どうしたものか。

嘆息するさとりに見えるように、おずおずと大ちゃんが手を上げた。

「あの、私たちはよくこの森で活動してるので、ここがどの辺なのかはわかるかもしれませんが」

「本当ですかっ？ その割に初めに会った時は迷っていたような気がしましたけど」

「あ、あの時は見覚えがないところだったので……でもこの辺りなら……えっと、あつちにあれがあるはずだから……あつ。ここ、森の入り口のすぐ近くですね」

どうやら自然と森を出ようとしてしまっていたらしい。ただ、同時に納得もする。カエルは森に出現する魔物なのだから、森の外側へと進んでいけば、やがてこうしていなくなるのも当然だったということだ。

大ちゃんに、森の入り口はどの方向にあるかと問いかけると、少し「うーん」と唸った後に、「あつちです」と指差してくれた。これが初めて会ったばかりのプレイヤーやNPCだったなら多少は騙されることも考慮するところだが、この短時間で彼女の人柄は十分に理解している。断言する彼女を疑うことはなかった。

もう少し森の中で「シンクロシステム」の使い手を探していたかった思いもあるが、同時に、入り口が近いということは好都合だともさとりは感じていた。なにせ、そろそろ――。

「ゲームを始めてから二時間が経過しました。戦闘中の際は速やかに離脱し、ログアウト処理を行うことを推奨いたします」

ちようどそろそろだと予想していたところに、そんな赤い文字が宙空に描かれた。そう、そろそろログアウトしなければいけない時間帯だ。

こころの方へ顔を向ける。今回、彼女とはほぼ同時にゲームをスタートした。こころもまたさとりと同様にメッセージが出現したらしく、こちらに目を向けてきた彼女と視線が合う。

「大ちゃん。私たちはログインの制限時間になってしまいましたので、今回はもうログアウトしようかと思えます」

「あつ……あ、あの！ えっと、ありがとうございます！ さとりさんたちがいなかったら私はやられてたし、チルノちゃんのこともきつと見つけれなかったですっ」

「いえ、私たちも人探しのついででしたから。そう何度もお礼を言われることのほどじゃありません」

「人探し……そ、そうです！ それなんですけど……」

大ちゃんは辺りを見渡し、チルノやこころがさとりの近くにいないこと、聞き耳を立てる様子がないことを確認すると、さとりへ唐突に歩み寄ってきては小声で言葉を続けた。

「その……それってどんな人なんですか？」

「……？ そうですね」

どうして声を潜めるかはわからなかったが、彼女がそうしたいと言うのなら、さとりもそれに従う。同じように、こころやチルノに声が届かない程度に音量を小さくして答えた。

「私とはある知り合いから、この森に『シンクロシステム』をほぼ自由自在に操れる人物がいると聞いてやってきたんです。それでその人と会って、どうやって『シンクロシステム』を使っているか知ることができれば、と」

大ちゃんが『シンクロシステム』を知っている前提に話してしまっていたが、そういえばあの力は表向きはなんなのかわからない謎のシステムということになっているんだったか。さとりも詳細を把

握し切っているわけではない。わからないから、学びに来たのだ。

とりあえず大ちゃんに「シンクロシステム」についてさとりの知っている範囲で軽く説明しようとしたところ、さとりは、大ちゃんがさとりの言葉を耳にして神妙な顔をしていることに気がついた。

「やっぱり、そうなんですね」

予想がついていたと言わんばかりの呟きに、さとりの顔は疑惑に歪んだ。

「やっぱり……？」

「さとりさんたちほどに強い人たちがこんな森に、それも人探しに来るなんて、それくらいしかないと考えていました」

「それは」

それはつまり、この大ちゃんはそのシステムの使い手が誰かということを知っているということなのか？

声にして出さずとも、そんなさとりの疑問が大ちゃんには伝わったらしい。彼女は静かに、こくんっ、と頷いた。

「その、信じられないかもしれませんが……さとりさんたちが探しているのって、チルノちゃんなんです」

しかし次に彼女が吐き出した言葉を耳にして、さとりは一瞬思考が止まってしまう。

「……え？ 今なんと」

「『シンクロシステム』の使い手というのは、チルノちゃんなんです……たぶん」

「ええ……？」

思わず、未だ大の字で寝転がっているチルノへ胡散臭いものを見る目を向けてしまった。

大ちゃんと同じくらい背で、頭がよさそうだともあまり思えない。無駄に騒がしいし、最強だとかなんだとか見栄っ張り。それに、大ちゃんが妖精だと言うのなら、まず間違いなく彼女も妖精であろう。現実での力もそれほど強くないという推測に至るのは必然だった。

そんな彼女が、さとりのずっと探していた「シンクロシステム」の

使い手？ しかも、大ちゃんはたぶんなんて言葉も最後に付け足した。さとりが困惑してしまうことも無理はない。

ただ、同時にさとりの頭の隅には、諏訪子から聞いていた使い手について断片的な情報がよぎっていた。

——どうすれば使えるかなんて……いや、たぶんそもそも、〃シンクロスシステム〃を使ってるっていう自覚もないんじゃないかな。っていうか存在を知ってるかも怪しい。

「大ちゃん。その、チルノさんは……そのシステムを使っているという自覚はあるのですか？」

「や、絶対ないですね。でも、たまに私が魔物にやられたりなったりしそうになると、唐突にすごい力を発揮することがあって……チルノちゃんに聞いても『なんか知らないけどパワーアップした！』くらいしか言わないけど、チルノちゃんのスキルやアビリティにそんなものはないはずなんです。だからたぶん、あれが噂でいろいろ言われてる〃シンクロスシステム〃なんじゃないかって」

「……うーむ」

そのパワーアップ状態のチルノを目にしたことがないさとりでは、それが本当にシンクロスシステムかの判断をすることができない。かつて《恐ろしい波動》のその力を見た自分ならば、もう一度同じような力を見ればそれが本物かどうかを判別することはできると思うのだが……。

このチルノという少女が、〃シンクロスシステム〃の使い手。あまり信じられる話ではない。だけど、今は他に手がかりがないことも確かだった。できることならどうか行動をともしにして、そのパワーアップする瞬間をこの目で確認してみるしかない。

そんなさとりの考えを、またしても大ちゃんは察したらしい。一足早くこくりと首を縦に振ると、『メニユー・コール』と呟いた。さとりには見えず、彼女には映っているだろう画面を操作し始める。

なにをしているのだろう。聞いてみようかと思いかけた矢先、不意にさとりの視界に新たなメッセージが出現した。

『大ちゃん』からフレンド申請が届いています。承諾しますか？』

「これは……」

「あの、いつでも連絡してきてください。そうしたら、チルノちゃんにさとりさんたちと遊ぶ約束を取りつけさせますから。さすがに連絡してすぐっていうわけには行きませんが……できるだけ次の日以降までには一緒に冒険できるように取り計らっておきます」

それは願ってもない申し出だった。〃シンクロシステム〃がどういふものなのか暴くためには、現在唯一の手がかりかもしれないチルノと行動することが一番の近道だ。

「でも、迷惑ではありませんか？ チルノさんがシステムの力を使うところが見たいというのは私たちの……いえ、私個人の好奇心や探究心にか過ぎませんし、そんなことのために約束を取りつけさせるなんて、少し気が引けます」

「そんなっ、大丈夫ですよっ！ 私はもつとさとりさんたちと冒険してみたいし、チルノちゃんだって……それに、私たちが得をしないというわけでもないんです」

「どういうことですか？」

「実は私たち、この森を中心に活動し始めてから結構経つんですけど、未だにこの森を攻略できていなくてですね……正直、森の奥の方は私とチルノちゃんの二人だけじゃ手詰まりだったんです。だから、さとりさんたちに手伝ってもらえたら森の奥のさらに先の方に進めて、もしかしたらボスだって倒せるかもしれないって、そう思ってるんです」

「なるほど、そういうことですか」

さとりだけに利益があるわけではない。チルノや大ちゃんにも、それ相応の理由がある。

そういうことならば是非もない。いや、そういう事情がなくともフレンド申請自体は承諾していたが、とにかくこれで、〃シンクロシステム〃の正体に近づくことができる。

フレンド登録しました、という機械音声が、さとりと大ちゃんの二人の耳に届いた。

「さて、それでは今日はもうお別れですね。また今度、一緒にこの森を

攻略しましょう」

「はいっ！ その時は、どうぞ宜しく願いますー！」

「ええ。こちらこそ」

大ちゃんとの会話を終えると、さとりは踵を返してこちらの方へ歩み寄る。大ちゃんもまた、チルノの方へと戻っていった。

「なにを話してたの？」

「また一緒に遊びましょう、という約束です。その時はこちらさんもお願いますね」

そろそろログアウトしましょう。そうさとりが誘うと、こころはこくと首肯した。

チルノという少女が本当にシンクロスシステムの使い手なのかどうかはまだわからない。それを確かめるには、チルノがパワーアップしたという状態をこの目で見るほか、あと一つだけ方法があった。

次にこの世界に来た時には、それを行ってみるのが吉だろう。そう思いながら、さとりはこころとも「また会いましょう」と別れの挨拶を交わした。

翌日。今日も今日とてゲームの世界へ入り込んでいる。

昨日は森の中をふらふらと彷徨っていたものだが、今回さとりは一人で、街の方へと戻ってきていた。

というのも、本当にチルノがシンクロスシステムの使い手なのかを確認するためだ。チルノに聞いてもわからない、大ちゃんも可能性は高いと思っているにせよ確信には至っていない、さとりもこの目で見ていないから判断がつかない。そうになると、実際にそのシステムの真の正体を知り、森にいる使い手がどういう姿かたちをしているかを把握している人物に尋ねるのが一番だ。

すなわち、洩矢諏訪子にチルノの特徴を説明し、本当に彼女がシンクロスシステムを自由自在に扱える使い手なのかと確認を取る。それを目的に、さとりは街へと戻ってきていた。

「まあ、もしもチルノって子がそうでなかったとしても、森の攻略は手伝うつもりなのだけど」

街の様子はあいかわらずだ。古い西洋を象った街並みで、その表通りには多くの人々が行き交い、数多くの話し声は他のそれらと混ざり合って雑音と化している。幻想郷では祭りの時以外はあまり見られず、見られたとしても地霊殿の外に出ないさとりに縁のないこの雰囲気は、どことなく新鮮であると同時に、多くの人がいるという状況で少し苦手でもあった。

諏訪子の店はこの表通りから外れたところにある。今は大通りを歩いているが、もう少しすれば路地に曲がらなくてはならない。

目的としてはチルノが使い手なのかどうかを問いかけることだけど、そんなものはすぐに終わってしまうだろう。だからその後はいつも通り、諏訪子とお茶でも飲んでだべっているつもりでいた。諏訪子とは、そうして一緒にのんびりしていることがそれなりにある。

ただ、あとでどころと遊ぶためにも時間を合わせる必要がある。いつもなら時間いっぱいまでゆっくりしているところだが、お茶を飲んだのんびりする時間は、今日はいつもよりも短くなりそうだった。

「……ん？」

ふと、後ろを振り返る。なにか、視線を感じたような気がした。

多くの人々を通りをあっちへこっちへ歩き回っている。それに加え、突然立ち止まったさとりに奇異な視線を向ける人もいた。そのせいで誰に見られていたのかわからず、さとりは首を傾げる。

気のせいだった？ いや、それにしては。

さとりは視線を前に戻すと、その足を早めた。つけられているにせよ勘違いにせよ、こんな人の多い場所ではどうにもわかりにくい。一旦路地に入り、改めて後ろを確認してみる必要がある。

早足で進んでいる間にも、やはり、さとりをじいつと観察するような視線を、さとりは背後から感じていた。

勘違い、ではないか。

すつ、と路地に入り込むと、さとりはすぐに全速力で駆け出した。後ろから追ってきているとするならば、建物の角が死角になってさとりが走り出したことはわからないはずだ。

すぐそばの分かれ道を左に曲がると、その角に身を潜めた。足音に

耳を澄ませていると、やがて、慌てて路地にやってきたような不自然な足音がさとりの耳に届く。

さとりは左の手で『衝撃』^{インパクト}の魔法陣を描きつつ、その足音の主が分かれ道のそばまで近づいてくるのを静かに待っていた。

やがて、その人物が姿を現したところで。

「動かないで」

「っ——」

さとりは素早く背後に回り込むと、左腕で軽く拘束しつつ、右手をそつと相手の首元へ添える。

さとりの行動に、ぴくりつ、と一瞬だけ反応するものの、相手は言われた通りに動きを止めた。たかが軽く首に触れられている程度で、なにができるわけでもない——そんな風に判断して拘束を振り払おうとしない辺り、どうやら『魔術師』の『衝撃』^{インパクト}等の触れているだけでダメージを与えられるスキルに心当たりがあるということか。

さとりは、追ってきたその人物の姿を観察し、訝しげに眉をひそめた。

全身にぼろぼろの灰色のローブを纏い、フードまでかぶって顔を隠している。そんな怪しき満点の格好に加え、その背はほんの10にも届かない程度の子どものもの。自分を追ってきた者の姿がそんな人物であれば、誰でも困惑してしまうだろう。

それでもさとりは気を取り直し、引き締め直した。この人物が自分をつけていたことは間違いないのだ。なにか、よこしまな目的があったに違いない。

「あなた、私をつけていたわね。なにが目的なのかしら」

返答はない。さとりは、触れていた手をさらに強く押しつけ、スキルを発動させた際にもつと強く荷重がかかる状態にしてみせた。

「答えないなら、このまま思い切りやってしまおうわよ」

「……………けた」

ぼそつ、となにかを呟いたこと。触れていた首元が、声を発したことでわずかに震えたことがわかる。

よく聞こえなかった。「なんと言いましたか?」と問いかけ直すと、

少女の発する震えが段々と明確に、大きくなっていった。

けた、けた、けた、けた、けた。つけた、つけた、つけた、つけた。

「やっつと、見つけた」

「なっ——!?!」

唐突に相手が振り返り、さとりの瞳をじっと見つめてきた。フードの奥に垣間見えたその人物の顔を目にし、さとりは思わず驚愕の声を漏らして体を硬直させてしまう。

その隙を見逃すような相手ではなかった。素早くさとりの拘束を振り切ると、軽くバックステップを踏んで距離を取る。そして、それをやめて立ち止まった時の反動で、その人物のフードが取れた。

金髪のサイドテール、炎よりも深く輝く真紅の瞳。狂気を内包する、恐ろしいまでに無垢で無邪気な笑顔の少女。

見覚えがあるどころの話ではない。この少女は、かつてさとりとこころをその圧倒的な力をもってして焼き殺してきた、史上最悪のプレイヤーキラー。

「《恐ろしい波動》……!?! どうして、こんなところにつ……!」

右手を剣の柄に伸ばし、素早く抜き放つ。同時に左手で編んでいた『インパクト衝撃』の魔法陣をかき消すと、すぐさま『魔弾』のそれへと変更した。

臨戦態勢を取るさとりに対し、二つ名を持つにまで至ったプレイヤーキラーの少女は幽鬼のように立ち尽くすだけで、なにも構える様子がない。それを若干訝しく思いつつも、それ以上の警戒心を胸に彼女と対峙する。

「やっつと見つけた、と言ったわね。まさか、また私を殺すつもり?」

まずい、ときどりは思う。今は隣にこころがいない。あの時奇跡的にこの少女を追い詰めることができたのはこころがともにいたからだ。

しかもここは表通りから路地に入っつてすぐの場所。すぐに応援が来る可能性があると言えば聞こえはいいが、逆に言えばこの少女にはそれまでの間大量虐殺が可能であるということ。見知らぬプレイ

ヤーのことなどさとりには関係ないと突っぱねることはできるけれど、だからと言ってその虐殺をみすみす見過ごすわけにもいかない。諏訪子に助けを求める？ 彼女が相当な強者であることはわかっている。おそろく、《恐ろしい波動》とまともに一対一で戦えるほどか、それ以上の実力がある。

ただ、諏訪子の店まではまだそれなりの距離があった。《恐ろしい波動》の超高威力広範囲の攻撃をこんな狭い路地でかわしつつそこまで移動するのは現実的ではない。

どうすべきか、と思考を続けるさとりへと、一步、《恐ろしい波動》が歩み寄ってくる。それに呼応して、さとりも一步下がってしまった。

それは、距離取らなければ危ないという理性的な判断から下がったものではない。ただこの少女と相対する恐怖ゆえに、本能が後退することを選んでしまった。それが屈辱だとわずかに感じるとともに、それほどまでにこの少女は危険なのだとも自覚する。

「ずっと、ずっとずっとずっと……あなたと、あの変な無表情なやつにやられてから、ずっと探してた」

「やられた……？ あなたは勝ったでしょうに。あのとてつもない力で、〃シンクロシステム〃の力で」

「……〃シンクロシステム〃？」
金髪の少女が、首を傾げる。まるで心当たりがない、と言った具合に。

どういうことだ？ あれはシンクロシステムではなかったのか？
この少女がとぼけているようには、どうにも見えなかった。

……まさか、無意識だった？ シンクロシステムのことを知らず、けれど無意識のうちに、あの時あの瞬間にシンクロシステムの力へと到達した？

そんな都合のいい話があるものか。そうは心の中で否定してみるものの、この少女の反応は、そうとしか思えないものだった。

「なんでもいいわ。最後に私が勝ったただとか、お前らが勝ったただとか、それこそどうでもいいのよ」

「なんですって?」

「消えないの……ずっとずっと、ずっとつ。あの日からずっとつ!

お前の満足そうな笑顔が! もう一度私に挑んでみせるって言ったら、楽しそうなあの顔が!」

「なに、を」

胸の奥が強く痛むかのように、相対する少女は胸元で右手を握りしめる。一步、二歩、三歩。ゆっくりと、けれど着実に少女が近づいてくるたびに、さとりも一歩ずつ下がってしまっていた。

「あの日から、誰を殺したって全然気持ち晴れないっ……! どんなふうに苦しませたって、もやもやするだけでまったく楽しくなれない! 人が苦しむ顔が楽しみだっただけなのに、それを見るたびに、お前のあの顔を思い出すの! 怯えるんじゃないで、笑って、私と戦うのがまるで楽しいみたいにつ! そのせいでぜんぜん楽しめない! なんて邪魔するの? なんて、楽しくなろうとしたところでいつも邪魔してくるのよ! お前は確かに私が殺したはずなのに、なんで私をこんなに苦しめ続けるの! ふざけないでよ!」

なんとも理不尽な罵倒だった。ふざけてるのはどっちだ、なんて言葉が頭の中には浮かぶのに、あまりの迫力に、口から出すことはかなわなかった。

あの時、この少女への意趣返しでしてみせた笑顔は、さとり予想以上にその心に印象強く残ってしまっていたらしい。

別に、楽しかったわけじゃない。他人を玩具のように、自分やころもその一つとでも言うように、もてあそんで殺そうとしてくる。そんな相手と進んで戦い合いたいとはとても思わない。

ただ、こころと一緒に話せば話は別というだけだ。彼女はとても頼りがいがあるし、自分を頼ってもいてくれるのがわかる。初めての友達である彼女であれば、たとえばはるか格上の残酷なプレイヤーキラーが相手だろうとも、信じ合って挑んでいける。

「……だから、あなたをずっと探してた。この晴れない気分を、なにをどうしたってどうにもならないこむしゃくしゃを、終わらせるために」

少女が足を止めた。さとりもまた、自然と後退を止める。

「やはり、また私を……殺すつもりなのね。それで、あなたのその晴れない気分とやらを終わらせることができるの？」

確かに、今この少女にいたぶられて、あの時のように笑顔でやられることができる自信はない。あれはこころが残してくれた、楽しかった、という一言があったからできたことなのだから。

笑顔の終焉ではなく、怨み憎む、もがき苦しむ断末魔。それを耳にし、目にするのができれば、彼女の気持ち晴れる、と。彼女はそう言いたいのだろうか。

さとの核心を伴っての質問に——けれどこの少女は、静かに首を横に振った。

「なら……いったいなにを目的に私を探していたというの。殺すのが目的ではないとすれば、いったい私をどうしたいと」

「……どうもしない。あなたをもう一度殺したって、あなた一人だけを、今度は本当に苦しませることができたって……この胸にあるもやもやっつけた気持ちなくなるなんて、どうしてか、思えない」

「どうもしない？　なら、どうして私をやっと見つけただなんて言ったのかしら。あなたはなにか目的があつて、したいことがあつて私を探していたはず。なら、それはいったいなんのために」

「……私は」

少女が目を伏せる。その幼き心で、深く、なにかを考え込んでいるような静かな表情。

やがて彼女が静かに意を決したように顔をあげると、すつと手を宙空にかざす。『紅蓮弾』かなにかが飛んで来るか、といつでも回避できるように意識しつつ剣を持つ手に力を入れたが、どうやらそういうわけではないらしい。

少女の手と、指が動く。魔法陣を描くわけでもなく、武器を握るでもなく。

まるでその手の動きは、まさに昨日、大ちゃんがさとの前で見せたものと酷似していて——。

『フランドール・スカーレット』からフレンド申請が届いています。

承諾しますか？」

「なっ、ん……!？」

突如さどりの視界に出現した画面に映った文字を見て、さどりは目を見開かざるを得なかった。

六・ 捩狂幼心 (twisted heart)

「……いったいこれはどういう冗談かしら」

《恐ろしい波動》ことフランドール・スカーレットから届いたフレンド申請の画面。かつてさとりを殺す気で襲いかかってきた相手からのそれに一瞬驚いたものの、すぐに訝しげに目を細めた。

そもそもこのフランドールという名前らしい少女は、さとりを殺した時に生まれた晴れない気分とやらを終わらせるために会いに来たと言った。だというのにこれはなんだ？

かつてさとりは意趣返しにと笑いながら死んでみせた。だからこそ、てつきり今度こそさとりが心の底から苦しむさまを眺めてから殺そうとしてくるとでも思っていたのだが……。

本当にわけがわからない。さとりがフランドールにあまりいい感情を抱いていないのと同じように、あちらもこちらにそこまで好意的な思いを持っていないことは数秒前の会話からも明らかなのに。

「別に、冗談なんかじゃない。私がしたいことは見ての通りのこと」

「それこそ冗談じゃないわ。言い方を変える。あんた、なにを企んでるの？ いったいなにが目的？ いきなりこんなものを送ったところで私が承諾するとも思ってるの？」

拒否することに抵抗はない。承諾なんでもつてのほかだ。

この少女はさとりとこころを玩具のように弄びながら、殺した。そんな相手といきなり友達フレンドになる？

できるわけがない。フランドールへ送るさとりの視線が自然と睨むようになる。

「……条件があるなら、できる限り飲むわ」

「そんなことを聞いているわけじゃない」

フランドールはさとりの鋭い目線にも動じず、それどころか両手を下げ、無気力そうにだらんと力を抜き始めた。

本当に、いったいなにを考えているの？

……少し、試してみようかしら。

さとりはフランドールが急に動き出しても対応できるようじゅう

ぶんに警戒しつつ、一步步彼女に近づいていく。やがて剣の射程範囲内までたどりつくと、ずっと手を添えていた柄から刃を抜き放ち、フランドールの首筋にそれを添えた。

フランドールは一瞬ぴくりと体を震わせたが、それでもなにもせず、覇気のない瞳でさとりをぼーつと見つめている。

「お前、条件があるならできるだけ飲む、と言ったわね。だったらこういうのはどう？ あなたが私ところを……いえ、それ以外にも多くのプレイヤーを自分の娯楽のためだけに殺してきたように、私があなたを殺し続ける。何度リスポーンしても殺して殺して、私の気が済むまで繰り返す……」

そんな趣味の悪いことを本当に実行するつもりはないが、返答によつてはこのまま剣を振り切ってもいいとも思っている。もともとこの少女に対して友好的な感情など一欠片もないのだ。躊躇はない。フランドールはしばらく目を閉じて黙り込んでいたが、やがてゆつくりと瞼を上げると、さきほどと同じ力ない視線でさとりを見つめた。

「構わないわ。それであなたが満足できるなら、別に」

「……本気？」

「信じられないなら、一度殺してみる？ それとも私が自分で自分を刺してみる？ 私はどっちでもいいけどね」

「……冗談じゃないみたいね」

どうやら今の彼女に敵意がないことは確からしい。あまりに隙だらけすぎる。それに、ずっと人の心を読んできたさとりにはなんとなくわかるのだ。

彼女は嘘をついていない。正直に自分の気持ちを吐露している。

そしてこの諦観混じりの、今の自分の目的がかなうのなら他のなにもかもなんて、それこそ自分の感情や尊厳さえどうでもいいというような色の声音。

——……ごめんね、お姉ちゃん。

どうしてか一瞬だけ、昔の妹の姿が頭をよぎった。

「……はあ」

たどえかつて敵だったとしても、今の彼女を殺す気にはなれなかった。

さとりは剣を下ろすと鞘にそれを戻した。

「三度目よ。私が納得できるだけの答えを返して。あなたの目的はなに？ 私とフレンド登録を結んで、いったいなにをしたいっていうの？」

さとりの視線にもう鋭さはない。そこにあるのは単純に疑問に思う心だ。

これに答えないようならこれ以上問答を続けるつもりにもならない。さつきとこんなフレンド申請なんて拒否して立ち去る心持ちだ。

「私は……」

フレンドールもこの問いが最後だということを知っているらしい。ぽつりぽつり、その心にある思いをこぼしてくる。

「私は、もう一度自分が楽しいって思えるような時間を取り戻したい。それ以外のことなんてどうでもいい、なんでもいい。私自身が楽しめればそれだけでいい。取るに足らない他人虫けらどもがどんなことを思っているのが知ったことか」

およそフレンド申請を送ってきた理由とはかけ離れた発言だったが、口を挟まず少女に話を続けさせる。

「ずつとずつと一人で生きてきた。自分が楽しいって思えることだけやってきた。これまでは誰かを苦しませて殺すのが一番面白かったけど……もうなにをやったって、なんだか全然楽しめなくて……」

「……だから？」

「だから、だから……私には、わかんないのよ！」

フレンドールは突然むしゃくしゃとした気分を吐き出すように急に大声を出すと、今までだらんと下げていた手を、自分の左胸の腕でぎゅつと握り込んだ。

焦燥、あるいは苛立ち。無気力だった表情は激情に染まり、そのすべての感情がさとりではなく自分自身に向けられている。

「なにをするのが楽しかったのか、なにをすれば楽しいのか！ 今まで楽しいって思ってたことがなんでか全部つまんなくなってるっ、今

まですつと一人で生きてきたのに、一人でなにしてたつて空っぽな気持ちにしかねない！ つまんないっ、つまんないっ！ つまんないのよ！ なにもかも全部！」

血走った、けれどどこか悲しそうな色のフランドールの視線が、さとりを貫く。

「お前は、なんであの時笑いながら死んだのっ？ どうして私にこんな呪いみたいなものを植えつけたの？ 私がこんなに苦しむことをわかってたからあざ笑ったの？ やめて、やめてっ、お願いだからやめてよ！ 私の楽しみを返して……やだ、やだあ！ やなのよお！ もうこんな気持ちを私に味わわせないでえ！」

「……あなたは……」

癩癩を起こした子どものように叫び散らす彼女を呆然と見つめる。少し前とは違って、今の彼女はいつ攻撃してくるかもわからないほど感情を撒き散らしていた。

狂っている。そう思った。

別に普段から狂っているような妖怪なんてさほど珍しいものではないが、今の彼女はなんというか、そういう安定した類の狂気ではないように感じた。元から狂っているものがさらにねじれ狂ったせいで、自分自身のことからわからなくなってしまうているかのような、そんな類の危うい狂気のように思う。

今までもずっと一人で生きてきた。彼女はそう言っていた。

さとりと同じ——いや、違う。さとりにはお隣たちペットがいた。こいしというただ一人の家族がいた。他人と対等な関係を築くことはできずとも、決して孤独に生きてきたわけではなかった。

このフランドールという少女は違うのだろう。

一人だった。独りだった。誰かと触れ合う機会はあるかもしれない。だけど、誰かと心を通わせる機会なんて一度たりともありはしなかった。常に自分のことだけを考えて生きてきて、他人の心なんて一度として気にしたことはなかった。

さとりは他人の心が読めてしまうことで嫌われて一人になることを選ばざるを得なかったが、おそらく彼女はその逆だ。他人の心なん

て一切考えてこなかったから、独りだった。

そこにさとりやこころという異分子がなんらかの一石を投じてしまったがために、元から狂っていた彼女の心が不安定になってしまった……という具合だろうか。

激情を喚き散らすフランドールを下手に刺激しては危ないとはばらく傍観していたが、やがて落ちつきを取り戻したのか、少しずつ言葉数が減っていく。やがて荒い息を吐くフランドールの目の色から、再び力が抜けてきた。

「……私は私が楽しめればそれでいいのに、もう、なにをすれば楽しめるのかわかんない。だから、こうしてあなたに会いに来たの。私と戦って、それでも最後に笑ってみせたお前と……今私を感じてるみたいな苦しみしかないはずのところで楽しそうにしたあなたと一緒にいれば、きつとまたいろんなことが楽しめるようになるかもしれないって、そう思ったから」

「なるほど……じゃないわね。一見理屈が通ってるっぽいけど、やっぱりわけがわからない」

「……そう？」

「敵としてしか話したことがない、っていうかむしろ殺し殺された相手といきなり仲良くなるうって発想自体がおかしいのよ。そもそもあんたと私は知り合いでもなんでもないわけだし」

「おかしい……うん。それ、お姉さまにもよく言われるわ。会話が成り立たないって」

「姉がいるのね」

「うん。暇つぶしにって私にこのゲームをくれたのも、お姉さま」

「いいお姉さんじゃない」

「あいつがいい姉なわけないでしょ。最近私が館をうろついているから問題を起こささないか不安なのよ、あいつは。ゲームをくれたのも、どうせ私に暇を潰せるだけの玩具を与えて大人しくさせたいだけ」

「……ふうん。まあ、あんたの事情だからどうでもいいけれど」

一瞬、もしかしたらこいしも自分のことをこんな風に思っているんだろうか、なんて落ち込みかけたがすぐに振り払う。

そもそもこいしに誰かを嫌うだけの負の感情が存在するとも思えない。

それに妹が自分のことをどう思っているかは知らないが、さとりは彼女のことをよく思っている。その事実だけあればじゅうぶんだろう。

「それで？ そんなあんたの自分勝手な理由を話して、私が承諾すると思っっているの？」

「さつきも言ったけど……私は私が楽しめれば他のことなんてどうでもいいの。だから、私ができることならなんでもする。あなたに数え切れないくらい殺されたって構わない。これまで殺してきたプレイヤーに同じように殺されるというのならそうする。それで私があなたと一緒にいれるなら」

「……どうしてそこまで」

「どうしてって、私が楽しめればいいからって何度も何度も言ってるじゃない。私が生きてる理由なんてそれだけだもん。だって世の中つまらないことしかないなら生きてる意味なんて、ううん、存在してる意味なんてないじゃない？」

「それは、究極的にはそうかもしれないけれど……」

いや、と首を横に振る。この少女は狂っている。どうせ価値観が合わないのだ。わざわざ会話を成り立たせようとする必要はない。

フランドールはひたすら自分だけのために生きている。これはただそれだけの話である。

問題はやはり、フランドールの要求をさとりが受けるメリットがほとんどないことにある。むしろデメリットの方が大きい。前回初めて会った際に急に襲いかかられた相手だ。今はおとなしいが、またいつ寝首をかかれるかわかったものではないし、狂っているから思考も読めない。

そばに置いてもただ危険なだけ。それがさとりのフランドールの要求への印象だ。

フランドールはなんでもするなんて言っただけはいるものの、別にさとりににはフランドールにしてほしいことなんてない。強いて言うなら

もう迷惑をかけないでほしい、つまりは関わらないでほしい。だけどそれはフランドールの望みとは真逆のものだ。それだけは決して彼女の要求と並行して叶えることができない。

「……悪いけど、あんたのフレンド申請は——」

「あ。そういうえば、これ渡さないといけないんだった」

さとりの否定の言葉を遮って、フランドールがふと思いついたように言葉を発した。さとりが断りかけたから無理に話題を転換してのことも思っただが、そういうわけでもないようだ。

フランドールはメニュー画面を操作するように宙で手を動かすと、さとりの視界に今度はトレード機能の表示が浮かんできた。

これは可否の前に相手の提示したものを確認することもできる。互いに物を出し合い、一度決定した後で再度互いに了承することでトレードは実行されるのだ。

初めは急にトレードを申し込んできたフランドールをただただ不思議に思っていたが、提示されたものを見て、さとりは目を見開いた。

「これは、『子鬼ゴブリンキングの王の宝玉』……?」

確か、一度でもログアウトしない限りはその際に手に入れたアイテムは『仮の所有者権限』しか持っていないことになっているんだっただか。そしてこの世界は死亡時には経験値の一割とその『仮の所有者権限』で所持しているいくつかのアイテムが失われ、その失ったアイテムは死体オブジェクトに保存される。

かつてさとりは『恐ろしい波動』ことフランドールと戦った際にこのレアアイテム『子鬼の王の宝玉』を喪失ロストしている。

「私を倒して手に入れたこれを、ずっと取っておいていたのね」

「ううん。違うわ。それ、あなたから手に入れたものじゃない」

「え?」

「あなたの死体は焼き尽くしちゃって、そこからアイテムを取ることではできなかったから。参照するくらいしかできなかった。だから、それは私が自分で取ってきたの。六〇〇……うーん、七〇〇? まあでも、たぶん一〇〇〇はいかないくらいだと思う。それだけあの雑魚い王さま気取り倒したらまた落ちてくれたよ」

「せ、一〇〇〇？」

「ちよつと時間はかかったし、あなたが持ってたものじゃないけど……やっぱりいらぬい？ それとももつと数がないとダメ？」

「……ちなみにだけど、もし、あと九九個欲しいと言ったら？」

「揃うまであれを倒し続けるだけ。それだけの数になるとたぶん何年かはかかっちゃうけど……それでもいい？」

「それでもいいって、本当に何年もずっと倒し続けるつもり？ あなたは、どうしてそこまで」

「だから私がまた楽しいって思えることをしたいからだってば。それだけが私の生きてる理由だもん」

「生きてる理由って……」

フランドール・スカーレットは狂っている。だから彼女の心は第三の目がないさとりには理解できない。彼女は自分のためだけに生きている。

そもそもさとりと行動をともしたところで、彼女がまた楽しいと思えるかどうかかわからない。そんなことは狂っている彼女にもわかってはいるはずだろう。ほんの少しばかり可能性があるかもしれないだけ。それなのにこうまでなりふり構わないのは、なんとも危うい。

心配するわけじゃない。同情するわけでもない。ただ、確信がある。

彼女はきつと、このままなになつ楽しいと思えるようなことがまた見つからなければ、自分の死さえもどうでもいいと考えて行動するようになる。

楽しむことを見つけるためなら、どんな危険にも身を投げ出すようになる。

これはそういう類の狂い方だ。今の彼女と言葉を交わしているさとりには、現実で数多の心を見通してきたさとりには、それがよくわかった。

「……いいわ。わかった。本当にあなたがなんでもするつて言うなら、三つ。三つ私の条件を飲んでくれるのなら、私と一緒にいてもい

い」

「っ、ほんとっ!？」

「ええ、本当」

フランドールを放っておくことはできる。むしろそちらの方が危険は少ない。

それならどうしてわざわざリスクの大きい選択肢を取ることを考慮するのか。

彼女は今までずっと一人で生きてきたと言った。だが、彼女は自分に姉がいるとも言っていた。

妹。さとりにも、妹がいる。いつも一人でふらふら出歩いて、たまに帰ってきたと思っただけならもういなかっただけで、本当に世話のやける、けれど大切な妹が。

フランドールに自分の妹の、こいしの姿を重ねたわけではない。だけど自ら破滅へと踏み出そうとする少女を見殺しにするのは忍びない。ほんの少し、そう感じたただけだ。

「私が提示する条件の一つは、まあこれは当然のことなんだけど、まず私たちには絶対に危害を加えないこと。それからもうプレイヤーキラーもしないで。あなたと一緒に行動する以上、あなたに悪い噂がつくだけでこっちも迷惑をかぶるんだから」

「うん、わかったわ。でも今でもじゆうぶん悪く思われてると思うし……人がいるところに行く時はこれかぶるようにする」

これ、と言いながらフランドールはぼろぼろな灰色のローブのフードをつまんだ。

さとりは頷いて、次に、と指を二本立てる。

「二つ目。自分のことだけを考えてないで、他の人と仲良く……とまでは言わないけど、嫌な気持ちにはさせないこと。いわばコミュニケーションカシラ。それをちゃんと意識して」

「うーん、具体的には?」

「え? や、えっと……そ、そうね。挨拶は大事よね。あとありがとうとごめんなさいも」

「挨拶と、お礼と謝罪……わかった。努力する」

このゲームを始めるまで自分からコミュニケーションすること
を放棄していたさとりが偉そうに語るには無理があった。が、フラン
ドールはさとりの割と適当なアドバイスも真剣な表情でこくりと頷
くと、最後は？ とさとりをまつすぐに見つめた。

……このぶんなら、そこまで警戒することもないかもしれないわ
ね。

フランドールが思っていたよりも真面目にさとりの話を聞いてい
るさまを観察して、さとりは彼女への好感度を少しだけ上方修正し
た。

「最後の条件は、現実ではちゃんとお姉さんと触れ合うこと」

「えー……」

これまでこくこくと素直に首を縦に振ってきた彼女だったが、これ
だけはどことなく嫌そうに顔をしかめた。

「えーじゃない。別に仲良くしなさいとは言わないわよ。毎日、ただ
一言二言交わすくらいでいい。今言ったおはようとか、あとおやすみ
とかね」

「別に私がお姉さまとどういう関係だろうが、あなたには関係ないん
じゃないの??」

「ないわね。でも、気にはなる。この条件を飲まないならフレンド申
請を受けるわけにはいかないけど、さてどうするのかしら」

「う、ぐぐ……はあー。わかった、わかったわよ。挨拶くらいはするよ
うにする。これでいいでしょ」

「よろしい」

さとりの妹たるこいしはいつも挨拶せずに出ていったり帰ってき
たりと神出鬼没で、いつもなにかと心配になる。フランドールがこい
しとは違うことはもちろんわかってはいる。むしろどちらかと言う
とフランドールは奔放なこいしとは逆で引きこもりっぽい感じがす
る。

フランドールがきちんと姉と触れ合うかどうかはさとりに確認す
るすべはないが、それでも構わない。これはただのさとりの自己満足
なのだから。

さとりはフランドルから送られていたトレードとフレンドの申請を承諾すると、それぞれが完了したメッセージを受け取った。これで晴れてフランドルとの確執も消えて仲良くなった……というわけでは決してないが、とりあえず敵同士ではなくなった。

「改めて、私はさとり。古明地さとりよ」

「フランドル・スカーレット。フランドル……ううん、フランでいいわ。さとりって呼んでいい？」

「ええ、構わない」

お互いよろしくとは言わない。さとりとしてはフランへの悪感情が薄まっただけで好意的な感情はまだ抱いていないからだ、フランは単に他人への関心が薄いからだろう。

なにはともあれ、これで一応はフランとの問題も解決と言ったところか。

元々、さとりは諏訪子のもとへ向かうために路地を歩いていた。それを再開すると、とてとてとフランも横に並んでついてきた。一緒に行動することを許したばかりなので、なにも言うつもりはない。

「そういうええ、前にあなたと一緒にいた変な仮面のやつは？」

「ごころね。秦ごころ。今日は別行動なのよ」

「ふーん。いつも一緒にいるわけじゃないんだ」

「あんただって、いつも一人でいるわけじゃないでしょ。それとおんなじよ」

「お姉さまとかと一緒にの時もあるけど、九割九分九厘は一人よ」

「でも、少なくとも今は違う」

「む、それはそうだけどー。揚げ足取り？」

「単なる事実よ。純然たるね」

「やっぱり揚げ足取りじゃない。なんか友達少なそうね、あなた」

コミュニケーションを意識してと言った矢先にこのトゲトゲな発言である。フランとしては素直に思ったことを口にしただけかもしれないが、割とさとりの心にはぐさつときていたりいなかったり。

「……友達は数じゃないわ。どれだけ心を通じ合わせてるかよ」

「凶星だったの？」

「う、うるさいわね。そもそも友達が少ないだとかなんだとか皆無なあんたに言われたくない」

「友達なら一人はいるわよ」

「ふうん。ちなみに誰？」

「あなた」

「いや私は違うってば」

「違くないって。フレンド登録したじゃない。もしかして英語わからない？」

「フレンドが友達って意味くらいわかってるっての。そうじゃなくて、フレンド登録だとかなんだとか、それは形だけでしょ？ 本当の意味での友達じゃないって言ってるのよ」

「本当の意味？ じゃあ、偽物も存在したりするの？」

「え？ まあ……すると言えばするのかしら。上辺だけ、上っ面の関係なら偽物の友達とも呼べるかもしれない」

あいにく心を読めてしまうさとりにはそんな上っ面の関係なんて築くことはできないが。とは言え、こればかりはむしろできる限り築けない方がいいものだ。

フランはどこか難しい顔をしていたが、やがて匙を投げるように首を横に振った。

「本物だとか偽物だとかなんかよくわかんないしどうだっていいや。そんなことより今どこ向かってるの？」

「急な話題転換ね……私の行きつけのお店よ。ついてくるのは別にいいけれど、あんまり失礼なことしたり問題を起こしたりしないでよ」
「うん。約束したものだ。悪魔は契約は必ず守るわ。あなたが私の望みを聞き続けてくれる限り」

「悪魔……」

「そう。私は悪魔、吸血鬼だから。悪魔は契約を破れない。まあ、実際には抜け道がないわけでもないんだけど」

この世界でも悪魔のルールが適用されるかはわからないが、少なくとも今のところ彼女から破る気配はなさそうだった。

それにしても吸血鬼か。これまで《恐ろしい波動》の噂として吸血

鬼なのではないかというものを何度も耳にしていたが、やはり本当だったらしい。

さとりは思う。フランとフレンド登録を結ぶことのリスクばかり危惧していたけど、メリットもそれなりにあるのよね。

第一として、非常に強力な戦力となる。少なくともフランはさとりやこころ、それぞれ一人ずつよりは確実に強い。そこにチルノや大ちゃんも加われれば、たとえ以前のように無数のカエルの魔物に襲いかかられようと森の攻略もじゅうぶんなし得ることだろう。

加えて、フランはこれまで一人ですつとこのゲームをやってきていたはずだ。さとりとこころ、二人だけでもそれなりに注意しながらでなければ攻略できなかった《Goblin Cave子鬼の洞窟》を何百回もクリアしてきた辺り、不意打ちなどにはめっぽう強いのではなからうか。

もちろん単純にそうとは言い切れないが、さとりやこころ、チルノなどと比べて力量的に一番なことは間違いない。

それに、《シンクロシステム》のこともある。チルノが諏訪子の言っていた使い手だとして、フランも無意識とは言え一度はその力をさとの目の前で行使した。あのシステムの謎に迫るための手がかりとしてもフランは重要な存在だ。

「……でも、なんだかいろいろ予想外なことが重なっちゃったわね」
誰かに後をつけられているかと思えばそれはかつてさとりを殺してきた相手で、かと思えば突然フレンド申請を申し込まれて、結局それを承諾した。

この選択が吉と出るか凶と出るか。それはおそらく《蛇蛙の森》の攻略で判断できる。

フランもまた、そう遠くないうちに楽しさとやらを再び見つけるか、あるいは結局取り戻せずにさとの元を去っていくだろう。

——それにしても、なんだかこころの驚く顔が目には浮かぶわね。
フランを一瞥して、くすりと微笑む。さとりだって、もしこころが突然フランを連れてきたりなんてしたら驚くどころじゃない。

そんなさとの様子に、フランは目をぱちぱちとさせて不思議そうにしていた。

なんでもない。さとりはフランにそう告げて、諏訪子のよろずやへの道を急いだ。

七．攻略前談（capture before）

チルノが本当に“シンクロシステム”を自在に扱うことのできる使い手であるか。先日諏訪子に確認したその返答は、まさしくイエスだった。

“シンクロシステム”がどういうものかを理解していないから、正確には自在の二文字は当てはまらない。だけどチルノは本当に必要な場面で適切に、確実にシステムを解放できるだけの生来の才能があると諏訪子は語った。

才能。初めて会った際に対峙したチルノはそれなりには手強かったけれど、隣で一緒に話を聞いていたフランほどではなかった。だとすれば生来のと頭につけている辺りからも察するに、諏訪子の言う才能とは強さに類するものではなく、おそらくは物事に対しての考え方や捉え方のようなもの。

一応フランにも“シンクロシステム”の存在を改めて説明し、それを解放する方法を聞いてみたりもしてみた。しかしこうしてフレンド登録を結ぶ前に交わした会話で彼女が“シンクロシステム”について首を傾げていた通り、やはり回答はわからないの一言で収穫はなかった。

諏訪子が言うにはフランにもチルノと似た才能はあるようだが、さとのりの時のように、居心地悪そうに縮こまるフランをじーっと観察した彼女いわく『元来の性格的な性質のせいでシステム解放に必要な条件の一つが満たしづらい』そうだ。その条件とやらを知らないさとoryやフランには諏訪子の言葉の本質がどうにも掴みがたかったが、要は“シンクロシステム”の行使のためにはいくつかの条件を満たす必要がある、フランはチルノほどには自由にシステムを操ることはできないということであろう。

なにはともあれチルノが本当に“シンクロシステム”の使い手であることを確信できたことに、さとりはほっと息をついた。フランに尾行されて突如フレンド申請を送られるなどのトラブルがあったものの、デメリットを無視しメリットだけで考えてみれば、さとりが

常々抱いていた頭数を増やしたいという悩みにもうまく合致していた。

そして現在は諏訪子のもとを訪れた、さらに後日。さとりは昨日と同様にフランを連れて、《蛇蛙の森》で他のメンバーが来るのを待っていた。

「フラン。あんたはこの森には来たことあるの？」

場所は普段チルノや大ちゃんが休んでいるという、大きな岩の根本にある小さな洞窟。

洞窟の隅に座って軽く休息を取りながら、さとりは『感受光石』を興味津々につついているフランに問いかけてみた。

フランはおそらくこれから森の攻略に繰り出すメンバーの中で一番レベルが高い。もしかすればこの森を攻略したことがあつたかもしれないとも思ったが、そんな推測とは裏腹にフランはふるふるとかぶりを振った。

「ううん、ないわ。さとりも知つての通り私はプレイヤーキラーだったから。こんな全然人が寄りつかない森になんて行ったことないよ。プレイヤーキルするのに誰も人がいないとこ行つたつてしかたないでしょ？ さとりと会つた《子鬼の洞窟》の近くみたいにそこそこ人気なダンジョンなら何度か行つてみたことあるんだけど」

「プレイヤーキラーだから人が寄りつかないとこには行かないつて、それ、他のプレイヤーを殺すためにゲームやってたつてこと？」
「それが一番楽しかったんだもん。魔物の悲鳴もそこそこいいけど、やっぱり人じゃないとね。あと魔物はあんまり命乞いしてくれないし」

「……ひねくれてるわね、ほんと」

「まあ、どこかの誰かさんのせいで今は他の人を殺してみても全然楽しくないんだけど」

「まるで私が悪いみたいに言わないでくれるかしら」

システム上のフレンドとなる際にいくらか条件を設けることで実害はなくしたものの、あくまでそれは口先だけの約束。フランは悪魔は契約を破れないとは言つていたけれども、自分が楽しければそれで

いい。そんなフランの考え方がなくなったわけではない。プレイヤーキラーとして活動していた頃のことを悪びれもせず語ってみせると、多少信用はできよう。とまだまだ信頼はできなさそう。

その後も、一言二言、ぽつりぽつりと雑談のように言葉を重ねていく。ただ暇つぶしとして話しているだけで、どちらも会話を盛り上げようという気はないから、このやり取りで信頼関係が築かれることはない。見方によってはどこか気まずい雰囲気に見えるかもしれないが、元より心が読める現実で他人を突き放した物言いをよくしているさととりにとっては慣れた空気であるし、フランはおそらくその極端に他人に興味を示さない性格上、空気を読むなんてことはまずやらない。どちらも気まずいなんて欠片も思っていないなかった。

ただしそれはさととりとフランの二人にとつてはの話である。後から訪れる第三者にとつて、二人の間に漂うどこことなく微妙な空気は非常に居心地が悪く映るだろう。

「さととりー、もういるー?」

もつとも、その第三者が空気を読めるような器用な真似ができるほど賢いのであれば、だが。

洞窟の入口からひよこっ、と無表情ながら元気な声音の少女が顔を出す。初めてゲームを始めた日からずっと一緒にこの世界を謳歌しているさとりの友達、秦こころだ。

「ええ、いますよ。こころさ……こころ」

呼び捨ては、やはりまだ少し慣れない。

「入っていい?」

「許可なんていりませんよ。どうぞ入ってください」

さとりの声を聞くと、彼女はとてとてと子どものように歩み寄ってくる。が、『感受光石』の前に座り込んで一人の少女の姿を認めると、ぴたりと足を止めて訝しげに首を傾げた。

「……おはよう? こんにちは? 秦こころ……でいいのよね。しばらくぶり」

そう言いながら、フランは立ち上がってはこころへと正面から向き直った。

こころからなにかを言われる前に自分から挨拶をした。それはさとりとフレンドになる際にした条件の一つ、コミュニケーションを、挨拶やお礼などはしっかりするという約束を覚えているからなのだろう。

さとりは自らが殺しかけてしまったこころに対してフランが取る対応を見るため、あとこころが驚く姿が見たかったので、少々申しわけなく思いつつもこころにはフランのことを「もう一人一緒に行く人ができた」としか伝えていなかった。

こころはフランの顔を認めると、慌てたように懐から扇子を取り出した。

「お、お前はあの時のっ、おそ、おそろ……お揃いのハロー！　なぜここにいる!?!」

《恐ろしい波動》である。

扇子を突きつけられても、フランは構えることはしなかった。それは当然、今のフランにとつてこころは敵ではないからだが、こころはそんな事情はまだ知らない。

フランは扇子を構えるこころを数秒ほどじっと見つめた後、すつ、と小さく頭を下げた。

「……ごめんなさい」

「……え？」

「あの時のことは、謝るわ。いきなり襲いかかったりなんてして、ごめんなさい」

「え、え？　う、うん」

かつて戦った苛烈に狂った雰囲気との差異に、こころはまるで肩透かしでも食らったかのように呆然と半ば反射だけで首を縦に振る。

けれどその後すぐに正気に戻ったようで、縦に振ったはずの首を今度は思い切りぶんぶん横に振り始めた。

「ま、待って！　待って待って！　なんだ、これはどういうことなのだった？　さ、さとりっ！　さとり、これどういうことなのっ?」

フランはちやんと謝ったので、こころに催促されたこともあり、この辺りででさとりも会話に入ることにした。

「……黙っていてごめんなさいね。こころに教えた一緒に行く人っていうの、こいつ……じゃなかった。前に戦ったこの女の子、フランのことなんです」

「え、ええっ？ えええっ？」

「こいつって、なんか私だけ扱いひどくない？」

「もとは敵だったんだからこんなもんでしょ」

詳細を教えず、許可を得る前に勝手に連れてきたさとりにも非はある。だからさとりもまた、フランと同じようにこころに頭を下げた。「ごめんなさい、私の独断で決めてしまつて。こころからしたら信用ならない相手かもしれないけど……」

「そ、それはいいけど……ど、どうしてこんなことになってるの？ さとりが大丈夫って判断したなら大丈夫なんだろうけど、どうしてこうなったかは教えてほしいところ……」

「それはもちろん。そうですね、フランと会ったのはこころに連絡をした少し前で——」

順を追って事情を説明する。街の中でフランと遭遇したこと、フランの目的と、フレンド登録を結ぶ際に交わした条件。時折フランにも相槌を打ってもらい、間違いがないことも確認する。

全部を説明し終わると、こころは難しい顔……はしていないが、難しそうに腕を組んで宙空に視線を彷徨わせた。

「うーん、つまり私たちと一緒に遊びたいってことでいいのよね。それなら歓迎するわ！ 我らが大親分さとの言うことはちゃんと聞くのだぞ！」

扇子をさつと仕舞い、ぱあつと両手を広げる。大分渋つたさとりと違い、普通に快く受け入れてくれた。

きっとそれはこころの心が広いとかそういう理由からではなく、こころにとつてのフランとの一戦はさとりと一緒にボスに挑むような感覚と同じだったから。それが仲間になったのなら心強い。きっとただそれだけの感覚に違いない。

あまりの単純さに若干あきれられるような気持ちもあるものの、これは間違いなくこころの長所と言える部分である。彼女の考え方を否定

するつもりはさとりにはさらさらなかった。

「親分だって。それじゃあ私は子分の二にでもなるのかしら。友達が少ない頼りない親分さん？」

フランがさとりをからかうように言うので、さとりもまた同様にふざけて返すことにする。

「子分って言うより狂犬かしらね。文字通りの」

「む、犬扱い？ 私、これでも一応吸血鬼のお嬢さまなだけ。もつといい例えないの？」

「じゃあなにがお望みなのかラス？ ワニ？ 狸？ どれもあんなには似合わないそうだけど」

「動物以外よ」

「念のため言っとくけど、人間も吸血鬼も広義の上では動物の一種よ？ 犬とおんなじね」

「むう、また揚げ足取り？ 性格悪いわね」

「あんたに言われたくない」

そんなやり取りをフランと交わしていると、ふと、こころがじつとこちらを見つめてきていることに気がついた。特にいつものような大げさな仕草はなく、じつと見えてきているだけ。

フランは首を傾げていたが、それなりの付き合いになるさとりには最近彼女がどんな感情を抱いているのかが仕草で示してくれなくても、雰囲気で大体わかるようになってきていた。

今のこころはおそらく、どこか物欲しげな、羨ましいというような思いを抱いている。今のフランとの会話の中のどこにそんな感情を感じる要素があったのかはわからない。

だから聞いてみた。どうしたんですか、と。

するとこころは、その質問になぜかさらに不満げな様子になって、さとりに言った。

「むう……フランには呼び捨てで敬語も使わないのに、どうして我には敬語を使う？ もっと砕けた話し方をしてもよいのだぞ」

一旦区切って、私みたいにー、と今度は比較的軽い口調で。

なんだか少し前にも似たようなことがあった、と大ちゃんにこころ

の呼び方について指摘された時のことを思い出す。あの時もここに結構な付き合いになるのに未ださん付けなのが不満だと、呼び捨てにするよう懇願された。

こころには敬語だが、フランにはため口。深い意味があったわけではない。フランはもとが敵であったために丁寧に接する気にはなれず、こころに対してはさん付けの件と同様に喋り方が定着してしまっただけに過ぎない。

しかしこころにとつて、さとりがフランと隔てや遠慮なく話しているさまは、自分では立ち入れなかった距離にフランは簡単に踏み入ってしまったのだと。知らぬ間に急に他の人と自分以上に仲良くなっているのだと。そんな風に映っているらしい。

私の方がさとりと付き合いが長いのに、仲がいいのに。

要はそんな感じの、ただの嫉妬だった。

「ふ、ふふ……」

呼び捨てにしようとした時は恥ずかしすぎて倒れそうになってしまったが、こころがしてきた要求に対して抱いた印象は、今度はあの時と真逆だった。

不満足を存分にたたえた瞳でさとりを見つめてくるこころには、その無表情の奥側に、頬を膨らませる仕草さえ幻視する。それはさながら構ってもらえず拗ねている子猫のような、子犬のような。

さとりを思ってくれている。心が見えなくても、それだけは確かに読み取れる。

そして気がつけば、さとりはこころの頭の上に撫でるように手を置いてしまっていた。

「えっ、え、さ、さとりっ?」

「……あ、ごめんなさい。いつもペットに対してしてるみたいに……無意識だったわ」

「むう……何度も言うが、我はさとりのペットではないぞ……」

そう主張する割に、さとりの手が自分の頭から離れていくところを見るこころの目線は、どこか名残惜しそうな思いを秘めているような。そんな風を感じたのは、こころがペットだったらと幻想するさと

りの願望の産物だったのか、はたまた本当に彼女がそう思ってくれていたのか。

心が読めればわかるのに。そう思ってしまうのは、やはりわがままなのだろう。

さどりの探るように覗き込む視線に、こころはなぜか顔を真っ赤にすると「わ、私は！」と声を上げた。

「わ、私はさどりのペットじゃなくて、友達だもん。だからその、えつと、これからは私にも敬語は使わなくていいんだよっ?」

「ん……そうで、いえ……そうね。まだ慣れないけど、ちよつとずつそつちも変えていくよう努力しま、するわ。それで、いいかしら」

こころがそう望むのなら。ここで断ったら、こころにとつてはフランの方がさどりと距離が近いと誤解したままになってしまう。自分を少なからず気にかけてくれる相手に、そんな感情をさせ続けたくはない。

敬語をやめること。それに対して、名前を呼び捨てに変更した時のようなこつ恥ずかしさはあまりなかった……というのは嘘。ちよつと頬が赤らんでいることと、耳が熱を持っていること。それぞれがはつきりと自覚できる。

けれども、それらはどちらもこころを呼び捨てにした時ほどではない。

あの時は勢いあまってこころの胸の中に倒れたり、弱音を漏らしたり、散々恥ずかしいことをやらかしていた。今回あまり恥ずかしがらずにいられるのは、きつとあの時の反動なのだろう。多少こそばゆくても、あの時ほどまでは恥ずかしくはない。そういう意識のおかげで、きつと今のさどりは少なからず冷静さを保っている。

とは言え、それはさどりの主観と、鈍感なこころの視点によるものである。第三者たるフランは顔を紅潮させているさどりを見上げ、「話し方変えるだけでこれとか初心うぶすぎない?」とか同じく友達が少ない立場ながら内心鼻で笑っていたが、知らぬが仏である。今のさどりに心は読めない。

こころはさどりの対応にどことなく満足げに頷くと、すつとさどり

の隣に腰を下ろした。そうして、なにやらメトロノームのようにゆらりゆらりと左右に体を揺らし始める。

一目見るだけで機嫌がいいとすぐにわかる。あいかわらず無表情ながら多彩な感情を示す、単純で純粋な少女であった。

「――で、氷の魔法でつかい塊を作つて、入り口を……」

「だからそれはダメだつて言つてるでしょチルノちゃんっ。これから一緒にさとりさんたちに迷惑かけちゃダメっ」

こころが来てからしばらく。ふと、洞窟の外の方からひそひそとした話し声が聞こえてきて、さとりは顔を上げた。洞窟の中からでは姿は見えなかったが、その声音は明らかにさとりが見知った二人の妖精のものだった。

耳を澄ましてみればはつきりとその内容も耳に届く。どうやら、チルノが洞窟の入り口を氷の塊で閉ざして出られなくするといういたずらをしようとして、大ちゃんに止められているようだ。

別に閉じ込められてもこころの『真空斬』やフランの炎の魔法で軽く突破できそうだが、せっかく庇つてくれている大ちゃんをこのまま放つておくのも忍びない。さとりはこころとフランに声をかけつつ、先に一人で洞窟の外に出ることにした。

「ああー、出てきちゃったー……」

「さ、さとりさんっ」

「数日ぶりですね。ところで、なにかたちの悪いいたずらを画策しているように聞こえたのですけれど」

さも偶然聞こえました、という風に問いかけてみると、大ちゃんは大慌てでチルノを庇うように前に出た。

「ち、違うんです。今のはその、えっと、ええっとお……そ、そう！ 私がしようつて言つて、だからチルノちゃんは別に悪くは」

「大ちゃんなに言つてるの？ やろうつて言つたのあたいだよっ。」

「ちよっ、ち、チルノちゃんはほんとにもうっ……！」

せっかく大ちゃんが庇おうとしたのに本人がばらしては元も子もない。バカなのか、ある意味肝が座っているのか。

もつとも、さとりにちよつと二人をからかってみただけに過ぎな

い。いたずらの事情は初めから全部わかっていた。怒られる、と縮こまっている大ちゃんに、さとりはできる限り優しく見えるよう軽く微笑んでみせる。

「冗談です。全部丸聞こえでしたから、その上でからかってみただけです。怒ってはいませんよ」

「そ、そうだったんですか。でもその、ごめんなさい。チルノちゃんか……」

「構いません。未遂ですし、大ちゃんが止めてくれましたからね。ただ……実際にやられたとなったらどうなるかはわかりませんが」

子どものいたずら程度、さとり自身はそこまで気にはしない。けれど、そのせいでこころに迷惑がかかったりするのなら話は別である。現実では妖怪である身としても、その時は相応の仕置きをする必要があるだろう。

そんなさとりの内心が表情や声色ににじみ出ていたのか、大ちゃんはびくつと一瞬全身を震わせた。

「ひっ!? わ、わかりましたっ! こ、これからはじゅうぶん気をつけますし気をつけさせます!」

「む、大ちゃんを怖がらせたらあたいが——」

「だから全部私たちのせいだから! ほら、チルノちゃんも謝るのっ!」

あくまで私たちのせい。チルノのせいとは言わない。さとりにとってこころが大事な友人であるように、きつと、大ちゃんにとってもチルノは大切な友達なんだろう。そしてその逆、チルノにとっても。

「二人ともこの前ぶりー」

「なにこのよわっちそうなやつら。こいつらいる?」

さとりに続いてこころとフランが洞窟から姿を現す。チルノと大ちゃんを見た二人の反応のテンションはそれぞれまるでかけ離れたものだ。

大ちゃんがこころに行儀よくお辞儀をする最中、初対面であんまりな言い草にチルノがフランに食ってかかっていた。

「ふんっ、あたいたちの強さがわからないなんてまだまだね。力のじげんが違いすぎるとどっちの方が強いのかわかんないって聞いたことあるし、お前相当弱いんだなー」

「あー？ 私が弱いだって？ あはは、これは傑作だわ！ 力の次元が違うと力量差がわからないって、それまんまあなたのことじゃないっ。あなた相当弱いねえ、あわれだわー」

「なんだとー！ この、だったらどっちの方が強いのかここで証明してやるー！」

「上等よ。さ、どこからでもかかってきなさい？ あなた程度、この私が軽く捻り潰して——いたっ!？」

さすがに見過ごせなかったので、フランの頭に帽子の上からげんこつを落とす。恨めしげに涙目で睨みつけてくるが、どう見ても今のは先に挑発したフランが悪い。

「私が提示した条件、忘れたの？ 私たちに危害を加えないこと。それは私やこころだけじゃなくて、この二人も例外じゃない」

「むぐぐ……はあー、わかったわよ。えーっと、チルノ、でいいんだっけ？ 悪かったわね、弱いだとかんだとか言っつて。正直全然強そうには見えないけど一応謝つとくわ」

「フラン、挨拶とお礼と謝罪はどうしなくちやいけなかったかしら」
「……訂正。強いか弱いかは実際に見ないとわからないわよね。第一印象で勝手に決めつけて、悪かったわ。ちゃんと謝る」

確認するようにさとりを上目遣いで見つめてくるフランに、今度はしつかり謝罪ができていたので、こくりと頷いてみせた。

チルノの方は変わらず「ふふん、あたいの方が強いって認めたのね」と挑発気味な言葉を放っていたが、さとりに注意されたフランはそれをもうまともに相手にはしなかった。はいはいと適当に流す。

そのうちフランに対しさとりがしたことと同じように、大ちゃんが調子に乗っているチルノを諫め、この場の小さなトラブルは収束した。

「なにはともあれ、これで全員集まったわね」

この《蛇蛙の森》の攻略は今集まった五人で行う。さとりとこころ

はいつも組んでいるから問題ないが、チルノや大ちゃん、そしてフランは別だ。

さとりとところの二人だけであれば息を合わせた連携をアイコンタクトだけで行うことができる。けれどあの大量の蛙の魔物を相手に逃げるくらいしかなすすべがなかったことから察するに、おそらくこの森はさとりとところの二人だけでは乗り切れることは少々難しい。他の三人の力が必要になる時は必ず訪れる。

チルノと大ちゃんについては以前蛙の魔物たちから逃げる際に多少共闘したから誰がどんな戦闘スタイルなのかはそれなりに理解してはいるが、連携までもうまく取れるとは言いがたい。フランに至っては今回が初めて組む上に、フラン自身にとっても誰かと一緒に組むだなんて初めてのことだろう。かなりの不安が残る。

なのでまずはそれぞれどういう戦い方が得意なのかを明言し、それを全員が理解しておく必要があるとさとりは感じた。要は全員で改めて自己紹介を行うのである。なにより、今日新しく加わったフランはチルノや大ちゃんとは今回が初面識だ。彼女に二人のことを知っておいてもらうことも、二人にフランのことを知ってもらう意味でもしておかなければ攻略に支障が出る。

その旨を全員に話し、まずは言い出しっぺからと、さとりが名乗り出た。

「皆知っている思うけれど、私は古明地さとり。ジョブは『魔術師』と『斥候』と『調教師』よ。『調教師』って言ってもペットはいないから、基本的には『魔術師』として中距離から支援攻撃をしたりすることになると思うわ。剣も使えはするけれどこれもサポートか自衛程度ね」「あれ？ さとりさん、敬語は……？」

大ちゃんが首を傾げる。ところやフランに敬語を使わず話していたこともあつて、勝手に抜けてしまっていた。「さきほどここに敬語を使わなくてもいいと言われちゃいました。せっかくなので好意に甘えることにしたんです」

「あ、それなら私たち、私とチルノちゃんにも敬語なんて使わなくてもいいですよ。さとりさんの方がなんだか歳上っぽいですし」

「ん……それなら、遠慮なくそうさせてもらおうかしら。大ちゃんは敬語のままでもいいの?」

チルノや大ちゃんに対して敬語をやめることはここに感じたほどの抵抗はなかった。まだ付き合いが浅いから戸惑いや恥じらいが少ないという部分が大きいのだろう。

「あはは、私はチルノちゃん以外には自然とこうなっちゃって……作ってるわけじゃないので気にしないでください」

「そう。ならいいけど」

さとのりの紹介が終われば次は当然、さとのりの相棒たる彼女の出演である。

こころは一步前に歩み出ると、「あーあー」と声を調節するように何度か喉を手を当てた。最後にこほんど咳払いをすると、むんっ、とそこそこある胸を張る。

「我が名は、こころ! 秦こころであるっ!」

どーん。そんな擬音が背後に見えた気がした。

「私の力を教えよう。我が力の一つは『槍士』、薙刀を扱うための術。二つ目は『奇術師』、薙刀や扇子を面妖に操るための術。そして最後の『精霊術師』は、それらをより強力に使いこなすための術である」

「ふーん。っていうか初めて見た時から思ってたんだけど、その変な面ってなに? クマのお面? おしゃれのつもりなの?」

フランがつっこむと、こころは「ふっふっふ」と含み笑いをしながら、その側頭部につけていたお面を前方に回した。

デフォルメされたクマのお面を正面に自信満々に自己紹介するさまは正直言つてシユールである。

「よくぞ聞いてくれた。これこそは我がこの世界に降り立ってより、我が友さとりとともに初めて倒した強敵、森のクマさんの戦利品から作り上げた至高の面である。これを付けることにより我は風の力をより自在に操ることができるようになるのだ」

「へえ。そのお面で風の攻撃が強くなるんなら、別の属性のお面もあるのよね? いろんな属性を使い分けられるなんてなかなか便利ね」
「え。あ、いや、その、一応でつかいゴブリンのお面ならあるけど、あ

れ地属性のお面で……でも私自身は地属性のスキルは持ってないから、その、まだ使えないというか……」

「風しか使えないってこと？ それはそれでなんというか、よくそんなんでそんな自信満々になれたわね」

「ごめんなさい……」

「いや別に責めてはないんだけど」

尊大な口調が引っ込み、徐々にしぼんでいくところ。なんとなくかわいそうだったので、ぽんぽんと頭を軽く撫でてあげれば、彼女はしばらく目をぱちぱちとさせて面越しにさとりを見つめた後、一気に耳まで紅潮させてさとりからぱつと離れた。

慌てすぎなところにちよつとだけくすくすと笑ってしまったて、どことなく不満そうな感情を込めた視線を送られる。お面の上からなのでわかりにくいのが、さとりにはわかる。

そんなところに「ごめんなさい」と軽く謝って、さとりは次の一人、チルノへ視線を向けた。

「お、次はあたいか？ ふっふっふ、ならば聞いておののけ！ あがめてたたえよ！ あたいの前にひれふせー！」

「チルノちゃん、それ意味わかってて言ってる……？」

「あたいはチルノ！ じよぶはー……じよぶ？ えつと、じよぶ、じよぶ……あ、じよぶの後はすとれーとだっけ？ ふっくとあつぱーつてのも知ってるぞー！」

それはボクシングであるし、ジョブではなくジャブである。

大ちゃんは小さくため息をつく、チルノの代わりにチルノの紹介を始めてくれた。

「チルノちゃんは『剣士』と『盗賊』と『氷術師』のジョブを取っています。いつも使ってる武器は氷属性の剣で、これで相手を斬りつけるとそのたびに相手の動きを鈍らせることができます。遠くから氷の魔法もたくさん撃てますし、『盗賊』のジョブのおかげで速いで、どの距離からでも連続攻撃をしていけるのが強みです」

「へえ。強いつて自慢してたのは口だけじゃなかったのね。っていうか聞いた限りだとさとりより強いんじゃないかしら？ さとりつて

言っちゃえばただの『魔術師』だものね」

フランがからかうように言ってくるが、さとりはただ肩をすくめてみせた。

「まあ、火力がないのは自覚してるわ。杖でも作るなりして近いうちにどうにかしたいとは思ってる」

「あれ、否定しないのね。思ってたより素直」

「事実だもの。でも、火力がないなりに私は私でうまく立ち回っていくつもりよ」

「ふうん。まあ、さどりの厄介さは前に戦った私がよく知ってるから心配してないわ。最後の『衝撃』^{インパクト}の執念深さはさすがに舌を巻いたもの」

「あら、あなたも思ったより素直じゃない」

「事実だもん。あれがなかったらその無表情の、こころだっけ？

その薙刀だって食らうことなかったし」

かつては敵だったのに、これからの攻略では肩を並べる。改めて意識してみると、なんとも奇妙な感覚だ。

フランと顔を見合わせる。そこでお互いに同じ感覚を覚えていたことがなんとなくわかって、ほんの少しだけ笑い合った。

ここまでフランとは刺々しい会話が続いていたが、ちよつとだけ関係が前進した気分だった。

「えっと、チルノちゃんの次は私ですね」

そう言ったのは大ちゃん。かつて共闘したとは言ったが、彼女に関しては謎が多い。なにせ大ちゃんは直接的には戦ってくれなかった。というか、戦闘能力があるのかどうかすら怪しい。

そしてそんなさどりの少し心配そうな視線に、なぜかチルノの方が自慢げに胸を張っていた。

「私のことは大ちゃんとも呼んでいただけると嬉しいです。ジョブは『庭師』と『精霊術師』と『聖職者』の三つを持っていますが、直接戦闘系のスキルやアビリティはまったくと言っていいほど持ってないので、私本人の戦闘能力はあんまり期待しないでいただけると助かります……」

「私本人の、ということとは、大ちゃんは他の人のサポートが得意ということでもいいのかしら」

「はいっ。チルノちゃんと一緒にいる時は『精霊術師』と『聖職者』の混合スキルの一つの『攻撃持続性氷属性強化』（ノンストップファイアスリインフォース）っていう支援スキルを使ったり、『聖職者』の回復スキルで傷や状態異常を治したりしています」

「大ちゃんはすごいんだぞー。攻撃が超強くなるし、どんな怪我だって一〇秒もあればぱつと治してくれるからなっ」

「えへへ、戦闘はいつもチルノちゃん任せなんだけどね……私にはサポートくらいしかできないから」

回復と強化。大ちゃんはサポート特化のスキル構成をしているということだ。戦えないという欠点は確かに多少目立つものではあるが、それ以上に恩恵の方がはるかに大きい。

特に回復が可能なことは、つまりどんな怪我や状態異常を負ってもすぐに再起できるということだ。これまで慎重に行かなければいけなかった場面でも、多少思い切った選択をできるようになる。そうならば戦闘や攻略の効率は目に見えて格段に上がるはずだ。そのぶん怪我を負うことも多くなるけれど、そのために大ちゃんがいる。

「じゃあ、最後は私ね」

残ったのはフランだ。フランはなんの気負いもなさそうに、すつと自分の胸の前に手を置いた。

「私はフランドール、フランドール・スカーレットよ。フランでいいわ。ジョブは『戦士』と『炎術師』と『魔術師』。スタイルは、そのチルノってやつとは真逆のタイプになるのかしらね」

「あたいと逆?」

「そ。あなたはスピード重視の魔法剣士でしょ? でも私はパワー重視の魔法剣士。主な武器は大剣よ。戦い方は炎の魔法で広範囲を焼き払ったり、吹き飛ばしたり、あと複合スキルツリーの『紅蓮剣技』のスキルかしら。一撃には自信があるわ」

フランの攻撃が非常に強力であることはさとりもこころもその身をもってじゆうぶんに味わっている。広い草原の一角を一撃にして

焼け野原に変えてしまったあの衝撃は忘れられない。

ただ、一つだけ懸念事項があった。

「一応言っておくけど……木が密集してるようなところで『大紅蓮剣』とか、ああいう広くて強すぎるのは使わないでね。森が焼けたせいでこっちも焼かれちゃ世話ないんだから」

「そんなこといちいち言われなくてたつてわかってるわ。狭いところでの戦いはあんまり得意じゃないけど……新しく私が楽しめることを見つけるためだもの。そのためならなんだってやるって、もう決めてるから」

森と言うだけあって自然はそこら中にある。おそらくこの森であのような大火力の切り札を繰り出せる場面は非常に限られてくる。もしかすれば一度として訪れないかもしれない。それはつまり、フランの本来の実力が発揮できないということでもある。

それでも、多少不満そうにしつつもフランは当たり前でも言うように頷いてみせた。なにも楽しくなかったはずの死の間際で笑ってみせたさとりと一緒にいること。その一点は今のフランにとって、きつとなによりも重視、優先すべき決定事項なのだろう。

とにもかくにも、これで全員の自己紹介が終わった。そしてそれらの情報をもとに、さとりは基本的な戦術を頭の中で構築していく。

近接戦闘が得意なフランとところが前衛で、『魔術師』のさとりは中衛で援護、状態異常を操ることができて近距離遠距離と隙がないチルノは軽い遊撃隊、そして大ちゃんが守るべき後衛と言ったところか。

フランとところは遠慮なく敵と戦ってくれて構わないが、さとりとチルノは戦闘の最中、大ちゃんを守り通すことも頭に入れておく必要がある。彼女の生存は森での攻略効率、ひいてはメンバー全員の生存確率にも直結する。時には少なからず自分の身を犠牲にしても守り切らなければいけない場面もあるかもしれない。

そう言ったそれぞれの立ち位置を、さとりは全員に説明する。こころはいつも通り迷うことなく頷いて、フランはこれまで一人だったから複数人での戦い方はよくわからないとのこと、これまた口を挟むこともなく素直に首を縦に振った。チルノはちんぷんかんぷんと

言った具合で小首を傾げていたが、要は大ちゃんを守りつつ自由に動いてくれればいいと言えば「いつも通りにやればいいんだな！」と承諾してくれる。大ちゃんは大ちゃんですら守られることを申しわけなさそうにしていたけれど、そのぶんだけサポートに期待していると告げると、その瞳の奥にやる気の炎が灯り出す。

「それじゃ、これで準備は万端ね。四人とも、なにか忘れ物とか言っておきたいこととかはない？」

「ないよー」

「私も別に。強いて言うなら、視界の外から近寄ってきたりはしないでね。間違つて攻撃しちゃうかもしれないし」

「ここにいるやつらでこの森を制覇するんだよな？　ははー、胸が鳴るぜー」

「たぶんだけど……それ、腕が鳴るだよ、チルノちゃん」

背につり下げた剣、身につけている装備の各所。特に破損も不具合もないことを確認し、他の四人を連れて樹木の密集する獣道へと足を踏み入れる。

「目的を再確認するわよ。この五人で《蛇蛙の森》を攻略する。できれば誰一人欠けることがないように……さ、行きましようか」

新しい冒険と、《シンクロシテム》の謎を解き明かすため。未攻略ダンジョン《蛇蛙の森》の探索が始まった。

八・行違暴走 (perception gap)

——蛇に睨まれた蛙。そんな諺ことわざを初めて知った幼い頃、私はふと、当時住んでいた故郷の外れにある森のことを思い出した。

——滅多に人が寄りつかないあの森では、蛇と蛙の魔物が森の覇権を巡り、日夜争っているのだという。

——蛙よりも蛇の方が強い。そう諺を純粹に信じていた昔の私は、どうして蛇が勝たないのかと、母に問うた。

——そんな私に母は、あの森には魔物たちだけが知る、蛇さえも恐れるような怖い怖い魔物が潜んでいるのよ、と。そう教えてくれた。

Threeway Deadlock
【蛇 蛙 の 森】

《蛇蛙の森》はさとりが初めに攻略した、『鋭き右の柔熊』がいた森と比べれば自然の具合が落ちついている。あちらは森というよりも樹海に近い。《蛇蛙の森》は樹海と呼べるほど森が深くないため、あの時よりはいくらか楽に探索できる。

そもそもクマさんがいた森ではでこぼことした足場によく慣れてきたところで猿の群れに何十分と追い回されたりして本当に変だったので、足場が悪かろうと悪くなかろうと、落ちついて探索できるといっただけでありがたかった。

ふと、先頭を歩いていたところが、隣を歩いていたフランと後ろに続くさとりたちを手で制す。どうしたのかと小声で問いかけてみれば、進行方向にカエルの魔物の群れがいるようだ。こちらには気づいておらず、見たところ少し先を通りがかっているだけとのこと。

放置していても勝手にどこかに行ってくれそうだとこころは言っていたが、ここは奇襲をかけることをさとりは提案した。さとりは『斥候』のスキルとして『既知探知』——そのログイン中に一度でも倒したモンスターと同種類の敵を察知する——を持つ。初めは積極的に敵に突っ込んだ方がいいだろう。戦闘を回避しすぎたせいで本当に大事な場面で敵を察知できなかつたとなれば目も当てられない。

それに、今はさとりとこころの二人だけではない。チルノと大ちや

ん、フランがいる。戦力的にも余裕があり、大ちゃんの回復がある以上、痛手を負う可能性は皆無に等しい。

「よーし、それじゃ一気に焼き殺して——」

「いえ、フランが突っ込むのは二番目よ。一番手はチルノの方がいい」
さとりはさりげなくチルノのことを初めて呼び捨てにしてみたが、特に反応は見られない。さん付けでも呼び捨てでもどちらでもいいようだ。

それはそれとしていざ飛び出そうとしていたフランがつんのめり、少しだけ不満そうにさとりを見上げた。

「真正面からならともかく、今回は奇襲だもの。一番足が速いチルノが一気にかき回して混乱させた方がいいわ。フランはその後に『紅蓮剣』辺りで一掃する役目」

「むう……まあ、さとりの言うことなら従うけどね」

「チルノもいいかしら」

「要するにあいつらのところに突っ込んでけばいいんだろ？ 任せろー！」

「あ、行く前に一つだけ。無理に一匹を仕留めなくていいから、できれば複数の目を引きつけて。チルノの役目は攪乱だから」

「かくらん？ よくわかんないけど、とにかく暴れてくればいいのよね？」

「……まあ、そうね。お願いできる？」

「任せろー！」

だーっ！ と元気よく駆け出していくチルノ。子どもじみた走り方のくせに、その速さは『盗賊』だけあって群を抜いている。

——その後、敵の群れの殲滅はあっさりと終えてしまった。

チルノが蛙の魔物たちの背後から水晶の剣で最後尾の魔物を斬りつけ、怯んでいるうちに次の魔物、さらにその次の魔物も。四匹目はさすがに防いできたが、囲まれる前に即座に右へ離脱。離れた位置で氷柱を連続で飛ばして敵の注意をまとめて引きつけている隙にフランが集団に距離を詰め、『紅蓮剣』で何匹か一撃で斬り殺す。届かなかった位置にいた敵はこころが『真空斬』で同じく真つ二つにした。

事前に役割を決めていたからか、流れるような連携でさとりが手を出すまでもなかった。これが初めからフランとところが突っ込んでいたらうまくいかなかっただろう。チルノが斬りつけたことによる氷結で動きを鈍らせ、さらに氷柱でその場に釘付けにするとともに囚になった。その動けないところを狙ったからこそその瞬殺だ。

もしも何匹か逃れていたとしても、それはさとりが足止めしておけばあとは袋叩きにできる。やはり人数が揃っているというのはやりやすい。今回はそれぞれ得意なことが分かれているからなおさらだ。

フランは火力、チルノは速度、こころはその両方を及第点レベルまで収めている。さとりは後方から補助、いざなにかあっても大ちゃんの回復や支援。これだけ揃っていて今更雑魚の群れに苦戦する道理はない。

以前フランがいなかった際は無数のカエルの魔物に追われて逃げ回ったりしていたが、連携を深めることさえできれば、あの数に襲われても意外となんとかできるかもしれない。いくら敵が何十匹という方が一度に全員と戦うわけではない。地形を利用したり戦い方を工夫したりすればいくらでも手はある。

やはり問題は長期戦、あるいは強敵への対処。作戦がうまく機能しない場合の臨機応変な対応も、組んだばかりの今のパーティーではおそらく少々ぎこちなくなる。『既知探知』の対象を増やすほかにもパーティーの動きに慣れるために、まずは積極的に敵に向かって行った方がいい。

その方針を他の四人にも伝え、さとりたちは順調に森の中を進んで行った。

一度目の遭遇以降はこちらからではなくあちらが先にこちらを見つける場合もあったが、不意打ちされるよりも先に誰かが接近に気づいたために敵方からの奇襲の被害は負っていない。時には気づいていないふりをして裏をかくなんてこともして連携を深めたりもした。さとりとこころだけなら何度か攻撃を受けていたかもしれないだけに、やはり仲間が多いということはそれだけで心にゆとりができることを味わった。

この森の攻略が終わった後、一度このパーティは解散となるだろう。大ちゃんとはフレンド登録をしているので今後も声をかければ一緒にどこかへ行ったりはしてくれるとは思いますが、おそらくさとりとこころのように常時ペアを組むというようなことにはならない。それでも多人数で行動する利便さを知ってしまったさとりは、今後はこころと二人だけでなく、一緒にダンジョンへ潜ってくれそうなフレンドをもう少し増やした方がいいということをもっと実感した。

あるいは、そろそろ本当に『調教師』のスキルを習得して魔物を従えてみるか。そうすれば今後チルノと大ちゃんと別れ、フランさえ離れていったとしても、数の面では補うことができる。

「あ、さとり。また魔物発見したよー」

進んでいると、こころがそう報告してくる。『既知探知』に反応はない。ということは、これまで遭遇したことのないタイプの魔物だ。

それを全員に警告した後、そつとこころの視線の先を覗き込む。

そこにいたのは蛇の魔物だ。もちろん、ただの蛇ではない。まず普通の蛇より何十倍も体が大きく、人と同等以上の体つきを誇っている。頭から尾の先までの長さは五メートル以上はあるだろうか。それに巻きつかれて締めつけられたら相当苦しそうだ。

なにより、その巨大な巨頭に生えそろう蛇の牙が非常に鋭く、脅威に映る。よく注意してみれば薄い鱗の鎧を全身に展開していることもあり、少なくとも数に利があるからと言って油断していい相手ではなさそうだ。

まだこちらには気づいていないようだったので奇襲を提案しようとしたが、その直後、ちょうど蛇の視線がさとりたちの方に向いた。こちらからあちらが見えている以上、あちらからもこちらは見えている。

蛇の魔物はちろちろと舌を出しながら、ずるずると体を引きずって。その巨体からは想像できないほどのすさまじい速度でこちらに迫ってきた。

「っ、大ちゃん下がって。フランは前へ、こころとチルノはフランのサポートに。私は大ちゃんを守りながら一緒に援護します」

「私一人が前つてことは、今度は私が囿？」

「近いけど、囿とはちよつと違うかしらね。自分からは無理に攻撃はしなくていいからできるだけ攻撃を引きつけて防御して。私や大ちゃんに向かつてくるようなら迎撃。それから、もし攻撃がこころとチルノに向かうようなら全力で斬りつけてやりなさい」

「ふうん、いいじゃない。奇襲なんかよりもそつちの方が存外向いてるわ」

初めて会った時、視界外から『紅蓮弾』撃ってきた人がなにを言っているのかしら。そんな嫌味が反射的に出かけたが、すぐそばにもう蛇の魔物が迫っていたため、さとりは大ちゃんの手を引いて急いで後方へ下がった。

蛇の魔物は先頭に立ったフランへ一瞬威嚇の姿勢を取ると、まっすぐ頭から突つ込んでいく。

「ふん、正面から来るしか能がないようなやつ、がつ？」

フランが蛇の突進に合わせて大剣を振り下ろす。そのままの速度でお互いが近づいていけば確実に当たる軌道を描いていたそれは、しかし蛇が直前で体が進行する向きを真上へそらしたことで、ぎりぎりのところで外れてしまう。

このまま再度飛び込まれたらまずい。そう考えて、フランはすぐさま防御に回ろうとした。大剣を引き、体の前にかざすように。けれど蛇の動きはそんなフランの行動よりも一歩早く、そして速い。

大剣が地面に衝突すると同時に蛇が飛び込んだのはフランではなく、地面にのめり込んだ大剣自身だった。ぐるぐるとその巨体を剣に巻きつけていく。

フランが大剣を引いても、きつく巻きついた体は離れない。振り回しても解けない。振り下ろして、巻きついた体を地面との挟み撃ちで叩き切ろうとしても、長い長い蛇の体重が加算されている大剣は普段より何倍も重量があるせいで、大した威力にはなり得なかった。

切っ先から根本に至るまで、その刀身が欠片も見えなくなるほどにきつく体を巻きつけた蛇の魔物は、その顎を大剣を持つフランの頭へ向けた。口を大きく開き、鋭い牙でその頭をまるまる飲み込んでしま

おうと。

大剣を離して逃れようとしても、もう遅かった。柄にまで蛇の体が巻きついてしまっているせいで離れられない。

『真空、斬』っ！』

そんなフランの窮地を救ったのは、過去同じように彼女を追い詰めたことがある二人の片割れ、仮面の少女こと秦こころ。

『真空斬』。いつもは薙刀を振り回し、その斬撃を飛ばす。だが今回こころはそれを突きによって放った。

範囲は振り回した時と比べれば大幅に下がる。それは普段ならば欠点ではあるが、今この場面においては利点となる。フランを巻き込まない。そして範囲が狭い代わりに、その威力は普段の『真空斬』よりも何倍も高い。

ちょうどフランの頭部を飲み込まんとしていた蛇の頭へ向けて、フランのすぐ隣を真空の斬撃が通りすぎた。大抵の生物は——妖怪は例外として——頭部がなければ活動できない。蛇の魔物もその範疇にあるらしく、蛇は直前で身を翻し、胴体を横に倒すことで飛ぶ斬撃を躲した。

真空の斬撃が見えている。それも脅威ではあるが、今はそれよりも目の前の窮地への対応が先だ。

フランの大剣はあいかわらず、その片腕ごと取り込まれている。実は彼女は一瞬前から『紅蓮剣』を行使して刀身に炎を纏わせているのだが、蛇はまるで堪えた様子はない。どうやら火に強い耐性を持っているらしい。

このままでは再び同じ攻撃を繰り返されて、今度こそやられてしまう。その巨軀に似合わぬ回避能力と、まだ未知数な鱗の鎧の防御力。少なくとも、フランが捕まっている間の一瞬で仕留めることは相当に厳しい。

であれば、今ここですべきことは一つでしかない。フランはそう結論を出す。さとりでも、こころでも、チルノでも大ちゃんでも一瞬では思いつかない。それは狂気に満ちたフランだからこそ反射の域でたどりつくことができ、戸惑いなくできる選択だった。

『紅蓮弾』

それ自体はなんてことがない火の球を生み出すスキル。蛇の魔物にも効果は薄い。だが。

フランはそれを大剣を手離し、蛇の体に隠れて見えない手の中に創造した。普段なら着弾点、あるいはある程度距離を進んだところで爆発する熱量を、フランはその場で解き放つ。

蛇の胴体によって密閉された空間の中で熱量が暴れ狂い、隙間から火花が飛び散っていった。それでも当然、蛇の体にほとんど損傷はない。しかしそれでいいのだ。フランが狙ったのは蛇ではなく、自分。

自らの魔法によって肘から先を焼滅させ、強引に蛇の締めつけから逃れたフランは、再度巻きつかれる前に素早く後ろへ下がった。

「ぐう……やっぱり焼かれるのって、普通に斬られたりするより何倍も痛いし苦しいわね……他人にやってやるぶんには、だからこそいいんだけど」

さしものフランの目元にも若干涙が滲んでいる。

「とんだ無茶するわね……大ちゃん、回復を」

「は、はいー」

フランはすぐには戦線に戻れない。さとりはそう判断すると、こころとチルノに注意を引きつけてもらおうように指示を出す。ただ、フランの二の舞いになってはいけないのでできるだけ距離を取りながら。

「これくらい無茶って言うほどでもないわ。それより、えっと、ごめんなさい。さとりが言った役割、全然果たせなかったわ……」

「いえ、さっきの指示は私のミスよ。連携がうまくいきすぎて油断してたわ。こころと二人だった時ならもっと慎重にやってたはずなのに……警戒してことに当たるべきだった。謝るわ」

大ちゃんが生み出した緑の光に包まれ、どんどん治っていく焼けただれた片腕を見ながら、さとりは顔を伏せる。

いつもならきつと最初は様子見で、敵のスペックを測っていたはずだ。初めから誰か一人に攻撃の対処を任せたりはしない。

数が多いに越したことはないが、利があるからと言って無理な手を

打ち続けてはいけない。今回はこころとチルノが押さえてカバーしてくれているけれど、今後そんな余裕があるとも限らない。

「……私の」

回復し切った手を握っては開いてを何度か繰り返した後に、フランはその手をぎゅつと握りしめた。

「私の力不足を謝られても、不愉快なだけだわ」

「え。って、待ちなさいフラン。今は武器がないんだから前に出ないで私と一緒にサポートに」

「嫌」

さどりの言うことを聞く。それは交わした約束の一つだったはずなのに、さどりの言葉を突っぱねたフランは、一直線に蛇の魔物へ突っ込んでいった。

「その仮面のやつとちっこいの！ もういいわ、どいて！ あとは私がやる！」

そう叫んだフランは、最初に蛇の魔物がフランへ一直線に進んできたように、まっすぐに蛇の魔物に突っ込んでいく。こころとチルノは一瞬戸惑って、その硬直に蛇が体を振り回して攻撃をしかけ、それを躲すために交代せざるを得なくなった。

フランの得物たる大剣は蛇の長い胴体の下敷きとなっている。そう簡単に回収することはできない。

だというのにフランは迷わず蛇の頭に向かって跳躍した。その両手には『紅蓮弾』が宿っている。

空中で回避はできない。蛇もそれはわかっているようだ。長い胴体の筋肉にひねりを加え、その勢いのすべてを尻尾に集中させ、薙ぎ払うようにしてフランへ繰り出した。頭の方が近いのに噛みつきを仕掛けてこなかったのは両手の『紅蓮弾』を警戒してのことだろう。

確かに、空中で回避はできない。他に推力がなければ、と注釈がつくが。

フランは尻尾の躍動になってすぐに、左手の『紅蓮弾』を真下へ向けて高速で繰り出していった。ほんの一メートルほど離れたところで、フランの意思に沿ってそれは爆発をする。

爆風によって吹き飛ばされたフランの体は尻尾によるなぎ払いを回避し、蛇の頭のさらに上空にまで飛び上がった。

「まだ……！」

さきほどのように欠損はなくとも、少なからず服が焼け、露出した肌は軽くないやけどを負っている。当然だ。吹き飛ばされるほどの爆風を受けて無傷で済むはずがない。せいぜい数回が限度と言ったところだろう。

だが、それだけあればじゅうぶんだ。

尻尾の勢いを利用し、うねりを上げて跳ね上がった胴体が見据えるフランの視界を遮った。同時に、通り過ぎていたはずの尻尾がフランの背後に回るように展開されている。このままフランの体を巻きつけるつもりらしい。

このままでは捕まる。だから今度は真上に二つ目の『紅蓮弾』を放った。重力に爆風が加われば着地に一秒もかからない。衝突とも言えるほど強く地面に着地したことで、さらにひどくなった全身のやけどがひどく痛むが、まだ体は問題なく動く。

胴体が跳ね上がったことで下敷きになっていた大剣が露出していた。それをさつと素早く拾うと、落下してくる蛇の胴体を、片手で大剣を振り上げて強引に吹き飛ばす。

しかしその胴体に隠れて蛇の頭がフランへと迫っていた。大剣を振り上げた直後、一切の間を置かず近づいてくる蛇の顎。蛇の行動はフランの動きを予測していたかのように早く、振り下ろす暇さえない。

蛇の口が大きく開かれ、フランを飲み込まんと迫る。あの牙に貫かれれば、フランはきつと間違いなくやられてしまう。

避ける方法はない。

いや、避ける必要はない。

「爬虫類風情の浅知恵なんて無駄よ」

蛇がフランの攻撃を予測していたように、フランも蛇の動きを予測していた。

フランが蛇の胴体を吹き飛ばしたのは、片手に握った大剣によつ

て、だ。もう片方の手は別のことを、すなわち『紅蓮弾』の生成を行っていた。

至近距離で、しかも目の前にあるのは頭。いかに火に強いと言ってもひとたまりもないに違いない。相当なダメージを負わせられるだろう。しかし、きつとその後すぐにフランは怪我によって満足に動けなくなる。その程度の結果ではフランは満足できない。

フランはこの蛇を一人で倒すつもりなのだ。

だからこそフランは、『紅蓮弾』を真後ろで爆発させた。

「あははっー」

三度目の爆風。大剣を手離し、されるがままに吹き飛ばされる。そうして進む先は蛇の口の中。

蛇の予測よりも。噛みつかれるよりも、牙がフランの体に刺さるよりも。さらに早く自ら蛇の口の中に突っ込んだことで、フランは意識を保ったまま蛇の体内に入り込んだ。

消化液だろうか。焼けただけた全身にさらに酸性の液を塗りたくられる激痛は想像をはるかに絶する。あまりの痛みに叫びたくなる。だが、それでもフランの口元に浮かぶのは笑みで、口からこぼれるものも笑い声。

今にも途切れそうな意識を強靱な精神で繋ぎ止めながら、フランは最後の魔法を行使する。『紅蓮弾』。何度も何度も繰り出し、自らの身体のみを傷つけたそれを、今度こそ本来の用途で使用した。

いくら鱗が火の魔法に強かろうと、体内からであれば。

そのフランの考えは間違っていないなかった。密閉された空間内で破裂し、全身に行き渡る炎の奔流。蛇が上げた断末魔の振動が、体内にいるフランさえも震わせた。

ばんっ！ と爆発点であったフランがいた部分の蛇の胴体が破裂する。鱗が吹き飛び、倒れ伏した蛇の胴体の隙間から、フランの体が露出する。

「あ、はは……勝った……勝ったわ。私が、勝った……」

フランは火の魔法を扱うゆえに火に対しては高い耐性を誇るが、これだけの無茶を繰り返して無事で済むはずがない。

勝利の余韻に浸りながら、蛇の体からずると這い出たフランは、ばたりと地面に倒れ伏す。意識は一応まだあるみたいだが、放っておけばヒットポイントが○になってしまうことは想像に難くない。

「……本当、狂ってるわね。なんて戦い方……」

ぶつちやけ、さとりは若干引いていた。

自爆を繰り返して敵を葬り去るなんて普通の精神性ではできない。思いついたとしても、リスクが高すぎて実行しようなんて思うはずがない。

というかこんな戦い方を目の前でされて引かないのは同じように狂ってるやつくらいである。無表情なところも硬直して明らかに思考が追いついていないし、頭が弱いチルノでさえ「うわ」とか目をピクつかせている。大ちゃんに至ってはさとりにしがみついて涙目になってふるふる震えていた。

さとりはそんな大ちゃんをどうにか正気に戻して、フランを回復してあげるようお願いする。こころとチルノには周囲の警戒を任せた。

さとりはさとりでやることがあるので、大ちゃんと一緒にうつ伏せで倒れるフランに近寄って、そのそばにしゃがみ込んだ。

「さ、とり……どう？ わ、たし、勝ったわ……私の力、は、さとりの策を……ちやんと、遂行できる……だ、から」

見捨てないで、と。フランは言った。

それに少し、面食らう。

フランが片腕を自分で落として後方に下がった時、さとりは指示を自分のミスだと言った。あれは当然本音だった。断じてフランの力が足りないから気を遣って別の理由を話したりしたわけではない。

むしろフランはこの中で単体の力なら一番強いはずだ。かつては敵だったけれど、いや、かつては敵だったゆえにこそ、そんな彼女の力を信じていたから、最初に一人で止めてくれと頼んだのだ。

まだ付き合いが短かったからか、フレンドになりたいとフランが言った時に、さとりが否定的な態度を示したからか。その後も嫌味のようなものを言い合い続ける態度だったからか。フランはさとりの

言葉を勘違いしていたらしい。

いや、本当はさどりの言葉が本音だとわかっていたけれど、そうではない可能性も思いついてしまって、それがよほど恐ろしかったのかもしれない。それこそ、今まさに全身に負ってしまっている凄まじい怪我以上に。

見捨てないで。そうフランは言った。

フランは自分が楽しむために生きている。そしてその手段を見つける方法は彼女にとって、さどりにしか残されていない。さどりはそれは知っていたはずなのだが、その思いの深さを理解し切れていなかった。

いや、そもそも理解しようとしていなかったか。狂っているからと考えることを放棄していた気がする。

さどりは小さく息をつくと、ぐつ、と人差し指を親指で押さえて、フランの顔の少し上に持っていった。

そして、フランの額を小突く。俗に言うでこぴんである。

「い、いたっ！　ちよ……やけど、まだ治り切って、ないんだか、ら……やめ、て」

大ちゃんの力によって徐々に治ってきてはいるが、全身のやけどともなると治すのには時間がかかるようだ。フランが涙目で抗議してくる。

さどりはそれに無然な表情で返答した。

「自業自得よ。私の言うこと無視して突っ込んで……なんで妹っていうのは誰もかれも人の言うことを聞かないのかしらね」

「え、さどりって妹が、いるの？」

「ええ。あんたと同じで人の言うことを全然聞かないから、いつも心配してるのよ」

そつと、フランの頭に手を乗せてみる。

「あんたはまかり間違っても私の妹じゃないけど、まあ……ちよつとは自分の体を大切にしてほしいわね。以前までならともかく、今は一応仲間なんだし」

「……それって、心配、してくれてるの？」

「さあね」

「……さとりが私に言ってた仲間って、形だけで、本当は都合のいい時だけ利用するようなドライな関係だと思ってた」

「あのねえ」

元々は敵であり、恨まれているかもしれないという自覚はあつたらしい。

ただ、フレンド登録をすると決めた段階で、すでにさとりはフランのことにについては大分割り切っていた。こころだつて彼女の性格からしていつまでも昔のことをねちねちと引きずったりはしないはずだ。

こうして話しているうちに、死亡判定一步手前だったフランの怪我は完治していた。かかった時間は大体三十秒から四十秒と言ったところだろうか。戦闘中であれば致命的なロスではあるが、合間に回復するぶんには破格の性能だ。

「ほら、先に進むわよ。それともちよつと休んでく？ あれだけのことをやったんだから結構疲れてるはずでしょ？」

「……ううん、いい」

「そ。じゃあ、行きましようか」

「うん」

らしくもなく、しおらしい。思わず、すつと手を差し出してしまつていた。

完全に無意識だった。でも、今更引つ込めることもできない。しかたなくそのままの状態でいると、フランは目をぱちぱちとさせた後に、そつと、さとの手に自分の手を重ねてきた。

そんなフランを引き上げる。そうしてふらつくこともなく、問題なく立ち上がれたことを確認すると、その手を離して、こころやチルノに声をかけに行つた。

「もう大丈夫。先へ進みましょう。あの蛇の魔物については、進みながら対策について話し合ひましょう。無理をすれば倒せるからつてさつきのフランにみたいに無茶だけはしないように」

今後は複数同時に出現する可能性もある。かなり体が長かつた上

に移動の際にずるずると音がするので奇襲を受ける心配はなさそうだが、単純に強いというのはそれだけで厄介だ。

一番火力があるフランの火が通じず、巨体の割に素早くこちらの攻撃を躲けてきて、その身は鱗の鎧によって少なからず守られている。どうにか安定した戦法を確立した方がいいのは明白だ。

そして考えることはさとりの仕事だ。この場にいるメンバーは全員にそれぞれ個性が存在し、優秀である。それを活かせるかどうかはさとり次第だ。